

神岡町埋蔵文化財調査報告第5集
江馬氏城館跡調査報告書 第5集

岐阜県吉城郡神岡町
EMA CASTLE SITE
江馬氏城館跡 IV
-下館跡南堀延長部周辺の調査-

神岡町教育委員会

1998年3月



1 調査地区全景写真(上が西, 1997年撮影)



2 竪穴住居SI 11・炉跡SX20発掘後写真(東から)

神岡町埋蔵文化財調査報告第5集
江馬氏城館跡調査報告書 第5集

岐阜県吉城郡神岡町
EMA CASTLE SITE
江馬氏城館跡 IV
- 下館跡南堀延長部周辺の調査 -

神岡町教育委員会

1998年3月

序

史跡整備に向けて始まった江馬氏下館跡の4年目の発掘調査は、平成7年度に調査した門前地区と、平成8年度に調査した南辺地区に挟まれた南堀延長部周辺の地区でした。その調査結果は、南堀を境に南側地区では館に関連した工房跡と考えられる竪穴住居跡や炉跡・竈跡等を検出し、何らかの作業を行っていた地区であろうことが判明しました。また、その北側地区では極端に柱穴構造が少なく、広場としていた可能性が推察されます。平成6年度から始めた発掘調査によって、江馬氏下館跡の堀の周辺部の様子が明らかになってきたことは嬉しいことです。

また、今年度からは町単独の調査体制に移行しました。多くの町民の参加と協力を得て調査を行い、貴重な成果を得ることができました。生き生きと発掘作業をし、自らの先祖の雄姿に思いをはせる町民の姿は、まさに「戦国のロマンあふれる町・ひだ神岡」を表わすものであり喜ばしい限りです。埋蔵文化財の発掘調査によって、より多くの町民の方々が自らの歴史を知り、祖先のエネルギーを現在よみがえらせることが、今後していく史跡整備の活力となり、また町づくりの力となっていくことと期待します。

今後は前回調査と今回の4年間にわたる調査によって明らかになった情報に基づいて整備計画を立て、中世の貴重な史跡遺産を守り、活用していくよう努力しなければならないと願っております。

おわりに、発掘調査とこのまとめの報告書作成にあられた町民の調査参加者の皆様と、専門的なご指導を賜りました多くの方々に心からの感謝を申し上げます。

また、今後さらに史跡整備のために、格段のお力添えを戴けますようお願いいたします。

平成10年3月

神岡町教育長 堀本 昌義

例　　言

- 1 本書は、岐阜県吉城郡神岡町大字殿に所在する中世城館、国指定史跡江馬城館跡下館跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は文化庁の指導による史跡の環境整備事業（史跡公開化）にともなう事前調査であり、その復原資料となすことを目的として1994年度から実施している。本年度はその4年目にあたる。
- 3 調査は、文化庁記念物課、岐阜県教育委員会文化課、江馬氏城館跡調査整備委員会の指導協力を得て、神岡町教育委員会が主体となり、平成9年度県費補助事業として実施した。
- 4 本書の編集・執筆は大平愛子が担当した。建物の復元について吉岡泰英氏（福井県教育委員会）、出土遺物については、瀬戸美濃の器種・年代等について藤沢良祐氏（瀬戸市埋蔵文化財センター）、貿易陶磁器について小野正敏氏（国立歴史民俗博物館考古研究部助教授）、石材について若田俊一氏（神岡町文化財審議会委員長）からご教示頂いた。なお、理解・記述等に誤りがあればすべて編者の責任である。また、江馬氏の文献的考察について小島道裕氏（国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授）、遺跡探査について酒井英男氏（富山大学理学部助教授）から報告を頂き、本書に掲載した。
- 5 地区割は、直角座標第7系国土座標（X=35878.577, Y=13064.049）を原点として設定した。水準はT.P.である。
- 6 土層の色調については『新版 標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄編著、1967 日本色研事業株式会社）を用いた。
- 7 調査区杭の設置、航空写真撮影、造構平面図の作成は㈱日本テクニカルセンターに委託して行った。
- 8 本書の遺物番号は実測図と写真とを統一している。
- 9 参考文献は本文末にまとめた。報告書抄録は巻末に掲載した
- 10 現地調査及び本書の作成に際して、江馬氏城館跡調査整備委員会以外にも、下記の諸氏・関係機関からご指導・ご教示、またご協力を得た。記して厚く感謝申し上げる。（順不同・敬称略）
田中哲雄（文化庁記念物課）、網野善彦（神奈川大学特任教授）、前川　要（富山大学人文学部助教授）、マーティン・モリス（千葉大学工学部講師）、宮田正弘（富山大学人文学部教授）、川部　誠（岐阜県教育委員会文化課主任）、萩原三雄（帝京大学山梨文化財研究所研究部長）、河合君近（瀬戸市埋蔵文化財センター）、浅野晴樹（埼玉県埋蔵文化財事業団）、三鍋秀典（富山県立山町教育委員会）、内堀信雄（岐阜市教育委員会）、三宅唯美（恵那市教育委員会）、岩花秀明（国府町教育委員会）、柳原滋高（青森県市浦村教育委員会）、四橋嘉章（漆器文化財研究所）、中島恒次郎（福岡県太宰府市教育委員会）、都竹清隆（神岡町社会福祉協議会事務局長）、池之端甚衛（NHK岐阜放送局高山支局長）、中田書矢（富山大学人文学部考古学研究室学生）、北陸中世土器研究会
- 11 調査に際して、山本　登（大字殿区長）、沖野好夫（江馬遺跡保存会長）、堀　進、田中幸一、吉中公男、川上定義、宮前　稔、保木　薰、清水邦宏、川上真人、新家康孝、新家久雄、中田康孝、沖野　寛、岩垣達哉、伊勢米蔵（殿地区地権者）、日影広男、森脇賛三をはじめとする殿地区および神岡町内の方々にご協力戴いた。神岡鉱業株式会社から給水について便宜を計って戴いた。記して厚く感謝申し上げる。
- 12 出土遺物・記録書類は、神岡町教育委員会で保管・公開している。

目 次

	頁
第1章 調査の概要	1
1 調査に至る経緯と目的	1
2 下館跡の現状	3
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	4
1 遺跡の立地	4
2 歴史的環境	8
3 高原郷の街道と中世城跡	10
第3章 下館跡の概要と調査の経過	14
1 下館跡の概要	14
2 調査の方法	17
3 調査の経過と調査組織	18
第4章 発掘調査の成果	22
1 1997年度調査の目的と調査範囲	22
2 層 位	23
3 遺 構	24
4 遺 物	63
第5章 小 結	83
第6章 文献資料による考察（補足）	小島道裕 88
第7章 岐阜県神岡町江馬氏下館跡における電磁気探査 酒井英男・小島信人・前川 要・上坂麻子・佐藤 朗・大平愛子 91	
参考文献	105
別 表	107

挿 図 目 次

	頁
第1図 江馬氏下館跡の位置	4
第2図 江馬氏下館跡と周辺の城跡・遺跡	5
第3図 江馬氏下館跡付近絵図トレス図(江戸末～明治初年)	7
第4図 江馬氏下館跡付近地籍図(明治21年)	7
第5図 中・近世の吉城郡の交通路	10
第6図 下館跡と周辺城跡の位置・距離図	12
第7図 調査地区周辺の地形と発掘区位置図	15
第8図 富山大学理学部電磁気探査チームによる遺跡探査(二極法電気探査)	19
第9図 発掘調査風景	19
第10図 西堀の発掘	19
第11図 調査監督委員会の現地指導	19
第12図 現地説明会風景	20
第13図 富山大学理学部チームによる考古地磁気資料採取風景	20
第14図 調査参加者写真	21
第15図 1997年度調査地区的トレンド設定図	22
第16図 1997年度調査地区内の1976～1978年度調査範囲	23
第17図 1997年度調査地区遺構平面図	25
第18図 調査地区南壁土層断面図	27
第19図 調査地区北壁土層断面図	28
第20図 2トレンド南壁土層断面図	29
第21図 南堀平面図	31
第22図 南堀土層断面図	33
第23図 南堀埋土の土層堆積模式図	35
第24図 西堀実測図	37
第25図 建物SB21実測図	39
第26図 建物SB22・SB23・SB24・柵列SA21実測図	41
第27図 建物SB26・SB30実測図	43
第28図 建物SB25・SH27・柵列SA22・建物SB28実測図	44
第29図 建物SB29・柵列SA23・建物SB31・柵列SA24・SA25・SA28実測図	45
第30図 柵列SA26・SA27・SA29・SA30・SA31・SA32・SA33実測図	46
第31図 穴状住居SI11・土間状土坑SX15実測図	48
第32図 土間状上坑SX11・SX12・SX23・土坑SK38・SK39・SK40実測図	50
第33図 不明土坑SX14・土間状土坑SX17・SX18実測図	52
第34図 土坑SK31・SK32・SK33・SK34・SK36・井戸SE11実測図	54
第35図 炉跡SX20・SX22実測図	56
第36図 窑跡SX21・炉跡SX19・SX24実測図	58
第37図 溝跡SD11・SD12実測図	61
第38図 区画4の盛土の土層堆積模式図	62
第39図 江馬氏下館跡出土の土器器皿分類図	67
第40図 南堀出土遺物実測図(1)	69
第41図 南堀出土遺物実測図(2)	71
第42図 建物・柵列柱穴出土遺物実測図	73
第43図 道構内出土遺物実測図(1)(SI11・SX11・SX12・SX13・SX23)	74
第44図 道構内出土遺物実測図(2)(SX17・SX18・SX19・SX19周辺・SD11)	76
第45図 盛土1・盛土2出土遺物実測図	78
第46図 道構外出土遺物実測図(1) (SI11面上・SX15面上・旧耕作土・盛土面上・地山面上)	80

第47図	遺構外出土遺物実測図(2)	82
第48図	江馬氏下館 I 期の遺構配置図	84
第49図	江馬氏下館 II A 期の遺構配置図	85
第50図	江馬氏下館 II B 期の遺構配置図	86
第51図	江馬氏下館跡の1997年度調査地区	92
第52図	本研究の探査範囲	92
第53図	通常の電気探査(a)と高密度電気探査(b)の電極設置	93
第54図	高密度探査の測線位置図	94
第55図	測線 1, 2, 5, 6, 7, 10 の探査結果	95
第56図	測線 8, 9, 11, 3 の探査結果	96
第57図	RM15二極法探査の結果	98
第58図	1997年度の発掘結果の概略図と1976・1977年度調査地区	99
第59図	測線 3 の地下レーダー探査の結果	100
第60図	a. 南堀において推察される地下構造	101
	b. 西堀において推測される地下構造	
第61図	a. 測線 1 の地下レーダー探査の結果	102
	b. 1~13mまでの探査結果	
	c. 20~30mまでの探査結果	
第62図	a. 測線 2 の地下レーダー探査の結果	102
	b. 11~22mまでの探査結果	
	c. 20~33mまでの探査結果	
第63図	帯磁率探査の結果	103

表 目 次

第1表	江馬氏下館跡の発掘調査実績表	2
第2表	江馬氏下館跡指定地の土地買い上げ事業実績表	3
第3表	江馬氏関係年表	9
第4表	江馬氏下館周辺の城跡一覧表	13
第5表	南堀出土遺物破片数・個体数一覧表	34
第6表	盛上及び盛土直上出土遺物破片数・個体数一覧表	62
第7表	1997年度調査区画4出土食器の種類・器種別組成表	64
第8表	1997年度調査区画4出土食器の用途・種類別組成表	65
第9表	1997年度調査区画5出土食器の種類・器種別組成表	66
第10表	1997年度調査区画5出土食器の用途・種類別組成表	66
第11表	1997年度調査区画4の遺構変遷表	83
第12表	延徳3年(1491)5月6日付け北野社領關係幕府奉行人連署奉書	89
第13表	各測線の探査の詳細	94
第14表	柱穴断面形分類表	123

別表目次

別表1	建物計測表	109
別表2	柵列計測表	109
別表3	堀跡計測表	110
別表4	溝跡計測表	110

別表5	竪穴住居計測表	110
別表6	炉跡・竈跡計測表	110
別表7	土坑計測表	111
別表8	柱穴計測表	112
別表9	1997年度調査の出土遺物計測表	124

写真図版目次

- 卷首図版 1 調査地区全景写真（上が西、1997年撮影）
 2 竪穴住居SI11・炉跡SX20発掘後写真（東から）
- 図版 1 1 調査地区航空写真（1947年撮影）
 2 神岡町遠景写真（北から）
- 図版 2 1 調査地区遠景写真：1978年度調査時（西から）
- 図版 3 1 調査地区遠景（西から）
 2 調査地区発掘後全景（上が北）
- 図版 4 1 調査地区区画4 発掘後全景（東から）
 2 調査地区区画5 発掘後全景（東から）
- 図版 5 1 南堀検出状況（東部分、東から）
 2 南堀発掘後全景（東から）
- 図版 6 1 南堀S1T発掘後全景（東から）
 2 南堀SST第3段階埋土b中の礫検出状況（北から）
 3 南堀SST発掘後全景（東から）
- 図版 7 1 南堀S3T北壁層位（南堀埋土東西断面の西部分、南東から）
 2 南堀調査地区東壁層位（西から）
 3 南堀S5T西壁層位（東から）
 4 南堀S2T西壁層位（北東から）
- 図版 8 1 西堀発掘後全景（上が西）
 2 西堀（菜研堀）北壁断面層位（南から）
 3 西堀（菜研堀）東壁断面層位（北西から）
- 図版 9 1 SI11発掘後全景（東から）
 2 SX15発掘後全景（西から）
 3 SX15断面層位（東西畦の西半、南から）
 4 SX15断面層位（南北畦の南半、西から）
- 図版10 1 SX11・SX12・SX23発掘後全景（西から）
 2 SX12・SX23断面層位（西から）
 3 SX17発掘後全景（西から）
 4 SX17断面層位（東西畦の東半、南から）
 5 SX14検出状況（西から）
 6 SX14断面層位（南から）
- 図版11 1 SX18発掘後全景（西から）
 2 SX18断面層位（調査地区南壁内、北から）
 3 SK31断面層位（西から）
 4 SK32断面層位（西から）
 5 SK33断面層位（西から）
 6 SK34断面層位（西から）
 7 SK36発掘後全景（西から）
 8 SE11断面層位（西から）
- 図版12 1 炉跡SX20検出状況（南から）

- 2 炉跡SX20焼成2の白色灰（2層）検出状況（南から）
 3 炉跡SX20焼成1の被熱面（12層）検出状況（南から）
 4 炉跡SX20発掘後全景（地山下面状況、南から）
- 図版13 1 石組み炉SX22炉内円窓検出状況（北から）
 2 石組み炉SX22炉床の礫取り上げ後の断面層位（北から）
 3 石組み炉SX22炉床の礫取り上げ後の断面層位（北から）
- 図版14 1 炉跡SX24被熱粘土面検出状況（南から）
 2 炉跡SX24・倒木裏S K51断面層位（南から）
 3 炉跡SX19発掘後全景（西から）
 4 SX21検出状況（南から）
 5 区画4盛土2検出状況（南から）
 6 区画5盛土1検出状況（南東から）
 区画4盛士層断面（X座標-54ライン付、南から）
 7 Y座標-33～-37
 8 Y座標-30～-33
- 図版15 1 溝跡SD11発掘後全景（北東から）
 2 溝跡SD12発掘後全景（南から）
 3 溝跡SD11断面層位（2トレンチ南壁内、北から）
 4 溝跡SD11・SD12断面層位（中央柱北壁内、南から）
- 図版16 1 調査地区南壁土層断面（Y座標-12付近、北から）
 調査地区北壁土層断面（北から）
 2 Y座標-10付近
 3 Y座標-20付近
 4 Y座標-36付近
 5 1トレンチ発掘後全景（東から）
 6 1トレンチ西端部落ち込み部土層断面（北から）
 7 2トレンチ西端落ち込み部（北東から）
 8 3トレンチ西端部SD14発掘後全景（西から）
- 図版17 南堀出土遺物写真(1)
 図版18 南堀出土遺物写真(2)
- 図版19 建物・横列柱穴出土遺物写真
- 図版20 遺構内出土遺物写真(1)
 図版21 遺構内出土遺物写真(2)
- 図版22 盛上1・盛上2出土遺物写真
 遺構外出土遺物写真(1)
 図版23 遺構外出土遺物写真(2)

付 図

付図1 江馬氏下館跡遺構平面図

第1章 調査の概要

1 調査に至る経緯と目的（第1表）

岐阜県の北部、旧飛騨国に位置する神岡町を流れる高原川と山田川の川筋には、中世におけるこの地域の豪族が築いたと伝えるいくつかの城跡が点在している。中でも高原川右岸に広がる殿段丘上の神岡町大字殿地区は、古文書・古絵図等に「江馬氏之下館」と記していること、字土井ノ内に「五ヶ石（御花石）」と呼ぶ5つの大きな石が残っていることから、地元では古くから、中世高原郷を中心に活躍した地方有力武家である江馬氏の館・庭園跡であると言い伝えてきた。

神岡町教育委員会は1973～1977年にかけて、この殿地区一帯において土地改良（基盤整備・客土）工事に先立つ試掘調査を実施した。その結果、これらの伝承を裏付けるかのように庭園跡、南・西の堀跡や建物跡の一部を確認することができた。特に庭園跡は、故森 蕤庭園文化研究所所長により、室町時代の庭園として貴重なものであるという評価を受け、1977年には岐阜県史跡「江馬館庭園」の指定を受けている。

1978年には国史跡指定を前提とした国の埋蔵文化財緊急発掘調査補助事業として、遺構規模・館跡規模の四方向からの確認を目的として本格的な発掘調査を実施した。これらの調査によって、当遺跡は中世武家居館跡として全国的に見ても非常に保存状態のよい遺跡であることが明らかとなり、1980年、遺存状態の良い関連の6つの城跡とあわせて「江馬氏城館跡」として国の史跡指定を受けた。

1993年、神岡町教育委員会では、江馬氏城館跡は国民共有の文化遺産であるという認識のもとに、遺跡の保護・保存は言うまでもなく、その歴史的意義をさらに追及するための発掘調査を計画した。さらに、遺跡を広く一般に公開・活用することも大切なことであると考え、発掘成果に基づいた整備事業も行うこととした。

この整備事業では、史跡の公有化及び保護・保存を目的に、地元住民の意志を尊重し、さらに科学的な調査研究結果に基づき、将来的には歴史公園としての整備復元を目指している。

これらの事業は、神岡町教育委員会が事務を担当し、その基本構想を事業計画に基づいて実施しつつある。またその過程における発掘調査の指導や助言、整備方法の提言については、それぞれの学識経験者で構成した調査整備委員会・文化庁・岐阜県教育委員会から受けている。調査整備委員会の構成は、下記の通りである。

江馬氏城館跡調査整備委員会

委員長：	牛川喜幸（考古学・庭園）	長岡造形大学教授
委 員：	加藤允彦（造 園）	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 保存工学研究室長
委 員：	古岡泰英（建 築）	福井県教育委員会
委 員：	宇野隆夫（考 古 学）	富山大学人文学部教授
委 員：	沖野好夫（地 元）	江馬遺跡保存会長

調査整備委員会では、下記の実施計画を作成した。

<基本計画>

- ・史跡として活用でき、歴史学習が身近にできる環境づくり
- ・親しみやすく休息できる散策空間の整備
- ・文化遺産を保護・保全していくための整備を行う

以上の計画のために以下の項目について今後検討していく。

- (1) 館跡は、史跡として活用できるので、調査結果に基づいて整備復元する。
- (2) 江馬氏城館跡全体を開通づけた施設を整備する。
- (3) 出土遺物を整理し展示するための施設を整備する。
- (4) 歴史学習に親しみやすくするために、散策、休息の場としての空間を整備する。

発掘調査の主体は神岡町教育委員会であり、調査整備委員会の指導に基づき、遺跡の保護・保全のため、また整備に必要な資料を得るために調査を、1994年度から計画的に実施している（第1表）。

1994年度は、館の三方を囲む堀跡のはば全面の発掘調査を行った。

1995年度は、館の正面と考えられる西堀の外側地区の様相を明らかにするための門前地区の全面調査と、園池の構築年代を明らかにするための園池地区的トレンチ調査を行った。

1996年度は、前年度門前地区で確認した道路の延長、下館跡指定地南辺部での遺構の在り方、広がりの確認を目的とする南辺地区の調査を行った。なお、1994年度から1996年度の調査は富山大学人文学部考古学研究室に委託して行っている。

1997年は、南堀の西への延長部分の周辺の遺構の状況を確認し、門前地区（武士居住区）と南辺地区（職人居住区）の境を明らかにすることを目的とする調査を行なった。また、本年度から、町単独の調査体制に移行している。

第1表 江馬氏下館跡の発掘調査実績表

調査年度	調査地区	調査面積 (m ²)	事業費 (千円)	備 考
1976年度	庭園周辺	2,940		
1977年度	堀内側北東部建物群 南堀・西堀堀部周辺 南居外側地区	2,610		
1978年度	遺跡範囲確認調査	3,060	10,000	奈良国立文化財研究所・福井県教育庁 朝倉氏遺跡発掘調査研究所の指導を受ける
1994年度	堀跡地区	1,630	24,357	富山大学人文学部考古学研究室に委託
1995年度	門前地区	1,210	25,764	富山大学人文学部考古学研究室に委託
	園池地区	140		
1996年度	南辺地区	890	19,573	富山大学人文学部考古学研究室に委託
1997年度	南堀延長部周辺	1,429	17,205	
総 計		13,909	96,899	

2 下館跡の現状（第2表）

下館跡史跡指定地の総面積はおよそ24,810m²である。神岡町教育委員会では、遺跡保存地区として史跡指定地全体の公有化事業を進めており、その進行状況は第2表にまとめたとおりである。

1997年度当初の未公有化面積8,980m²のうち、道路水路以外の約8,030m²の民有地は、7人の地権者が主に農地（大半は水田）・宅地として利用しており、指定地内に2戸の住宅、その他倉庫などの付属建築物、庭木等の樹木がある。指定地内の東側の史跡内を南北に町道が、中央部には同方向に農道が走っている。1997年度国庫補助事業として、指定地内の倉庫の指定地外への移転1件と2,178m²の土地の公有化を実施している。

第2表 江馬氏下館跡指定地の土地買い上げ事業実績表

事業年度	面積(m ²)	事業費(千円)	備考
1978年度以前	4,090		
1995年度	3,580	116,661	家屋移転補償1件含む
1996年度	8,160	224,077	家屋移転補償1件含む
1997年度	2,178	53,597	付属構築物移転補償1件含む
公有化済総面積	18,008	394,335	
未公有化総面積	6,802		
下館跡遺構保存地区総面積	24,810		

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

1 遺跡の立地

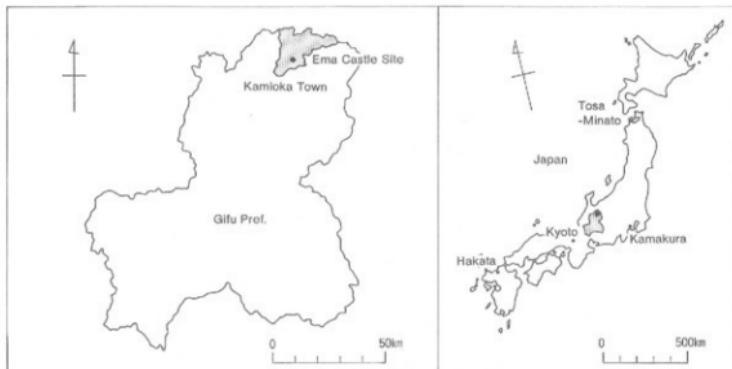
(a) 神岡町の地勢と遺跡立地（第1・2図）

神岡町は岐阜県北部、旧飛騨国吉城郡高原郷に位置する。その人口は約12,200人、面積は312.34km²であり、うち耕地面積8,721ha、宅地面積2,321ha、山林面積221,521haである。その広い土地のほとんどは山地・森林であり、標高差が700mもある複雑な地勢である。町や集落は山々の間を流れる谷や川に沿って立地し、神岡町市街地は河川の浸食により幾階層かに分かれた河岸段丘状の土地に成立している。市街地中心部の標高は約400mを測る。この地域は、1950年（昭和25年）に舟津町・阿曾布村・袖川村が合併し、町制を施行したものであり、江馬氏下館跡の所在する殿地区は、古くは阿曾布村に属していた。

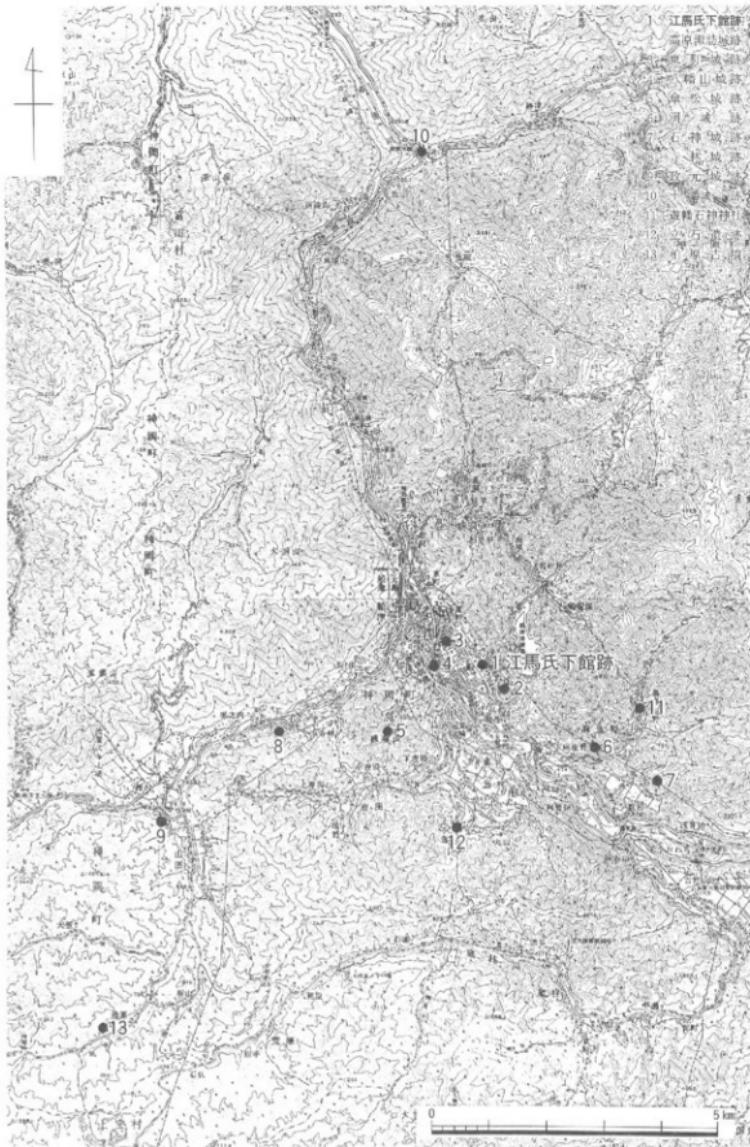
江馬氏下館跡は高原川中流域にある段丘の中央部、標高約455mに立地する。段丘は北アルプス連峰に源を発する小谷および蒲田川、双六川が合流し山峡を北流して日本海に注ぐ高原川（神通川水系右支）と、神岡町東北端に位置する北アルプスの支脈二十五山（標高1,327m）および天蓋山（標高1,527m）付近に源を発する和佐保谷の浸食により形成された河岸段丘である。

遺跡の背後にあたる東側は二十五山から南に向かって伸びる支脈が屏風のように段丘をさえぎり、尾根の南端頂および後線延長には「高原諏訪城」がある。現在は二十五山に発電所の導水管が通ったためその水量は減ってしまったが、かつては山麓裾部に豊富な湧水や谷水があり、この地域への水源となっていたようである。

遺跡西側は西堀跡から約55m西の付近において、旧高原川が南から北西に蛇行し段丘を分断して形成した標高差約7mの崖が自然の要害をなしている。その対岸の段丘を向野と呼び、現在は神岡鉱業の社宅街・一般住宅地となっている。



第1図 江馬氏下館跡の位置



第2図 江馬氏下館跡と周辺の城跡・遺跡 緯尺 1/85,000

遺跡南側は、和佐保谷が二十五山から延びる支脈を浸食・切断して形成した低位段丘が南約1kmの付近まで広がっている。この地区はかつては耕地であったが、現在は工業団地や運動公園となっている。

北側の段丘尻には東町城が位置している。この遺跡は『飛州史』に「江馬之御館」と記すものであり、現在の神岡城である。この館跡北側は段丘上で最大の広がりをもち、農耕地として利用していたが、第2次大戦後、神岡鉱業の社宅拡張や都市計画による住宅地化、学校建設等によって市街地化している。東町城から眺望できる最下位段丘上は江戸時代、舟津町村として周辺農村の商業地として発展し、現在も市街地が広がっている。

また、現在の神岡町・上宝村である旧飛騨国吉城郡高原郷の中心をなす集落は、いずれも高原川およびその支流に形成された段丘上に位置している。高原郷に活躍した中世地方豪族に関連すると伝えられる城館跡は、下館跡の東側背後にある高原諏訪城跡のほか、高原郷では東町城跡(「江馬之御館」)・洞城跡・石神城跡・寺林城跡・政元城跡・土城跡・尻高城跡・芦生茂城跡・天元城跡などがあり、これらは河岸段丘上に成立した集落の背後に立地しているものが多い。なお、荒城郷(現在の古川町)の梨打城跡、越中の地中山城跡なども江馬氏との関係が伝えられている。

(b) 古絵図・古文書から見た下館跡の土地利用の変遷 (第3・4図)

殿地区に現存する土地に関する最も古い記録として元禄検地水帳(元禄7年、1694年)がある。しかしこれに付随するもしくは同時期の絵図がないため、水帳にあげている孫字名の正確な位置を知ることはできない。

第3図は江戸時代末~明治初年の江馬氏下館付近の絵図のトレース図である。この図を見ると「土井ノ内」・「土井ノ上」・「田ノ下」・「ほりはた」などの地名の地区を畑として利用していることから、周辺の田よりもやや高い地形であったことが予想される。明治初年頃は、このように僅かではあるがかつての館の地形・施設の名残を留めている。

館跡内部部に当たるであろう字「土井之内」には庭園造構が遺存していたと推定できるが、江戸時代末期の文化年間(1804~1817)に、江馬氏と関係の深い臨済宗瑞岸寺12世陽堂泰旭がこの地区を再開発した。そして文化末年に再建した瑞岸寺本堂の境内拡張に際して、その石垣として庭園の景石を利用したようである。

第4図は明治21年の地籍図であるが、これをみると明治初年には畠があった字中通り…帯が、すべて水田になっていることがわかる。ここには掲載しなかったが、昭和初年頃に撮影した当地の写真をみると、田の畦畔にかつては池の景石であったであろう巨石を用いていることがわかる。

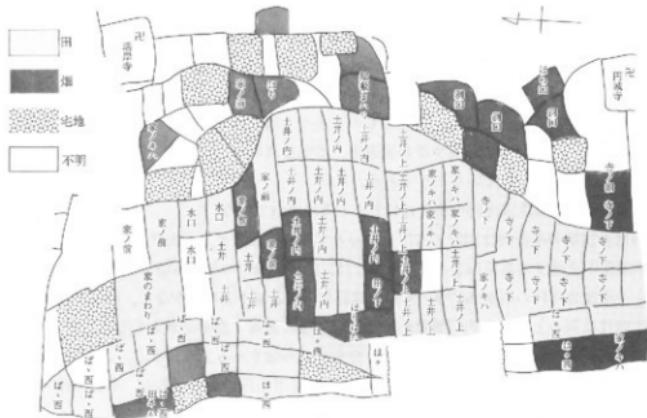
このように後世の耕地化等によって、地形に残っていたかつての館の痕跡は次第に失われ、明治の中頃には字名にその名残を残すだけになったようである。

(C) 遺跡周辺の現地形と原地形

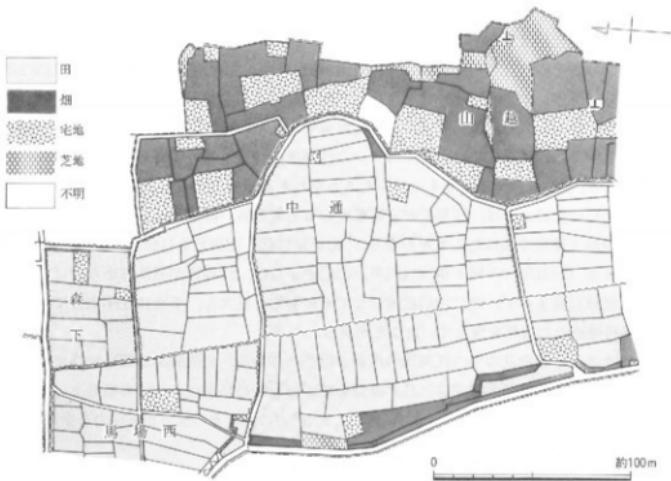
神岡町大字殿地区一帯は1972年から実施した土地改良事業によって、その地形が大きく変わっている。土地改良事業施行前の地形(原地形)は、「土地改良事業計画概要書」(昭和47年10月31日付、岐阜県知事平野三郎宛、神岡町営土地改良事業施行認可許可申請書)では、「旧来の圃場は極めて小さく、そのうえ起伏多き複雑な地形をなしている。地形は東西1/60・南北1/350の傾斜で、地質は洪積層に属する。地質は地表から0~30cmまでは茶褐色粘質土質腐食土壤、30~80cmまでは黒色泥質土壤で花崗岩礫が混っている。80cm以上は黄褐色礫層で径30cmの礫および玉石が混じっている。」としている。

このように中通り一帯は南北に細長く緩傾斜で広がり、東側山麓から河川敷跡までの幅は南北に比して狭く、傾斜が急な地形であった。そして土地改良事業の施行に伴い、山麓の起伏が多い高地を削り取り、その土砂によって段丘端部の低地を埋めた。その結果、館跡西部の外郭部分は土砂の

著しい移動がなされ原地形は失われた。また中通り一帯、江馬氏下館跡を南北に縦断している町道周辺の変貌は著しく、土地改良事業とあいまって埋立て、宅地化、工場敷地等の開発が進み、市街地近郊として様相を一新し、かつての地形とはその姿を大きく変えてきている。



第3図 江馬氏下館跡付近給図トレース図（江戸末—明治初年、小島道裕氏原図を一部改変）



第4図 江馬氏下館跡付近地図 (明治21年)

2 歴史的環境(第2図・第3表)

高原川水系の河岸段丘上には古くから人々の営みがあったようである。石神・麻生野・殿・小萱・釜崎・朝浦・吉田など、高原川・吉田川によって形成された河岸段丘上や、山田など山田川沿いの河岸段丘上では縄文時代の土器・石器が出土している。麻生野地区からは縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土し、また同地区的遊轡石神神社は、縄文時代中期の硬玉製大珠をはじめとする石器類を保管している。石神地区からも縄文時代中期の赤色顔料付有孔錫付土器や石器・石棒などが出土した。上小萱の立石遺跡は縄文後～晩期のものであろう環状列石遺構であり、周辺から土器・石器なども出土している。遺跡の範囲やその変遷等、不明な点は多いものの、縄文時代を通してこれらの河川沿いに人々が暮らしていたようである。

一方、高原郷からは弥生式土器の出土はほとんど確認されていない。

飛騨における古墳の確認例は国府・古川を中心とする古川盆地と、高山盆地の宮川水系に集中している。本遺跡が立地する高原川水系の高原郷では、山田川沿いの柏原古墳が唯一の確認例である。

古代から中世鎌倉時代の高原郷については、確認できる遺跡や史料が少なく、明らかではない。

中世室町時代に至ると、江馬氏下館跡から13世紀以後の遺構・遺物が出土するようになる。また江馬氏が高原郷一帯を治めるようになったことを史料から知りえるようになる。江馬氏関連の史料については、葛谷鮎彦氏の詳細な考察(葛谷1970)、小島道裕氏の論考がある(小島1996・1998)。葛谷・小島氏の研究を第3表にまとめ、以下に簡略に示す。

高原郷の江馬氏は、13世紀中頃に伊豆国田方郡江馬庄(現伊豆長岡町付近)を領有していた鎌倉幕府執権北条氏か、その在地御家人である伊豆の江馬(江間)氏のいずれかの一族が飛騨に所領を得て高原郷に入ったものようである。その後、南北朝の内乱を経て在地領主として成長して行つたと推定できる。

高原郷の江馬氏が史料上に表われるのは14世紀後葉以後のことであり、「山科家文書」応安5年(1372年)の記録がその初見である(岐阜県教育委員会1969)。「山科家文書」応安5年(1372年)から嘉慶2年(1388年)までの記録では「江馬但馬四郎」、「江馬能登三郎」、「江馬民部少輔」の名前が確認できる。この3人の出自、系譜、また高原郷で伝えられる江馬氏と同族なのかも明らかではない。しかしすでに14世紀末には、高原郷にいた江馬氏の一派が室町幕府と直接結びついてその公務を執行したり、逆に反抗する力をもっていたことがわかる。「山科家礼記」文明3年(1471年)・同4年(1472年)の記録からは、江馬氏が室町幕府の有力者と強い繋がりを持ち、また認められるだけの力を持つ地方豪族であったことがわかる。「梅花無尽藏」延徳元年(1489年)の記録、「北野社家日記」延徳3年(1491年)・同4年(1492年)の記事からは、江馬氏が高原郷から荒城郷近辺、つまり高原川流域に留まらず、既に吉川盆地にまでその勢力を拡大し、また15世紀末まで在地の勢力としての室町幕府との関係を保っていたことが判る。

戦国時代になるとその動乱の中の江馬氏の活動が記されている。北飛騨高原郷は次節でも述べるように、信州、美濃を介して太平洋側と日本海側を結ぶ交通路の分岐点としての戦略上の重要地である。江馬氏は甲州の武田氏と越後の上杉氏という二大勢力の間でその双方から圧力を受けつつも、越中に進出するだけの力を蓄えていたようである。

天正10年(1582年)、本能寺の変によって織田信長が没すると、江馬輝盛は飛騨の支配権をめぐって南飛騨の三木白綱と戦ったが敗れて討死にし、高原諏訪城も落城した。このようにして、中世の北飛騨に雄飛した江馬氏は、近世への転換期に領主としての姿を消すこととなった。

第3表 江馬氏関係年表

歴年代		江馬氏の動向	日本史上の動き
13世紀	1300	北条氏の一門または伊豆の江馬氏の一族、高原郷に入る。	鎌倉時代 1321 後醍醐天皇 建武の新政 1336 足利尊氏 京都に入る。南北朝の分裂。
14世紀	1372	「江馬但馬四郎」 広瀬氏を通じ、管領細川頼之から 室町幕府の指示実行命令を受ける。[1]	南北朝時代 1378 足利義満 室町殿(花の御所)に移る
1381	「江馬但馬四郎」 伊勢貞長を通じ、管領斯波義将から 室町幕府の指示実行命令を受ける。[1]		
1383	「江馬能登三郎」 山科家領飛驒国江名子・松橋を押領する。 [1]		
1388	「江馬民部少輔」 室町幕府の指示実行命令を受ける。 [1]		
1400			1392 南北朝の統一。
15世紀	1471	「江馬左馬助」 伊勢貞宗、飯尾為信・之種から 室町幕府の指示実行命令を受ける。[2]	室町時代 1467 応仁の乱始まる
	1472	「江馬左馬助」 管領細川藤元から 山科家に忠誠を尽くすよう指示を受ける。[2]	
	1489	万里集丸、高原郷・荒城郷を訪れ 「江馬氏」の要応を受ける。[3]	
1491	「江間殿」 室町幕府奉行人松田長秀・飯尾為親から 北野社領飛驒国荒木郷の回復を命じられる。[4]		
1492	以後、「江馬氏」 北野社領の飛驒国荒木郷の 所領經營を委任される。[4]		
1500	1551	「和尔平太」 江馬氏の使いとして、北野社に 年貢を兩円院に納める旨の返答を行う。[4]	戦国時代 1551 第1回川中島の合戦
前葉			
16世紀	1565	甲州武田氏、越後上杉氏の両勢力から圧力を受ける この頃の江馬氏の当主は「左馬介時盛」であるが、 息子「常陸介輝盛」と対立する。 この頃、越中まで勢力を伸ばす。	1551 第1回川中島の合戦
中葉	1572	「輝盛」、父「時盛」を殺害。本城高原譙訪城支配。	1572 武田信玄没。
	1576	上杉氏の軍勢、飛驒侵攻。輝盛、上杉氏に降伏。	
後葉	1582	「輝盛」、織田信長を後盾とした 南飛驒の三木自創と対立。 「輝盛」、吉城郡荒城川で三木自創軍に敗れ、討死。 高原譙訪城落城。	1578 上杉謙信没。 1582 本能寺の変、織田信長没
	1600		1600 関ヶ原の合戦

* <江馬氏に関する記述がみられる古文献>

[1]『山科家文書』、[2]『山科家礼記』、[3]『梅花無尽藏』、[4]『北野社家日記』

* 16世紀中葉以降の記事は『岐阜県史』通史編中世 1969 岐阜県、『岐阜県史』通史編近世 1968 岐阜県による。

3 高原郷の街道と中世城跡

(a) 高原郷の街道と江馬氏（第5図）

江馬氏城館跡の所在する高原郷は飛騨国の中北端に位置し、越中・信州と接していることから古くより交通の要所となっていた。中世鎌倉時代において交通上最も重要であったのは、幕府が所在する政治の中心地鎌倉との交通である。この鎌倉への道を鎌倉街道と呼ぶ。飛騨のみならず、北陸諸国から鎌倉のある関東方面に向かうには、日本アルプスを越え、信州・甲斐に抜けるのが最も近道であり、飛騨の鎌倉街道は北陸諸国と鎌倉とを結ぶ道としても重要であった。この鎌倉街道の一つが越中から高原郷を抜けて信州に至る有峰街道であり、鎌倉幕府が倒れた後は飛騨・北陸諸国と信州を結ぶ道として信濃街道・信州街道と呼ばれるようになった。また飛騨と越中を結ぶ街道を越中街道と呼び、主要なものは越中東街道・越中中街道・越中西街道の3つである。高原郷内にはこれら的主要街道を連絡する幾つかの脇街道も通っていた（第5図）。

江馬氏下館跡は、越中東街道と信濃（有峰）街道とを結ぶ上宝道沿いの河岸段丘上に位置する。さらに館の南には山之村道と吉田街道の分岐点があり、これらを通じても主要街道と連絡がとれる。また江馬氏城館跡に指定されている城跡は、これらの街道沿いやその分岐点など交通上の重要地に位置している。江馬氏にとって、軍事・商業の両面において大切な意味をもつ交通路を掌握することが、高原郷を支配する上で重要な意味をもつことであったのだろう。

(b)周辺の中世城跡（第5・6図、第4表）

高原郷には下館跡のほかにもいくつかの中世城跡がある。第4表に下館跡周辺の中世城館跡を一覧表にまとめ、第5図には街道と城跡との位置関係を、第6図に下館跡からの距離関係を示している。



第5図 中・近世の吉城郡の交通路

高原諒訪城跡：江馬氏下館の東側背後、二十五山から南に向って延びる尾根の南端頂および稜線延長上、保木戸平（城山）山頂に位置する。周囲の山々の峰はいずれもこれより高く、包囲された印象をうけるが、南方は水かさの多い高原川の急流に臨んでおり、比較的の攻撃しにくい位置にある。高原諒訪城の南麓において山之村道が上宝道から分岐し、山之村で鎌倉（有峰）街道と連絡する。高原諒訪城は江馬氏の本城であると伝えるが、築城年代・築城者とともに不明である。

本丸は南北30m・東西16mの長方形の平場であり、その下には幅6～10mの腰曲輪がある。本丸北側尾根の延長に堅堀や堀切を設け、尾根筋からの攻撃を防いでいる。本丸の南方、直高12m下に東西の方向に山地を掘り切った長さ42m・幅18mの堀切がある。この堀切より5.5m下った所に、東西9.6m・南北20mの二の丸（出丸）があり、幅5m前後の腰曲輪がめぐる。二の丸の南端にも堅堀と堀切を設けている。

洞城跡：神岡町の中心地から高原川をややさかのほった麻生野地区の山上にある。『飛州志』には城主は麻生野右衛門大夫直盛と記しており、築城者はこの直盛であると考えられる。また彼は永禄7年（1564年）に55歳（一説には57歳）で没しており、築城は天文頃と考えられる。直盛の跡を継いだ慶盛が本家の輝盛と不和になり天正6年（1578年）8月18日夜、輝盛の軍勢に攻められ、慶盛は自害し、城も焼け落ちたといふ。

山顶に東西42m、南北13mの長方形の本丸を設け、本丸西側に東西33m、南北14mの曲輪がある。この曲輪から南側・北側それぞれの斜面に1本ずつの堅堀を設ける。また、本丸北側には堀切を設け尾根筋の防御としている。

石神城跡：神岡町石神地区にある。洞城と石神城は共に高原郷と鎌倉（有峰）街道を結ぶ上宝道沿いに立地し、また二つの城の間に広がる河岸段丘の平坦面を守るように立地する。江馬時経の築城とされる。

本丸は東西27m・南北19mの椿円形の平場であり、東側に南北方向の堀切、西側南北それぞれの斜面に1本ずつの堅堀を設ける。この堅堀の西に平緩面があるが、送電線の設置によって地形がかわっている。この平場の南西端部に東西方向の堀切を設けている。

寺林城跡：神岡町寺林、玄蕃山の頂部に立地する。高原郷の主要街道である越中東街道沿いである。本丸は東西23m・南北10mの方形の平場であり、西に3段の平場が連なるが、堀切、堅堀はない。

政元城跡：神岡町西にある。高原郷の主要街道である越中東街道はこの地で巣山・十三墓峠を越える本道と、数河畔を越える脇道（数河街道）に分かれ、政元城はその分岐点の押えであったと推定できる。江馬氏の家臣吉村政元の居城とも、正本主馬の居城とも伝える。本丸は東西20m・南北10mの椿円形の平場であり、幅4～10mの腰曲輪がめぐる。西側に東西16m・南北10mの曲輪がある。その南に堀切を設け、尾根筋への防御としている。

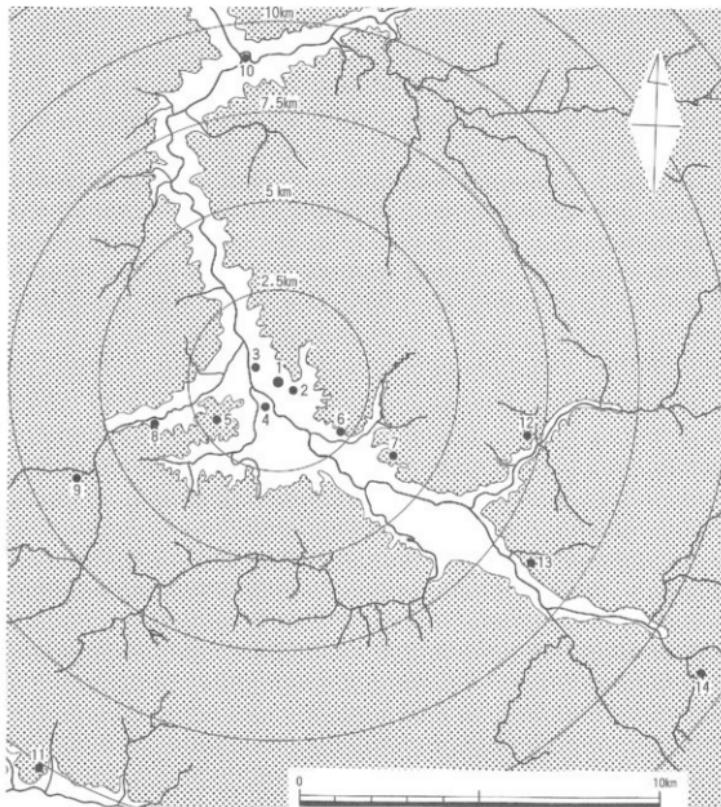
土城跡：神岡町牧、高原川と跡津川の合流点の岩山である牛首城山にある。高原郷の主要街道である越中東街道と、鎌倉（有峰）街道を結ぶ脇街道である有峰道はこの城の麓の大字土より分岐して大多和幹を経て有峰・富山に至る。土城はその分岐点にあり、北方に備えると共に、江馬氏との関係が伝えられる越中地山城（富山县上新川郡大山町）との連絡にあてられたものであろう。江馬氏の家臣一ノ瀬清四郎の居城であったとも伝えられている。頂部に二段の平場がある。

江馬之御館跡：現在の神岡町東町、江馬氏下館の北方、殿段丘の段丘端部に位置する。『飛州志』によれば、江馬氏が武田氏に属した後、武田信玄の越中侵攻のため、その家臣山県昌景の縄張りで造り、後の金森長近の入国際には、その家臣山田小十郎が入れ置かれたとされる。

梨打城跡：吉城郡国府町八日町、古川盆地を流れる宮川の支流荒城川が東の山峠に入つてまもなく

く、北岸の桐谷と十三墓の両峡谷に挟まれた標高749mの山頂にある。越中東街道はこの城の東側を抜けて大阪岬から高原郷に入るが、梨打城はその守りであった。『飛州志』には高原郷源訪城城主江馬常陸介輝盛の持ち分と記され、北飛騨の雄であった江馬氏が南方を固めるために造った出城であろうが、築城者、築城年共に不明である。天正10年の荒城川の合戦で輝盛が三木氏に破れた時、本城高原源訪城と共に落城している。本丸は南北36m、東西24mの不整三角形の平場であり、幅4~8mの腰曲輪がめぐる。本丸を中心に三又状に伸びる尾根上に曲輪を設け、堀切、堅堀で防御している。

その他江馬氏との関係が伝わる城跡には「八幡山城跡」・「韋松城跡」(神岡町)、「尻高城跡」・「天元城跡」・「李生茂城跡」(上宝村)、「中地山城跡」(富山县新川郡大山町)などがある。



1. 江馬氏下館跡 2. 高原源訪城跡 3. 東町城跡 4. 八幡山城跡 5. 韋松城跡
6. 刈城跡 7. 石神城跡 8. 寺林城跡 9. 政元城跡 10. 土城跡 11. 梨打城跡
12. 尻高城跡 13. 天元城跡 14. 李生茂城跡 (図中の番号は第4表と対応する)

第6図 下館跡と周辺城跡の位置・距離図 比例尺1/135,000

第4表 江馬氏下館跡周辺の城跡一覧表

番号	城跡名	読み	別名	標高 (m)	比高 (m)	下限からの 直線距離(m)	立地	指定	所在地	参考文献
1	下館跡	しもやかたあと		455			内岸段丘面上	岡史跡 江馬氏城跡	岐阜県吉城郡 神岡町	2,3,4,5, 6,7,9,10
2	高畠跡城跡	たかはらすわじょう あと	江馬城 まじょう 地城 あさひやまじょう 毛城 あさきじょう	619	164	0.5	尾根盛先端部	岡史跡 江馬氏城跡	岐阜県吉城郡 神岡町	2,3,4,5, 6,7,9,10
3	東町城跡	ひがしまじょうあと	江馬之跡館 えまのかやかた 寺坂 おきのじょう 野坂 のじりじょう	443		0.9	段丘上	町史跡	岐阜県吉城郡 神岡町	2,3,4,5, 6,7,9,10
4	八幡山城跡	はちまんやまじょう あと		451	30	1	山頂	町史跡	岐阜県吉城郡 神岡町羽根	4,5,9
5	奈松城跡	なまつじょうあと	有田城 よしだじょう	803	373	2.1	山頂	島史跡	岐阜県吉城郡 神岡町吉田	4,5,9,10
6	御城跡	ごのじょうあと	飛生城 あそやじょう	536	74	2.4	半独立峰頂部	岡史跡 江馬氏城跡	岐阜県吉城郡 神岡町吉野	2,3,4,5, 6,7,9,10
7	右伴城跡	いしがみじょうあと	西城 あんすじょう 地城 ふたごえじょう	703	183	3.7	山頂	岡史跡 江馬氏城跡	岐阜県吉城郡 神岡町石神	2,3,4,5, 6,7,9,10
8	寺林城跡	てらばやしじょうあと	玄要城 げんばじょう	632	76	3.7	半独立峰頂部	岡史跡 江馬氏城跡	岐阜県吉城郡 神岡町寺林	2,3,4,5, 6,7,9,10
9	政元城跡	まさもじょうあと	山田城 やまだじょう	741	39	6.2	尾根盛先端部	岡史跡 江馬氏城跡	岐阜県吉城郡 神岡町	2,3,4,5, 6,7,9,10
10	上池跡	じょういけあと	鬼ヶ城 おにがじょう	352	62	9.2	山頂	岡史跡 江馬氏城跡	岐阜県吉城郡 神岡町	2,3,4,5, 6,7,10
11	梨打城跡	なしうちじょうあと		749	197	12.5	山頂		岐阜県吉城郡 国府町	
12	荒高城跡	あらかじょうあと				7			岐阜県吉城郡	7,8
13	天元城跡	てんげんじょうあと				9.5	尾根盛先端部	—	岐阜県吉城郡 上宝村岩井戸	8,9,10
14	亭生茂城跡	とうじょうじょうあと				14.2		—	岐阜県吉城郡 上宝村生茂	8
15	中地山城跡	なかぢやまじょうあと		380	35	26	台地	町史跡	富山県上新川郡 大山町中地山	1,2,6,7, 10

番号は第6図と一致する

第4表、第6図の参考文献

- 1 大山町教育委員会 1994 「大山の歴史」
- 2 神岡町教育委員会 1979 「江馬氏下館跡発掘調査概報」
- 3 神岡町教育委員会 1981 「江馬氏下館跡保存管理計画策定報告書」
- 4 神岡町教育委員会 1981 「神岡の文化財」
- 5 神岡町教育委員会 1994 「飛驒の神岡」
- 6 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1995 「江馬氏城跡－下館跡発掘調査報告書Ⅰ－」
- 7 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1996 「江馬氏城跡Ⅱ－下館跡門前地区と庭園の調査－」
- 8 上宝村 「上宝村誌」
- 9 森本一雄 1987 「定本飛驒の城」 郷土出版社
- 10 吉岡勲・村瀬一郎・横山泰 1979 「岐阜県『日本城郭大系』第9巻 新人物往来社
- 11 佐伯哲也氏提供の縄張図を参考にした。

第3章 下館跡の概要と調査の経過

1 下館跡の概要

江馬氏下館跡は北飛騨の高原郷を治めた中世武家である江馬氏の居館跡であり、1980年に国の史跡指定を受けた江馬氏城館跡の中心遺跡である。

1973年度に江馬氏居館跡・庭園跡との伝承をもつ神岡町大字殿地区において土地改良工事に先立つて試掘調査を行い、広範囲にわたる遺構の存在を確認している。この調査によって庭園造構の概要をほぼ確認し、園池に隣接した建物跡、館を囲む堀跡の存在も明らかになった。以後、1978年にかけて、調査区を拡大しつつ館内外の発掘調査を行い、建物跡、館の西・北・南の三方を囲む堀跡などを検出している（神岡町教育委員会1979）。

1994年度は、それまでの調査によって部分的に確認していた館の三方を囲む堀跡の規模と年代を確認することを主目的とする調査を行った（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1995）。

1995年度は、館の門前の利用のあり方と館内外を結ぶ道路を確認するための門前地区的調査と、館内部の園池地区的トレンチ調査を行った（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1996）。

1996年度は、門前地区で確認した南北道路の南への延長の有無の確認と、史跡指定地南辺での遺構の状況を確認するための南辺地区的調査を行なった（神岡町教育委員会・富山大学考古学研究室1997）。

以下に、その調査成果の概要をまとめることとする。

(a) 館内部の調査成果（付図1）

堀で囲んだ館中心部の規模は東西114m、南北97m程であり、東側は山を背にして残りの三方を堀で囲んでいる。建物配置と薬研堀の位置からみて、正面は西を向く。

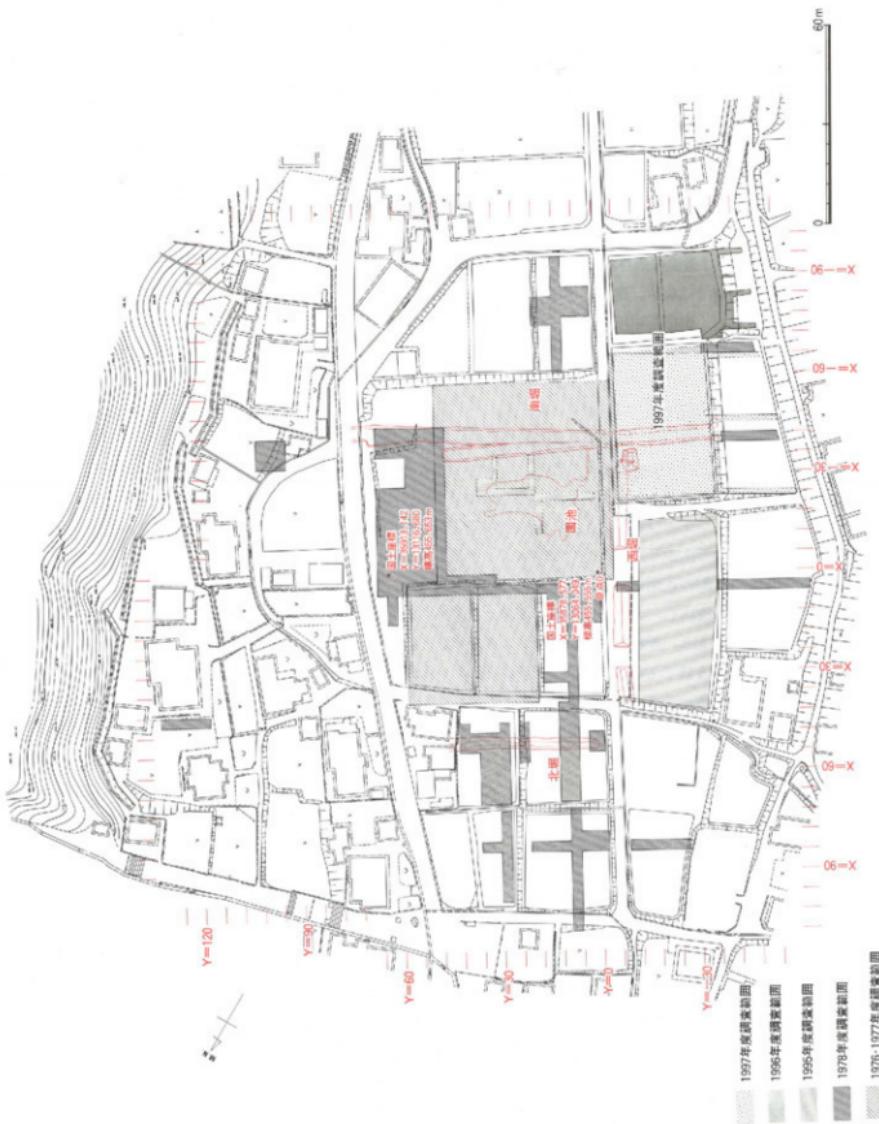
北堀：幅約4m、深さ約1mの箱堀である。堀の内側に接して、幅3m、高さ0.5~0.8mの土塁状の高まりがある。

南堀：幅約4m、深さ約1.1mの箱堀であり、角度をやや東に振って新たに掘り直している。掘り直した新堀は幅約5m、深さ約0.7mの箱堀である。掘り込みの土層の検討から南堀は新旧2時期、6段階の変遷をたどることが判った。旧堀の埋土には館内側からの流れ込み層があり、土壘を伴っていたと考えられる。新堀にはこのような層が堆積しない。また旧堀西方には園池の排水路が接続する。南堀では旧堀の東側部分をいったん埋め戻して整地した後、その南側に新堀を掘り直しているが、この排水路以西では旧堀跡をそのまま利用している。

西堀：館の正面であり、館への導入部となる二つの土橋がある。北側の土橋1は幅約3m、南側の土橋2は幅約7mであり、南側の土橋2が主門である。堀は、土橋1の北側では、幅約4.4m、底幅約1.8m、深さ約1.4mの箱堀であり、南側では幅約4.5m、底幅約0.2m、深さ約3mの薬研堀である。その埋土は自然の堆積ではなく、整地土で一度に埋め戻している。この堀埋土の流れ込みの方向から、西堀の内側に土壘の存在が想定できる。

これらの堀は、わずかに水が溜まる程度であり、基本的には空堀であったようである。出土遺物のうち最も新しい年代を示すものは16世紀前葉のものである。

庭園：館の南西隅に位置する。1995年度に行なったトレンチ調査により東西約28m、南北約14mの規模であり、中央部には東西約7m以上、南北2.5m以上の中島を築くものであったことが判明した。池底は素掘りの状態であり、地山層まで削った後に、掘削土を用いて池の汀部と中島に盛土している。



第7図 調査地区周辺の地形と発掘区位置図 緯尺1/1,470

池辺の施設や付属する建物の配置、石材の使い分け、景石の据え方などから、京都の庭園様式にならって造ったものであると推測している。園池からの排水溝が南堀旧堀に接続していること、層位観察による南堀・盛土との関係から、園池は館の造成時に旧堀・土塁と一体の施設として成立したことがわかる。最も新しい年代を示す出土遺物は16世紀初めのものである。

建物：館内部には3つの造構面があり、館の成立期を含めて3回の整地を行ったと考えられる。最上層造構面で検出した館内の建物跡には、礎石建物9棟、掘立柱建物1棟、檜列4列、溝跡等がある。これらの建物群はその主軸方位の違いから2時期あったことが確認され、報告書中ではこれをA期・B期にわけて整理している。両者の新旧関係については一部の礎石の抜き取り穴の重複(SB03・SB11)や、礎石の検出レベルから、A期(SB01～SB07)がB期(SB08～SB11)に先行することが判明している。A期建物は造構の残存状態が良好で平面規模も推測できるが、B期建物については削平を受け、平面規模は明瞭ではない。建物と南堀との主軸方位をみると、占いとされるA期建物と南堀新堀の主軸方位が一致し、南堀新堀段階にA・B両時期の建物が伴うことが指摘できる。これら各期の造構には、建物跡の主軸方位、堀の重複状況、庭園と堀の関係等にみられるように前構築工法の踏襲の意識が強くうかがわれる。

(b) 館外部の調査（第7図、付図1）

1978年度調査では造構の広がりを確認するため、堀の外側でもトレント調査を行っている。館の北側・南側では南北に長軸をとる十字型のトレントをそれぞれ4本・1本設定した。西側は西堀から段丘端部まで伸びる東西トレントを1本、段丘端部に東西方向に2本、南北方向に1本のトレントを設定した。各トレントでは柱穴・土坑・堅穴住居等を検出したようであるが、1978年度概報では、館外での明確な造構の広がりは確認できなかったと報告している。

1995年度には館の正面にあたる門前地区の調査を行ない、掘立柱建物8棟、檜列3列、井戸10基、竈跡1基などを検出し、大きく3時期の変遷をたどることが明らかになった。門前地区第1段階は館を整備する前であり、総柱式掘立柱建物(SB01・06～08)が散在する。門前地区第2a段階は館の整備に伴って建物を建てる時期であり、門前を檜列(SA01)で南北の区画に分け、南側の区画では建物が建ち並ぶ景観が出現する(SB02・03・05・SA02)。門前地区2b段階は、館内部と共に建物を建て替える時期であり(SB04・SA02)、門前地区は広場状になっていたことが明らかになった。

1996年度には、館の中心部からやや離れた南辺地区的調査を行なった。下館跡では初めて堅穴住居2棟を確認し、掘立柱建物7棟、檜列3列、土間状土坑1基、土坑等を確認した。これらのうち、館を造成する前の江馬1期に相当する建物ではなく、この地の利用は館を整備する江馬氏下館跡II A期に始まる。南北に伸びる道路と檜列で東西2つの区画を設けて建物をつくり(区画1にSB11、区画2にSB15・SI02)、同II B期にはそれぞれの区画でその配置を踏襲して建て替えを行っている(区画1ではSB12、区画2ではSB16・SB17・SI01)。生漆が付着した漆塗膜が出土したことから、堅穴住居は職人の作業場と考えられる。下館では武士以外の身分の人々も館周辺で活動しており、館の造成に際しては館周辺部も含めて区画を設け、身分による住み分けを行っている様子がわかった。

1977年度の調査で門前・南辺両地区のは中間の位置に、館を囲む南堀が西に延長して伸びていることを確認しており、この南堀を武士と職人の区画の境としている可能性が想定できる。また、近世村落の復元の結果、近世には下館がある殿段丘の南端部に諏訪社と天神社が、北東端部に加茂社が、北端部に白山社があったことがわかった。これらの宗教施設は、下館の時代にこの地に勧請されたものと考えられ、殿段丘全体に下館の施設が広がる可能性が高くなつた。

(c) 出土遺物の概要

中世の遺物は土師器皿を中心として5000点ほどが出土しており、その出土量は堀の内側地区に多い。館外部地区においては門前地区では極端に少ないものの、南辺地区では一定量の出土があった。出土土器・陶器の種類は、土師器、瓦器、中国陶磁器、白瓷系陶器、瀬戸美濃、珠洲、八尾、常滑などである。13世紀後半から16世紀中葉にかけての各時期の遺物で構成され、15世紀前半の遺物量が最も多く、館の最盛期と考えられる。また、全体的な量は少ないものの16世紀中葉までの遺物が見られる。

(d) 江馬氏下館の変遷

以上の調査成果に基づき、江馬氏下館全体の変遷を、次のⅠ～Ⅲ期に時期区分している。

江馬氏下館Ⅰ期（13世紀後半～14世紀）：一定の遺物が出土するようになり、この地の利用が始まる。総柱式建物が散在し、堀はまだ造っていない段階である。1994年度報告の江馬氏下館Ⅰ期、1995年度報告の門前地区第1段階に相当する。

江馬氏下館Ⅱ期（14世紀末～16世紀初め）：方約一町の館を整備した段階である。建物主軸の方位の変化に基づき、ⅡA期・ⅡB期に細分できる。

江馬氏下館ⅡA期（14世紀末～15世紀前半）には堀・庭園を造成し、館としての機能が出揃う。また館外部にも計画的に区画を設け、南辺地区には手工業生産の場も配置している。1978年度報告のA期建物の時期である。遺物の出土量は最も多く、館の最盛期である。1994年度報告の江馬氏下館2-a期、1995年度報告の門前地区第2a段階に相当する。

江馬氏下館ⅡB期（15世紀後半～16世紀初め）には館内部と門前地区では建物の主軸方位が変化し（1978年度報告のB期建物）、門前地区には馬屋が出現する。南辺地区は建物配置は継承しつつ建て替えを行うが、その主軸方位は館内部とは一致しなくなる。1994年度報告の2-a2期、1995年度報告の門前地区第2b段階に相当する。

江馬氏下館Ⅲ期（16世紀中頃～16世紀末）：江馬氏が下館の機能を他所に移してから、1582年に三木氏に敗れ領主としての江馬氏の歴史が終わるまでの時期である。1994年度報告の江馬氏下館2-b期と3期の一部に相当する。地籍図や縄張図等の検討から江馬氏下館Ⅲ期には、東町城・高原諒訪城が本拠であった可能性が高い。

2 調査の方法

遺跡の標示：岐阜県遺跡台帳に登録されている遺跡番号はGO7K00093である（岐阜県教育委員会1989）。遺跡略号は、Gifu EmayakataをあらわしたGEとし、調査年度を組合せてGE97と標示した。

調査区の設定：基準点網の設定は、1978年度調査時に使用したグリッドをもとに実行している。これは当時の保存原点である杭1（国土地標X=35878.577, Y=13064.049, Z=455.555）と杭2（国土地標X=35913.142, Y=13116.680, Z=455.653）を結ぶ線を基準とするものである。この軸線をY軸とし、杭1を通りこれに直交する軸線をX軸とした。杭1が原点0であり、座標は1mを単位とした数値によって表示している。この座標の方向は館内のA期建物の軸線にあわせたものであり、X軸が磁北から内へ約26度振っている。

なお、調査地区内の杭は6mごとに設定し、遺構実測・遺物取り上げの基準として用いた。

調査の方法：まず調査予定地の南辺に層位観察用の試掘坑を設定し、表土・旧表土から地山層に及ぶ基本層序を確認した。その後、調査地区全体を重機を使用して旧表土層まで掘削し、それより下層は人力により発掘した。検出された遺構には、奈良国立文化財研究所の標示方法に準じて、以下の記号を用いた遺構番号を付した。

SB：建物 SA：樋・柱列 SI：竪穴住居 SD：溝

SK：土坑・倒木痕 SP：穴・柱穴 SX：その他の遺構（土間状土坑・炉跡・竈跡等）

なお、本年度の遺構番号は1996年度調査南辺地区からの通し番号とし、それぞれSB21・SA21・SI11・SD11・SK31・SX11から数えた。SPのみは1から数えている。

個々の遺構調査では、柱穴は柱痕跡や抜き取り跡を平面的に観察した後、半裁して断面観察を行ない、最終的には完掘した。土坑等の大型の遺構は二分法、あるいは四分法を用いて発掘した。SX上間状土坑・炉跡等は完掘したが、SK土坑は半裁のみとし、残り半分の埋土はそのまま埋め戻した。SK倒木痕については、平面観察で倒木痕と確認できたものについては未掘のものがある。なお土坑・倒木痕の完掘、半裁の区別は、卷末の別表7に記した。

実測・記録：遺構の全体平面図は、株日本テクニカルセンターに委託し、ラジコンヘリコプターから撮影した写真をもとに、縮尺20分の1で図化した。掘り下げ段階の遺構の平面図は、必用に応じて縮尺20分の1（一部縮尺10分の1）で割り付け実測を行った。断面図は縮尺20分の1（一部縮尺10分の1）で割り付け実測を行なった。柱穴の断面図は堆積に層位があるものについて作成した。ただし全ての遺構は、断面形・法量等を記録した遺構観察表から断面図の作成が可能なようにしている。

出土遺物の取り上げは、前述した座標を用いたX・Y座標、出土レベルを少数点以下2桁まで記録しておこなった。

写真撮影は遺構検出状況、土層断面、遺構完掘状態等を中心に行なった。調査区全体の発掘後全景写真は高所作業車を用いて撮影した。完掘状況空中写真は株日本テクニカルセンターによる航空測量の一部として、ラジコンヘリコプターによって撮影した。

遺構の埋め戻し：大型の遺構と、半裁のみで埋土を残した遺構については、埋土との区別をつけるため、完掘した部分を山砂で埋め戻した。完掘した柱穴等の小型の遺構は耕作土で埋め戻した。南堀、西堀は掘り残した埋土の断面にブルーシートをかけて断面の保護と埋め戻し土との区別とし、完掘した部分は耕作土で埋め戻した。その後、重機を用いて調査地区全体を耕作土で埋め戻した。

報告書について：これまで神岡町教育委員会が刊行してきた報告書にはシリーズ番号が記されていなかったが、本報告書からシリーズ番号を記すこととする。これまでの報告書を数え、本報告書を「神岡町埋蔵文化財調査報告書 第5集」として、以後継続して次数を数えることとする。また、将来的には下館跡以外の国史跡江馬氏城館跡の発掘調査も行う計画であることから、江馬氏城館跡の調査報告のシリーズ番号も付すこととし、本報告書を「江馬氏城館跡調査報告書 第5集」として以後継続していくこととする。

3 調査の経過と調査組織

5月16日 調査地区的設定を行なう。

5月20日～21日 富山大学理学部助教授酒井英男氏・株興和上坂麻子氏を中心とするチームが表土剥ぎ取り前の地下遺構の状態を確認するため電気探査を行なう。

5月22日 発掘器材の搬入を行なう。土層の堆積状況を確認するため、調査区南壁にそって試掘坑を設定し、人力によって地山面まで掘り下げた。

5月23日 神岡中学校3年生選択社会科の生

徒10名・教師1名来跡。

5月26～30日 重機による表土掘削を行なう。区画4では旧耕作土最下層部の鉄分堆積層の直下で遺構面を確認し、表上掘削と同時に人力によって遺構の検出作業をすすめ、柱穴多数、土壤等を確認する。区画4西辺部で盛土層を確認する。盛土検出面には遺物が多く散布。区画5では、全面で鉄分堆積層の下に黒褐色土の盛土層を確認した。盛土面上では遺構は確認できなかった。



第8図 富山大学理学部電磁気探査チームによる遺跡探査
(二極法電気探査)

5月30日 富山大学考古学研究室学生2名来跡。

5月31日 神岡中学校3年生選択社会科の生徒、表土剥ぎ後の状況を見学に来る。

6月2~4日 嶺日本テクニカルセンターに委託し、調査区坑の設置を行なう。

6月6日 1977年度調査トレンチ埋め戻し土の掘削を開始。

6月9・10日 富山大学理学部助教授酒井英男氏を中心とするチームが、表土掘削後の遺構の状態を確認するための電気探査・レーダー探査を行なう。区画4の遺構概略図の作成開始。

2トレンチの掘削終了。遺構は確認できず。3トレンチの掘削開始。

6月12日 1977年度調査トレンチ埋め戻し土の掘削終了。

6月16~19日 区画4西辺部の盛土層の掘削開始。盛土中より遺物が多く出土。盛土下の地面において柱穴、石組み炉SX22を検出。



第9図 発掘作業風景

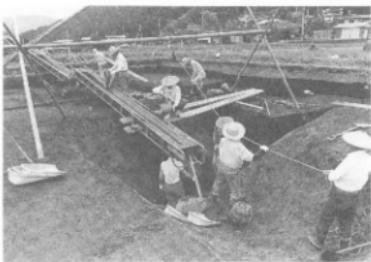
6月20日 区画4の遺構の半截作業を開始。

6月26日 区画4の遺構実測を開始。

7月3日~ 雨天時に、遺物洗浄・注記・計測・台帳作成作業と、遺構整理作業を行なう。

7月10日 富山大学人文学部教授宇野隆夫氏来跡。現地指導を受ける。

7月15日 区画4の遺構半截終了。西堀の1977年度調査埋め戻し土の掘り上げ開始。



第10図 西堀の発掘

7月16日 区画5の盛土の掘り下げ、遺構の検出を開始する。区画5では、遺構の数が少ない。井戸SE11検出。順次、半截・実測作業を行なう。

7月25日 富山大学考古学研究室学生5名来跡。

8月5日 埼玉県埋蔵文化財調査事業団浅野晴樹氏来跡。



第11図 調査整備委員会の現地指導

8月6日 文化庁田中哲雄氏、奈良国立文化財研究所加藤允彦氏、福井県教育委員会吉岡泰英氏、国立歴史民俗博物館小野正敏氏・小島道裕氏、千葉大学マーティン・モリス氏、富山大学前川 要氏来跡。現地視察後、岐阜県教育委

員会川部 誠氏、江馬遺跡保存会長沖野好夫氏、調査担当者、町関係者を加え、第4回江馬氏城館跡調査整備委員会を行なう。

8月12日午前 現地で調査成果の記者発表を行なう。報道関係記者8名、神岡町議会議員5名の参加を得る。

8月15日 中条町教育委員会水澤幸一氏来跡。

8月17日午前 現地説明会を行ない、地元の方々を中心にして130名の参加を得る。

関市教育委員会田中弘志氏、大垣市教育委員会高田康成氏、宮川村教育委員会立田佳美氏、国府町教育委員会岩花秀明氏、岐阜県文化財保護センター伊藤秀雄氏・上嶋善治氏、福光町教育委員会佐藤型子氏、富山市佐伯哲也氏来跡。



第12図 現地説明会風景

8月18日 南堀SSTの掘削を開始する。埋土上層部から館内の礎石、拳大の礎、遺物多数が出土する。下諏訪町教育委員会田中慎太郎氏、北海道埋蔵文化財センター石井淳平氏来跡。

8月26日 南堀SST完掘。神岡町役場農林課職員15名来跡。

8月27日～9月1日 南堀SITの掘削を開始する。埋土上層から遺物が多数出土。

9月3日 岐阜市教育委員会内堀信雄氏、恵那市教育委員会三宅唯美氏、高富町教育委員会山田哲也氏来跡。

9月8日 信州大学日本史専攻ゼミ学生11名来跡。

9月9日 神岡町議会総務委員会による発掘現場視察。

9月11日 (株)日本テクニカルセンターに委託

し、ラジコンヘリコプターによる航空測量写真・調査地区完掘状況写真の撮影を行なう。

9月12日 神奈川大学鶴野善彦氏、NHK高山支局池ノ端甚衛氏、丹生川村教育委員会高橋孝助氏、益田南高等学校権井重治氏来跡。夜、作業員の慰労会を行なう。

9月20日 魚津市教育委員会塩田明弘氏来跡。

9月24日 高所作業車による調査地区全景写真の撮影を行なう。

10月3日 炉跡の掘り下げ、実測作業開始。



第13図 富山大学理学部チームによる考古地磁気資料採取風景

10月8日 神岡町立山田小学校6年生12名・先生1名来跡。

10月15日 富山大学理学部教授広岡公夫氏が炉跡の考古地磁気測定のため、測定資料を採取。

10月16日 富山大学考古学研究室学生2名来跡。

10月18日 山梨県史編纂室萩原三雄氏・畠大介氏・渡辺見氏・八巻與志夫氏・山下孝司氏来跡。はたき石・植など鉱山関係の遺物についてご教示をうける。

10月24日 神岡中学校3年生選択社会科の生徒11名・先生1名来跡。

10月28日 神岡町文化財審議会委員長若田俊一氏来跡。石材についてご教示をうける。

10月29日 全ての発掘調査・記録作業を終了する。

11月12日 発掘器材の搬出を行なう。

11月10～26日 保存のための遺構への砂入れを行ない、重機による調査地区全面の埋め戻しを行なった。

江馬氏下館跡1997年度調査組織

調査指導機関：江馬氏城館跡調査整備委員会

調査員：大平 愛子（神岡町教育委員会）

調査作業員：伊藤 正子，沖野 好夫，大庭 俊美，柏當 芳江，下葛千壽子，下葛 安平，

下野 正夫，出井 正蔵，堀籠 弘，細井 理恵，堀辺 英臣，道上 義紀，

宮垣 秀雄，森腰 幸一，山下 悅司，山本 政雄，吉中 公男

沖野 裕子（敷賀女子短期大学学生）

茂角奈津子，山下 洋平（岐阜県立飛騨神岡高校生徒）

整理参加者：堀辺 英臣，道上 義紀

中林 郁美（神岡町教育委員会）

伊藤 正子，下葛千壽子，細井 理恵，

茂角奈津子（岐阜県立飛騨神岡高校生徒）

事務局：堀本 昌義 神岡町教育委員会教育長

村井 充佳 神岡町教育委員会教育課長

古宿 稔 神岡町教育委員会社会教育係長

林下 明史 神岡町教育委員会主事補

大平 愛子 神岡町教育委員会学芸員



第14図 調査参加者写真

第4章 発掘調査の成果

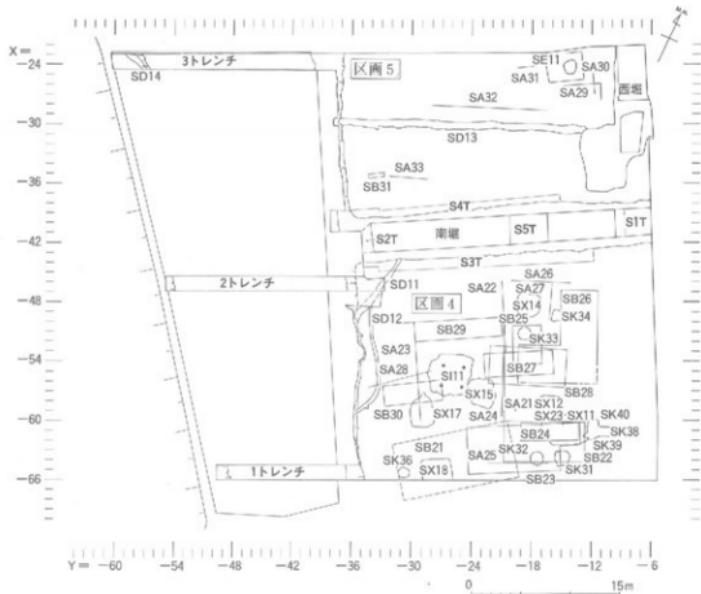
1. 1997年度調査の目的と調査範囲（第15・16図）

これまでの調査成果で得られた第2章1の知見に基づき、1997年度は武士の区画である門前地区と、職人の区画である南辺地区の境と想定できる南堀延長部周辺の状況をより詳しく把握し、西堀と南堀の接続部分の状況を明らかにすることを目的とした発掘調査を実施した。

調査地区は現在の田地の区画に合わせて設定した。その範囲はX座標が-22～-66, Y座標が-6～-37である。1995年度調査門前地区と1996年度調査南辺地区の中間にあたる場所である。

調査地区の西側の田（X座標-22～-70, Y座標-37～-60の範囲）は比高差約1.5メートルで、一段低くなっている。この田での遺構の広がりを確認するため、調査地区の北壁、南壁を西に延長し、またX座標-47ラインにそって、幅1.5mの東西方向の試掘坑3本を設定した。試掘坑は南側から順に1トレンチ、2トレンチ、3トレンチと呼称し、調査地区とこの出の間の斜面を「段丘斜面」と呼称する。西側の田の西辺部は比高差約8mの段丘崖斜面であり、その崖斜面の下部、段丘端部から約5m下に、かつての脇街道である「上宝道」が通っている。

本年度の発掘調査面積は約1,429m²である（試掘坑を含む）。



第15図 1997年度調査地区のトレンチ設定図 緯尺1/500



第16図 1997年度調査地区内の1976-1978年度調査範囲 縮尺1/500

なお、調査地区の一部、西堀・南堀の埋土の一部は1976-1978年度調査時にすでに掘削しており、その範囲は第16図に示したとおりである。

2. 層位

(a) 調査地区的層位 (第18・19図)

下館跡の堀外側地区の基本層序は、上層から、1972年度から1978年度発掘調査後にかけて行なった土地改良工事による客土である「表土」・「土地改良土（盤土）」、土地改良以前の耕作土であり、中世～近世の遺物包含層である「旧耕作土」、遺構確認面がある「地山」に大別できる。

1997年度調査地区的層位は、南壁、北壁の2方向で観察した。

表土は、南壁・北壁ともに第1層オリーブ褐色砂質土および第2層暗褐色粘土であり、土地改良土は第3層明黄褐色砂質土である。

南壁では、旧耕作土は第24a層黒褐色砂質土、第25a層暗茶褐色砂質土であり、第25a層は耕作に伴って沈着した鉄分の層である。なお、Y座標-12m以東の南壁第5層～10層は1977年度調査後の埋め戻し土である。北壁では、旧耕作土は第19a層暗褐色砂質土、第20a層黒色粘土であり、第20a層は耕作に伴って沈着した鉄分の層である。なお、第7層は1977年度調査時の埋め戻し土であるが、

調査終了後行なった土地改良工事に伴って広範囲に押しならした旧耕作土でもあり、北壁東端部からY座標-34m付近まで確認できる。

地山は暗灰黄色砂質土であり、この面上で遺構を検出した。

(b) 1～3トレンチの層位（第18～20図）

調査地区西側の田に設定した1～3トレンチでは、各トレンチの西端部と中央部西寄りの2カ所で地山面の落ち込みを確認した。2カ所の落ち込みの間は東から西へ緩やかに傾斜する平坦面である。

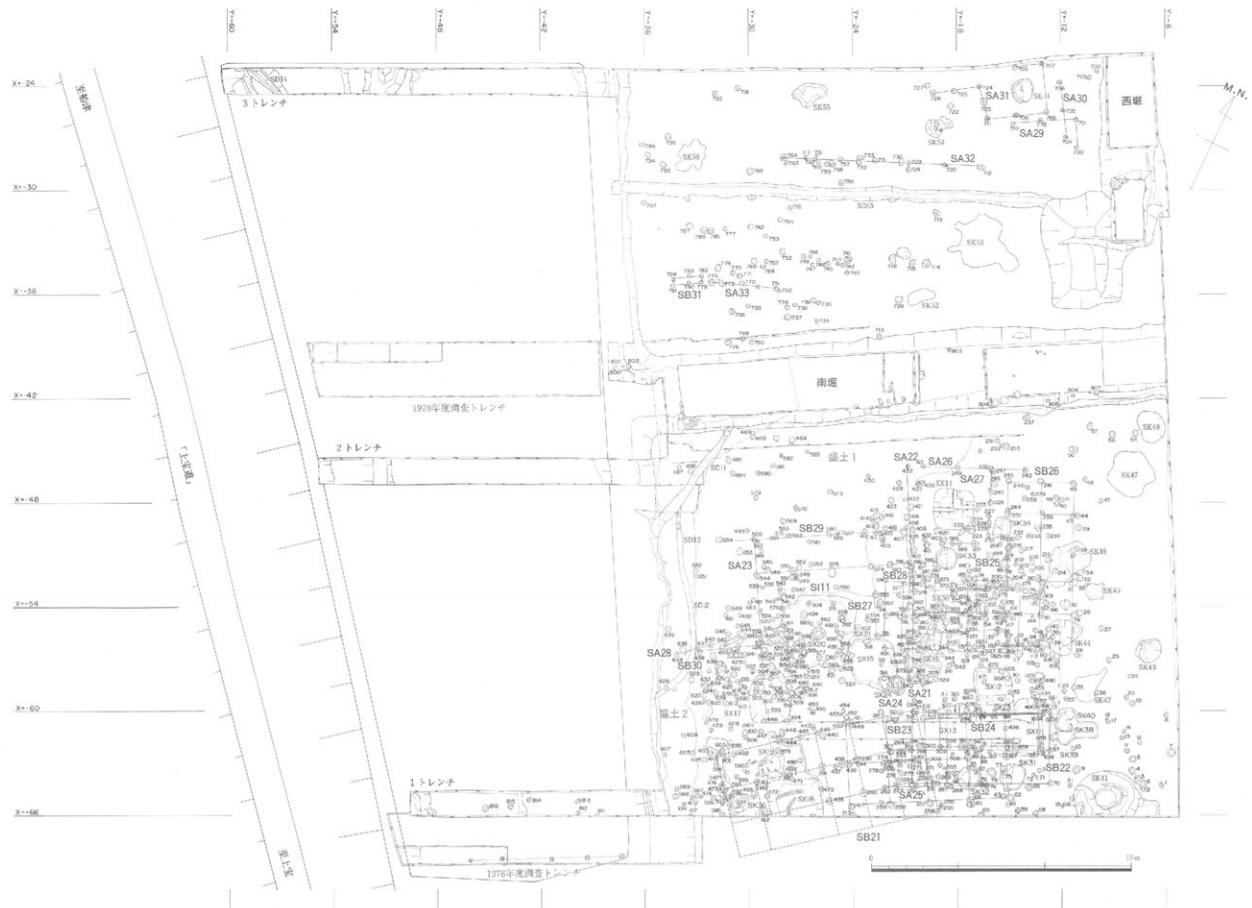
1～3トレンチを設定した田でも調査地区とおなじ基本層序（表土、土地改良土、旧耕作土、地山）が確認できる。各トレンチ東端にあたる段丘斜面には、調査地区的田の畦土が流れ込んでいるが、層をなさない。表土は1トレンチ・3トレンチでは第1層オリーブ褐色砂質土・第2層暗褐色粘土であり、2トレンチでは第1層黄褐色粘土・第2層暗オリーブ褐色土・第3層暗褐色粘土である。土地改良土である明黃褐色砂質土は、1トレンチ・3トレンチでは第3層、2トレンチでは第4層にあたる。旧耕作土の最下層に堆積する鉄分の層は、各トレンチとも、その西部分の地山落ち込み部の平坦面上でのみ確認でき、1トレンチの第25b層暗赤褐色砂質土、2トレンチの第21層暗赤褐色砂質土、3トレンチの第20b層暗赤褐色粘土層に相当する。鉄分の層の堆積はほぼ水平であり、土地改良工事前は、中央部西寄りの落ち込み段差を境として、東西2面の出があったものと推定する。土地改良工事時の耕作地の拡張に際して、西側の低い田を埋め立てるため、東側の田の旧耕作土を地山まで削平して西側へ押し均しておき、西側落ち込み内では鉄分堆積層の上層に地山砂礫を多く含んだ層が堆積する。土地改良時に移動した旧耕作土は1トレンチの第12～23層、2トレンチの14～19層、3トレンチの第11～18層である。また、鉄分層が段丘西端部までは水平に伸びていることから、トレンチ西端部の段丘崖面の落ち込み部は近世以降の耕地化の際に埋め立てて耕地を拡大していることがわかる。

3. 遺構

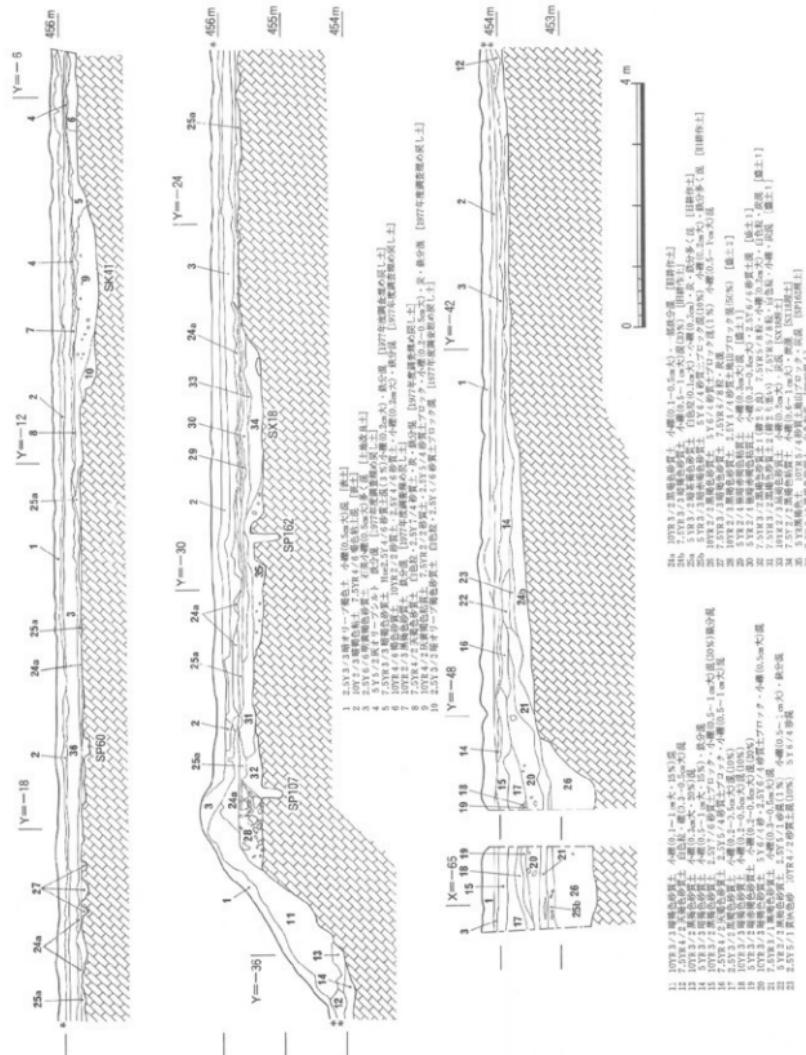
本年度の調査で確認した遺構は、南堀の南側と北側とではその検出密度に大きな違いがあり、調査地区は南堀を境として大きく2区画に分けられる。本文では、昨年度調査の区画番号を継承し、南辺地区寄りの南堀の南側部分を「区画4」、門前地区寄りの南堀の北側部分を「区画5」とする。また今後、1995年度門前地区の主門前の区画を「区画6」、脇門前の区画を「区画7」とする。そして南堀の外側の職人の作業場地区である1996年度南辺地区（区画1・2・3）と1997年度調査の区画4を総称して「南外部地区」とし、館の正面にあたる西堀前の1995年度調査の区画6・区画7、1997年度調査の区画5を「門前地区」と総称することとする。

区画4では、掘立柱建物10棟、堅穴住居1基、土間状土坑6基、土坑7基、炉跡3基、溝2本等を確認した。また、段丘西辺に沿って盛土を検出しておき、1996年度調査南辺地区段丘端部で確認した盛土と同じものと考えられる。盛土上面では明確な構造は確認できず、掘立柱建物になる柱穴等も、盛土下の地山面において検出した。堅穴住居や炉跡を検出したことから、この区画も南辺地区同様の職人の作業場の区画と考えられる。掘立柱建物は区画4の南東部で3棟、北東部で4棟がほぼ同じ場所で重複する。区画4西側では掘立柱建物の重複はないが、堅穴住居や炉跡が位置しており、東側は掘立柱建物、西側は作業場としての広場であったと考えられる。

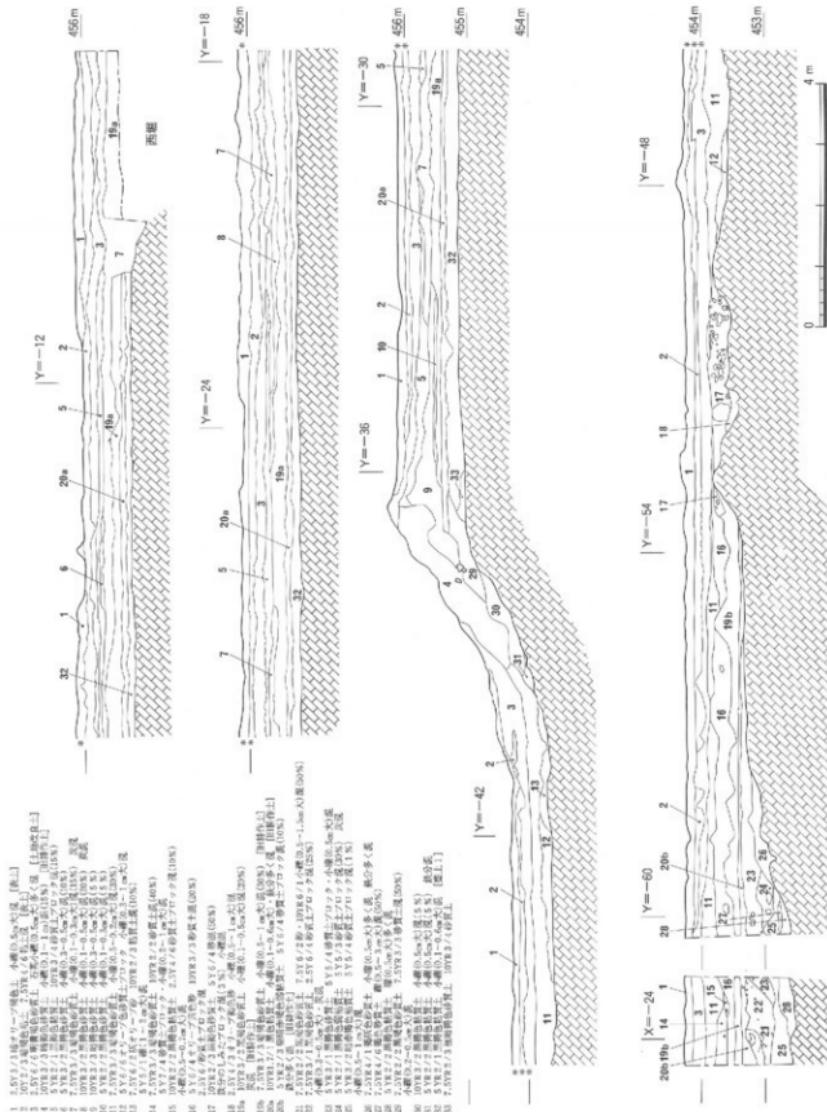
一方、区画5ではその東部で西堀の南端部を確認した。西堀と南堀の間は地山を土壠状に掘り残しており、両堀は直接はつながっていない。全面で盛土を検出し、盛上下の地山面で中世の遺構を検出したが、その密度は区画4と比べて極端に少なく、人が生活するような掘立柱建物も復元できなかつた。横列5本、井戸1基、西堀に接続する溝1本を確認した。



第17図 1997年復調査地区遺構平面図 比尺 1/220

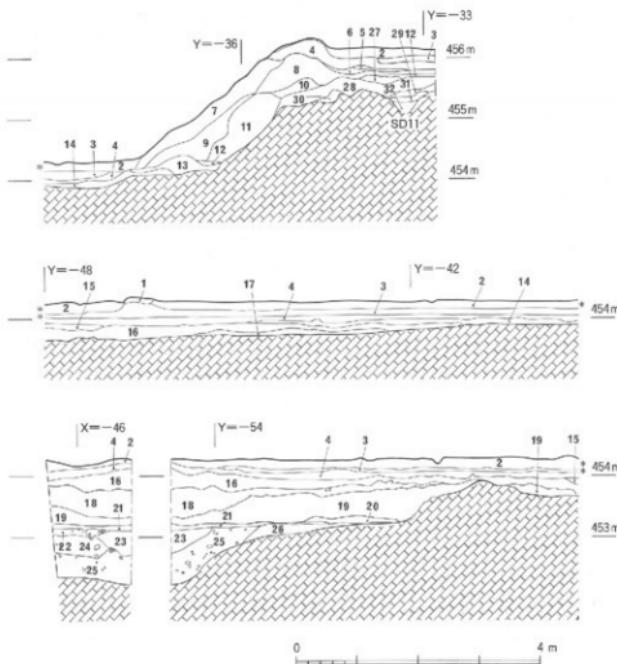


第18図 調査地区南壁土層断面図



第19図 調査地区北壁上層断面図 比尺 1/80

以下で、主な造構について、その種類ごとに報告する。時期別の組合せやその変遷については第5章小結においてふれることとする。また各造構の法量等の数値データは巻末の別表にまとめたので参照されたい。



- 1 2.5Y 5 / 5 初葉色黏土 [灰土]
- 2 2.5Y 2 / 3 黒モリーブ色土 小縫0.5cm 大透 [灰土]
- 3 1DY 2 / 3 黒褐色粘土 7.5YR 4 / 6 黄土 [灰土]
- 4 1DY 2 / 3 黒褐色粘土 石根小縫0.5cm 多く黄 [土壤成灰土]
- 5 1DYR 3 / 3 黑褐色粘土
- 6 7.5YR 3 / 3 黑褐色砂質土 白色反復
- 7 1DYR 3 / 3 黑褐色砂質土 小縫0.5~1cm 大透(15%) [耕作土]
- 8 1DYR 3 / 2 黑褐色砂質土 小縫(0.5~0.7cm)透 [耕作土二]
- 9 1DYR 2 / 3 黑褐色砂質土 8Y 6 / 4 透 小縫0.5cm 大透
- 10 1DYR 2 / 3 黑褐色砂質土 小縫0.5~1cm 大透
- 11 1DYR 3 / 3 黑褐色砂質土 色分多く透 [耕作土]
- 12 5YR 2 / 3 黑褐色砂質土 色分多く透 [耕作土二]
- 13 7.5Y 2 / 3 黑褐色砂質土 小縫0.5~0.9cm 大透
- 14 1DYR 2 / 3 黑褐色砂質土 小縫0.5~1cm 大透(15%)
- 15 分厚多く透 [耕作土]
- 16 2.5Y 3 / 3 黑褐色砂質土 2.5Y 6 / 1 透 小縫0.5~1cm 大透
- 17 2.5Y 3 / 3 黑褐色砂質土 小縫0.5~1cm 大透(15%)
- 18 2.5Y 3 / 3 黑褐色砂質土 多く透
- 19 3 YR 6 / 4 黄褐色砂質土 10Y 3 / 3 黄質土塊(20%)
- 20 3 YR 6 / 4 黄褐色砂質土 小縫(0.5~1cm) 多く透 鉄分塊
- 21 3 YR 6 / 2 黑褐色砂質土 小縫(0.5cm) 多く透
- 22 3 YR 3 / 2 黑褐色砂質土 3.5Y 6 / 4 黄質土ブロック(1.5~3cm)透
- 23 3 YR 3 / 2 黑褐色砂質土 小縫(0.5~1cm) 多く透
- 24 7.5Y 6 / 1 黑褐色砂質土 2.5Y 6 / 4 黄質土ブロック(25%)
- 25 7.5Y 6 / 1 黑褐色砂質土 2.5Y 6 / 4 黄質土ブロック(20%)
- 26 7.5Y 6 / 1 黑褐色砂質土 小縫(0.5~1cm) 多く透 鉄分塊
- 27 2.5Y 6 / 1 黑褐色砂質土 小縫(0.5~1cm) 多く透
- 28 2.5Y 6 / 1 黑褐色砂質土 小縫(0.5~1cm) 大透 [灰土]
- 29 1DYR 3 / 3 黑褐色砂質土 小縫(0.5~1cm) 大透 [灰土]
- 30 1DYR 3 / 3 黑褐色砂質土 2.5Y 6 / 1 黄質土 [灰土]
- 31 1DYR 3 / 3 黑褐色砂質土 小縫(0.5~1cm) 多く透
- 32 1DYR 3 / 3 黑褐色砂質土 小縫(0.5~1cm) 大透 多く透 [SD1地盤]

第20図 2 トレンチ南壁土層断面図 縦尺 1/80

(a) 堀 跡

南堀 (第17・21~23図)

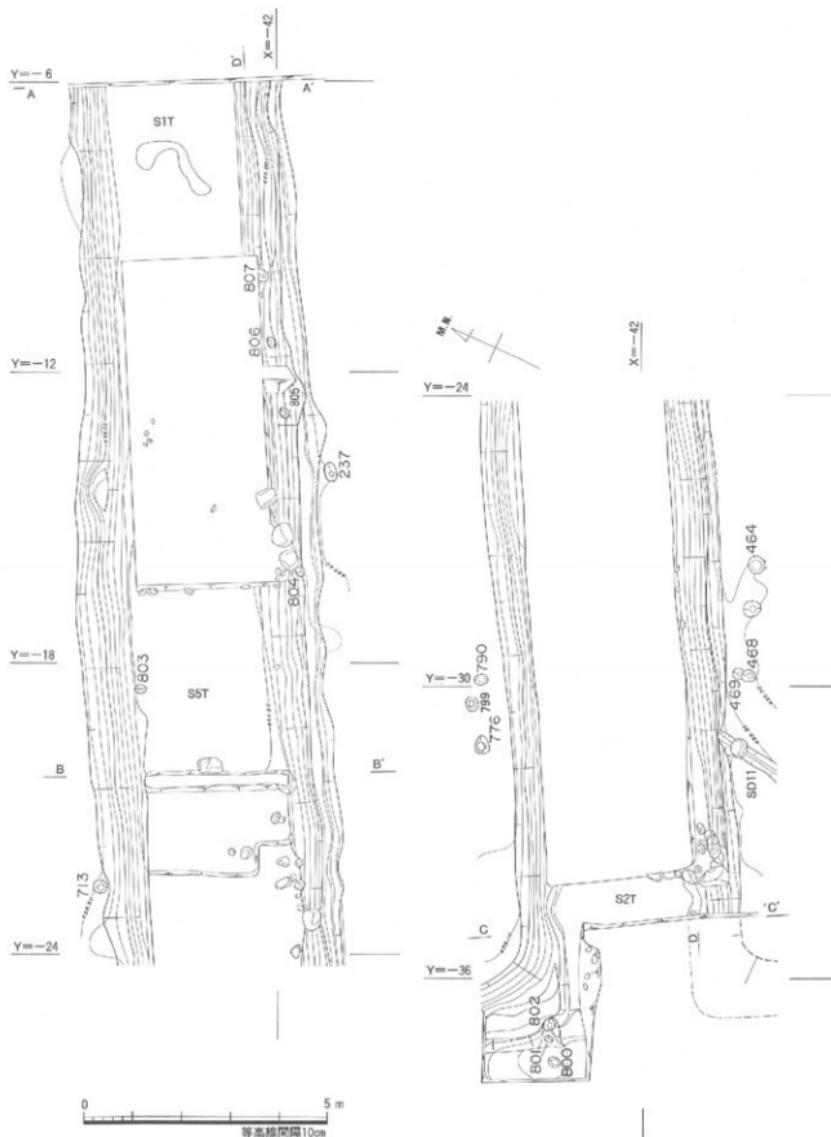
1997年度調査地[\times]のはば中央部、X座標-38~-44、Y座標-6~-37.25の範囲で検出した。検出長は31.2m、主軸方位はN-59.5°-Eである。南堀は館寄り部分では新旧2本の堀を確認しているが、今回調査を行った館外への延長部では南堀は1本であり、1978年度報告では館西南部の園池の排水路の接続点より西では、新堀の段階にも旧堀をそのまま使っているとしている。なお、1977年度調査において、堀を南北に横断するX座標-38.8~-41.6、Y座標-8.5~-9.5の範囲(S1T)、X座標-40.0~-43.0、Y座標-34.0~-35.0の範囲(S2T)、南側堀肩部にそったX座標-41.0~-45.0、Y座標-6.0~-34.9の範囲(S3T)、北側堀肩部にそったX座標-27.0~-28.5、Y座標-6.0~-38.0の範囲(S4T)の堀埋土を地山まで完掘している。そのため、堀肩部の土層堆積状況や、区画4・区画5で確認した盛土との直接の層位関係を確認することができないが、残った埋土断面の観察から掘り込みの回数や盛土との関係の理解に努めた。また、今年度の調査において、S1Tを調査区東壁Y座標-6.0ラインまで拡張し、さらにX座標-39.2~-42.3、Y座標-16.4~-20.2の範囲にS5Tを設定し、堀底まで埋土を掘り下げ、埋土の堆積状況、出土遺物の状況を確認した。その結果、南堀の埋土は3層に大別でき、以下のように3段階の変遷が確認できる。以下、各段階毎に述べる。出土遺物の内訳は第5表にまとめている。

第1段階 (第22・23図の調査地区東壁第18~23層、S5T西壁第11~15層、S2T西壁第11・12層)：地山を掘り込んで南堀旧堀をつくり、その後、土砂が自然に堆積した段階である。

堀の形状は箱型である。堀幅は上幅4.5m前後、下幅2.9m前後である。深さは95cm前後であり、底面は平らである。地山底面検出レベルは調査区東壁で454.48m、南堀S2T西壁で454.33m、西端部で454.12mであり、東から西に向って地形にそった勾配がある。南堀の西端部は、Y座標-36.0付近で南北の堀の斜面がそれぞれ南と北に開き、調査地区西辺部である段丘斜面につながる。堀底はY座標-37.25付近で西側の田の地山面につながる。南堀西端部北側斜面下部でSP800~802を、S5TでSP803を検出した。いずれも地山を掘り込んでいる。南側堀肩部、X座標-43.5、Y座標-31.0でSD11が接続するが、1977年度調査でこの部分の埋土を完掘しており、切り合は不明である。

この段階の埋土は調査地区東壁第18~23層、S5T西壁第11~15層、S2T西壁第11・12層である。自然堆積した黒色~黒褐色の砂質土であり、0.5~1cmの大の小砾が多く混じる。堀の両側から彫形斜面の傾斜に沿って地山堀底に堆積している。調査地区東壁第23層、S5T西壁第14・15層は地山と良く似た黄褐色砂質土であり、堀の造成後、比較的早い時期に地山が流入して堆積したものと考えられる。調査地区東壁の第21・22層は所々に0.5cm厚の砂層がほぼ水平に堆積する黒褐色粘質土であり、降雨等による一時的な滯水があったものと考えられる。S5T・S2Tではこのような層は確認できず、部分的な滯水と考えられる。なお、調査中、S1Tでのみ地山堀底面上での降雨による滯水がみられた。出土遺物のうち最も新しい年代を示すものは珠洲V期のすり鉢である(第40図の1)。

第2段階 (第22・23図の調査地区東壁第13~17層・S5T西壁第7~10層)：第1段階の自然堆積の後、2回目の掘り込みを行ない、その後、再び土砂が自然に堆積した段階である。調査地区東壁では、本段階掘り込みの堀底検出レベルは454.86mであり、第1段階地山堀底より約35cm上である。S2T東壁(図は掲載せず)・S5T西壁では、堀の中央部では地山に達するまで第1段階埋土を掘り込んでいる。第2段階埋土の上部検出幅・最大堆積厚は、調査地区東壁で1.95m・18cm、S5T西壁で2.45m・55cm、S2T東壁で2.00m・10cmである。掘り込み肩部を確認できないため、この段階の堀の上幅は明らかではない。



第21図 南壁平面図 縦尺1/100

第2段階埋土は調査地区東壁第13~17層、S5T西壁第7~10層が対応する。黒褐色粘土層であり、ほぼ水平に堆積している。粘土層の所々に、水平に堆積する薄い砂層が観察でき、降雨等による一時的な流水や滲水があったと考えられる。最も新しい年代を示す遺物は下館跡ⅡA期の最盛期のものと考えられる土器類T-6類（第41図の9）である。

第3段階（第22・23図の調査地区東壁第6~12層・S2T西壁第5~10層・S5T第3~6層）：人為的に埋め立てを行ない、堀を廃棄した段階である。埋土は土質によって下層のa・上層のbの2層に分けられる。

第3段階埋土a（第22・23図のS2T西壁第5~10層・S3T北壁）

黄褐色砂質土地山ブロックを大量に含んだ堆積であり、区画4で確認した盛土2に対応すると考えられる。S3T南壁とS4T北壁のY座標-27.0付近までの南堀西端部の埋土内で確認できる。S2T西壁では、南側の区画4から堀内に流れ込んでおり、S3T北壁ではY座標-31.5付近を頂部にして東西に山形に流れ込んでいる。

S2T・S3T・S4Tで土層断面観察のみを行い、新たな理土の掘り下げを行なわなかったため、遺物の有無は不明であるが、区画4では盛土2下層の盛土1から17世紀前半の年代を示す登窯第2小期の瀬戸美濃鉄絵皿が出土しており、第3段階の埋め立ては南外部地区の盛土と同時に17世紀前半以降の耕地化に際して行ったものと考えられる。

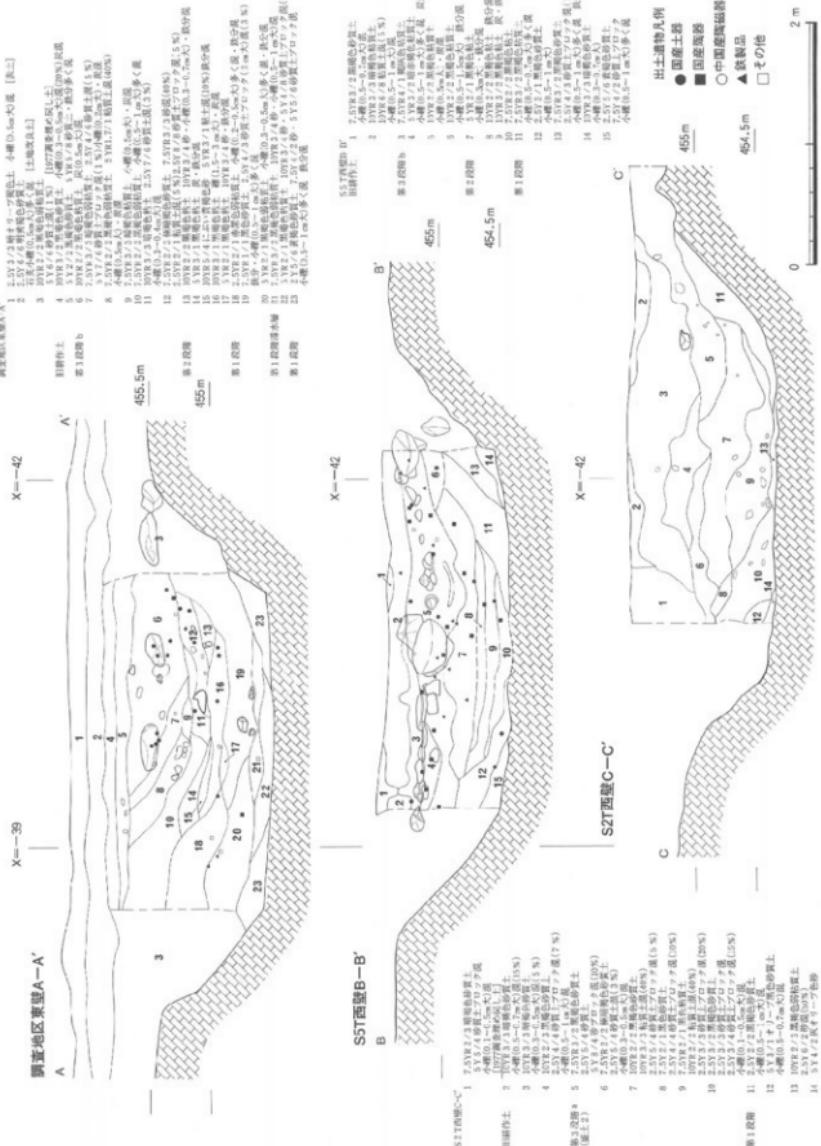
第3段階埋土b（第22・23図の調査地区東壁第6~12層・S5T第3~6層・S3T北壁）

礎石や遺物を多く含む層であり、堀を埋め戻すために運んだ館内部の土砂と考えられる堆積である。S3TではY座標-29.8付近から調査地区東壁まで確認できる。この層は調査地区東壁では北側の館内部側から流れ込んでいるが、S5T西壁ではほぼ水平に堆積している。埋土下部の検出レベルは調査地区東壁で455m、S5T西壁で454.8mである。S1Tでは、地山堀底から約95cm上、検出レベル455.5m付近から礎石と考えられる円窓2個が出土し、その周辺の層からは10~15cm大の船津花崗岩塊も多く出土した。遺物は流れ込みの先堀部にあたる調査地区東壁第6・12・13層から多く出土している。S5Tでは、地山堀底から約55cm上、検出レベル455m前後のS5T西壁第4・5層内から、館内の礎石と考えられる径30~40cm前後の円窓6個が出土し、10~20cm大の船津花崗岩塊も多く出土した。遺物もほぼ同じレベルから多く出土している。最も新しい年代を示す遺物は大窯第1~2段階の瀬戸美濃入り鉢である（第41図の19）。

1994年度調査の南堀の変遷との対応と北堀埋土との関連：1994年度は南堀の館寄り部分の調査を行い、大きくは新旧の2時期、細かい掘り込みもあわせると6段階の変遷を確認した。1~3段階目の掘り込みが旧堀、4・5段階目の掘り込みが新堀の時期にあたる（以下、1994年度1~6段階目とする）。神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1995）。また、1978年度報告では、本年度調査を行った南堀延長部については、新堀の段階にも旧堀跡をそのまま利用しているとしている。

堀の形状、堆積、土質等から、1997年度に調査を行った南堀延長部第1段階（以下、1997年度第1・2・3段階とする）の地山の掘り込みが1994年度1段階目、すなわち旧堀の掘り込みに対応するものと考えたい。1994年度調査の旧堀では2回の掘り直し（1994年度2・3段階日の掘り込み）を行っており、2段階目の掘り込みは土壌の流れ込みと考えられる層で人為的に埋め立てられているが、南堀延長部第1段階埋土とこれらの掘り込み・埋土との対応は明らかではない。

1997年度第2段階埋土は帶水があったと考えられる粘質土が自然堆積していることから、1994年度調査南堀新堀の埋土である4・5段階日の埋土に相当すると考えられる。また1997年度第2段階の掘り込みは、1994年度調査の4段階目の堀、すなわち新堀の堀底に相当すると考えられるが、1994年度



第22図 商船土壘断面図 比尺 1/40

第5表 南堀出土遺物破片数・個体数一覧表

種類	層位	第1段階		第2段階		第3段階b	
		S1T	S5T	S1T	S5T	S1T	S5T
中世 土器 珠 潟	1(※)	2(0.08)	2(0.08)	6(0.17)	3(0.54)	9(0.71)	17(0.42)
土器系陶器 瀬戸美濃		1(※)	2(※)	1(※)	5(0.08)	6(0.08)	1(※)
陶器 青 磁							14(0.08)
磁器 白 磁							3(※) 2(※)
小計	1(※)	3(0.08)		7(0.17)	8(0.62)		19(0.42) 38(1.46)
合計			4(0.08)			15(0.79)	57(1.88)
不明陶器 繩紋土器	1(※)		1(※)				
鐵 製 品	1(※)		1(※)				
石 製 品	2		2		1	1	1
小計	4		4		1	1	1 2
総計			8(0.08)			16(0.79)	59(1.88)

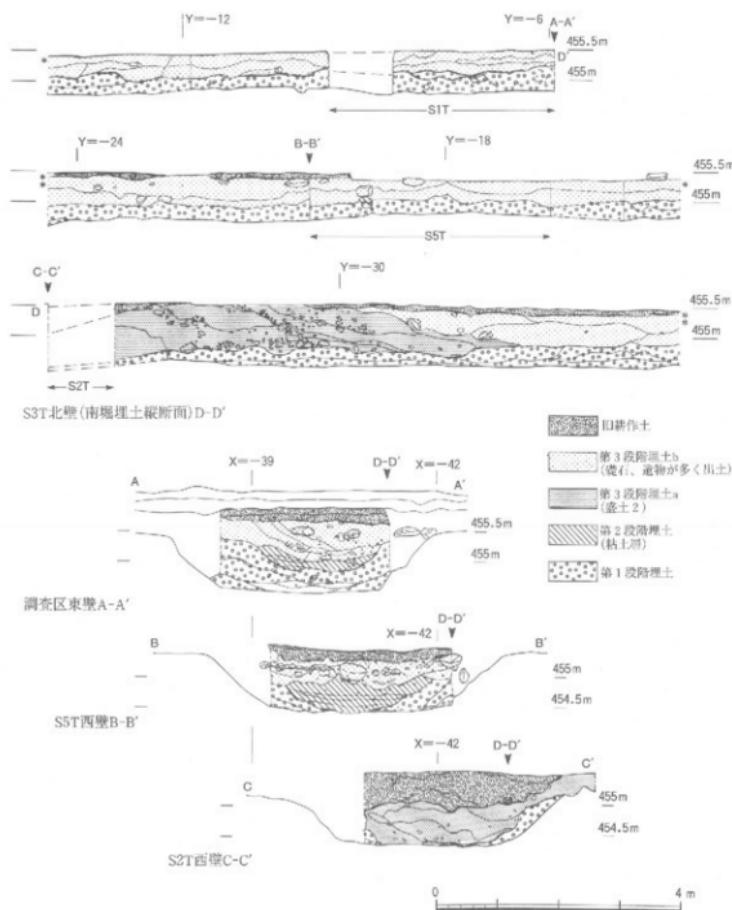
()内は口縫部計測法による個体数。※は破片が存在するが個体数としては表われないことを示す。

5段目に対応する堀り込みは確認できない。

17世紀前半以降に1997年度調査の南堀延長部を最終的に埋め戻している第3段階埋土に相当する層は、1994年度調査の南堀寄り部分では確認できない。南堀の館寄り部分は4・5段階の自然堆積の埋土によって近世までにすでにほぼ埋まっており、近世の耕地化に際しては、埋まりきっていないかった南堀延長部を館内の土砂（第3段階埋土b）と盛土（第3段階埋土a）で埋め戻し、耕地を造成したものと考えられる。なお、1997年度第3段階埋土bは館内の礎石や遺物を多く含んでいるが、同様の状況は1994年度調査時の北堀を埋め戻している埋土でも確認でき、北堀の最終的な埋め立ても南堀延長部と同様、近世の耕地化に際して行ったものと考えられよう。

南堀西端部の柱穴（第21図）：南堀西端部は堀の斜面が南北に折れて段丘斜面となつたが、その堀出口北側の段丘斜面下部にSP801・SP802がある。その30cm西、西側の田の地山平坦面にSP800がある。南堀底面はその西端部で西側の田の地山平坦面となつておらず、そのままでは南堀内に自由に出入りできてしまう。SP800～SP802は堀出口の段丘斜面から平坦面にかけて堀と同方向にほぼ一直線上に並んでいる。端部南側斜面が未調査のため断定はできないが、南堀西端部の閉塞または区画に関係する施設の存在が想定できよう。なお、これらの柱穴は1977年度調査時に完掘しており、いずれの段階に伴うものかは不明である。

南堀内の柱穴（第21図）：S3T南堀南側斜面中位X座標-41.5付近、Y座標-12.0～-17.0にSP804～SP807がある。S3Tは1977年度調査において完掘しているため、これらの柱穴がどの層から掘り込んだものであるかは不明である。SP805・SP806・SP807はほぼ1.5m（約5尺）等間で並んでいる。S5T北側斜面立ち上がり部、X座標-39.2、Y座標-18.5では地山を掘り込むSP803を検出した。埋土は明褐色粘土であり、柱痕はない。南堀を渡るための木橋等の存在は想定できるところであり、これらが橋脚等を支える柱の柱穴である可能性もあるが、未調査部分にそれらの遺構がある可能性も残るため、断定は避け可能性を指摘するにとどめておく。



第23図 南堀埋土の土層堆積模式図 縮尺1/80

西堀（第17・24図）

調査地区北東部、X座標-22.0～-36.8、Y座標-6.0～-13.3の範囲で確認した。館の正面である西堀薬研堀の南端部であり、その最南端部は西に屈曲しており、堀の形状が箱堀となる（以下、この箱型部分を屈曲部として記述する）。屈曲部南端部と南堀の間は、約1.2m幅で土橋状に地山を掘り

残しており、西堀と南堀は直接つながらない。本年度調査地区内の西堀は、1977年度調査時に屈曲部と薬研堀の埋土の一部を完掘している。そのため、屈曲部の埋土の堆積状況、屈曲部と薬研堀・SD13との切り合いは不明である。なお、本年度の調査では1977年度調査の埋め戻し土のみ完掘し、屈曲部堀底の形状と断面層位の観察のみ行ない、新たな埋土の掘り上げは行なわなかった。

薬研堀（第17・24図）：X座標-22.0～-32.0, Y座標-6.0～-9.7の範囲で検出した。検出長は9.0m, 主軸方位はN-29.0°-Wである。東側肩部は調査地区外のため確認していない。確認できる範囲で上場の幅2.8m以上、下場の幅0.2m前後、底面検出レベル452.3m前後、深さ3.0m前後である。

埋土は横断面をX座標-27.5ラインで、縦断面を調査地区東壁であるY座標-6.5ラインで観察した（第24図）。西堀埋土は第7～17層である。第8・10・11層には黄褐色砂質土・地山ブロックが混じる。第12層は地山によく似た黄灰色砂層であり、第13・14層にも暗黄灰色砂が多く混じる。これらの層は堆積の状況とその土質から、西堀施設時に館内部から崩した土星盛土の流れ込みと考える。第15～17層は地山によく似た灰オーリーブ色砂礫層であり、堀掘削後、比較的早い段階に堆積したものと考えられ、館が機能していた時期の堀底は第15層上面であったと考える。この知見は1994年度調査西堀薬研堀の埋土の知見と一致する。調査地区東壁内の縦断面では、南側からの埋土の流れ込みは見られず、堀廃棄時の埋め戻しは東側の館内部の上塗を西堀内に人為的に押し崩したものと考える。

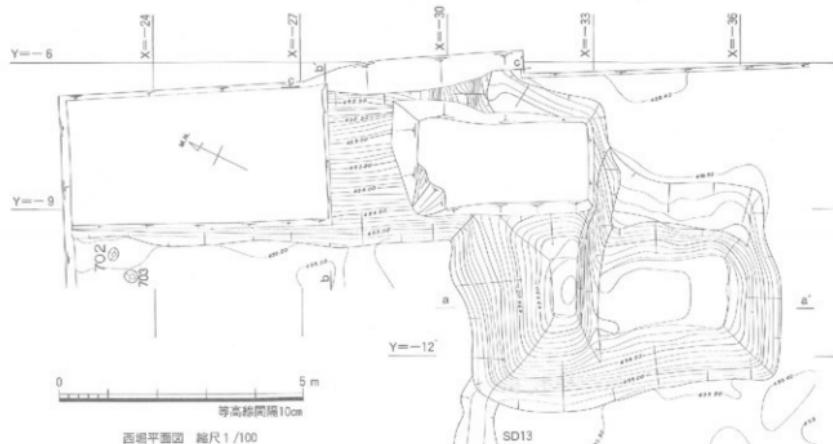
屈曲部（第17図・24図）：X座標-30.1～-36.8, Y座標-8.5～-13.2の範囲で確認した。箱堀であり、南北の検出長6.69m, 主軸方位はN-27.0°-Wをはかる。屈曲部の堀底はX座標-33ラインから北側をさらに約85cm掘り込み、一段低い底面となる。北側・南側ともに堀底は平坦であり、東西の上幅は4.2m前後である。東内の下幅・深さは屈曲部北側でそれぞれ1.21m・2.08m、屈曲部南側でそれぞれ1.35m・1.25mを測る。屈曲部西北角部にSD13がつながるが、切り合いは不明である。

（b）掘立柱建物・構列跡（第25～30図）

本年度の調査では区画4で掘立柱建物10棟、構列8列を、区画5では掘立柱建物1棟、構列5列を復元した。これらの柱穴数は187基であり、調査地区全体の柱穴数は737基である。SB22～SB24は区画4南東部において、SB25～28は区画4北東部において重複しており、ほぼ同じ位置での建て替えを行っている。またSB22～24と土間状土坑SX11・SX12・SX23が重複しており、建物の外に張り出すものの、土間状土坑は掘立柱建物に伴うものと考えられる。その組合せについては、第5章でふれることとし、ここでは切り合い関係のみを記述する。以下、各建物について挿図順に述べる。文中に示す尺は、1尺を0.303mとして計算している。また切り合いの新旧関係は、矢印を使い「（古い）→（新しい）」で示す。

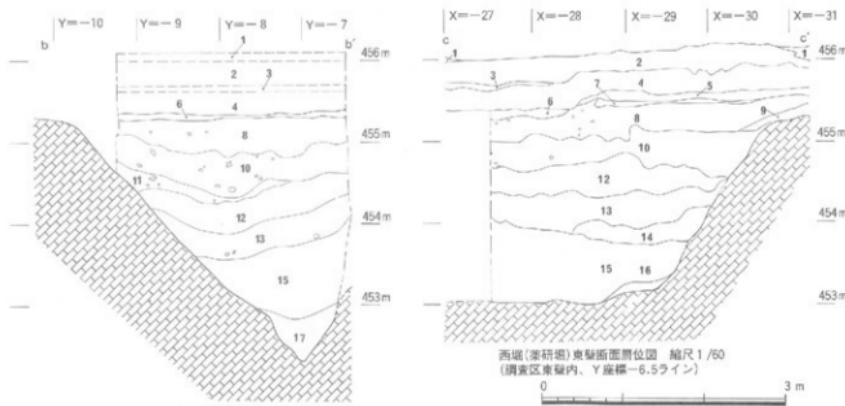
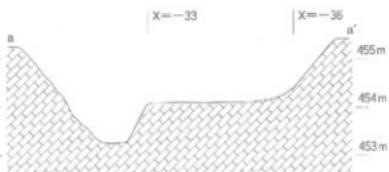
SB21（第25図）：区画4南西部、X座標-60.0～-66.0, Y座標-18.9～-31.9の範囲に位置し、調査地区外の南に伸びる。確認できる範囲で、桁行6間、11.77m（38.8尺）、梁行3間、6.00m（19.8尺）以上の東西棟の総柱式建物である。主軸方位はN-51.0°-Eを測る。柱間は桁行・梁行とともに約2.0m（6.6尺）等間である。北側より第1柱穴列の西から第2柱穴、同第3柱穴列の西から第3柱穴は検出できなかった。柱穴は円形・楕円形を中心とし、長径26～45cm、深さ7～50cmを測る。SB22・SX18と重複し、SP316→SP317からSB21→SB22であることが判る。SB23・SX18・SX19とも重複するが、直接切り合わない。遺物は出土していない。

SB22（第26図）：区画4南東部、X座標-60.2～-64.3, Y座標-12.6～-20.6の範囲に位置する。桁行4間、8.00m（26.4尺）、梁行2間、4.01m（13.2尺）の東西棟の総柱式建物である。主軸方位はN-64.0°-Eを測り、主軸方位とはほぼ一致する。柱間は桁行・梁行とともに約2.0m（6.6尺）等間である。北側柱穴列と南側柱穴列の東から第2柱穴は検出できなかった。柱穴は円形を中心に径25～



- Y-N・C-S
 1. 2.5Y 3/2弱(1) - 黒色土 小礁の5cm大層 [A段]
 2. 7.5YR 3/2 黑褐色砂質土 小礁(0.1-0.5cm大)混(5%)異透
 3. 19YR 3/2 黑褐色砂質土 小礁(0.3-0.5cm大) - 黑面 [B段作上]
 4. 5.5Y 3/2 黑褐色砂質土 小礁(0.1-0.5cm大) - 黑面 [B段作下]
 5. 5.5Y 3/2 黑褐色砂質土 小礁(0.3-0.5cm大) - 枝分多く混 [B段作二]
 6. 5.5Y 4/2 黑褐色砂質土 小礁(0.3-0.5cm大) - 黑面 [C段]
 7. 10YR 3/2 黑褐色砂質土 小礁(0.5-1.0cm大) - 黑面(5%)
 8. 10YR 3/2 黑褐色砂質土 小礁(0.5-1.0cm大) - 黑面(5%)
 9. 2.5Y 5/2 黑褐色砂質土 - 2.5Y 5/6 沈砂土ブロック - 5.5Y 4/6 沈砂土混(5%)
 10. 10YR 3/2 黑褐色砂質土 - 2.5Y 5/6 沈砂土混(5%)
 11. 5.5Y 5/2 黑褐色砂質土 - 19YR 2/2 沈砂土 - 5.5Y 5/1 混(1cm大)混(5%)
 12. 5.5Y 5/2 黑褐色砂質土 - 19YR 2/2 沈砂土混(5%) - 5.5Y 5/1 混(1cm大)混(5%)
 13. 5.5Y 5/2 黑褐色砂質土 - 19YR 2/2 沈砂土 - 5.5Y 5/1 混(1cm大)混(5%)
 14. 5.5Y 5/2 黑褐色砂質土 - 19YR 2/2 沈砂土 - 5.5Y 5/1 混(1cm大)混(5%)
 15. 5.5Y 5/2 黑褐色砂質土 - 19YR 2/2 沈砂土 - 5.5Y 5/1 混(1cm大)混(5%)
 16. 5.5Y 5/2 黑褐色砂質土 - 19YR 2/2 沈砂土 - 5.5Y 5/1 混(1cm大)混(5%)
 17. 5.5Y 5/2 黑褐色砂質土 - 19YR 2/2 沈砂土 - 5.5Y 5/1 混(1cm大)混(5%)

西堀屈曲部南北断面図 縮尺1/100



第24図 西堀実測図

34cm、深さ13~33cmを測る。SP76で径16cm、深さ13cmの柱痕跡を確認した。SB22の梁行に軸線を描えたSA21が、西側より第1柱穴列の北から第1柱穴を共有して北側に伸びる。SB21・SA25と重複し、SP317→SP316からSB22→SB21、SP267→SP268からSB22→SA25であることがわかる。SB23・SB24・SK31・SK32とも重複するが、直接切り合わない。SP659をSX11底面で、SP674をSX23底面で、SP677をSX13底面で確認した。遺物はSP91とSP286から土師器皿各1点が出土している（第42図の24）。

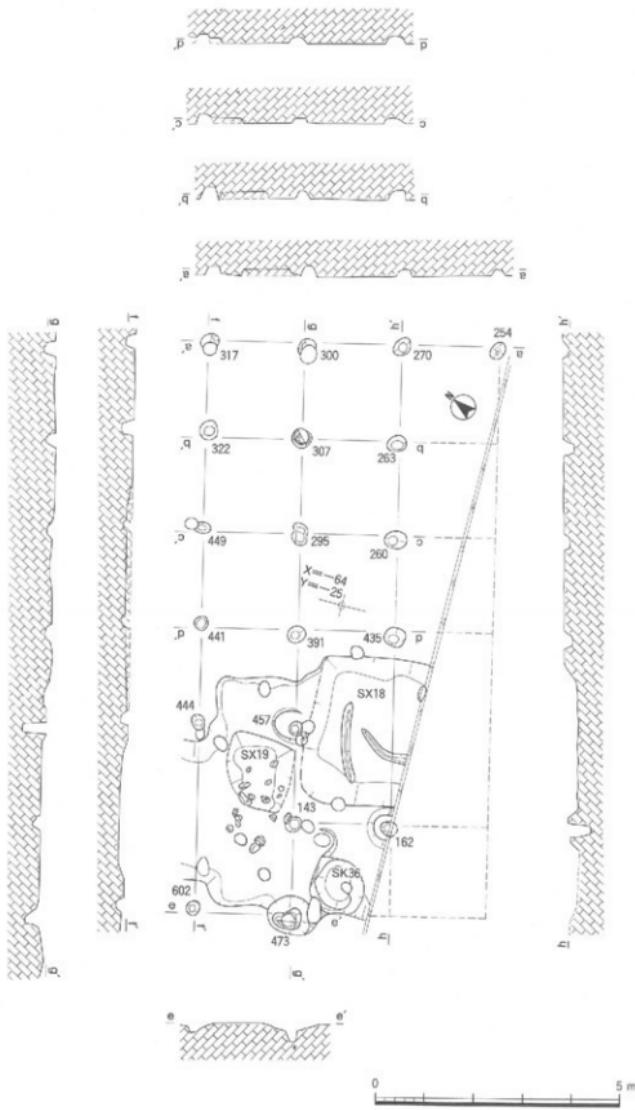
SB23（第26図）：区画4南東部、X座標-60.3~-65.7、Y座標-13.0~-24.5の範囲に位置する。桁行4間、9.22m（30.4尺）、梁行2間、4.68m（15.4尺）の東西棟の総柱式建物である。主軸方位はN-61.5°-Eをはかる。東辺北側に1間×1間の張り出しがある。柱間は桁行・梁行ともに約2.3m（7.6尺）等間である。柱穴は円形を中心に径24~48cm、深さ9~44cmを測る。SP280で径16cm、深さ7cmの柱痕跡を確認した。SB24・SX11と重複し、SP663→SP664からSB23→SB24、SP87→SX11からSB23→SX11であることがわかる。SB22・SK31・SK32とも重複するが、直接切り合わない。SP666をSX23底面で、SP675をSX13底面で検出した。遺物はSP313から土師器皿1点、瀬戸美濃1点が出土した（第42図の25・26）。

SB24（第26図）：区画4南東部、X座標-60.2~-62.2、Y座標-13.4~-19.0の範囲に位置する。桁行3間、5.78m（19.1尺）、梁行1間、1.89m（6.2尺）の東西棟の側柱式建物である。主軸方位はN-63.5°-Eをはかる。桁行柱間は約1.92m（6.4尺）等間である。柱穴は円形と稍円形を中心に径25~37cm、深さ28~35cmを測る。SP93で径13cm、深さ20cm、SP315で径18cm、深さ24cmの柱痕跡を確認した。SB23と重複し、SP664→SP663からSB24→SB23であることがわかる。SB22とも重複するが、直接切り合わない。SP666をSX23底面で、SP660をSX11底面で検出した。遺物は出土していない。

SB26（第27図）：区画4西北部、X座標-46.6~-56.4、Y座標-11.2~-19.4の範囲に位置する。桁行5間、9.53m（31.5尺）、梁行2間、3.80m（12.5尺）の南北棟の総柱式建物である。主軸方位はN-26.0°-Wをはかり、座標と一致する。西辺南側に2間×2間の張り出しがある。柱間は桁行・梁行ともに約1.9m（6.3尺）前後である。張り出し部と主屋の間の東西方向の柱間だけは約2.3m（7.6尺）である。東側より第2柱穴列の北から第3柱穴は検出できなかった。柱穴長径27~53cm、深さ17~35cmを測るが、平面形は一様ではない。SP119で径18cm、深さ13cmの柱痕跡を確認した。SB28と重複し、SP157→SP156からSB26→SB28であることがわかる。SB25・SB27とも重複するが、直接切り合わない。遺物はSP161・SP236・SP243から土師器皿各1点、SP218から瀬戸美濃1点が出土した（第42図の29・30）。

SB30（第27図）：区画4西部、X座標-55.7~-58.6、Y座標-26.6~-33.0の範囲に位置する。桁行3間、5.92m（19.5尺）、梁行1間、2.0m（6.6尺）の東西棟の側柱式建物である。主軸方位はN-58.5°-Eをはかる。桁行柱間は約2.0m（6.6尺）等間であるが、北側柱穴列の西から第1・第2・第3柱穴の柱間は、それぞれ2.2m（6.7尺）・1.7m（5.6尺）である。柱穴は円形と稍円形を中心に、長径23~46cm、深さ12~38cmを測る。西側1間分のはば中央部に石組み炉SX22が位置し、SB30は石組みがSX22の覆い屋と考える。SX17と重複し、SP507→SX17からSB30→SX17であることがわかる。SI11とも重複し、SP460をSI11底面で検出した。SA23とも重複するが、直接切り合わない。遺物はSP526から刀子1点、SP619から青磁1点、SP632から土師器皿2点が出土している。

SB25（第28図）：区画4北東部、X座標-50.3~-54.3、Y座標-16.7~-19.5の範囲に位置する。桁行2間、3.97m（13.1尺）、梁行1間、2.89m（9.5尺）の南北棟の側柱式建物である。主軸方位はN-27.0°-Wを測り、座標とはば一致する。柱間は桁行約2.0m（6.6尺）前後、梁行約2.9m（9.5尺）である。柱穴は円形と稍円形を中心に径32~44cm、深さ13~34cmを測る。SB26・SB27・SB28と重複



第25図 建物SB21実測図 緩尺 1/100

基準標高値455.5m

するが、直接切り合わない。SB25北西部にあるSK33は、その配置からSB25に伴うものと考える。遺物はSP366から土師器皿と瀬戸美濃各1点、SP374から鉄釘1点、SP401から土師器皿1点が出土した（第42図の27・28・43）。

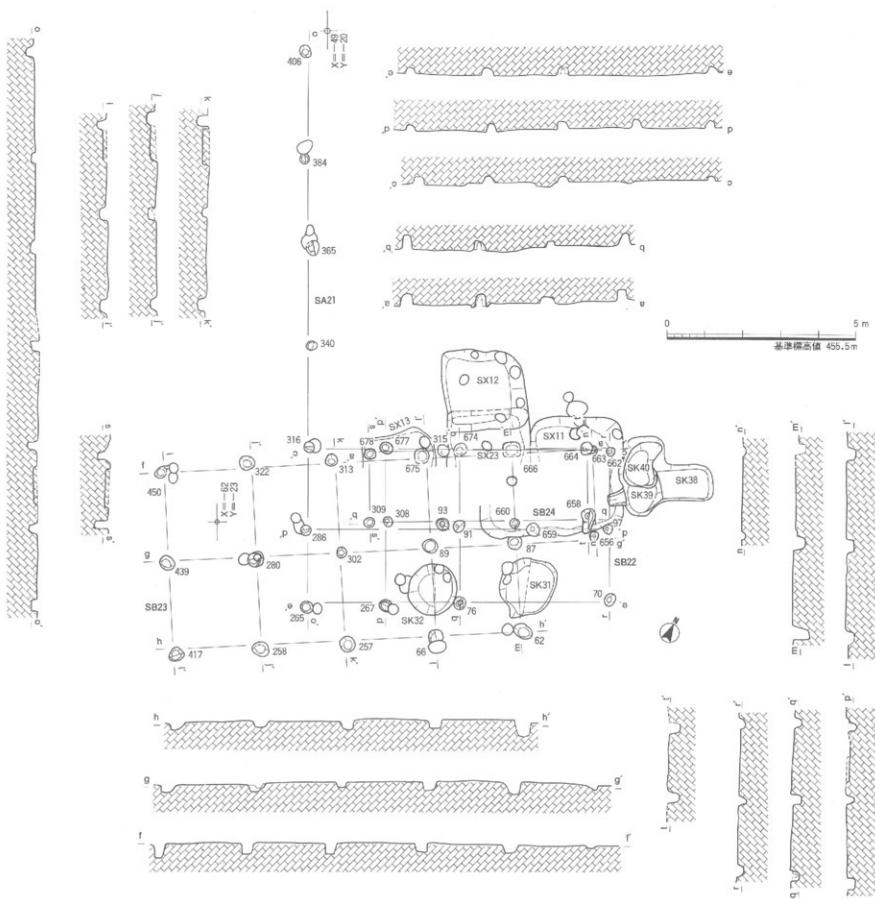
SB27（第28図）：区画4北西部、X座標-52.8～-55.8、Y座標-15.5～-22.8の範囲に位置する。桁行3間、6.97m（23.0尺）、梁行1間、2.47m（8.2尺）の東西棟の側柱式建物である。主軸方位はN-60.5°-Eをはかる。桁行柱間は約2.3m（7.7尺）前後である。柱穴は円形と楕円形を中心に長径34～41cm、深さ17～36cmを測る。SP136で径15cm、深さ11cmの柱痕跡を確認した。SB27の梁行に軸線を描いたSA22が、北側柱穴列の西から第2柱穴を共有して北側に伸びる。SB28と重複し、SP371→SP372から、SB27→SB28であることがわかる。SB25・SB26・SA24とも重複するが、直接切り合わない。遺物はSP180から土師器皿1点、SP350から青白磁1点が出土した（第42図の32）。この青白磁はSB28柱穴出土の一破片と接合しないものの同一個体と考えられる。

SB28（第28図）：区画4北西部、X座標-52.3～-56.5、Y座標-14.2～-22.3の範囲に位置する。桁行5間、7.80m（25.7尺）、梁行2間、3.94m（13.0尺）の東西棟の側柱式建物である。主軸方位はN-68.0°-Eをはかる。東側柱穴列には梁行の中央の柱穴がないことから、東側1間分は庇になると考えられる。柱間は桁行・梁行とともに、基本的には約1.9m（6.3尺）前後であるが、北側と南側柱穴列の西から第1・第2・第3柱穴の柱間は約1.0m（3.3尺）等間である。中央桁行では西側から柱間1.0m（3.3尺）、東側から柱間0.9m（2.9尺）のところにそれぞれ柱穴SP360・SP150があり、棟持柱になると考えられる。柱穴は円形と楕円形を中心に、長径27～46cm、深さ8～32cmを測る。SP156で径12cm、深さ9cmの柱痕跡を確認した。SB26・SB27と重複し、SP156→SP157からSB28→SB26、SP372→SP371からSB28→SB27であることがわかる。SB25・SA24とも重複するが、直接切り合わない。遺物はSP156・SP377から土師器皿各1点、SP359から土師器皿と青白磁各1点、SP375から土師器皿3点、SP491から鉄滓1点が出土した（第42図の31～33）。

SB29（第29図）：区画4北西部、X座標-50.0～-52.4、Y座標-20.8～-29.9の範囲に位置する。桁行4間、8.8m（29.0尺）、梁行1間、1.97m（6.5尺）の東西棟の側柱式建物である。主軸方位はN-60.0°-Eをはかる。SB29の梁行に軸線を描いたSA23が、南側柱穴列の西から第1柱穴を共有して南側に伸びる。桁行柱間は約2.2m（7.3尺）前後である。柱穴は楕円形を中心に、長径26～59cm、深さ14～29cmを測る。SP381で径15cm、深さ8cmの柱痕跡を確認した。SA24と重複するが、直接切り合わない。遺物はSP412から中国陶器の肩突き茶入れ1点（第42図の35）が出土し、盛土出土の一破片と接合しないものの同一個体と考えられる。

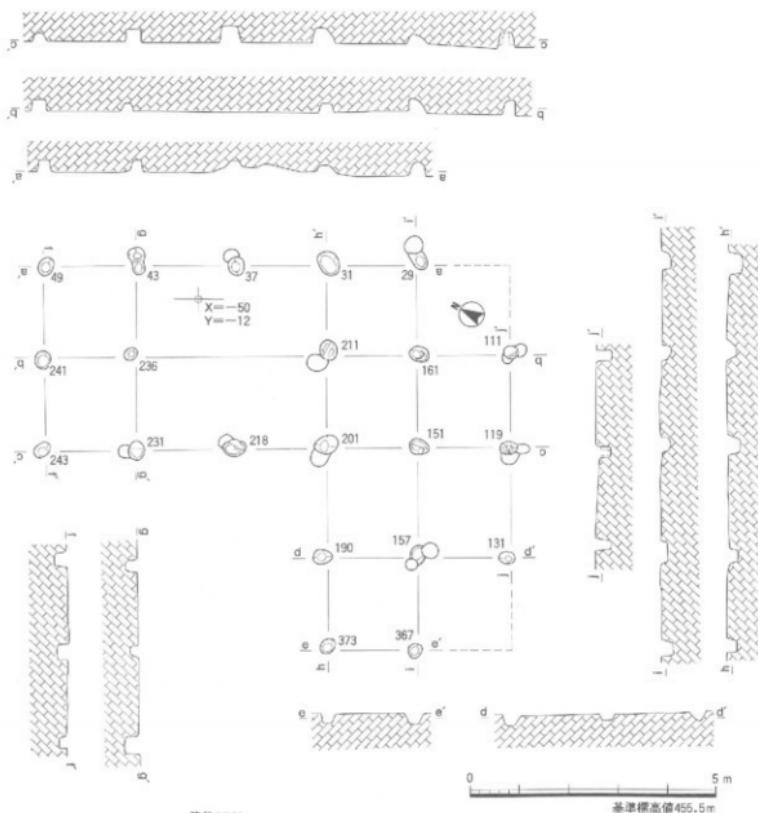
SB31（第29図）：区画5南西部、X座標-34.8～-35.7、Y座標-32.6～-34.5の範囲に位置する。桁行2間、1.61m（5.3尺）、梁行1間、0.4m（1.3尺）の東西棟の側柱式建物である。主軸方位はN-60.0°-Eをはかる。桁行柱間は約0.8m（2.7尺）前後である。柱穴はすべて円形であり、長径20～24cm、深さ13～26cmを測る。建物として造構番号を付けたが、規模が小さく、その性格は不明である。また桁行西端柱穴の並びがやや南にずれており、北側・南側の柱穴列でそれぞれ独立した施設であり、作り替えを行ったものである可能性も高い。遺物は出土していない。

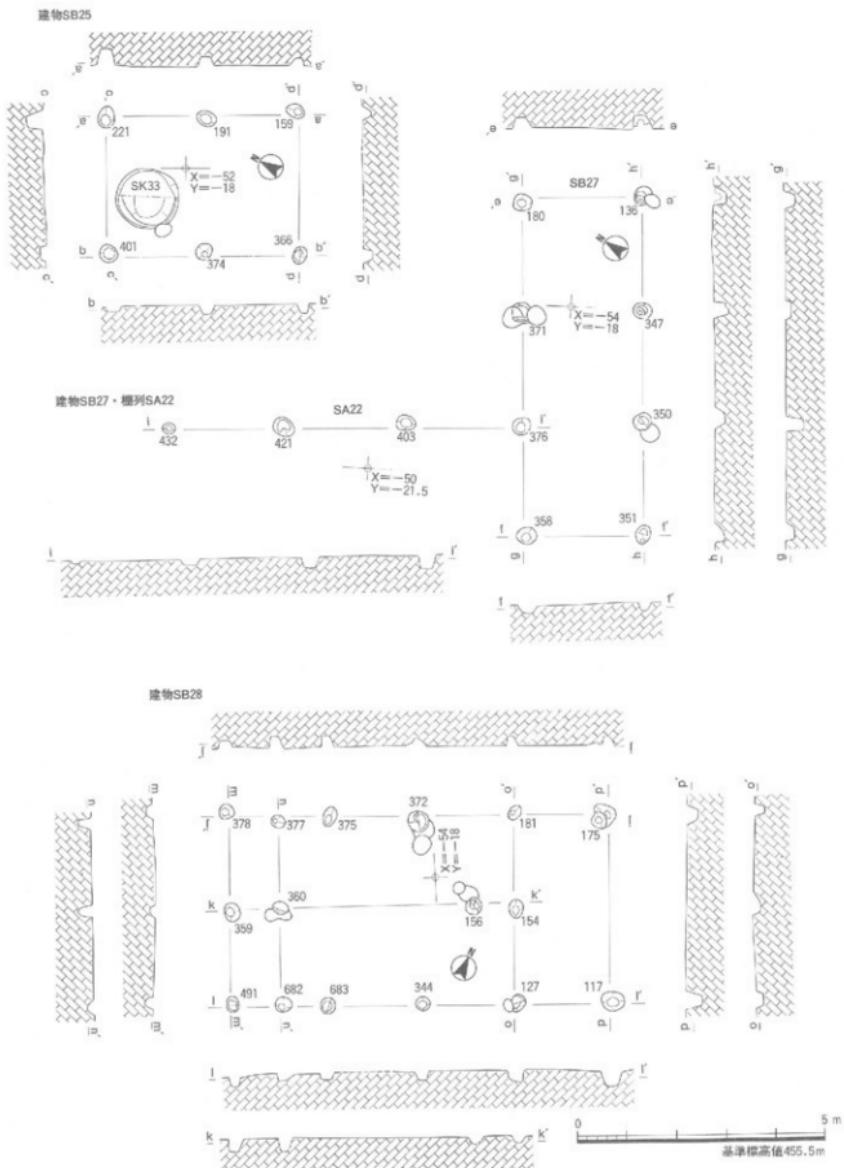
SA21（第26図）：区画4中央部、X座標-49.3～-60.2、Y座標-20.2～-20.8の範囲に位置する南北方向の櫓列である。主軸方位はN-26.0°-Wを測り、座標に一致する。総長は4間、10.6m（35.0尺）である。柱間は約2.4m（7.9尺）～約2.9m（9.4尺）と不揃いであり、平均柱間は約2.7m（8.8尺）である。柱穴は全て円形であり、長径27～38cm、深さ12～28cmを測る。SB22に付属する櫓列と考えられ、SB22北西角のSP316をSA21の南端とする。SA24・倒木痕SK49と重複し、SP384→SP383か



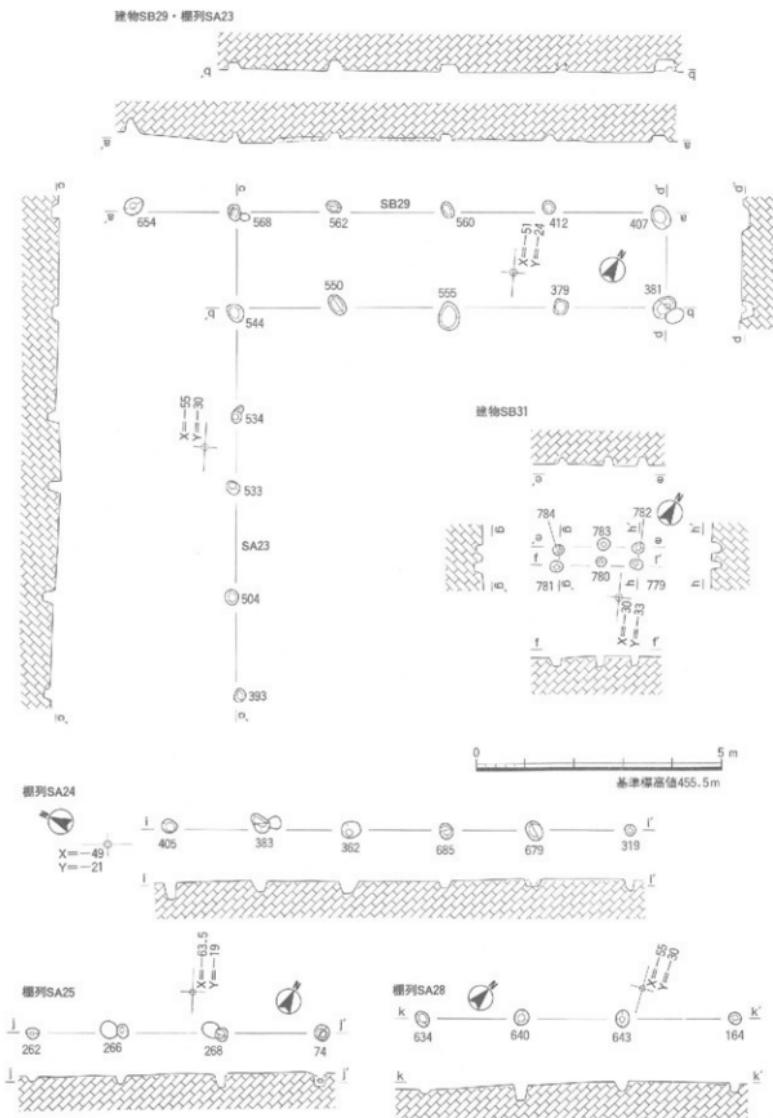
第26図 建物SB22・SB23・SB24・樹列SA21実測図 比尺1/100

建物SB26

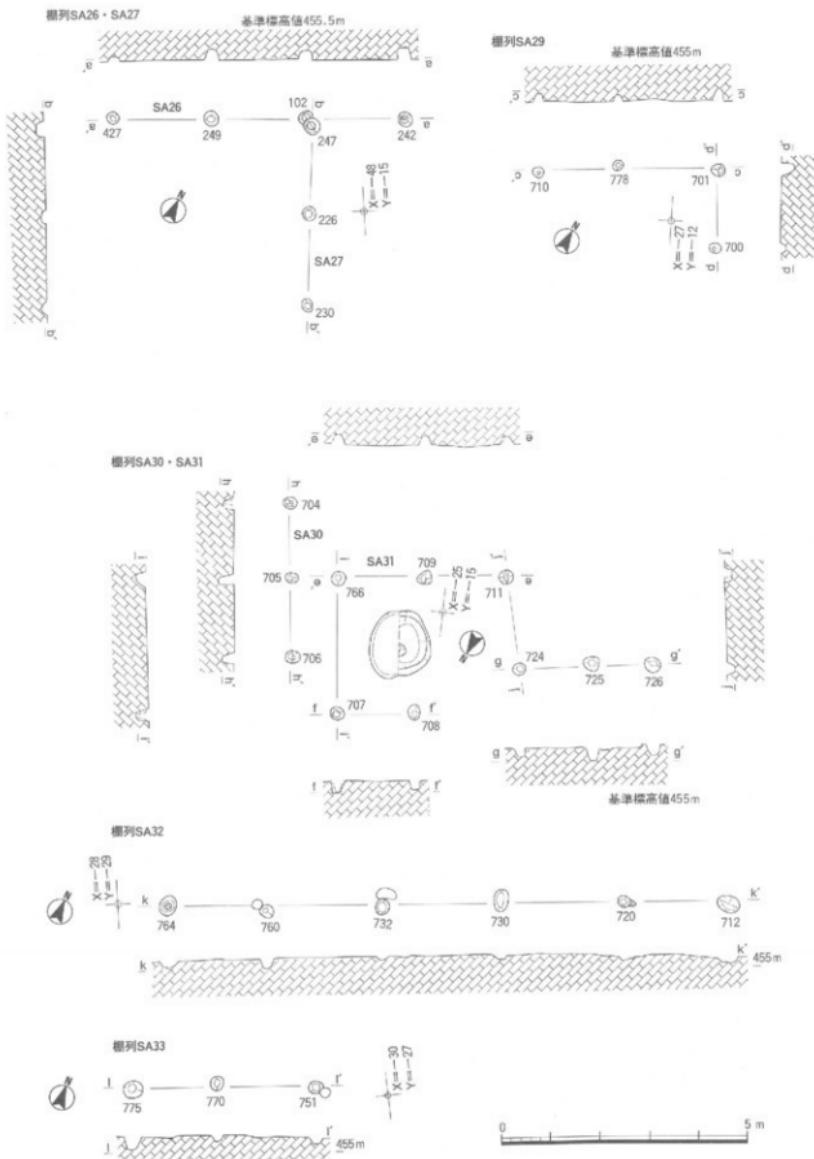




第28図 建物SB25・SB27・櫛列SA22・建物SB28実測図 比尺 1/100



第29図 建物SB29・柵列SA23・建物SB31・柵列SA24・SA25・SA28実測図 線尺 1/100



第30図 標列SA26・SA27・SA29・SA30・SA31・SA32・SA33実測図 比尺1/100

らSA21→SA24, SK49→SP340であることがわかる。SB27・SB28・SA22とも重複するが、直接切り合わない。遺物はS P384から土師器皿と壺器系陶器各1点が出土している（第42図の38）。

SA22（第28図）：区画4北側中央部、X座標-45.7～-53.5、Y座標-19.4～-21.1の範囲に位置する南北方向の柵列である。主軸方位はN-30.0°-Wを測る。総長は3間、7.2m（23.9尺）である。柱間は約2.4m（7.9尺）等間である。柱穴は全て円形であり、長径21～43cm、深さ11～28cmを測る。SB27に付属する柵列と考えられ、SB22北側柱穴列の西から第2柱穴SP376をSA22の南端とする。SA22・SA24と重複するが、直接切り合わない。遺物の出土はない。

SA23（第29図）：区画4西側、X座標-52.0～-60.2、Y座標-28.8～-29.8の範囲に位置する南北方向の柵列である。主軸方位はN-29.5°-Wを測る。総長は4間、8.0m（26.5尺）である。柱間は南から第1と第2柱穴、第4と第5柱穴では約2.2m（7.3尺）等間であるが、第2と第3柱穴、第3と第4柱穴ではそれぞれ約2.1m（6.6尺）、約1.5m（4.9尺）である。柱穴は円形を中心に、長径25～30cm、深さ13～28cmを測る。SB29に付属する柵列と考えられ、SB29南側柱穴列の西から第1柱穴SP544をSA23の北端とする。SX17と重複し、SP393→SX17からSA23→SX17であることがわかる。SB30・SA28と重複するが、直接切り合わない。このライン上には柱間は不揃いであるもののいくつかの柱穴が並ぶことから、建て替えも想定できる。遺物はSP504から土師器皿1点が出土している（第42図の34）。

SA24（第29図）：区画4中央部、X座標-50.1～-59.8、Y座標-20.5～-20.7の範囲に位置する南北方向の柵列である。主軸方位はN-26.0°-Wを測り、座標と一致する。総長は5間、9.5m（31.3尺）、柱間は約1.9m（6.3尺）前後である。柱穴は円形と楕円形を中心に、長径25～43cm、深さ11～30cmを測る。SA21・倒木痕SK49と重複し、SP383→SP384からSA24→SA21、SP679→SK49からSA24→SK49であることがわかる。SB27・SB28・SA22と重複するが、直接切り合わない。遺物はSP405から土師器皿・瀬戸美濃各1点が出土している（第42図の39）。

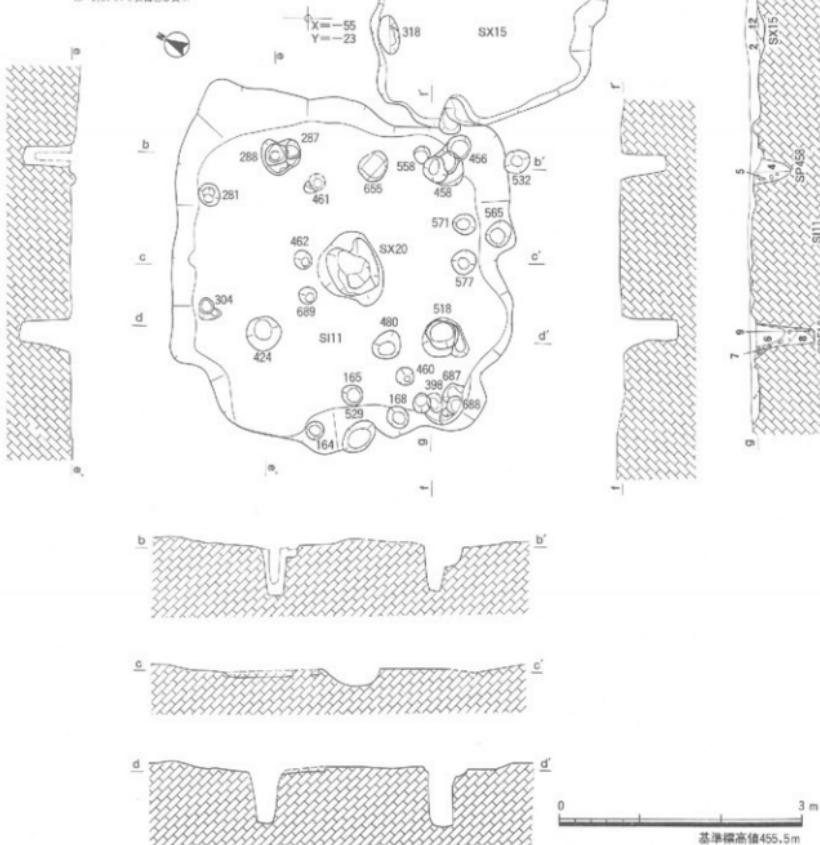
SA25（第29図）：区画4南西部、X座標-64.2～-64.5、Y座標-16.1～-22.4の範囲に位置する東西方向の柵列である。主軸方位はN-63.0°-Eを測る。総長は3間、5.96m（19.7尺）である。柱間は東から第3・第4柱穴では約1.8m（5.9尺）、その他は約2.1m（6.9尺）等間である。柱穴は円形と楕円形であり、長径24～30cm、深さ13～27cmを測る。SP74で、径15cmの楕円形、深さ9cmの柱痕跡とその下部に礎石を確認した。SB22と重複し、SP267→SP268からSB22→SA25であることがわかる。SB21・SB23・SK32とも重複するが、直接切り合わない。遺物は出土していない。

SA28（第29図）：区画4西部、X座標-55.0～-56.9、Y座標-27.9～-34.4の範囲に位置する東西方向の柵列である。主軸方位はN-49.0°-Eを測る。総長は3間、6.41m（21.2尺）である。柱間は西から第1・第2・第3柱穴では約2.1m（6.9尺）等間であるが、第3と第4柱穴では2.3m（7.6尺）である。柱穴は楕円形が中心であり、長径22～34cm、深さ10～34cmを測る。SI11と重複し、SP164→SI11からSA28→SI11であることがわかる。SA23とも重複するが、直接切り合わない。SB30とも近接しており、同時に存在していなかったと考える。遺物は出土していない。

SA26（第30図）：区画4北西部、X座標-45.7～-46.4、Y座標-13.9～-20.1の範囲に位置する東西方向の柵列である。主軸方位はN-66.0°-Eを測る。総長は3間、5.95m（19.6尺）である。柱間は約2.0m（6.6尺）等間である。柱穴はすべて円形であり、長径26～30cm、深さ9～30cmを測る。遺物はSP102・SP427から土師器皿各1点が出土している（第42図の40）。

SA27（第30図）：区画4北西部、X座標-46.1～-50.1、Y座標-15.7～-16.4の範囲に位置する南北方向の柵列である。主軸方位はN-22.5°-Wを測る。総長は2間、3.68m（12.1尺）、柱間は

SF92	1. 10YR 3 / 3 黒褐色粘土質土 SI 11・SX15 2. 10YR 3 / 8 黄褐色 (0.5m 大) (1%) 武底 SI 11・SX15 3. 10YR 3 / 3 黑褐色土 10YR 3 / 8 黄土粘土質 (10%)
SX15	4. 5 YR 3 / 6 黑褐色粘土質土 10YR 5 / 8 黄土質 (1%) 武底 SF458 5. 5 YR 3 / 6 黑褐色粘土質土 10YR 5 / 8 黄土質 (1%) 武底 6. 2.5YR 3 / 4 黑褐色土プロック層 (3%) 10YR 5 / 6 黄土質 (1%) 武底 7. 5 YR 2 / 2 黑褐色粘土質土 10YR 5 / 8 黄土粘土質 (1%)
SX24	8. 10YR 3 / 3 黑褐色粘土質土 2.5YR 4 / 4 粉層 (5%) 9. 2.5YR 3 / 4 黑褐色土 10. 5 YR 6 / 4 黑褐色土 黑色砂質土プロック 11. 10YR 2 / 2 黑褐色粘土質土 10YR 2 / 3 上層 (10%) 武底 12. 10YR 3 / 3 黑褐色粘土質土 黑色砂質土プロック 例木塚SX54 13. 10YR 3 / 3 黑褐色粘土質土 10YR 2 / 3 上層 (20%) 14. 2.5YR 3 / 3 黑褐色粘土質土 15. 2.5YR 5 / 2 黑褐色粘土質土 7.0YR 3 / 3 黑質土層 (20%) 16. 5 YR 5 / 8 黄土質土プロック層 (20%) 17. 10YR 3 / 3 黑褐色粘土質土 18. 5 YR 5 / 6 黑褐色粘土質土プロック (4%) 白色粘土層 (4%) 武底、薄層 (4%) 19. 5 YR 6 / 4 黑褐色粘土質土 20. 2.5YR 3 / 4 黑褐色粘土質土 21. 2.5YR 5 / 6 黑褐色砂質土



第31図 堅穴住居SI 11・土間状土坑SX15実測図 縮尺 1/60

1.8m(6.1尺)前後である。柱穴は円形と楕円形であり、長径26~32cm、深さ9~17cmを測る。遺物は出土していない。

なお、SA26とSA27の前後関係は、SP102→SP247からSA26→SA27であることがわかるが、SA26とSA27はほぼ直交しており、一体の施設として同時に存在していた可能性も考えられる。

SA29 (第30図) : 区画5北西部、X座標-25.8~-27.7、Y座標-10.9~-14.9の範囲に位置する東西方向2間、東端で南に1間の矩形の横列である。主軸方位はN-59.5°-Eを測る。東西方向列の総長は2間、3.64m(12.0尺)、柱間は東から約2.0m(6.7尺)、約1.6m(5.3尺)である。南北列の柱間は約1.7m(5.6尺)である。柱穴は円形が中心であり、長径22~26cm、深さ12~29cmを測る。SA30と重複するが、直接切り合わない。SA31とも近接しており、同時に存在していなかったと考える。遺物は出土していない。

SA30 (第30図) : 区画5北西部、X座標-23.6~-27.1、Y座標-11.5~-12.2の範囲に位置する南北方向の横列である。総長2間、3.18m、柱間は約1.6m(5.3尺)前後である。主軸方位はN-32.0°-Wを測る。柱穴は円形が中心であり、長径24~27cm、深さ22~32cmを測る。SA29と重複するが、直接切り合わない。遺物は出土していない。

SA31 (第30図) : 区画5北西部、X座標-22.6~-26.1、Y座標-12.6~-19.5の範囲に位置する、東西方向の横列であり、SE11を取り囲む。北側柱穴列の西部分が開き、西側列北端から西側に2間分の柱穴列が続く。総長6.76m(22.3尺)、主軸方位はN-56.5°-Eを測る。柱間は一定でないが、SE11を囲む北側と南側柱穴列の東側1間分は、柱間が約1.7m(5.6尺)前後で柱穴がほぼ対応しており、簡単な屋根がかかっていた可能性も考えられよう。柱穴は円形と楕円形を中心に、長径26~38cm、深さ18~37cmを測る。遺物は出土していない。

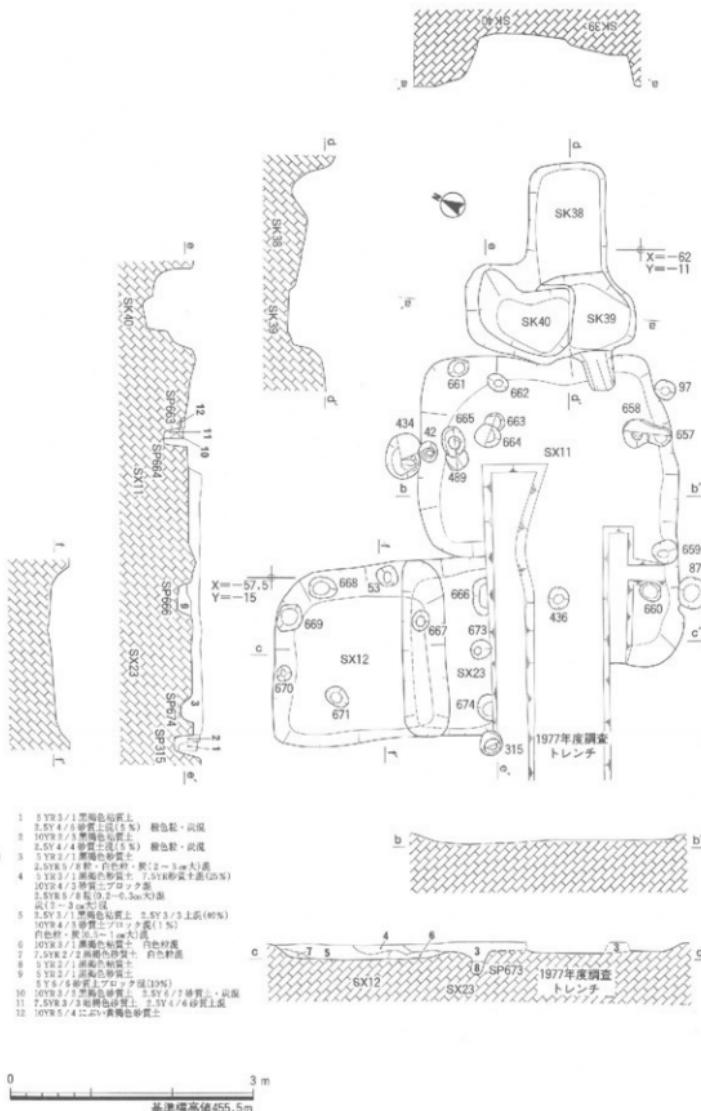
SA32 (第30図) : 区画5中央部、X座標-27.9~-28.9、Y座標-16.3~-28.1の範囲に位置する、東西方向の横列である。総長は5間、11.49m(37.9尺)、主軸方位はN-66.0°-Eを測る。柱間は約2.0m(6.6尺)~約2.5m(8.3尺)と一定ではない。柱穴は円形と楕円形を中心に、長径27~46cmを測るが、深さが8~18cmと浅く、掘形も不明瞭なものが多い。この柱穴列上には、他にもいくつかの柱穴があるが、SA32の柱穴同様、浅く掘形が不明瞭であり、柱間も不揃いである。何回かの建て替えが考えられるが、仮設的な横列が想定できよう。SP764底部に礎石がある。遺物は出土していない。

SA33 (第30図) : 区画5南西部、X座標-35.1~-35.6、Y座標-28.2~-32.3の範囲に位置する、東西方向の横列である。総長は2間、3.76m(12.4尺)、主軸方位はN-70.0°-Eを測る。柱間は東から約1.8m(5.8尺)、約2.0m(6.6尺)である。柱穴は円形と楕円形であり、長径27~36cm、深さ13~27cmを測る。遺物は出土していない。

(c) 竪穴住居 (第31図)

区画4西部において1棟を検出した。

SI11 (第31図) : 区画4西部、X座標-53.3~-57.5、Y座標-23.7~-28.4の範囲に位置する。平面規模は一辺約430cmの方形である。主軸方位はN-64.0°-Eであり、座標にはほぼ一致する。確認した深さは8cmであり、後世の耕作による削平のため、上部を失っていると考えられる。床面は地山をほぼ平坦に掘り込み、そのまま使用していたようである。壁は床面から緩やかに立ち上がり、床面、また上湯との境は不明瞭である。壁面に沿ってめぐる溝等は検出していない。上屋を支える土柱穴はSP288・SP424・SP458・SP518である。その平面形は円形と楕円形であり、長径33~50cm、深さ64~73cmと特に深く大型の柱穴である。SP288で柱痕跡を確認し、径12cm、深さ43cmである。SP424・



第32図 土間状土塙SX11・SX12・SX23・土塙SK38・SK39・SK40実測図 縮尺1/60

SP458・SP518では柱を抜いた跡と考えられる層が観察できる。床面の中央に炉跡SX20がある。その東側、SP655上面で竈跡と考えられる炭混じりの黄色粘土ブロックの広がりSX19を確認したが、原形は留めていない。SI11埋土は炭化物と橙色粘土粒を多く含む単層であり、人為的に短期間で埋め戻したと考えられる。土間状土坑SX15が東に接するが、削平によって上部を失っているため、平面・埋土の断面観察からはその境と新旧関係を明確にすることは出来なかった。

遺物は、主柱穴SP518から土師器皿2点、SP424からカラミが出土しており（第42図の36・37）、36は館最盛期のものと考えられるT-6類に属する。埋土からは土師器皿35点、瀬戸美濃4点、青磁・白磁各1点、鉄製品2点が出土し、被熱しているものがある（第43図の53～64）。年代を知りえる遺物は、下館の最盛期であるII A期の年代を持つものが多いが、15世紀末の年代を持つ土師器皿T-8類（第42図の54・60・60）が出土しており、SI11の施業は江馬氏下館跡II B期末以降と考えられる。

（d）土 坑（第31～34図）

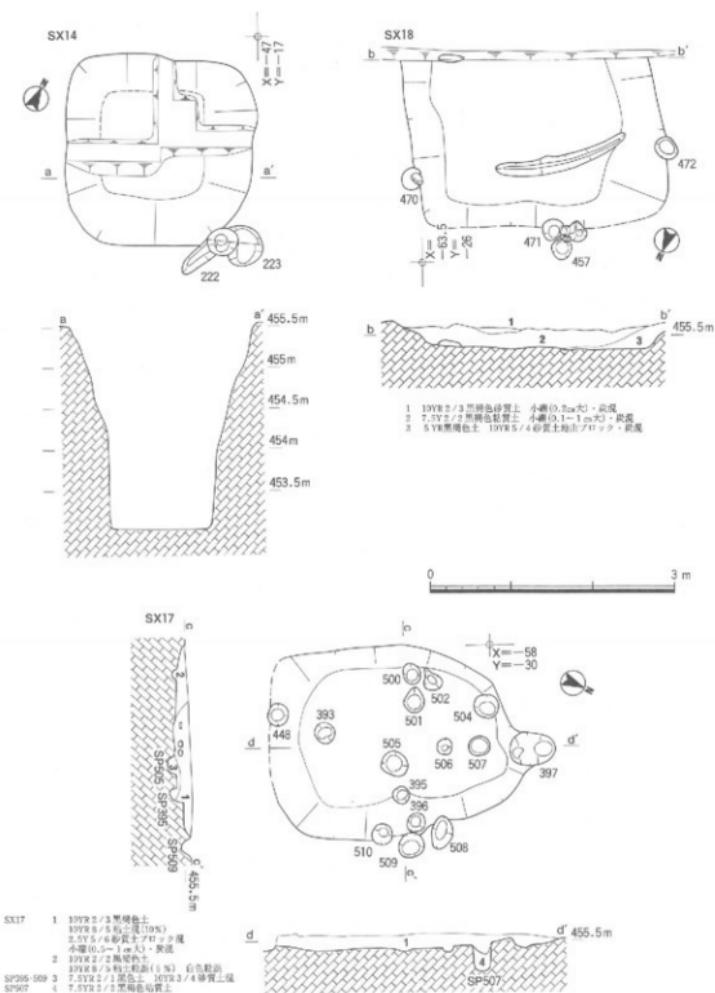
今回の調査では土坑32基を確認した。このうち、SXの遺構番号をつけたSX11・SX12・SX13・SX15・SX17・SX18・SX23の7基は、平面形がほぼ方形で、深さが30cm以内と浅く、床面が平らな土坑であり、建物と重複するものもあることから建物に伴う、または作業場としての土間状土坑と考えた。その組み合わせ・変遷等は第5章でふれることとし、ここでは切り合いのみ記す。いずれのSX土間状土坑からも遺物が出土している。SKの遺構番号をつけたもののうち、SK41～SK56は倒木痕である。SKの遺構番号をつけた土坑からは遺物は出土していない。なお、SX11・13・23の一部、SK38～48は、1977年度の調査で完掘している。また、倒木痕については記述しないが、平面規模等は巻末の別表7にまとめたので、参考にされたい。以下、插図の順に記述する。

SX15（第31図）：土間状土坑であり、区画4中央部、X座標-55.7～-58.5、Y座標-21.5～-24.3の範囲に位置する。一辺約280cmの方形である。後世の耕地化による削平のため、上部を失っており、確認できる深さは8cmである。床面は地山と倒木痕SK51を掘り込んでおりほぼ平坦である。壁の立ち上がりはほとんどなく、床面、また上場との境は不明瞭である。南東角に、か跡SX24がともなう。埋土は炭化物と橙色粘土粒を含み、単層である。埋土中に拳大～15cm大の礫24個が散乱していた。人為的に短期間に埋め戻したと考えられる。SP318・SP491（SB28柱穴）・倒木痕SK51を壊し、SP92に壊される。堅穴住居SI11が西に接するが、削平によって上部を失っているため、平面・断面観察からは、その境と新旧関係を明確にすることは出来なかった。

遺物は、土師器皿16点、瓦器1点、珠洲1点、瀬戸美濃5点、鉄製品2点、石製品1点が出土し、被熱しているものがある（第44図の76～82）。遺物の年代は15世紀前半にまとまっており、最も新しい年代を示すものは、古瀬戸戸内III～IV期の瀬戸美濃の盤である。これよりも新しい年代を持つ遺物を確認していないことから、SX15はSI11に先行するものと考えられる。

SX11（第32図）：土間状土坑であり、区画4南東部、X座標-59.8～-62.6、Y座標-12.3～-16.1の範囲に位置する。平面規模は長径314cm、短径246cmの東西方向を長軸とする長方形であり、主軸方位は座標にはほぼ一致する。後世の耕地化による削平によってその上部を失っていると考えられ、確認できる深さは8cmである。床面は地山を掘り込んでおり、平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。北辺と南辺の西端角部が一致せず、2つ以上の土間状土坑が重複していた可能性もあるが、中央部を1977年度調査で地山まで完掘しており、壁面の立ち上がりが確認できず、残った埋土面上でも切り合いは確認できなかった。埋土は炭化物と橙色粒を多く含む単層であり、人為的に短期間で埋めたものと考えられる。SX23と接するが、後世の削平によって埋土上部が失われており、切り合いを明らか

にすることはできなかった。SP87 (SB23柱穴) に壊され、SP489・SP659 (SB24柱穴)・SP660 (SB22柱穴)・SP661を壊す。SP97 (SB21柱穴)・SP436・SP657・SP658・SP662は1977年度調査時に完掘しており、切り合いは不明である。SP489・SP663 (SB23柱穴)・SP664・SP665も切り合いを確認す



第33図 不明土坑SX14・土間状土坑SX17・SX18実測図 縮尺1/60

る前に埋土を掘り下げてしまったため、不明である。遺物は15世紀前半の土師器皿2点が出土している（第43図の65・66）。

SX12（第32図）：土間状土坑であり、区画4南東部、X座標-57.5～-59.7、Y座標-14.7～-17.1の範囲に位置する。平面規模は一辺約215cmの方形であり、主軸方位は座標にはほぼ一致する。確認できる深さは24cmであり、上部は後世の耕地化に伴う削平により失っていると考えられる。床面は地山を掘り込んでおり、ほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物を含む黒褐色土を中心あり、その堆積状況から、人為的に短期間に埋めたものと考える。SX23・SP669に壊され、SP53・SP667・SP668・SP670・SP671を壊す。遺物は土師器皿2点、白磁1点、滑石製石鍋2点が出土し（第43図の67～69）、15世紀前半の年代を示す。

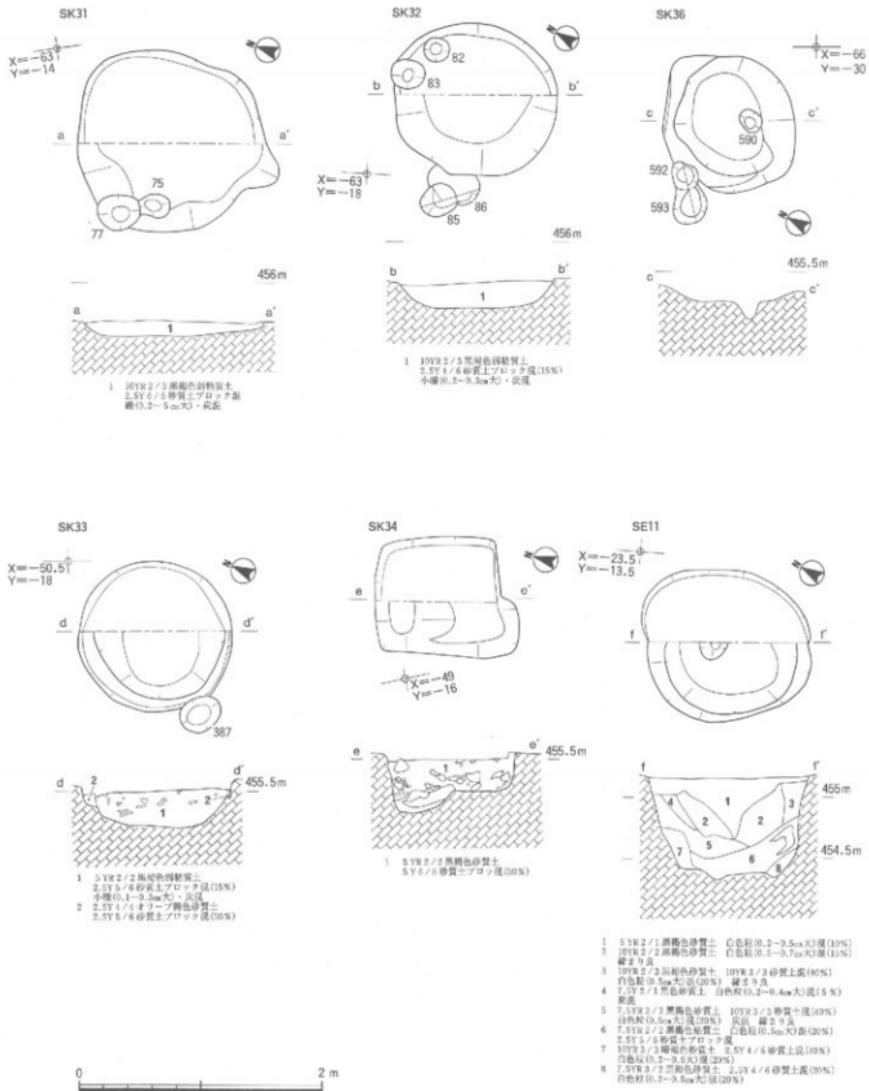
SX23（第32図）：土間状土坑であり、区画4南東部、X座標-59.1～-60.6、Y座標-14.7～-16.9の範囲に位置する。その南側を、1977年度調査時に壊しており、全体の平面規模は不明であるが、確認できる範囲で長径194cmを測り、方形であったと推定する。確認できる深さは10cmであり、後世の削平により、上部を失っていると考えられる。床面は地山とSX12埋土を掘り込んでおり平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物と橙色粒を多く含む單層であり、人為的に短期間に埋めたものと考えられる。SX11と接するが、その切り合いは不明である。SX12・SP666（SB23・24柱穴）・SP673・SP674（SB22柱穴）を壊し、SP315（SB23柱穴）に壊される。遺物は土師器皿4点、瀬戸美濃3点、青磁1点、白磁2点が出土しており、被熱しているものがある（第43図の72～75）。年代を知りえる遺物は、下館の最盛期であるⅡA期の15世紀前半の年代を持つものが多いが、15世紀末の年代を持つ土師器皿T-8類が出土しており（第43図の73）、SX23の廃棄は江馬氏下館跡ⅡB期末以降と考えられる。

SX14（第33図）：区画4北東部、X座標-47.1～-49.6、Y座標-17.0～-19.4の範囲に位置する。平面規模は上場が1辺約240cm、下場が1辺約120cmの方形であり、床面は平坦である。深さは248cmを測る。壁は床面から約120cm上まではほぼ垂直に立ち上がり、その上部では外側に向かってやや開く。崩壊の危険があつたため、断面図の作成を行わなかったが、埋土は灰褐色～黄褐色砂質土地山ブロックを多く含む暗茶褐色～黒褐色土が、ほぼ水平に層をなして堆積しており、地山を掘り込んで本遺構を掘削した後、短期間に内に埋め戻したものと考える。SP222に壊される。遺物は埋土上層から土師器皿1点が出土しているが、年代は不明である。

SX17（第33図）：土間状土坑であり、区画4南西部、X座標-57.2～-60.7、Y座標-27.6～-30.0の範囲に位置する。平面規模は長径303cm、短径234cmの楕円形である。確認できる深さは14cmである。床面は地山を掘り込んでおりほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物と橙色粘土粒を含み、2層に分かれるが、その堆積から、人為的に短期間に埋めたものと考えられる。SP393（SA23柱穴）・SP395・SP396・SP397・SP500・SP501・SP502・SP504（SA23柱穴）・SP505・SP506・SP507（SB30柱穴）・SP508・SP509・SP510を壊す。

遺物は、土師器皿11点、珠洲1点、白磁1点、近世陶器1点、鉄製品・石製品各2点が出土し、被熱しているものはない。（第44図の83～87）。遺物の年代は15世紀前半にまとまっているが、16世紀末～17世紀初めの年代をもつ肥前I期の椀が出土しており、近世初めの耕作化に際して本遺構を埋めたものと考えられる。

SX18（第17・33図）：土間状土坑であり、区画4南西部、X座標-63.9～-66.0、Y座標-25.7～-29.0の範囲に位置する。調査区外の南に続いており、確認できる平面規模は長径315cmの方形である。確認できる深さは30cmである。X座標-61.2～-66.0、Y座標-25.7～-31.5の範囲は、地山



第34図 土坑SK31・SK32・SK33・SK34・SK36・井戸SE11実測図 緯尺1/40

を約10~20cm掘り込んでおり、SX18は、先行する掘り込みの埋土を地山まで掘り込んで床面としている。床面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。床面に深さ約2cmの浅い2本の溝がある。南側の溝（第17図）は、断面観察から先行する掘り込みに伴うものであることがわかったが、北側のものは、どちらに伴うものか不明である。埋土は炭化物を含み、2層に分かれると、人為的に短期間で埋めたものと考えられる。SP143（SB21柱穴）・SP471・SP472を壊し、SP470に壊される。

遺物は、土師器皿13点、珠洲1点、瀬戸美濃2点、鉄製品1点が出土した（第44図の88~92）。遺物の年代は15世紀前半にまとまっており、最も新しい年代を持つものは古瀬戸後Ⅲ~Ⅳ期の瀬戸美濃の盤である。

SK13（第17図）：区画4南東部、X座標-59.5~-60.7、Y座標-17.3~-19.2の範囲に位置する。その南側部分を1977年度調査時に壊しており平面規模は不明であるが、確認できる範囲の長径は219cmを測り、方形であったと推定する。確認できる深さは8cmである。床面は地山を掘り込んでおり、平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は炭化物を多く含み、単層である。土間状土坑と考える。SP675（SB23柱穴）・SP676・SP677（SB22柱穴）・SP678（SB24柱穴）を壊す。遺物は15世紀前半の年代を持つ土師器皿2点が出土している（第43図の70・71）。

SK31（第34図）：区画4南東部、X座標-63.8、Y座標-14.8に位置する。平面形は直径約150cmの円形であり、深さ13cmを測る。耕地化に伴う削平により上部を失っていると考える。底面はほぼ平坦であり、掘り込みは緩やかである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色弱粘質土である。SP75を壊し、SP77に壊される。遺物は出土していない。

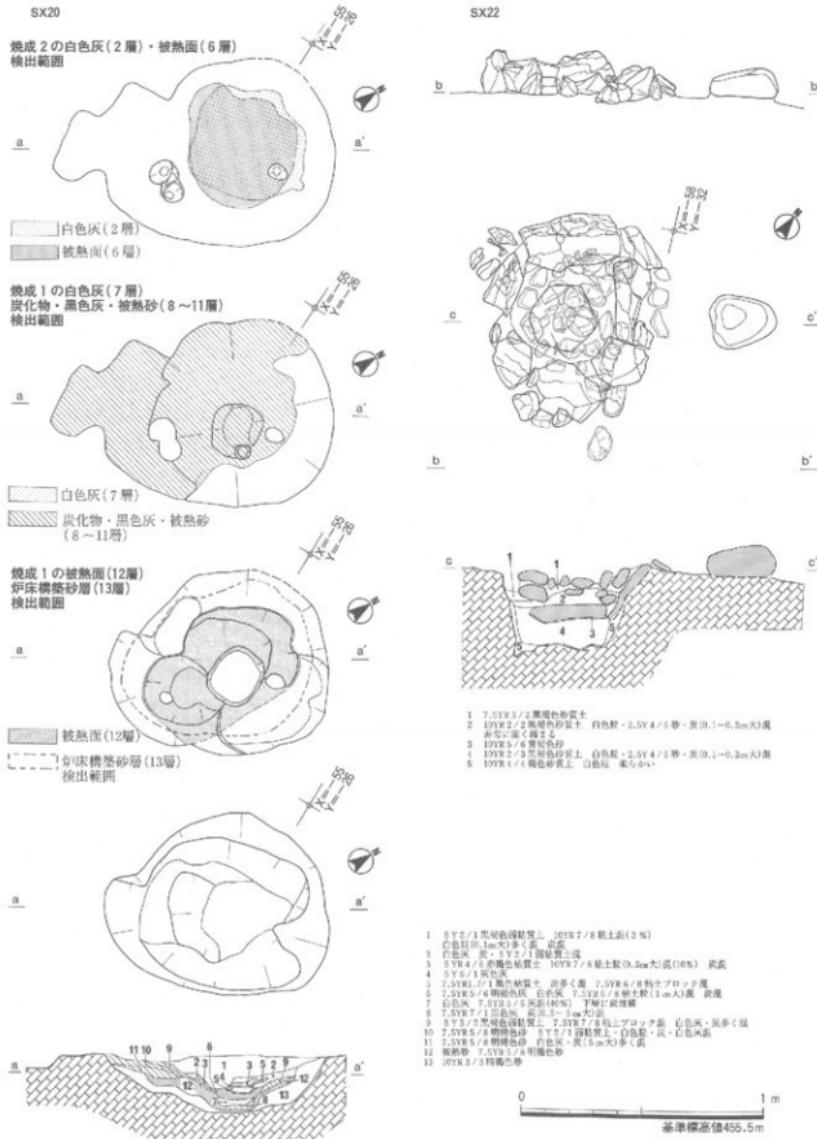
SK32（第34図）：区画4南東部、X座標-63.8、Y座標-17.4に位置する。平面形は直径約130cmの円形であり、深さ25cmを測る。耕地化に伴う削平により上部を失っていると考える。底面はほぼ平坦であり、掘り込みは緩やかである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色弱粘質土である。SP86を壊し、SP82・SP83に壊される。遺物は出土していない。その配置からSB23に伴う施設の可能性を考えられる。

SK33（第34図）：区画4北東部、X座標-51.3、Y座標-18.7に位置する。平面形は直径約125cmの円形であり、深さ40cmを測る。壁面は検出面から約17cm下まではほぼ垂直に掘り込み、幅10cm前後のテラス状の段を設けている。そこから底面に向かって緩やかに掘り込む。底面はほぼ平坦である。埋土は地山ブロックを含む黒褐色弱粘質土であるが、テラス状の段とその周囲壁面の間は地山によく似たオリーブ褐色土である。曲げ物の枠等を設けていた可能性があろう。SP387に壊される。遺物は出土していない。その配置からSB25に伴う施設の可能性を考えられる。

SK34（第34図）：区画4北東部、X座標-49.4、Y座標-15.5に位置する。平面形は一辺約100cmの方形である。底面には段差があり、北側が一段低く深さ50cm、南側が深さ30cmを測る。それぞれの底面はほぼ平坦であり、壁面は検出面からほぼ垂直に掘り込んでいる。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色砂質土である。遺物は出土していない。

SK36（第34図）：区画4南西部、X座標-65.3、Y座標-30.6に位置する。平面形は長径110cmの橢円形であり、底面はすり鉢状を呈する。検出面で範囲を確認できず、地山面の撓形で土坑と判断した。埋土は黒褐色土である。SP590を壊す。遺物は出土していない。

SK38・SK39・SK40（第32図）：区画4南東部、X座標-59.6~-62.0、Y座標-10.0~-11.2の範囲に位置する。1977年度の調査で完掘しており、その切り合い関係は不明であるが、平面形が長方形、深さ50cm前後の3つの土坑が切り合っていたものと考えられる。SX11と接しており、掘立柱建物、土間状土坑と一体の施設であった可能性がある。



第35図 堀跡SX20・SX22実測図 比尺1/20

(e) 井戸 (第34図)

区画5北東部で1基を確認した。1995年度調査門前地区区画6・7で確認した井戸同様、溜め井戸と考えられる。南外部地区ではこのような井戸は確認しておらず、南堀を境にしてその北側の門前地区にのみ設けられた施設のようである。

SE11 (第34図) : 区画5北東部、X座標-24.2、Y座標-14.2に位置する。平面形は直径約130cmの円形であり、深さは78cmを測る。底面はほぼ平坦であり、その中央部やや北寄りのところに直径約23cm、深さ8cmの底面がすり鉢状の円形の窪みがある。埋土は8層に分かれる。第2層は両側から、第5層は北側から、第6・8層は南側から流れ込むように堆積している。第3・5・8層は凹く締まっている。1995年度報告の井戸I b類に相当し、方形の木製井戸側を設置していたものと考えられる。構列SA31がSE11を囲んでおり、一体の施設であったと考える。遺物は出土していない。

(f) 炉跡・竈跡

今回の調査では、区画4において、炉跡4基と竈跡1基を確認した。以下、挿図の順に報告する。

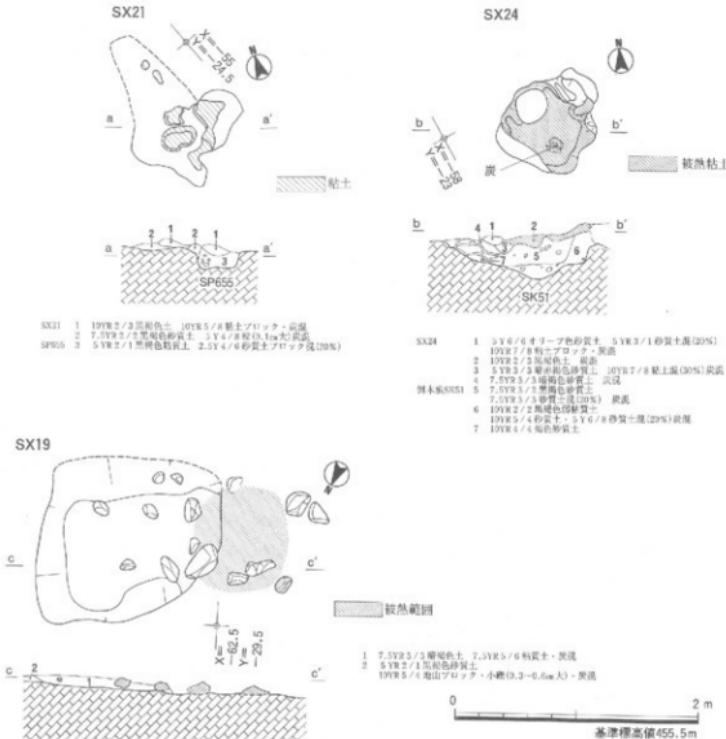
SX20 (第35図) : 調査地区中央部、X座標-55.5、Y座標-26.2、竪穴住居SI11の床面の中央部に位置する地床炉である。平面規模は長径91cmの楕円形である。地山を掘り込む底面はすり鉢状を呈し、深さ23cmを測る。埋土は13層に分かれ、白色灰層や炭化物の堆積層がある。2面の被熱面が確認でき、下層の被熱面に伴う焼成を焼成1、上層の被熱面に伴う焼成を焼成2として記す。

焼成1 (第7~13層) 地山をすり鉢状に掘り込んだ後、地山床面のほぼ全面に約10cmの厚さで第13層暗褐色砂を敷き、その中央部に直径約22cm、深さ4cmの円筒形の小穴を設けている。この上面を焼成面(第12層明褐色被熱砂)として1回目の焼成を行っている。第12層の被熱面は長径65cmの不整形の範囲に広がっている。小穴底部では被熱の痕跡は確認できなかったが、第7層白色灰層最下部に炭化物が堆積していることから、第8層黒色灰層が焼成面になっていたと考える。第7・8層の厚さは、共に約2cm前後である。第9~11層が焼成1に伴う炭化物や白色灰の堆積であり、炉跡の西側約30cmの範囲にも広がっている。炉跡内での第9~11層の堆積は3~8cmである。

焼成2 (第2~6層) 第6層は明褐色灰層であり、炉跡中央部の直径約50cmのほぼ円形の範囲で検出した。断面図では3cmほどの厚さが確認できる。その上層、第3・4層は炭化物や被熱した赤褐色粘質土を含む灰層であり、第6層上面で2回目の焼成を行ったと考える。第6層上面の検出面からの深さは約13cmである。最上層に第2層白色灰層が堆積する、第6層の検出範囲とほぼ同じ範囲に広がっており、厚さは最も厚いところで約5cmを測る。第1層黒褐色弱粘質土はSI11の埋土と同じであり、SI11とSX20は廃棄の際の埋土である。第1層から土師器皿の小片・鉄製品各1点が出土したが、その年代は不明である。なお、SX20は江馬氏下館II B期末以降にSI11と一緒に廃棄したものと考えられる。

SX22 (第35図) : 調査地区西部、X座標-57.5、Y座標-31.8に位置する。石組み炉であり、平面規模は長径約85cmの楕円形である。その構築の順は以下のようであった。まず、直径約60cm、深さ約30cmの円筒形に地山を掘り込む。地山底面から約10cmの厚さを第4層黒褐色砂質土で埋めてよく叩き締め、第3層黄褐色砂層を薄く敷き、その上部に厚さ8cm、一辺約13cmの平面六角形に加工した礫を上面がほぼ平坦になるように据えている。その周囲に、長径20~30cm大の不整形、厚さ5~10cmの厚板状の礫7個を地山壁面に沿ってやや上部に向かって開くように立てて据え、内壁をしている。床面の礫の上層の第2層黒褐色砂質土も固く締まっており、壁面の礫を固定するため叩き締めたものと考える。この炉の中に、径10~15cm大の被熱した円礫が入れられている。これらの円礫を埋める第1層黒褐色砂質土はが廃棄時の埋め土であり、盛土1である。

炉を構成する砾の石材の多くは船津花崗岩である。赤褐色に変色している部分も見られるが、風化によるものと考えられ、被熱による変色の可能性は少ない。一方、炉内に入れられた円窓はいずれも被熱しており、亀裂が入ったものや、一部黒く変色したものもある。埋土に灰層や炭化物の層がないことから、これらの円窓を炉内で焼いたとは考えにくい。また炉底・炉壁を構成する磚に被熱の痕跡が認められず、円窓を入れる以前にこの炉内で火を使用した可能性も少ない。この石組み炉は、他所で焼いた円窓の熱を利用する保温装置のような施設であり、そのような保温施設を必用とする何らかの作業を行なっていたものと推測する。遺物の出土はない。この炉跡の20cm西に長径28cmの平面隅丸三角形の砾を検出した。SX24にともなうものと考えるが、性格は不明である。なお、SB30はSX24に伴う覆い屋と考えられる。



第36図 球跡SX21・炉跡SX19・SX24測量図 箱尺1/40

SX21（第36図）：SI11東部、X座標-55.5、Y座標-28.8に位置する、黄色粘土ブロックと炭化物を大量に含む黒褐色土の広がりである。南北120cm、東西95cmの不整形の範囲で確認した。SI11内に設けられた竈を構築する粘土ブロックと考えるが、後世の削平等により、原形は全く留めていない。地山の掘り込みも検出していない。SP655を壊す。遺物の出土はない。

SX24（第36図）：SX15南東角部、X座標-58.3、Y座標-22.3に位置する。直径約65cmのほぼ円形の範囲に黄橙色の粘土を貼り付けており、全体が被熱している。黄橙色粘土の厚さは最も厚いところで約10cmを測る。黄橙色粘土上には薪の残存物と考えられる炭化物が散乱している。埋土は炭化物と黄橙色の被熱粘土を含む黒褐色土であるが、SX15・SI11の埋土と分けることが出来ない。SX15に接する南西側を焚き口とする竈の可能性もあるが、後世の削平がひどく、上部構造等が不明であるため、ここでは炉跡として報告する。倒木痕SK51を壊し、SP314に壊される。SX24上の埋土からは遺物は出土していない。

SX19（第36図）：区画4南西部、X座標-61.2～-66.0、Y座標-25.7～-31.5の範囲の性格不明の掘り込み内、X座標-63.2、Y座標-28.8に位置する。周辺に炭化物と橙色の焼土を含む暗褐色土が堆積しており、これを掘り上げたところ、直径約70cmの円形の範囲で黄橙色に変色した地山の被熱面を検出した。被熱面の東側では、性格不明の掘り込み埋土を、東西150cm、南北130cmの範囲で、深さ8cmほど緩やかに掘り込んだ窓みを検出した。この部分では被熱の痕跡はみられない。竈の可能性もあるが、炉跡として報告しておく。

遺物は上師器皿6点、瓦器1点、瀬戸美濃1点、鉄製品1点、陶玉1点が出土した（第44図の91・94～97）。最も新しい年代を示すものは古瀬戸後I～II期の瀬戸美濃御皿であり、SX18出土の1片と接合した（第44図の91）。

（9）溝（第17・37図）

区画4西辺にそって、SD11・SD12を検出した。区画5中央部ではSD13を検出した。SD11が南掘に、SD13が西堀屈曲部に接続するが、1977年度調査で接続部を完掘してしまっており、その新旧関係は確認できない。

SD11（第37図）：区画4西南部に位置する。X座標-43.5、Y座標-31.2で南堀に接続し、X座標-49.0、Y座標-35.9の地山段丘端部で終わっており、全長7.6mを測る。主軸方位はN-9°-Eである。上幅27～66cmであり、段丘端部が最も広く、南堀との接続部が最も狭い。下幅は約10cm、深さは約30cmである。底面レベルは、南堀接続部で455.05m、段丘端部で454.95mであり、わずかに段丘端部に向かって下っている。埋土は小砾を多く含む黒褐色砂質土である。南堀との接続部の埋土を1977年度調査時に完掘しており、その新旧関係は明確ではない。南堀との接続部手前のSD11内で、その下端を南掘に向いた長径約25cmの梢円形の礫を検出した。この部分は1977年度調査時に完掘しているが、当時の写真にもこの礫が写っており、原位置を保っていると判断した。同様の礫は、後述するSD12でもSD11との接続点の手前SD12内で検出している。これらの礫は溝の廃棄の際に掘えたものと考えられ、溝の廃棄にあたって溝を開塞する意味合いをもって掘えた可能性が考えられる。SD12を壊す。遺物は古瀬戸後I期の瀬戸美濃平碗1点が出土している。

SD12（第37図）：区画4西辺にそって、X座標-48.0～-59.3、Y座標-33.1～-35.5の範囲に位置する南北方向の溝である。検出長11.7m、主軸方位はN-32.5°-Wを測る。北端は土層観察用畦の下にあるため確認できなかったが、X座標-48.0、Y座標-34.0付近でSD11と交わると推定する。X座標-56.5、Y座標-33.0付近で西に曲がり、X座標-59.0、Y座標-35.5の地山段丘端部が南端になる。上幅は約18～40cm、下幅は約10cm、深さは約15cmである。底面レベルは、北端部で455.25m、

X座標-54.0ラインで455.36m、段丘端部で455.21mであり、底面の傾斜はほとんどない。埋土は黄褐色砂質土ブロックを含む黒褐色砂質土である。北端部溝内で、長径45cmのラグビーボール形の礫を検出した。埋土は単層であり、礫は溝の発達の際に掘えたものと推測する。SD11に壊される。遺物は出土していない。

SD13（第17図）：区画5中央部のX座標-30.0ライン上に、西堀屈曲部北西角から地山段丘端部まで延びる東西方向の溝である。全長24.8m、主軸方位はN-67.0°-Eを測る。上幅は約62-92cm、下幅は25-40cm、深さは17cm前後である。底面レベルは東端部で455.16m、西端部で454.89mと地表面の傾斜に沿って西に向かって緩やかに傾斜している。区画5の盛土1によって埋まっていた。西堀との接続部を1977年度の調査で完掘しており、その新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

SD14（第17図）：3トレンチ西堀部、X座標-23.0-~-24.5、Y座標-57.5-~-59.0の範囲に位置する。段丘崖面に続くと考えられる緩やかな傾斜面の途中に確認した南北方向の溝である。深さは10cm程である。段丘崖面の手前に位置し、柵列などの布掘りの溝の可能性も考えられるがトレンチ内では柱穴は確認していない。段丘崖端部まで遺構が広がっていたことがわかる。

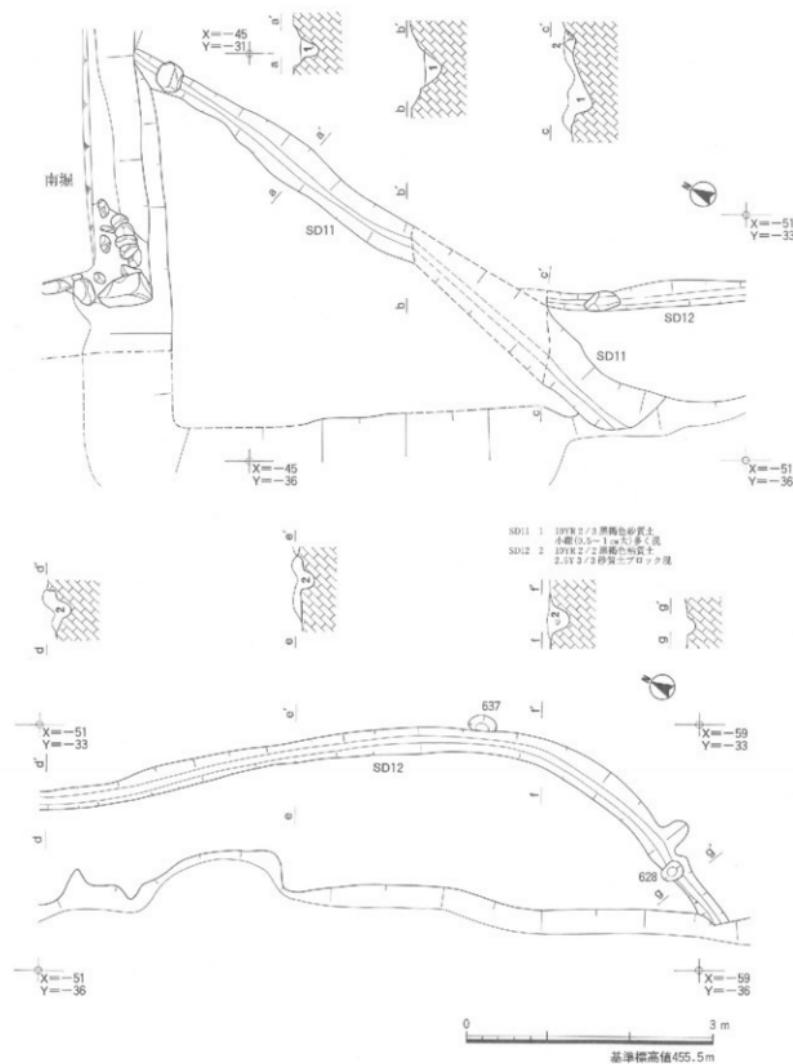
（h）盛 土（第17・38図）

区画4の段丘西部の広範囲、区画5全面で盛土地盤面を確認した。この盛土は、1996年度南辺地区の調査で確認した盛土と同じ堆積と考えられ、南辺地区同様、土質の違いから下層の黒褐色盛土（盛土1）と上層の地山ブロックを多く含む層（盛土2）に分けることができる。盛土1は区画4ではその西部、X座標-44.2ライン（南堀S3T南壁）以南、Y座標-17.5ライン以西で確認し、南堀に近いほど東にむかって広がっている。区画5では1977年度調査範囲を除く全面で確認した。区画4と区画5の盛土1のつながり、盛土1の南堀・西堀への流れ込みの有無は、1977年度調査のトレンチによる搅乱のため直接は確認できない。土質の観察からは、堀埋土に盛土1と考えられる堆積はみられない。区画4の盛土1はほぼ水平に堆積し、東から西に低くなる地山の傾斜に沿って、西端部が最も厚く、20cm前後の厚さを測り、東側ほど薄くなる。区画5の盛土1の厚さは調査地区北壁で26cmを測る。盛土2は、区画4段丘端部に沿ってY座標-33-~-35.3の範囲で検出し、区画4から南堀内に流れ込んでいる。盛土2は区画4の西辺にそって東西幅約1m、厚さ30cm前後で堆積し、南堀内に向かって南西から東と北に向かって流れ込み、最も厚い部分では80cmを測る。南堀埋土の南側縦断面であるS3T北壁ではY座標-27.0付近まで、北側縦断面であるS4T南壁ではY座標-28.0付近まで確認できた。南堀内ではこの盛土2の上層に、館内の礫石や遺物が多数混じる層（第3段階埋土b）が堆積する（第23図参照）。区画5では盛土2は検出しなかった。

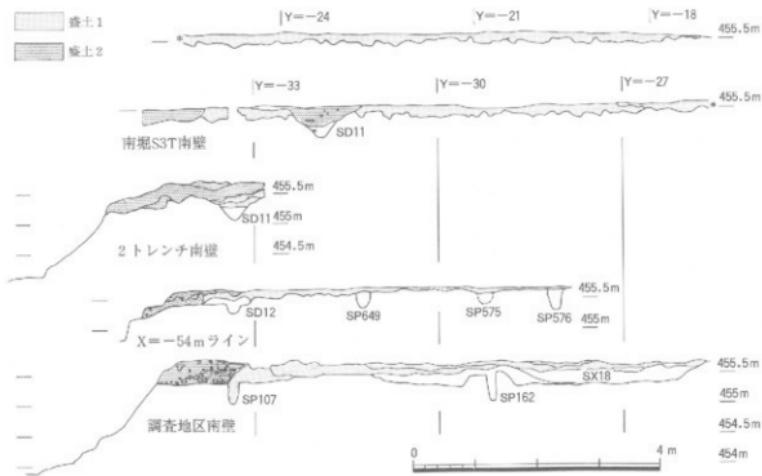
遺物は、区画4の盛土1中からと盛土面上から多数出土しているが区画5ではわずかであった（第45図の102-128）。その種類ごとの内訳は第6表にまとめた。区画4では、盛土内、盛土面上とともに、X座標-62.0-~-65.5、Y座標-29.5-~-32.5で不整円形状に特に多く分布し、X座標-50.0-~-54.0、Y座標-28.0-~-55.0内で楕円形状、X座標-56.0-~-59.8、Y座標-30.8-~-33.2内で不整円形状に分布のまとまりがあった。出土レベルは、盛土中全体にわたる。最も新しい年代を持つ盛土内出土の遺物は区画4では登窓第2小期の瀬戸美濃鉄絵皿（第45図の126）、区画5では肥前陶器Ⅰ期の椀（第45図の127）である。この遺物の年代から、南外部地区の段丘端部の広範囲で確認した盛土地盤は近世の耕作化の際に行われたものと考えられる。

（i）1-3トレンチの遺構（第17-20図）

1-3トレンチでは、各トレンチの西部でそれぞれ2カ所の地表面の落ち込み部を確認した。各トレンチが離れているため断定は出来ないが、下館が機能していた時期には1トレンチY座標-43.2、



第37図 溝跡SD11・SD12実測図 縮尺1/60



第38図 区画4の盛土の土層推移模式図 縮尺1/80

第6表 盛土及び盛土直上出土遺物破片数・個体数一覧表

種類	区画		区画4		区画5	
	層位		盛土		盛土直上	盛土1
	盛土1	盛土2				
中世 瓦 土器 珠 壺 磁 白 中國陶器	土器	127(2.74)	2(※)	83(1.77)	5(0.04)	
	瓦器	1(※)		1(※)		
	珠	6(※)	1(※)	2(0.03)		
	壺	20(0.37)	1(0.10)	14(0.44)	1(※)	
	磁	3(0.16)	1(※)	4(0.17)		
	白	4(0.10)	1(0.17)	3(0.02)	1(0.19)	
	中國陶器	161(3.37)	6(0.27)	110(2.43)	7(0.23)	
	小計					
	合計		167(3.64)			
近世陶器 繩紋土器 鉄製品 石製品 銭	2(※)				1(※)	
	1(※)				1(※)	
	1			2		
	1			5		1
				1		1
	小計	5(※)		8	2(※)	2
総計			172(3.64)	118(2.43)	9(0.23)	2

()内は口縁部計測法による個体数。※は存在するが個体数が数値として表れないもの

2トレンチY座標-50.4、3トレンチY座標-52.9付近の落ち込みを境にして、南北に細長い東西2つの平坦面があったと推定する。1トレンチでは段差はないが、2・3トレンチでは約40cmの段差となる。1トレンチではその西端部Y座標-48.0付近でその西側がさらに約60cm落ち込み、その下部に東西幅約40cmの平坦面を確認した。平坦面の西に段丘崖面斜面の落ち込みがあるものと考えるが、この半平坦面がいかなる性格のものかは不明である。2トレンチではY座標-53.6付近から西に約50cm落ち込む斜面を検出した。このまま、段丘崖面に落ち込むものと考える。3トレンチではY座標-57.6付近から西に向かって緩やかに落ち込む。Y座標-59.0付近にSD14を検出しており、段丘崖面の際まで遺構が広がっているものと考えられる。柱穴は1トレンチのY座標-38.8～-45.2の範囲で6基を確認したが、この範囲内では明確な並びは確認できなかった。調査地区の西側の田は少なくとも東西の2区画に分かれると考えられるが、今後の調査によってさらに区画が確認できる可能性があるため、区画の番号はつけなかった。

遺物は1トレンチからのみ出土した。遺構に伴うものではなく、旧耕作土と地山面直上から出土した。古瀬戸戸後I～II期に属する瀬戸美濃の鉢皿は接合しないものの区画4の盛土出土の1片と同一個体と考えられる（第15図の91）。

4 遺 物

1997年度調査区から出土した遺物は、中世の土器・陶磁器片のほかに鉄製品、銅製品、石製品、織紋土器、近現代陶磁器など総数779点である。前節で述べたように本年度の調査区は南堀を境にして、区画4では多くの遺構を確認したが、区画5では確認できた遺構はわずかであった。遺物の出土状況においても同じ傾向がみられ、総数779点のうち、区画4出土遺物は608点、区画5出土遺物はわずか33点であった。南堀SIT・SSTの埋土からは85点が出土している。

これらの遺物のうち、館の存続時期である13世紀後半～16世紀初めの年代を持つ中世土器・陶磁器は624破片、19.65個体分であり、区画4から536破片、16.62個体分、区画5から12破片、0.27個体分、南堀から75破片、2.76個体分が出土している。これらの中世食器資料について、区画4と区画5の種類別組成・用途別組成の比率を算出した（第7～10表）。ここからは、館外地区の遺物組成の様相が、南堀を境にして大きく異なる様子が読みとれる。南堀の南側の区画4では、1m²あたりの出土量が0.82破片を数える。用途別の組成において、食器具の占める比率が高く、その中でも土器皿の比率が高く、館内部の食器の組成比に近いものである。この傾向は南辺地区と同様のものであり、このような状況は南外部地区全般における傾向といえよう。一方、区画5では、1m²あたりの出土量が0.03破片と極端に少ない。他の館外地区と比べて、館の正面にあたる門前地区は、その全面において遺物の出土が特に少ない地区であることがわかる。なお、南堀SIT・SSTの1m²あたりの出土量は4.12破片と極端に多い。南堀延長部出土遺物のはほとんどは、堀の埋め立てに際して南堀へ運ばれた館内部の土砂の層である第3段階埋土b中から出土しているものであり、本来は館内において使用し、廃棄したものと考えられる。第1段階、第2段階埋土からの1m²あたりの出土量は0.98破片である。

これらの地区別の遺物の出土量と、本来の使用場所、出土場所の問題についての知見は、今回まとめるだけの余裕がないため、稿を改めて報告することとしたい。

遺物の接合関係は、SX18とSX19から出土した瀬戸美濃鉢皿（第44図の91）、盛土1内の別地点から出土した瀬戸美濃の平椀（第45図121）の2例がある。SP350（SB27柱穴）とSP359（SB28柱穴）から出土した青白磁水注（第42図の32）、SP412（SB29柱穴）と盛土直上から出土した中国陶器の肩衝き茶入れ（第42図の35）、盛土1と盛土2から出土した瀬戸美濃の平椀（第45図の119）の3例は、接

合しないものの同一個体と考えられるものである。接合作業を十分には行えなかったこともあるが、接合例は少なかった。

以下、出土遺物の諸特徴を述べるが、中世陶磁器については、珠洲を吉岡康暢氏の編年に、瀬戸美濃を藤沢良祐氏の編年に、中国陶磁器を国立歴史民俗博物館集成の分類に、それぞれ依拠して記述した（吉岡1994・藤沢1996・国立歴史民俗博物館1993）。土器類についても、1994年度調査報告書で

第7表 1997年度調査区画4出土食器の種類・器種別組成表
(13世紀後半~16世紀前半)

種類	器種	破片数	個体数
土器	皿	405	13.22(100.0%)
	小計	405	13.22[79.5%]
瓦器	火鉢・風炉	5	0.02(100.0%)
	小計	5	0.02[0.1%]
珠洲	壺	1	0 (※%)
	甕	11	0.10(62.5%)
	壺・甕	4	0 (※%)
	すり鉢	7	0.06(37.5%)
	小計	23	0.16[1.0%]
窯器系陶器	壺	4	0 (※%)
	小計	4	0 [※%]
瀬戸美濃	大目茶椀	8	0.14(7.6%)
	椀	11	0.47(25.5%)
	皿	6	0.25(13.6%)
	盤	15	0.02(1.1%)
	壺・瓶	3	0.22(12.0%)
	卸目付大皿	9	0.35(19.0%)
	卸皿	7	0.38(20.7%)
	香炉	1	0.01(0.5%)
	花瓶	1	0 (※%)
	不明	1	0 (※%)
	小計	62	1.84[11.1%]
	青磁	13	0.17(12.3%)
中国陶磁器	皿	2	0.16(11.6%)
	盤	1	0.03(2.2%)
	不明	1	0 (※%)
	白磁	3	0 (※%)
青白磁	皿	11	0.68(49.3%)
	不明	1	0 (※%)
	水注	2	0.34(24.6%)
	陶器茶入れ	2	0 (※%)
	青花皿	1	0 (※%)
総計	小計	37	1.38[8.3%]
		536破片	16.62個体分

(個体数は全て口縁部計測法による。※は破片が存在するが個体数が数値として表れないもの。)

示した分類に沿って記述している(第39図、神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1995)。胎土・焼成については、「胎土は密であり、焼成は良好」なものが大半を占めるため、この場合は特に記述しなかった。土師器皿の色調も別表に記したため、ここでは触れない。法量等の詳細データーは別表8にまとめてあるので参照されたい。なお、図版を組み上げたあとで造構の解釈がかわったりチェックミスのため、遺物のならびが前後するものがあるが、訂正する余裕がないためここでは番号の順に記述することとする。

(a) 南堀SIT出土遺物(第40図の1~7)

第1段階埋土出土品(第40図の1~3): 1・2は珠洲のすり鉢の底部破片である。内面底部まで鉤し目を施す。胎土は砂粒を含み、やや粗い。焼成・色調・卸目原体は、1が還元硬質・灰色・2.45cm幅に14条、2は還元軟質・灰白色・3.5cm幅に13条である。1は珠洲IV期後半に、2は珠洲V期に属し、それぞれ14世紀代、14世紀後葉~15世紀前半のものである。

3ははたき石である。かなめ石ともいい、この石の上に鉱石を置き、槌でたたいて碎くために使う。平面は一辺11cmの方形、厚さ3.2cmに石を割ったものであり、側面は割れたままであるが、底面は平滑に加工している。表面には鉱石を碎いたためにできた円形の窪みが3つある。石材は流紋岩である。これとセットになると考えられる槌がSX15から出土している(第44図の82)。通常、鉱山等で鉱石を碎くために使用するものはこれよりもかなり大型である。なお、3は第3段階埋土bから出土している。

第8表 1997年度調査区画4出土食器の用途・種類別組成表
(13世紀後半~16世紀初め)

用 途	種 類	破 片 数	個 体 数
食 器 具	上 鍋 器	405	13.22(87.3%)
	瀬 戸 美 濃	40	0.88(5.8%)
	中 国 陶 磁 器	31	1.04(6.9%)
	小 計	476	15.14[91.1%]
貯 藏 具	珠 洲	16	0.10(15.2%)
	瓷 器 系 陶 器	4	0 (※ %)
	瀬 戸 美 濃	3	0.22(33.3%)
	中 国 陶 磁 器	4	0.34(51.5%)
	小 計	27	0.66[4.0%]
調 理 具	珠 洲	7	0.06(7.6%)
	瀬 戸 美 濃	16	0.73(92.4%)
	小 計	23	0.79[4.7%]
そ の 他	瓦 器	5	0.02(66.7%)
	瀬 戸 美 濃	3	0.01(33.3%)
	中 国 陶 磁 器	2	0 (※ %)
	小 計	10	0.03[0.2%]
総 計		536破片	16.62個体分

(個体数は全て口縁部計測法による。※は破片が存在するが個体数が数値として表れないもの。)

第9表 1997年度調査区画5出土食器の種類・器種別組成表
(13世紀後半~16世紀初め)

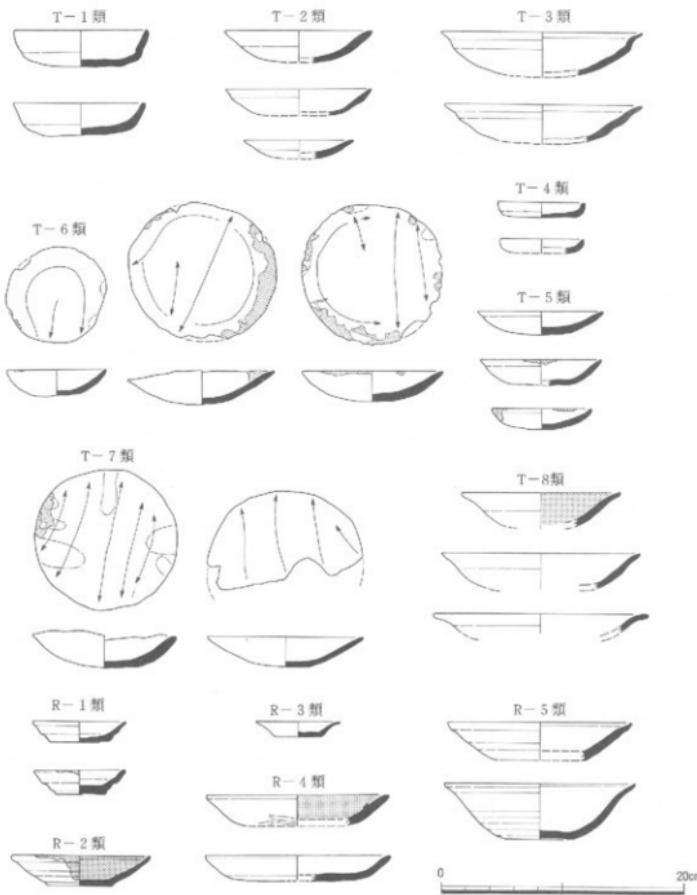
種類	器種	破片数	個体数
土師器	皿	6	0.04(100.0%)
	小計	6	0.04[14.8%]
珠洲	すり鉢	1	0.04(100.0%)
	小計	1	0.04[14.8%]
瓷器系陶器	壺	1	0(※%)
	小計	1	0[※%]
瀬戸美濃	壺	1	0(※%)
	卸口付大皿	1	0(※%)
	小計	2	0[※%]
中国陶磁器	青磁 梅瓶	1	0(※%)
	白磁 杯	1	0.19(100.0%)
	小計	2	0.19[70.4%]
総計		12片	0.27個体分

(個体数は全て口縁部計測法による。※は破片が存在するが個体数が数値として表れないもの。)

第10表 1997年度調査区画5出土食器の用途・種類別組成表
(13世紀後半~16世紀初め)

用途	種類	破片数	個体数
食器具	土師器	6	0.04(17.4%)
	中国陶磁器	1	0.19(82.6%)
	小計	7	0.23[85.2%]
貯蔵具	瓷器系陶器	1	0(※%)
	瀬戸美濃	1	0(※%)
	中国陶磁器	1	0(※%)
	小計	3	0[※%]
調理具	珠洲	1	0.04(100.0%)
	瀬戸美濃	1	0(※%)
	小計	2	0.04[14.8%]
総計		12破片	0.27個体分

(個体数は全て口縁部計測法による。※は破片が存在するが個体数が数値として表れないもの。)



手すくぬ形(丁型)

- T-1類 体部が弧曲で、口立ち上りがるもの。
 T-2類 口部を高くして、口縁部を内側に傾かせるもの。
 T-3類 口縁部を高くし、僅く外反させて段をつけるもの。
 T-4類 体部が直角どみに立ち上るや小鉢。
 T-5類 内底だけ手すくぬ形に施して、口縁部の直部を落とすもの。
 T-6類 内底に一方内に施して、口縁部の直部を落とすもの。
 T-7類 体部で手すくぬ形を施するもの。

扁楕成形(乙型)

- R-1類 口縁部がゆるく外反する小鉢。底部は直角底切り。
 R-2類 口縁部を高くして、底部を直角底切りとするもの。
 R-3類 口縁部が強く外反するもの。底部は母と直角底切り。
 R-4類 強い直型で、体部が直線的に陥くもの。底部は斜上直底り。
 R-5類 強い直型で、口縁部がやや内反するもの。底部は直角底切り。

第39図 江馬氏下鉢跡出土上の土師器皿分類図 縮尺1/4

第2段階埋土出土品（第40図の4）：4は土師器皿であり、T-5類に属する。

第3段階埋土b出土品（第40図の5～7）：5・6は土師器皿である。5はT-6類かT-7類に属する。焼成はやや悪い。6はT-7類に属する。胎土は砂粒を含み、密である。

7は青磁の壺瓶類の体部破片である。器形は胴部の一部がくびれる袋物であり、くびれ接合部から上位の部分の破片である。下側断面が接合面であり、漆による補修痕が残る。外面には接合部から上部に向かって鏽迹弁文を施す。内外面に明緑灰色のガラス質釉を施す。外面の釉調は細かい気泡を多く含み、やや白濁し、貫入は入らない。内面の釉調はガラス質透明であり、強い火を受けて所々剥落している。胎土は黒粒、気泡を僅かに含み、密である。色調は灰白色を呈する。

(b) **南堀S5T出土遺物**（第41図の8～21、第40図の22）

第1段階埋土出土品（第41図の8）：8は土師器皿であり、T-1類に属する。胎土は砂粒を含みやや粗い。内外面にタールが付着し、灯明皿として使用したと考えられる。

第2段階埋土出土品（第41図の9～13）：9・10は土師器皿である。9はT-6類に属す。外面に指押え痕が残る。胎土は細かい気泡を多く含み、やや粗い。口縁端部にタールが付着し、灯明皿として使用したと考えられる。10はR-5類に属する。胎土は砂粒を含み、密である。

11はカラミである。

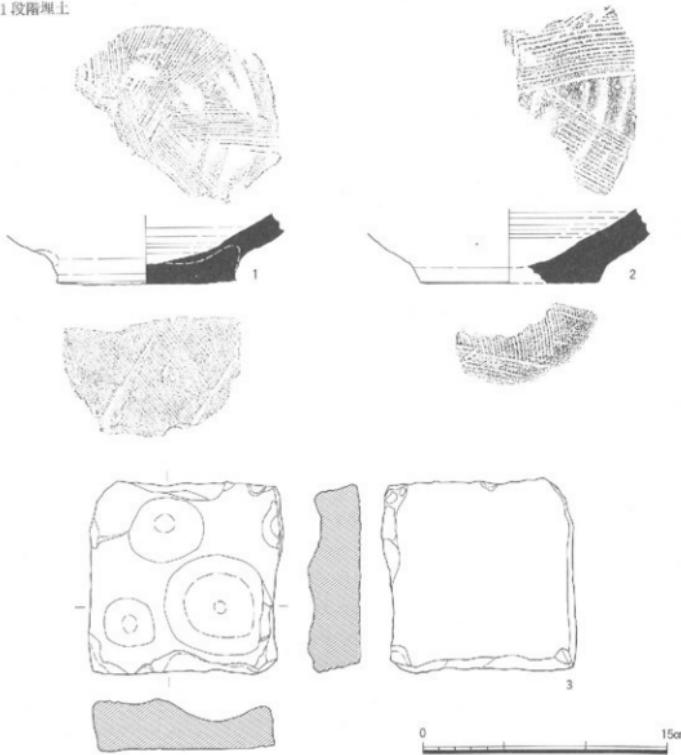
12・13は珠洲の壺である。12は口縁部が短く「く」の字状に屈曲し、端部は端面をしっかりと押さえしており、断面形が四角形を呈する。体部外面に3cm幅に11状の叩き目を施し、内面には当て具痕が残る。胎土は小石と砂粒を多く含み、やや粗い。海綿骨針を含む。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。珠洲IV期末に属し、14世紀代のものである。13は口縁部が短く「く」の字状に屈曲し、端部断面はやや丸みをもつ四角形を呈する。体部外面に3cm幅に7状の叩き目を施し、内面には当て具痕が残る。胎土は小石と砂粒、海綿骨針を含み、密である。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。珠洲V期に属し、14世紀後半～15世紀前半のものである。

第3段階埋土 b 出土品（第41図の14～21、第40図の22）：14・15は土師器皿である。14はT-7類に属する。胎土は砂粒を含み、密である。内面から口縁端部外面にかけてタールが付着し、灯明皿として使用したと考えられる。15はT-6類かT-7類に属する。胎土は砂粒を含み、密である。内面にタールが付着し、灯明皿として使用したと考えられる。

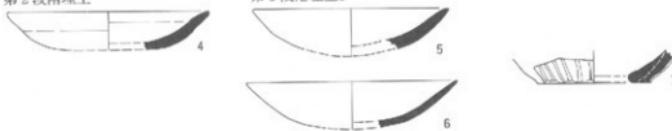
16・17は青磁碗である。16は口縁部内面に雷文を施す。外面は無文である。内外面に明緑灰色の釉を施す。釉は細かい気泡を多く含み、貫入は入らない。胎土は黒粒を含み、密である。色調は灰白色を呈する。龍泉窯系碗C2類に属し、15世紀前半のものである。17は底部破片である。内底見込みにスタンプ文を施すが、釉が厚く掛かり、その文様は不明瞭である。高台内に範削りを施す。高台端部内外面を削っており、端部断面はとがる。体部内面と外面高台まで灰オリーブ色の釉を施す。細かい貫入が多くはいり、表面には二次被熱による気泡が見られ、全体に白濁している。胎土は気泡と白色砂粒を含み、やや粗く、陶器質である。色調は橙色を呈する。高台内は無釉であるが、煤が付着する。体部と高台の一部を打ち欠いて陶製円盤に加工していると考えられる。龍泉窯系碗C2類に属し、15世紀前半のものである。

18は白磁杯である。透明釉を施すが、外面底部付近は露胎と考えられる。やや大きな貫人が入り、表面に僅かに気泡がある。胎土は黒粒と気泡を含み、密であり、色調は乳白色を呈する。白磁14類に属し、15世紀代のものである。

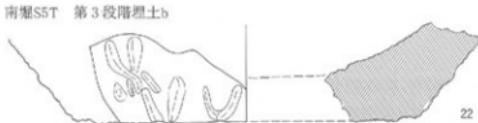
19は瀬戸美濃のすり鉢である。内外面に黒紫色の鎧釉を施す。内面底部まで卸し日を施し、卸目原体は2.5cm幅に10状以上である。内面はよく磨耗し、内面体部下部から底部にかけての釉は失っている。

南堀SIT
第1段階埋土

第2段階埋土



第3段階埋土b



第40図 南出土遺物実測図(1) 錄尺 1 / 3

胎土は長石粒を含みやや粗い。色調は表面は灰白色であるが、断面外側は灰褐色、内部は暗灰色を呈する。大窓第1～2段階に属し、16世紀初頭～前半のものである。

20・21は珠洲の壺である。20は口縁部が短く「く」の字状に屈曲し、端部上面はやや丸みを持ち、端部下端はやや尖り気味である。体部外面に3cm幅に7状の叩き目を施し、内面は当て具痕の上から撫でを施している。胎土は砂粒と気泡、海綿骨針を含み、やや粗い。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。珠洲Ⅳ期末～V期に属し、14世紀代～15世紀前半のものである。21は口縁部が短く「く」の字状に屈曲し、端部断面はやや丸みをもつ四角形を呈する。体部外面に3cm幅に7状の叩き目を施し、内面には当て具痕が残る。胎土は白色砂粒と気泡、海綿骨針を含み、密である。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀後半～15世紀前半のものである。

22は石鍋である。内面は平滑であるが、制作時の研磨によるものか、使用による磨耗によるものかは不明である。外面には幅0.7cmの溝状の鑿状工具痕がのこる。外面は赤橙色に変色しており、被熱によると考えられる。内面は灰黄色を呈する。石材は安山岩である。

(c) 建物・構列柱穴出土遺物（第42図23～52）

SB21出土品（第42図の23）：23は青磁碗の体部破片である。体部外面に、細い鏽蓮弁文を施す。内外面に暗緑灰色のガラス質釉を施す。細かい気泡を含み、内面には大きな貫人が入る。胎土は少量の黒粒と気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。龍泉窯系統B0類に属し、14世紀後半のものである。

SB22出土品（第42図の24）：24は土師器皿である。T-6類かT-7類に属する。胎土は砂粒を多く含み、密である。

SB23出土品（第42図の25・26）：25は土師器皿である。T-4類に属する。

26は瀬戸戸戸濃の筒型香炉である。口縁部内面から外面部下部まで灰釉を施すが、二次被熱によりオリーブ灰色を呈し、表面には細かい気泡がみられる。体部内面には輪轂成形痕が残る。体部外面、口縁部から約3cm下に一条の沈線がめぐる。胎土は砂粒と細かい気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後IV期（新）に属し、15世紀中頃～後半のものである。

SB25出土品（第42図27・28）：27は土師器皿である。T-6類に属する。胎土は砂粒と気泡を含み、密である。

28は鉄釘である。

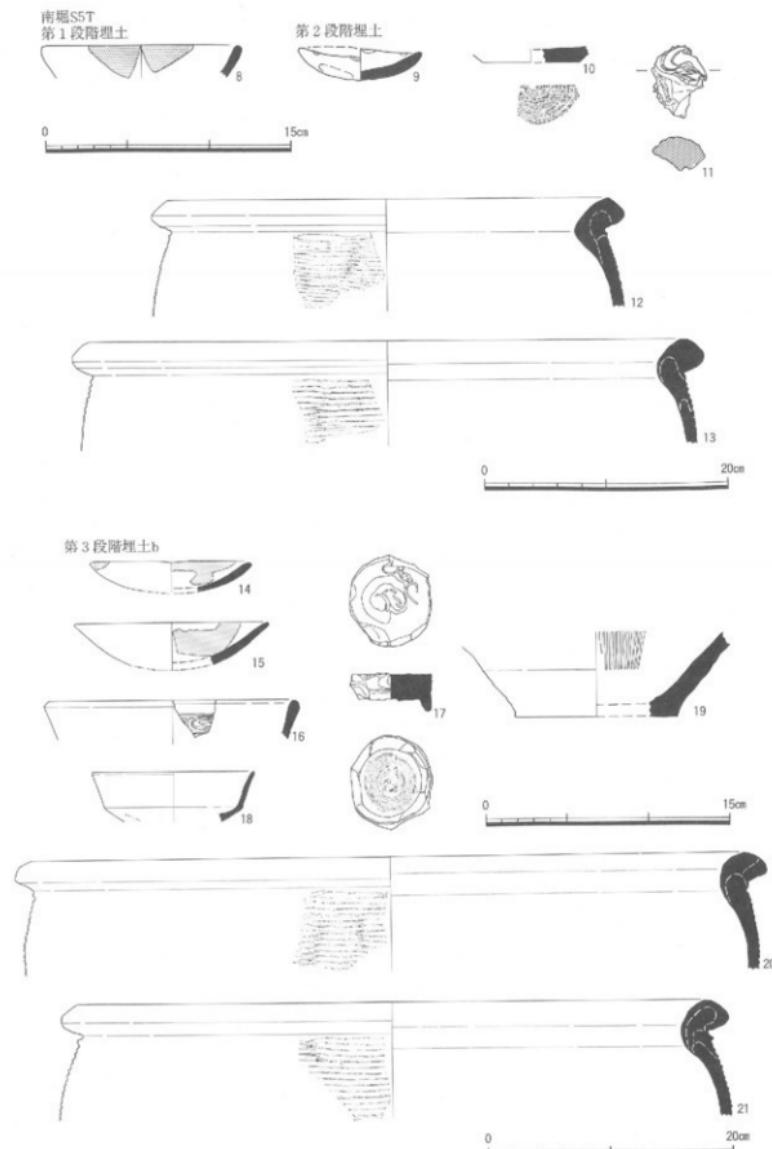
SB26出土品（第42図29・30）：29・30は土師器皿である。29はT-6類に属する。胎土は砂粒と石英粒を含み、密である。体部外面に指押え痕が残る。30はT-5類に属する。胎土は気泡を含み、密である。内面に煤が付着し、灯明皿として使用したと考えられる。

SB28出土品（第42図の31～33）：31は土師器皿である。T-6類かT-7類に属する。胎土は砂粒を含み、密である。

32は青白磁の水注である。体部外面に文様を施すが、小破片のためその絵柄は不明である。口頭部内面から体部外面に明緑灰色のガラス釉を施す。細かい気泡を含みやや白濁している。二次被熱により表面に気泡ができている。胎土は黒粒と細かい気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。口縁部はSP350（SB27柱穴）から、体部破片はSP359（SB28柱穴）から出土し、接合はしないが、同一個体である。

33は鉄釘であるが、周囲に鉄滓が付着している。鉄釘は、長さ4.9cm、幅0.8cm程である。

SA23出土品（第42図の34）：34は土師器皿である。T-2類に属する。



第41図 南堀出土遺物実測図(2) 箱尺1/3 ただし12・13・20・21は箱尺1/4

SB29出土品（第42図の35）：35は中国陶器の肩巻き茶入れである。口縁端部を欠損している。口縁部内面から体部外面に鉄釉を施すが体部内面、外面底部付近は露胎である。釉は黒色を呈するが、二次被熱を受けて表面に気泡ができ、光沢を失っている。胎土は黒粒を多く含み、密である。よく焼き締まり、磁器質を呈する。色調は灰白色を呈する。14～15世紀のものである。口縁部はSP412（SB29柱穴）から、体部は盛土直上から出土しており、接合しないが同一個体と考えられる。

SI11柱穴出土品（第42図の36・37）：36は土師器皿である。T-6類に属する。胎土は砂粒を含み、密である。

37はカラミである。金属に石英粒が付着している。

SA21出土品（第42図の38）：38は土師器皿である。T-6類かT-7類に属する。胎土は砂粒を含み、密である。

SA24出土品（第42図の39）：39は瀬戸美濃の腰折皿である。内面から外面体部に緑灰色の灰釉を施し、外面の腰折れ部上部には釉溜まりがみられる。口縁部周辺は二次被熱を受けて表面に細かい気泡が多くみられる。外面の腰折れ部より下部は露胎である。胎土は気泡を多く含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後IV期（新）に属し、15世紀後半のものである。

SA26出土品（第42図の40）：40は土師器皿である。T-6類かT-7類に属する。胎土は砂粒を含み、密である。内外面にタールが付着し、灯明皿として使用していたと考えられる。

SP85出土品（第42図の41）：41は土師器皿である。T-2類に属する。胎土は砂粒を含み、密である。

SP134出土品（第42図の42）：42は土師器皿である。T-7類に属する。胎土は細かい気泡を含み、密である。

SP366出土品（第42図の43）：43は瀬戸美濃の縁釉小皿の底部である。底部に回転糸切り痕が残る。底部内面は磨耗している。胎土は砂粒と気泡を含み、やや粗い。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後III～IV期に属し、15世紀中頃～後半のものである。なお、SP366はSB25柱穴である。

SP509出土品（第42図の44）：44は鉄釘である。先端部のみである。

SP541出土品（第42図の45）：45は瀬戸美濃の縁釉皿である。内面口縁部から口縁端部にかけて、オリーブ黄色の灰釉を施す。胎土は細かい気泡を多く含み、やや粗い。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後IV期（古）に属し、15世紀中頃のものである。

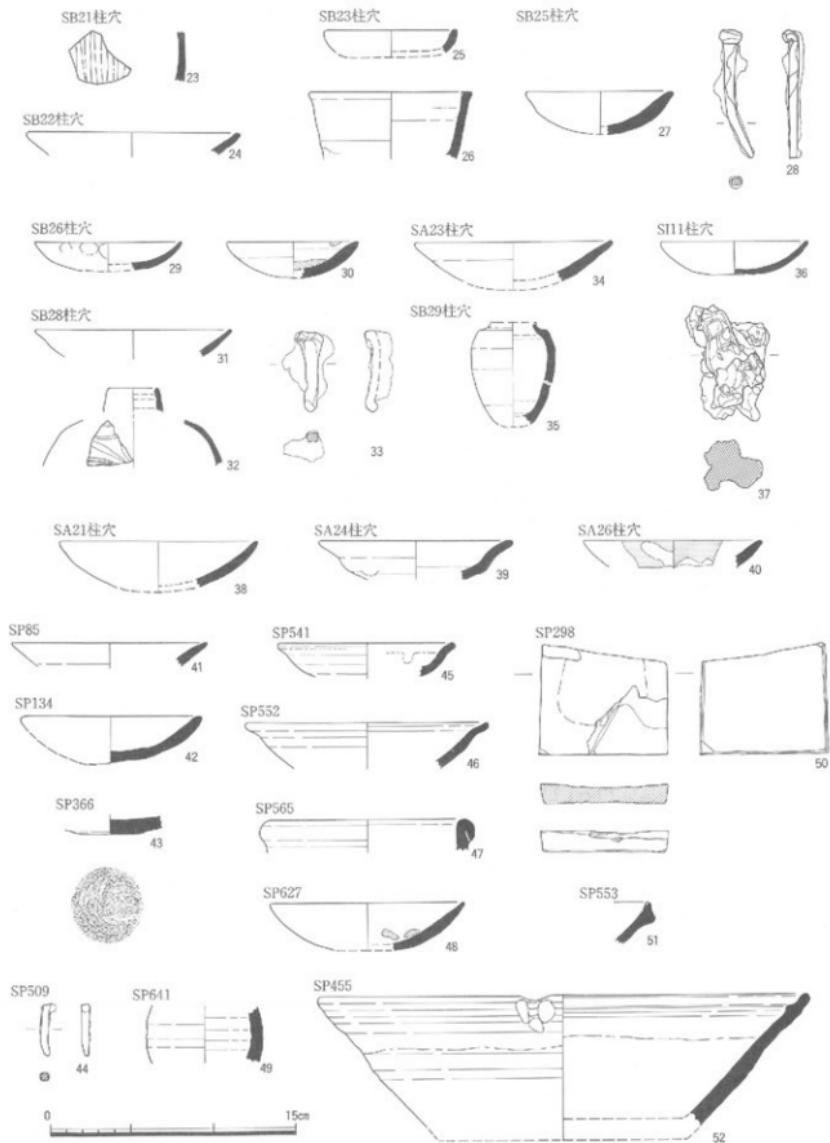
SP552出土品（第42図の46）：46は土師器皿である。R-5類に属する。胎土は細かい気泡と砂粒を含み、密である。焼成は不良である。

SP565出土品（第42図の47）：47は瀬戸美濃の四片窓の口縁部である。口縁部を外側に折り返し、玉縁状に丸く仕上げている。緑灰色の灰釉を内外面に施しているが、口縁端部上面の釉を搔き取っている。口縁肥厚部下部には釉が溜まっている。胎土は細かい気泡を含み、密である。色調は乳白色を呈する。古瀬戸中期に属し、14世紀前半のものである。

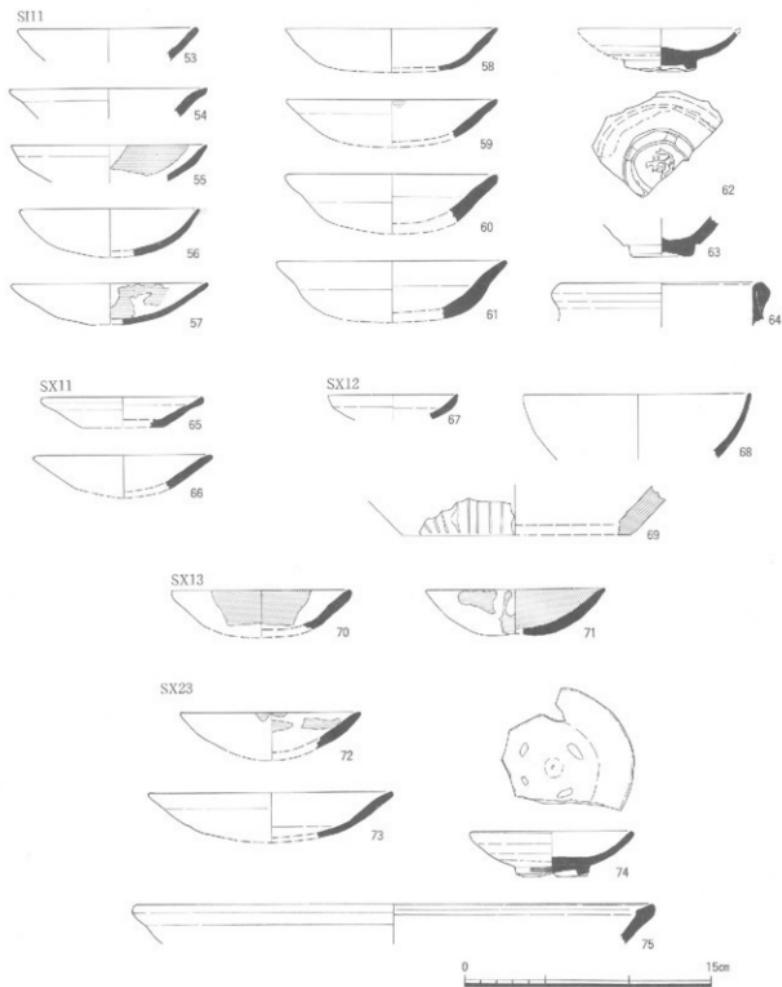
SP627出土品（第42図の48）：48は土師器皿である。T-6類に属する。焼成は不良である。内面に所々煤が付着し、二次被熱を受けている。

SP641出土品（第42図の49）：49は瀬戸美濃の花瓶の体部破片である。外面に灰釉を施すが、二次被熱により表面に細かい気泡がみられ、黄色を呈する。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後I～II期に属し、14世紀後半から15世紀初頭のものである。

SP298出土品（第42図の50）：50は覗である。底面・側面を磨いて平滑にしており、底面の残存部三辺の角部には面取りを施している。上面の陸部分中央部は使用による磨耗によって窪んでいる。2



第42図 建物・壇列柱穴出土遺物実測図 縮尺 1 / 3



第43図 遺構内出土遺物実測図1(SI11・SX11・SX12・SX13・SX23) 縦尺1/3

つに割れた後、再利用するため、表面の側縁を削り取っている。

SP553出土品（第42図の51）：51は瀬戸美濃のすり鉢の口縁部である。口縁端部は断面三角形を呈し、端部外面は浅く窪む。暗青灰色の鉄釉を施す。胎土は細かい気泡を多く含み、やや粗い。色調は灰白色を呈する。大窯第1段階に属し、16世紀初頭のものである。

SP455出土品（第42図の52）：52は瀬戸美濃の鉢目付大皿である。口縁部内面に小突起を持つ。口縁部から体部上半内外面に灰釉を施すが、二次被熱により黄白色～暗緑色を呈する。胎土は石英粒、砂粒を含み、やや粗い。色調は乳白色を呈する。断面に漆絆ぎによる補修痕が残る。内外面、補修痕が残る断面に二次被熱の際の煤が付着する。古瀬戸後IV期（新）に属し、15世紀後半のものである。

（d）遺構内出土遺物（第43図の53～75、第44図の76～101）

SX11出土品（第43図の53～64）：53～61は土師器皿である。53・56～58はT-6類かT-7類に、55・59はT-2類に、60・61はT-8類に属する。56・57は胎土に砂粒を含む。55・57は内面に煤が付着し、灯明皿として使用したと考えられる。

62は白磁皿である。高台に4カ所の抉りが入るものである。高台周辺をのぞいて、乳白色の釉を施している。釉は白濁し、細かい貫入が入る。内面見込みには高台の目跡が2カ所残る。体部外面には回転範割り調整を施している。胎土は黒粒と気泡を含み、密である。高台内に墨書きを確認できる。花押と考えられるが、その書形は不明瞭である。白磁17類に属し、15世紀代のものである。

63・64は瀬戸美濃である。63は天目茶碗の底部破片である。高台は内反り高台である。高台周辺は露体であり、内面には暗褐色の鉄釉を施す。高台周辺部に回転範割り調整痕が残る。胎土は気泡が多く、やや粗い。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期に属し、15世紀前半のものである。64は四耳壺の口縁部破片である。口縁部は外側に折り返し、断面三角形の玉縁状に仕上げている。外面にオリーブ灰色の灰釉を施すが、口縁端部内面の釉は搔き取っている。釉の表面に二次被熱による細かい気泡がみられる。胎土は密である。古瀬戸中期に属し14世紀前半のものである。

SX11出土品（第43図の65・66）：65・66は土師器皿である。65はR-1類に、66はT-6類かT-7類に属する。ともに胎土は砂粒を含み、密である。

SX12出土品（第43図の67～69）：67は土師器皿である。胎土は気泡を含み、やや粗い。

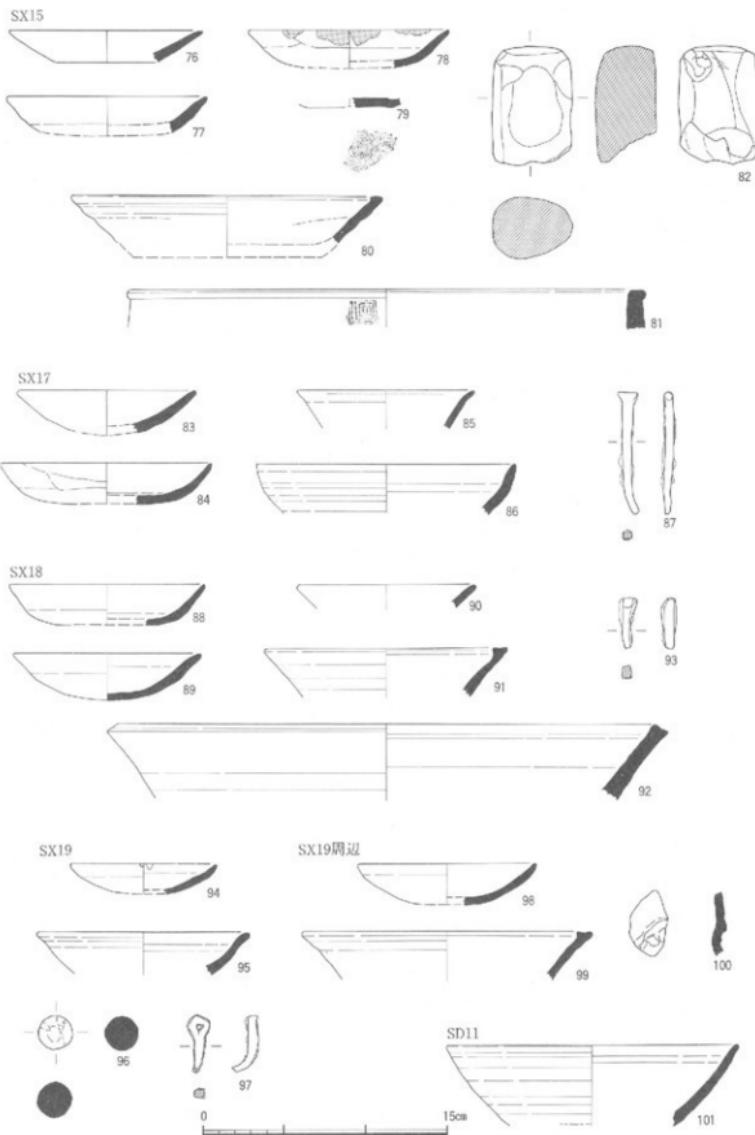
68は白磁皿である。半透明の白色釉を施す。内面に型押しの文様があるが、不明瞭であり、文様の意匠は不明である。胎土は黒粒と気泡を含み、密である。色調は白色を呈する。白磁7類に属し、14世紀代のものである。

69は滑石製の石鍋である。体部外面には繩状工具による縱方向の溝状の成形痕が残る。内面は平滑である。外面全面に煤が付着する。

SX13出土品（第43図の70・71）：70・71は土師器皿である。ともにT-6類かT-7類に属する。71は胎土に砂粒を含む。ともに内外面に煤・タールが付着し、灯明皿として使用していたと考えられる。

SX23出土品（第43図の72～75）：72・73は土師器皿である。72はT-6類かT-7類に、73はT-8類に属する。73は胎土に砂粒を含む。72は内外面にタールが付着し、灯明皿として使用したと考えられる。

74は白磁皿であり、高台に4カ所の抉りが入るものである。高台周辺をのぞいて、白濁した乳白色の釉を施す。表面には二次被熱による細かい気泡がみられる。内面見込みには高台の目跡が4カ所残る。体部外面には回転範割り調整を施している。胎土は黒粒と気泡を含み、密である。白磁17類に属する。



第44図 造構内出土遺物実測図(2)(SX17・SX18・SX19・SX19周辺・SD11) 比尺 1/3

し、15世紀代のものである。

75は瀬戸美濃の鉢目付大皿である。口縁端部を折り返し、内面にわずかに張り出す。灰釉を施しているが、強い二次被熱をうけて表面には気泡が多く、所々剥落し、オリーブ色を呈する。胎土は密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期(古)に属し、15世紀中頃のものである。

SX15出土品 (第44図の76~82) : 76~79は土師器皿である。76はT-6類かT-7類、77・78はT-2類、79はR-1類に属する。76・77・79は胎土に砂粒を含む。78は口縁部に煤・タールが付着し、灯明皿として使用したと考えられる。

80は瀬戸美濃の鉢皿である。口縁端部を折り返して内側に小突起を形成し、口縁上面はわずかに窪む。口縁部から体部上半にオリーブ黄色の灰釉を施す。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅱ期に属し、15世紀初頭のものである。

81は瓦器の風炉である。表面の炭素は失われている。ほぼ垂直に立ち上がる口縁部外面にスタンプ文の雷文を施す。胎土は砂粒と気泡を含み、やや粗い。色調は断面、表面とも浅黄褐色を呈する。1995年度調査報告分類の第IV類に属する。

82は槌である。第40図の3のはたき石の上においていた鉛石を打ち碎くために使う。全体を磨いて断面が卵形の棒状に仕上げており、先端はわずかに丸みを持つ。石材は石英が固まったものである。

SX17出土品 (第44図の83~87) : 83・84は土師器皿である。83はT-6類かT-7類、84はT-2類に属する。84は底部外面に煤が付着する。

85は白磁の口禿げ皿である。明緑灰色の半透明釉を施すが、口縁端部内面の釉は搔き取っている。胎土は細かい気泡を多く含み、密である。色調は灰白色を呈する。白磁1類に属し、13~14世紀のものである。

86は肥前系陶器の椀である。内外面にオリーブ黄色の灰釉を施す。胎土は気泡を含み、やや粗い。色調は灰黄色を呈する。肥前陶器Ⅰ期に属し、16世紀後葉のものである。

87は鉄釘である。

SX18出土品 (第44図の88~92) : 88~90は土師器皿である。88はR-4類、89はT-2類、90はT-6類かT-7類に属する。87・88は胎土に気泡を含み、密である。

91は瀬戸美濃の鉢皿である。口縁端部を折り返して内側に突起を形成し、口縁上面が僅かに窪む。口縁部から体部上半にかけて黄緑色の灰釉を施す、内面にも刷毛塗りしている。胎土は気泡を含み、密である。古瀬戸後Ⅰ~Ⅱ期に属し、14世紀後半~15世紀初頭のものである。なお、SX18とSX19から出土した各1点ずつが接合し、1トレンチ出土の1点も接合しないものの同一個体と考えられる。

92は珠洲のすり鉢である。口縁端部は外傾し、断面は四角形を呈する。胎土は砂粒と気泡を含み、やや粗い。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。珠洲Ⅱ期に属し13世紀前半のものである。

93は鉄釘である。

SX19周辺出土品 (第44図の94~97) : 94・95は土師器皿である。94はT-5類に、95はR-5類に属する。94は胎土に細かい気泡を、95は砂粒と細かい気泡を多く含み、密である。94はタールが付着しており、灯明皿として使用したものと考えられる。

96は陶玉である。

97は鏡等の止め金具である。一方の端に穴が空いており、他方は尖っている。

SX19周辺出土品 (第44図の78~100) : 98は土師器皿である。T-5類に属する。胎土は細かい気泡を含み、密である。二次被熱を受けている。

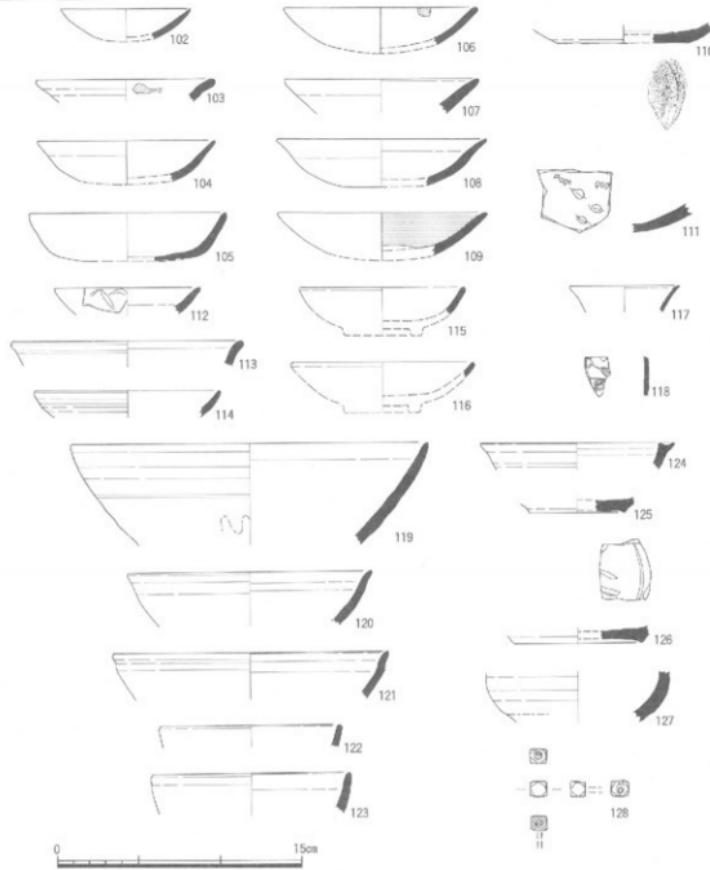
99は瀬戸美濃の鉢皿である。口縁端部を折り返して内側に小突起を形成し、口縁上面が僅かに窪む。

オリーブ黄色の灰釉を施す。胎土は細かい気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅲ期に属し、15世紀前半のものである。SX19周辺から出土したものと、盛上直上から出土したもののが接合した。

100は不明破片であるが、縁青が付着している。

SD11出土品（第44図の101）：101は瀬戸美濃の平碗である。浅黄色の灰釉を施すが、二次被熱を受けたため、口縁端部の釉は剥落している。胎土は気泡を含み、やや粗い。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅰ期に属し、14世紀後半のものである。

盛土1・盛土2



第45図 盛土1・盛土2出土遺物実測図 縦尺1/3

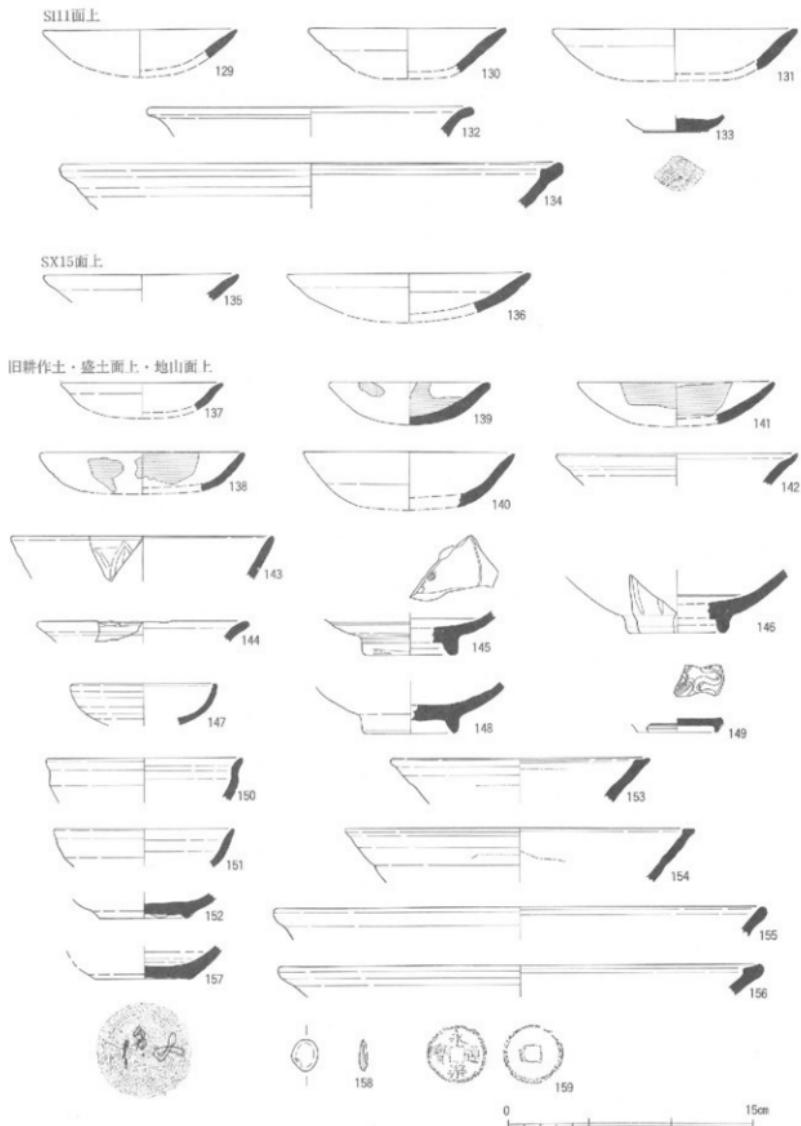
盛土1・盛土2出土品(第45図の102~128) : 102~111は土師器皿である。102・105はT-6類、103・108はT-8類、104・107はT-2類、106・109・111はT-6類かT-7類、110はR-5類に属する。102・105・106・110は胎土に砂粒を含み、密である。103・107は胎土に砂粒と気泡を含み、密である。103・109は内面に焼が付着し、灯明皿として使用したと考えられる。111は体部破片であるが内面に墨書きが残る。木の葉が3枚描かれているようであるが、全体の意匠は不明である。

112・113は青磁である。112は皿である。体部外面に片切りの蓮弁文を描いている。二次被熱を受けて、釉の表面は気泡が多く光沢も失われ、明緑灰色を呈する。口縁端部内側のみ、約0.2cm幅で釉を搔き取っている。胎土は気泡をわずかに含み、密である。色調は灰白色を呈する。113は碗である。口縁部が外反し、内外面無文である。細かい気泡を含むガラス質緑灰色の釉を施す。胎土は白色砂粒と気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。龍泉窯系碗D類に属し、14世紀後半から15世紀前半のものである。

114~118は白磁である。114~116は皿である。114は気泡を含む青みがかった透明釉を施し、貫入が入る。胎土は密であり、色調は青白色を呈する。白磁17類に属し、15世紀代のものである。115は気泡を含んだ透明釉を施す。釉には細かい貫入が入る。胎土は気泡と少量の黒粒を含み、色調は灰白色を呈する。116は気泡を含むガラス質透明釉を施す。釉には細かい貫入が入る。115・116は白磁16類に属し、15世紀前半のものである。117は杯であり、口縁部は外反する。やや白濁した灰白色釉を施す。胎土は黒粒を少量含み、色調は白色を呈する。白磁23類に属し、16世紀代のものである。118は碗の体部破片である。器壁は薄い。内面に型押しにより草花文を施す。ガラス質の透明釉を施す。胎土は密であり、色調は白色を呈する。白磁9類に属し、14世紀前半のものである。

119~126は瀬戸美濃である。119~121は平碗である。いずれも灰釉を施し、119は浅黄色、120はオリーブ黄色を呈する。121は窯焼けのため、釉が流れた部分が白色を呈し、残った灰釉はオリーブ黄色を呈する。119は口唇部が内湾しながら直線的に伸び、外面体部の中程に一条の沈線がめぐる。古瀬戸中Ⅳ期に属し、14世紀中頃のものである。盛土1と盛土2から出土した1点づつが、接合しないものの、同一個体と考えられる。120は口唇部が僅かにくびれて外反する。胎土は気泡を含み、やや粗い。古瀬戸後Ⅱ期に属し15世紀初頭のものである。121の口唇部は強く屈曲してくびれ、立ち上がり気味である。胎土は気泡を多く含み、やや粗い。古瀬戸後Ⅳ期(占)に属し、15世紀中頃のものである。盛土1内の別地点で出土した2点が接合した。122・123は丸碗である。ともに浅黄色の灰釉を施す。胎土は気泡を多く含み、やや粗い。大窯第1段階に属し、16世紀初頭のものである。124は鉢皿である。口縁内面に小突起が形成される。オリーブ黄色の灰釉を施す。古瀬戸後Ⅳ期(新)に属し、15世紀後半のものである。125は丸皿の底部破片である。内外面に灰釉を施す。内面の釉は二次被熱により表面に細かい気泡ができ淡黄色を呈し、外面は光沢が失われ灰白色を呈する。胎土は気泡を多く含み、やや粗い。大窯第2段階に属し、16世紀前半のものである。126は鉄絵皿である。高台型付き付近まで灰白色的長石釉を施す。内面底部に鉄絵を描き、長石釉を施す。胎土は細かい気泡を多く含み、密である。登窯第2小期に属し、17世紀前半のものである。127は肥前系陶器の体部破片である。内面と外面下部までオリーブ灰色の灰釉を施す。胎土は白色粒を多く含み、やや粗い。色調は灰色を呈する。肥前陶器I期に属し、16世紀後葉のものである。

128は銅製の建築金具である。約1.0cm四方の直方体であり、角部は面取りしている。中央に直径0.4cmほどの穴が貫通している。この穴に直交するように、金具を固定するための太さ0.2cmほどの軸棒が穴の中ほどまで伸びている。軸棒の外側に伸びる部分は失っている。



第46図 造拂外出土遺物実測図1(SI11面上・SX15面上・旧耕作土・盛土面上・地山面上) 縦尺1/3 ただし銭貨のみ縮尺1/2

(e) 遺構外出土遺物 (第46図の129~159, 第47図の160~162)

ここでは遺構にともなわなかつた遺物を扱う。これらの遺物の多くは、旧耕作土の最下層に堆積する鉄分堆積層の直下から、遺構の検出作業中に出土したものである。その出土状況は、区画4の盛土、堅穴住居、土間状土坑など、遺物の出土が多かつた遺構の上面にまとまる状況がみられた。

S11面上出土品 (第46図の129~134) : 129~131は土師器皿である。129はT-6類かT-7類、130・131はT-2類に属する。130の胎土はやや粗い。131は内面に煤が付着しており、灯明皿として使用したものと考えられる。

132は青磁盤である。口縁部が大きく外反する。ガラス質の緑灰色釉を厚く施す。釉は細かい気泡を含み、細かい貫入がわずかに入る。胎土は黒粒を多く含み、色調は乳白色を呈する。

133・134は瀬戸美濃である。133は折線小皿の底部破片であり、底部外面に回転糸切り痕が残る。内面底部には自然釉がかかる。色調は灰白色を呈する。古瀬戸中III~IV期に属し、14世紀中頃のものである。134は鈎目付大皿である。口縁端部を折り返し、口縁内面に小突起を形成し、上面がわずかに窪む。灰釉を施すが、二次被熱によって光沢が失われ、灰オリーブ色を呈する。胎土は気泡を含み、やや粗い。古瀬戸後IV期(古)に属し、15世紀中頃のものである。

SX15面上出土品 (第46図の135・136) : 135・136は土師器皿であり、ともにT-2類に属する。

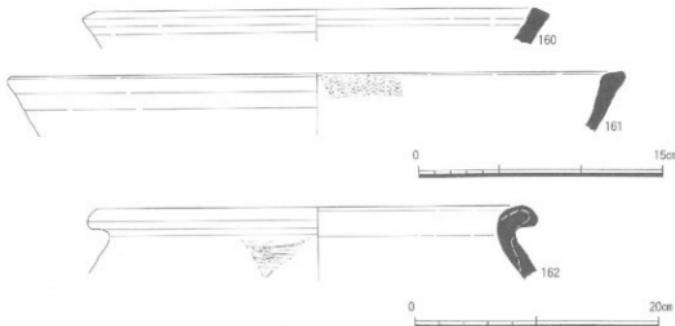
旧耕作土・盛土直上・地山面上出土品 (第46図の137~159, 第47図の160~162) : 137~142は土師器皿である。137はT-5類、138・139・141はT-6類かT-7類、140はT-2類、142はR-5類に属する。139~142の胎土は砂粒や気泡を含み、やや粗い。138・139・141は内外面に煤・タールが付着し、灯明皿として使用したものと考えられる。

143~146は青磁である。143は碗であり、体部外面に鎌連弁文を施す。灰緑色の釉を施す。釉は細かい気泡を多く含み、やや白濁する。大きな貫入が入る。胎土は気泡を多く含み、色調は灰白色を呈する。龍泉窯系碗B2類に属し、13世紀代のものである。144は青磁の棱花皿である。ガラス質のオリーブ灰色釉を施す。釉は細かい気泡を含み、大きな貫入が入る。胎土は気泡を多く含み、やや粗い。色調は灰白色を呈する。145は碗の底部破片である。内面底部にスタンプ文を施し、内面底部と体部の焼付近には一條の沈線がめぐる。高台内側をのぞいて、ガラス質の緑灰色釉を施す。釉は細かい気泡を含む。胎土は気泡を少量含み、密である。色調は灰白色を呈する。龍泉窯系碗D類に属し、14世紀後半~15世紀前半のものである。146は碗の底部破片である。体部外面に片切りの蓮弁文を施す。濃緑灰色の釉を施すが、二次被熱によって表面に細かい気泡が多くでき、白濁している。胎土は黒粒と気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。龍泉窯系碗B4類に属し、15世紀後半から16世紀初頭のものである。

147・148は白磁である。147は皿であり、やや白濁した乳白色の釉を施す。釉は細かい気泡を含み、細かい貫入があり、二次被熱によって表面に細かい気泡ができる。胎土は黒粒を含み、密であり、色調は灰白色を呈する。白磁17類に属し、15世紀代のものである。148は碗であり、ガラス質の灰白色の釉を施す。釉には貫入が入る。胎土は黒粒を少量含み、色調は白色を呈する。白磁29類に属し16世紀代のものである。

149は青花皿である。気泡を含みやや白濁した透明釉を施す。胎土は黒粒と気泡を含み、色調は青白色を呈する。皿B群皿VII類に属し、16世紀代のものである。

150~156は瀬戸美濃である。150は天目茶碗である。口唇部がくびれ、端部は外反して細く伸びる。鉄釉を施し、外面口唇部から内面は茶褐色、外面体部は黒色を呈する。色調は灰褐色を呈する。古瀬戸後IV期(新)に属し、15世紀中頃~後半のものである。151は丸皿である。浅黄色の灰釉を施す。二



第47図 遺構外出土遺物実測図(2) 比尺1/3 ただし162は比尺1/4

次被熱により表面に細かい気泡ができる。胎土は気泡を含んでやや粗く、色調は乳白色を呈する。大窯第2段階に属し、16世紀前半のものである。152は丸皿か端反皿の底部破片である。高台内に輪トチン痕が残る。淡緑色の灰釉を施すが、高台内部は搔き取っている。胎土は気泡が多く、やや粗い。色調は灰白色を呈する。大窯第1～2段階に属し、16世紀初頭～16世紀前半のものである。153はすり鉢型小鉢である。口縁部から体部上半に鉄釉を施すが、二次被熱を受け、表面に細かい気泡ができる光沢を失い、黒紫色を呈する。胎土は細かい気泡を含んで、密であり、色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期(古)に属し、15世紀中頃のものである。154は鉢皿である。口縁端部を折り返し、内側に小突起を形成している。オリーブ黄色の灰釉を体部上半に施し、内面体部下半にも刷毛塗りしている。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅲ期に属し、15世紀前半のものである。156は鉢皿である。口縁端部を折り返し、内側に小突起を形成する。灰釉を施すが、二次被熱により淡黄色を呈する。胎土は細かい気泡を含み、密である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸後Ⅳ期(古)に属し、15世紀中頃のものである。

157は近世陶器の皿である。産地は不明である。底部外面に墨書きがある。

158は碁石の黒石である。一部が欠けている。

159は永楽通宝である。初年は1408年である。

160～162は珠洲である。160はすり鉢である。口縁端面は外傾し、断面形は四角形を呈する。胎土は砂粒と海綿骨針を含み、密である。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。珠洲Ⅳ期に属し、14世紀代のものである。161はすり鉢である。幅の広い口縁端面は内傾し、4状の波状文を施す。胎土は細かい気泡、砂粒、小礫、海綿骨針を含み、密である。焼成は還元硬質であり、色調は灰色である。珠洲Ⅴ期に属し、14世紀後半～15世紀前半のものである。162は甕である。口縁部はやや長めに屈曲し、断面形は丸みをもつ。胎土は細かい気泡、砂粒、海綿骨針を含み、密である。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。珠洲Ⅳ期に属し、14世紀代のものである。

第5章 小 結

今年度は、館外部の南堀延長部周辺の調査を行った。その結果、南堀の南側の区画4においては堅穴住居や卯跡を検出し、カラミの出土があったことから、南側に接する南辺地区同様、職人等の作業場の空間であると考えることができた。一方、門前地区につづく南堀北側の区画5では、柵列を設ける時期もあるものの基本的には空地であり、門前地区的主門正面以外は広場として使っていたことが明らかになった。また区画4では南辺地区同様、掘立柱建物がほぼ同じ位置で重複しており、建物の配置は継承しつつ、その建て替えを行っている。区画4の建物と七間状土坑の対応・前後関係を整理すると第11表のようになる。その変遷を江馬氏下館全体の変遷と併せて整理したところ、館外部地区における区画の設定とその使い分けの様子がよりはっきりしたものになった。江馬氏下館の変遷と意義については、すでにこれまでの報告書においてまとめている（神岡町教育委員会・富山大学考古学研究室1995・1996）。ここでは1995年度調査の門前地区・1996年度調査の南辺地区の成果も含めて今年度の遺構配置の変遷を整理し、新たな知見を記してまとめたい。

第11表 1997年度調査区画4の遺構変遷表

時 期	区 画 4				縦 棚	横 棚	時 期	不 定
	南東部	北東部	西側					
I 期	SB21						SX12	SX25?
江 馬	II A期	SB22 SX11 SA21 ↓ SA24	SB26	?			SX15 - SX24	
氏 下	II B期	SB23 ↓ SB24 SX23	SB27 SA22 ↓ SB28	SB29 SA23 SI11			?	
館	III 期			SX17 SB30 - SX22			SX25?	

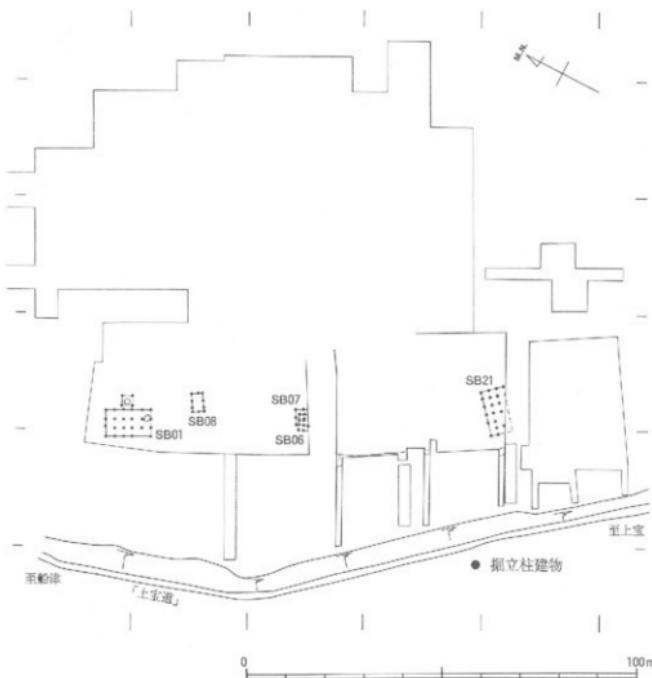
江馬氏下館I期（13世紀後半～14世紀中頃、第48図）

殿役丘上に縦柱式掘立柱建物が点在していた段階である。

区画4のSB21が相当する。この建物の主軸方位はこれまでの調査でI期に相当するとした建物ではないものである。館を整備する以前の遺構は、館外部地区においては、これまで門前地区でしか確認できなかったが、今回、南外部地区においても下館I期の建物を確認したことで、その活動の範囲がさらに広範囲におよぶことがわかった。この時期の建物には主軸方位の一致が見られず、館整備時のような規制ではなく、比較的自由に建物を造っていたものと考える。

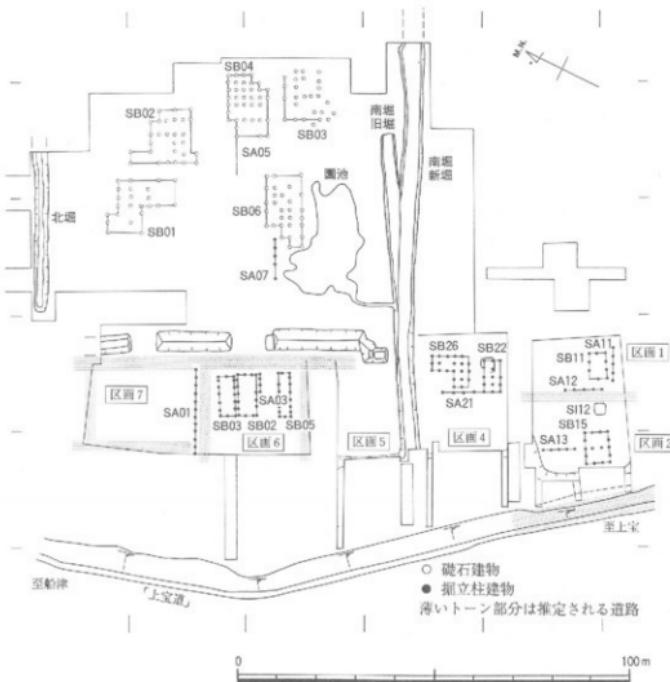
江馬氏下館II期（14世紀末～16世紀初め）

方約一町の館を整備した時期である。居館の中では整地地業を行い、館の三方を囲む南・北・西堀、園池、礎石建物等を緻密な計画のもとに整備している。館周辺でも、堀に平行・直交する道路や柵列によって区画を設け、様々な施設を配置する。武家館を中心に、その周辺に馬場などの儀礼施設や、堅穴住居などの手工業生産施設を計画的に配置している。神社・寺院といった宗教施設も周辺に配するものであったと推察する。さらに2段階に細分できる。



第48図 江馬氏下館I期の遺構配置図（13世紀後半～14世紀中頃） 緯尺1/1,250

江馬氏下館II期（14世紀末～15世紀前半、第49図）：館を造成した後の下館の最盛期の時期である。区画4では、その南東部分に掘立柱建物SB22、北東部にSB26を配置する。その主軸方位はほぼ座標に一致する。区画4中央部Y座標-18.0ライン付近には、SB22西側から北側に向かってY座標にその主軸方向をそろえるSA21が伸びており、ほぼ同じ位置でSA24に建て替えている。このラインは南辺地区の区画1と区画2の境をなすSA12とほぼ一直線上に位置しており、このラインが区画の基準の一つになっていたと考えられる。区画4ではこのラインを境にしてその西側には建物が復元できず広場になっていたようである。南辺地区区画1・区画2では南側に建物、北側は広場という配置で1つの区画が成立しており、区画4では東側に建物、西側に広場を配して、1つの区画として機能していたと考えたい。煩雑になるため図には示さなかったが、区画4西側には南北・東西それぞれの方向の縦長2間の柵列が幾つか復元できる。これらの柵列を風避け塀とする露天の作業を行っていた空間を想定したい。また区画4 SB22・SB26はその東辺をY座標-11.0ラインにそろえており、その東側では建物等を復元できない。南辺地区区画1の東側も同様の空間地になっている。遺構が復元できない空間地が南北方向の直線上につづいており、道路の可能性がある。しかし、調査区内ではその



第49図 江馬氏下館 II A期の遺構配図（14世紀後半～15世紀前半） 錄尺1/1,250

東辺は確認しておらず、また電気探査でも高比抵抗の反応が得られず、広場状の空間が広がる可能性もあるため断定は避け、今後の調査を期したい。

館正面の門前地区では、西堀にそって南北方向の道路を設け、区画6にはその東辺を道路にそろえた画一的な側柱式建物が整然と並んでいる。区画6の北側は、主門と脇門の中間地点に東西方向の柵列SA01とその主門側に道路を設けて区画7との境としている。区画6の南側は1995年度調査地区的南辺にそって東西方向の道路を想定しており、この道路が区画6と区画5の境であったと考えられる。館の造成にあたって、館の正面である西堀の前においては、主門の前にその北側・南側を道路と柵列で境を設け、建物を整然と並べた空間（区画6）があり、その両側にはほぼ同じ広さの広場（区画5・区画7）を配置していた様子が復元できよう。このような館外部地区的様子からは、II A期の館の造成に際しての計画性の高さと、その規制力の強さがうかがえよう。

江馬氏下館 II B期（15世紀後半～16世紀初め、第50図）：館内と門前地区では軸方向の異なる建物に建て替える時期である。南外部地区的区画4ではII A期の建物とはほぼ同じ場所で2回の建て替えを行っている。区画4南東部ではSB22の後にSB23→SB24、北東部ではSB26の後にSB27→SB28の順で建



第50図 江馬氏下館II B期の遺構配置図（15世紀後半～16世紀初め）

て替えを行う。区画4のSB23・SB27・SB28は、II A期には建物と広場の区画の境であったY座標-18.0ラインよりも西に張り出し、前時期の区画4中央部の区画割の意識はみられなくなる。南辺地区でもII A期とほぼ同じ場所で2回の建て替えを行っているが、これらの建物の軸線はほぼ一致することから、II B期における南外部地区の建て替えにあたっては、館内の建物主軸方位の規制は受けないものの、その地区内では一定の規制が働いていたものと考えられる。また、南外部地区における建物配置の継承は、作業場として機能を果たすためにはその配置が最良であり、あえて配置をかえる必要がなかったものと考えたい。さらに、前段階には広場であった区画4西側部分にも堅穴住居や長屋状の建物など多くの建物と炉跡が出現する。このことは作業場としての機能の拡大と考えられよう。また作業の内容が火の使用を伴うものに変化した様子もうかがえよう。

門前地区区画6ではSA01を馬屋SB04に建て替え、主門の前も広場になる。区画5では遺構に伴う遺物の出土がなく断定は出来ないが、SA32の主軸方位がほぼII B期の方位に一致し、この時期のものである可能性が高い。またこの軸線上には柱間の揃わない柱穴が多くあり、何回かの建て替えを行っていると考えられる。しかしこれらの柱穴は浅く、その形状も不明瞭であり、恒常的な棚列の柱穴と

は考えにくい。館門前の空間は、犬追物などを行なう儀礼空間としての馬場である可能性が小島道裕氏によって指摘されているが（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1995）、想像を逞しくするならば、門前地区の南端近くに位置するSA32とそのライン上の柱穴は、そのような儀礼行事に際して臨時に設置した施設の跡と考えることもできるのではないだろうか。

このように、ⅡB期になると南外部地区では前段階よりも建物の密度が高くなるが、その一方で門前地区はほぼ全面が広場になるなど、館外部地区的景観は前段階とは大きく変化している。またⅡB期の館様式の変化は、館正面の門前地区など館近辺のみに限られており、その外側地区ではⅡA期にみられた館内の規制力は相対的に弱くなったといえよう。南外部地区では、区画4の西側にも堅穴住居ができ、作業場としての区画の機能がより優先されるようになったと考えられよう。作業場としての機能の拡大と館内の規制力の弱まりは、館当主と南外部地区的職人集団の関係を考える上で重要な知見であり、今後事例の増加をまって再検討すべき課題であろう。下館ではⅡB期以降の年代を示す遺物の出土量が前時期に比べて急激に減少しており、ⅡB期末に江馬氏の本拠としての館の機能を他所に移したと考えられよう。

江馬氏下館Ⅲ期（16世紀以降）：館の本拠が他所に移動した後の時期である。南外部地区区画4の土間状土坑SX17から16世紀～17世紀初めの年代を持つ肥前I期の椀が出土し、また石組み炉SX22も近世初めの耕地化の際に行ったと考えられる盛土によって埋まっており、Ⅲ期末の遺構と考えられる。また南辺地区のSX01と盛上出土の遺物が接合しており、SX01の廃棄は盛土とほぼ同時期と考えられることから、南辺地区的区画1のSB13とSX01はⅢ期の遺構になろう。下館の本拠が他所に移動した後も、南外部地区は作業場として利用していたものと考えられる。南堀新堀はその掘削以降、自然堆積によって埋まりつつあり、この時期もそのまま放置され、館寄り部分ではほとんど埋まりきっていたと考えられる。南堀延長部、北堀は埋まりつつあるものの、まだ漸の形を残していたものと思われるが、館の区画施設としての意味合いは失っていたものと考えたい。

なお、土壘を崩して短期間に行われる西堀の埋め立ての時期は、館の機能を他所へ移すⅡB期末と、近世初頭の耕地化の際のどちらの可能性も考えられるが、未調査の部分も残ることから、今後の調査をまって再検討したい。また、区画1・2・4ではそれぞれ3棟の建物が重複しており、区画1のSB13・SX01以外にもこの時期に相当する建物となる可能性があり、その遺構配置・景観の復元についてはさらに検討を要する。今回はその時間的余裕がないため今後を期したい。

そして17世紀前半以降の耕地化に際して、下館一帯の土地の高低差、凹凸をなくすため、館中心部の土砂を運び出し、その土砂で埋まりきっていなかった南堀延長部や北堀を埋め立て、南外部地区的段丘壠部に盛土地稟を行ったものと考えられる。このように、近世初頭の耕地化によって、下館一体は以前とは全く異なる景観に変化し、下館の名残はわずかに残った土星の高まりや、耕地の中に残った圓池の景石等に見られるだけになったのであろう。

以上が、今年度調査のまとめである。調査担当者の力不足により、今年度成果を十分検討し整理しきることが出来ず、また検討不十分にもかかわらず、断定的な表現をしそぎている箇所も多々あると思う。特にⅢ期に属する遺構が明らかになれば、ⅡB期の遺構配置にも若干の変更が必用となるが、今回は船掘時期を再検討できなかった遺構については、これまでの知見をそのまま継承したことを付け加えておきたい。各位の率直なご意見・ご批判・ご指導をいただき、今後さらに検討していきたいと思う。

第6章 文献資料による考察（補足）

国立歴史民俗博物館 歴史研究部 小島道裕

前回は『江馬氏城館跡Ⅱ』において、山科家関係の史料によって、14～15世紀の江馬氏について検討し、室町幕府と直接の関係を持つ地方有力国人としての性格を明らかにした。この論旨については特に修正の必要はないと思われるが、前回触れなかった関連史料について補足として検討してみたい。この史料は、延徳3年(1491)5月6日に発給された室町幕府奉行人連署奉書で、「北野社家日記」の同年7月5日条の引用によってその内容が知られるものである。「史料叢集」の『北野社家日記 第三』で翻刻され、今谷 明・高 康夫編『室町幕府文書集成奉行人奉書篇』も上巻に1702号として収録、「江馬氏城館跡発掘調査概報」(神岡町教育委員会、1979年)でも紹介されているが、全文を読下せば以下のようなである。

北野宮寺領飛騨国荒木郷の事。近年守護押領の間、嚴重の神事退転に及ぶの条、神慮測り難きか。所詮、不日に社家雜掌に沙汰すべき旨、奉書を成されおわんぬ。宜しく存知すべきの由、仰せ出され候也。仍って執達件の如し。

延徳三

五月六日

(松田) 長秀判

(飯尾) 為規同

江間殿

江間(江馬)氏に対して、守護勢力に侵害されている北野社領飛騨国荒木郷の回復を命じた文書であり、「荒木郷」(吉城郷)は神岡町に隣接する現国府町内とされている。この「江間殿」が神岡町に本拠を持つ江馬氏であることは間違いないであろう。あるいは、長享3(延徳元、1489)年5月に、当地を訪れた押幡万里集九をもてなした江馬氏(『梅花無尽藏』)と同一人物かと思われる。

『北野社家日記』には、同じ荒木郷の所領について同日付けで飛騨国守護京極政経に出された文書も書き留められている。

北野宮寺領飛騨国荒木郷上分の事。近年押領の間、神事退転、はなはだ然るべからず。所詮不日に社家雜掌に沙汰し付くべし。所務を全うせられ、神事を遂げらるべし。更に難渋あるべからずの由、仰せ出され候也。仍って執達件の如し。

延徳三

五月六日

(松田) 長秀判

(飯尾) 為規同

守護

通常であれば、幕府からは守護→守護代のルートを通じて現地への命令が下されるのだが、この場合は守護自身(おそらく実際にはその被官)が押領の当事者であるため、守護自身から命令が下される一方、現地の有力者である江馬氏にも北野社領回復の命令が出されたのである。

第12表 延徳3年(1491)5月6日付けの北野社領関係幕府奉行人連署奉書

宛 所	所 領	北野社家日記 (延徳3年)	備 考
1-1 松梅院	加賀国福田庄	6月17日条	
1-2 敷地彦右衛門尉殿	タ	タ	社家代官
1-3 当所名主沙汰人中	タ	タ	
2 上杉相模入道殿(定房)	越後国大猪郡	7月2日条	堅紙
3 上杉相模入道殿(定房)	越後国上田郡	タ	堅紙
4-1 赤松兵部小輔殿(政則)	美作国吉野保	7月5日条	
4-2 椿橋殿(則高)	タ	ダ	代官、赤松被官人
5 赤松兵部少輔(政則)	播磨国小松原庄	タ	
6 守護代	備後国吉津保上分	タ	
7 守護代(山名政豊)	但馬国氣比氷上庄領家職	タ	
8-1 守護(京極政經)	飛驒国荒木郷上分	タ	
8-2 江間殿	飛驒国荒木郷	タ	
9 今川龍王殿(氏親)	駿河国河原一色	8月10日条	
10-1 赤松兵部少輔殿(政則)	美作国長岡藤原五名	タ	
10-2 当所名主沙汰人中	タ	タ	
11 当所名主沙汰人等中	加賀国小泉保	タ	
12 守護代	能登国芦原庄	タ	
13 山名治部少輔(鼎時)	因幡国岩井庄吉田保内2村	11月18日条	

*奉行人は、13は松田長秀・松田頼亮、他はすべて松田長秀・飯尾為則。

これは、前回検討した、江馬氏の初見史料である応安5年(1372)の山科家文書などと同じ関係であり、応安5年の場合は、幕府からの命令は、江馬氏と広瀬氏(現國府町付近の国人)の両名をセットとして、「両使」という鎌倉時代以来の制度によってなされていたのに対し、延徳3年の場合は、江馬氏単独で出されているが、引続き、守護以外の勢力でありながら、幕府から独自に命令を受ける存在であったことが確認できる。そして、その地域における重みは、いっそう増していたと言えよう。

実は、この延徳3年5月6日には、北野社領の回復を命じる幕府奉行人奉書が、全国の13ヶ所に対して、18通発給されている(第12表。「北野社家日記」による)。北野社の要請によって、応仁文明の亂を経て有名無実化しつつあった所領の回復が試みられたのであろうが、文書の宛先の比較によって江馬氏の地位を考えることができる。文書の宛先を見ると、やはり幕府から守護ないし守護代へのルートで命令の実行が図られていることが分るが、例外は加賀と飛騨で、加賀の場合は、長享元年(1487)からの一向一揆によって守護体制自体が崩壊していたためであろう、代官や「名主百姓中」などに直接宛てられている。飛騨は、先述のように守護が当事者であることと、江馬氏という幕府に直属する

関係を保った存在があったことによると思われる。このことからも、江馬氏が守護系列以外の在地勢力として室町幕府との関係を、少なくとも15世紀末まで持ち続けた存在であることが明らかになる。当初は相当数がいたこのような幕府直属の地域領主としての国人層だが、応仁文明の乱を経た時点では、特に遠隔地では少なくなっていたと思われる。江馬氏の場合は、守護が京極氏であり結局在国化しなかったという飛驒の特殊事情や、江馬氏自身の権力の性格の変化（一種の小戦国大名化）などが関係していると思われるが、それが館や城の変化とどう関連するかが関心の持たれる所である。こうした地方有力国人の館は15世紀前半まで廃絶している場合が多いようだが、「下館」の廃絶と東町城や高原原訪城の建設も当然以上のような問題に関わるはずであり、その意味で、この延徳3年の文書は重要な内容を含んでいると思われる。

なお、この北野社領の一件は、翌延徳4年（1492）にも、『北野社家日記』の記事があるので合わせて紹介しておきたい。

（延徳4年4月18日条）

「始小路より御使いありて、飛州荒木郷事、江馬方へ仰せらるべき由也。」

（同年6月11日条）

「飛驒荒木郷内神用の事、今日も江馬方へ申し遣すところ、南円院へ納め来る由返答これあり。奏者は和尔平太と云う者なり。此方使国分なり。」

北野社はその後、荒木郷の所領經營を江馬氏に委任し、江馬氏を通じて年貢の収納を図っていたようである。6月11日条では、「和尔平太」という者が江馬氏からの返答を行なっており、江馬氏家臣団組織の一端が伺われるのも興味深い。

第7章 岐阜県神岡町江馬氏下館跡における電磁気探査

富山大学理学部 酒井英男, 小島信人

人文学部 前川 要

徳興和 上坂麻子, 佐藤 朗

神岡町教育委員会 大平愛子

1 はじめに

電磁気による地下遺構の探査は種々の手法が試行されている。探査手法を改善し開発するためには、遺構の種類や保存状態と探査の有効性を検討しながら研究を進めることが望まれる、それには発掘結果との比較検討を重視した研究が必要である。本稿では岐阜県吉城郡神岡町江馬氏下館跡において神岡町教育委員会による発掘調査の前に行った電磁気探査の結果を報告する。

中世豪族江馬氏の館跡である江馬氏下館跡は、神岡町の神通川水系高原川の河岸段丘に立地する国指定の史跡である。江馬氏は、中世鎌倉時代末期から戦国時代までの約250年間にわたり、現在の神岡町や上宝村一帯を支配した豪族と伝えられている。1973~1978年に神岡町教育委員会による同遺跡のトレンチ調査が実施され、館内部の庭園跡、館を巡る堀や建物の礎石が確認された(神岡町, 1979)。1994年度からは、江馬氏下館跡を歴史公園として復元整備するための発掘調査が行われてきた。

1994年の探査では地下レーダーと電気探査により館の三方を囲む掘の調査を行い、北堀およびV字型の西堀と南堀を確認した。1995年は、西堀を横切る道と周囲の建物の検討を主な目的として、地下レーダー探査、電気探査および放射温度計探査を実施し、これらの遺構と良く対応する結果を得た。1996年度の探査では、館の中心部からやや離れた区域の道路や住居跡の分布を確認した。以上の様に、電磁気探査は江馬氏下館跡の調査に有用な手法となっている(酒井ほか, 1995b, 1996, 1997)。

本年度は図1に示す地域を対象に、特に掘の正確な位置と深度の推定を主な目的として、電気探査、地下レーダー探査と帶磁率探査を行なった。

2 探査の概要

探査範囲は1996年度の調査地域の北側に位置する、土手を挟んだ南北40m×東西30mの範囲である(第51図)。探査の内容と使用装置は以下のとおりである。

①電気探査

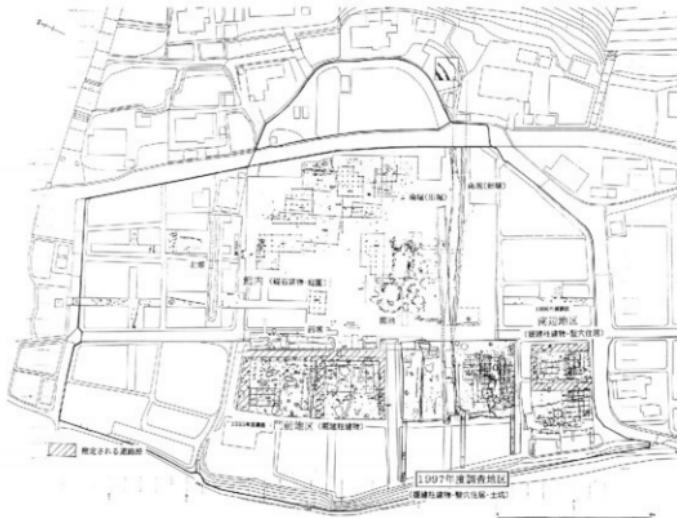
高密度電気探査(興和製・高密度電気探査装置)

二極法探査(RM-15型装置)

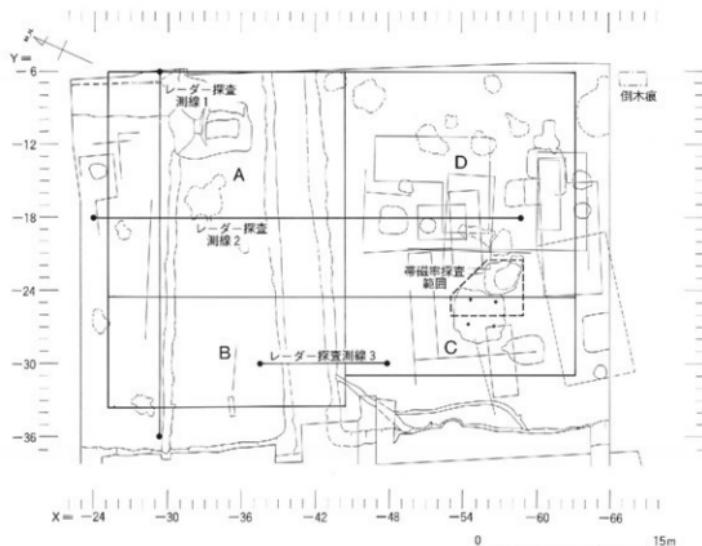
②地下レーダー探査(Pulse EKKO-4型装置による電磁波パルス反射法)

③帶磁率探査(田中地質WSL-A型装置)

探査方法は、Clark(1990)や酒井ほか(1994, 1995a, b, 1996)などで示している。発掘前には高密度電気探査を行い、探査の多くは表土掘削後に実施した。



第51図 江馬氏下館跡の1997年度調査地区 縦尺 1/950

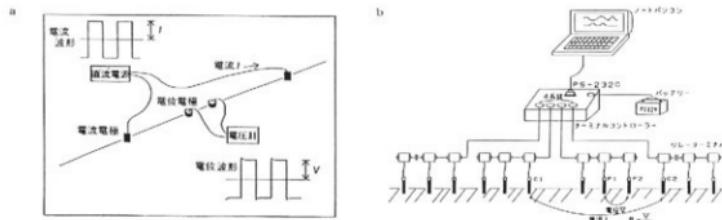


第52図 本研究の探査範囲 地下レーダー探査測線1～3、電気探査のグリッドA～D
発掘調査で認められた掘立柱建物、棚列跡、壁穴住居等の遺構も示す 縦尺 1/400

3 高密度電気探査の結果

高密度電気探査は、江馬氏下館跡では初めて試みた。探査の原理は通常の電気探査と同じだが、計測解析の作業を大幅に自動化しており、同一時間で10倍以上の高密度で電気比抵抗を測定できる。同探査は1990年代に多く利用される様になり、遺跡調査の他、断層や空洞調査の分野で用いられている。

第53図aの通常の電気探査では、4本の電極を地面に設置し、電極間隔を順次変えて探査深度を変化させる。この方法で得られる地下の電気比抵抗は1点の垂直データとなる。これに対して高密度電気探査では、第53図bの様に数十～百本を越える電極をあらかじめ設置する。パソコンとターミナルコントローラにより電流電極と電位電極の切り替えと電極間隔の拡張を自動制御で行い、連続的にデータを収集する。データはすぐに解析されて現地で比抵抗の断面分布を見ることが出来る。鉛直の電極配置により、地盤の3次元構造も推定可能である。



第53図 通常の電気探査(a)と高密度電気探査(b)の電極設置

高密度電気探査は5月20日から7月6日にかけて5日間で、第54図に示す10本の測線を調査した。測線1～8は表土剥取り前(但し、測線4は無い)、測線9～11は剥取り後の探査である。第13表には、各測線の始点座標、電極間隔、電極本数、測線長、探査深度を示している。

以下に各測線の探査結果と解釈を示す。探査結果は第55・56図に表わしている。第56図には有意な構造が認められた測線8、9、11および、北東の探査範囲での代表例として測線3の結果を示し、その他の7測線の結果を第55図に示している。図の縦軸は探査深度を、横軸は測線始点からの距離(測点番号)を表わす。第55・56図では、0.2mメッシュで区切った領域の比抵抗を色分けしており、各色に対応する比抵抗は図中に示している。

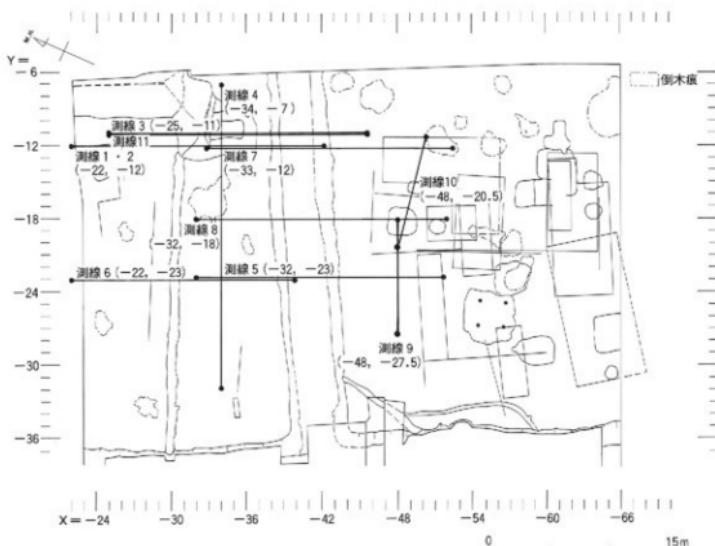
3-1 表土剥取り前の探査

測線1：堀を狙った測線だが、堀の地山と埋め戻し土壌の境界は鮮明ではない。雨で表土に水が溜まり、深度50cmまで水が浸透した構造が認められる。

測線2：測線1の電極を設置した状態で翌日に再測定した。一晩経過して水が下部まで浸透している。測線1と2には共に、深度1.5m前後に境界が認められる。

測線3：堀を狙った測線であるが、堀の境界らしい変化は見られない。表土剥ぎ取り後の測線11と同一測線である。

測線5：電極40番付近で地形の高まりを示す構造が見られる。これは南側北側の踏みしめ跡(又は



第54図 高密度探査の測線位置図 ()内は始点の座標値(X 座標, Y 座標)を示す 比尺1/400

第13表 各測線の探査の詳細

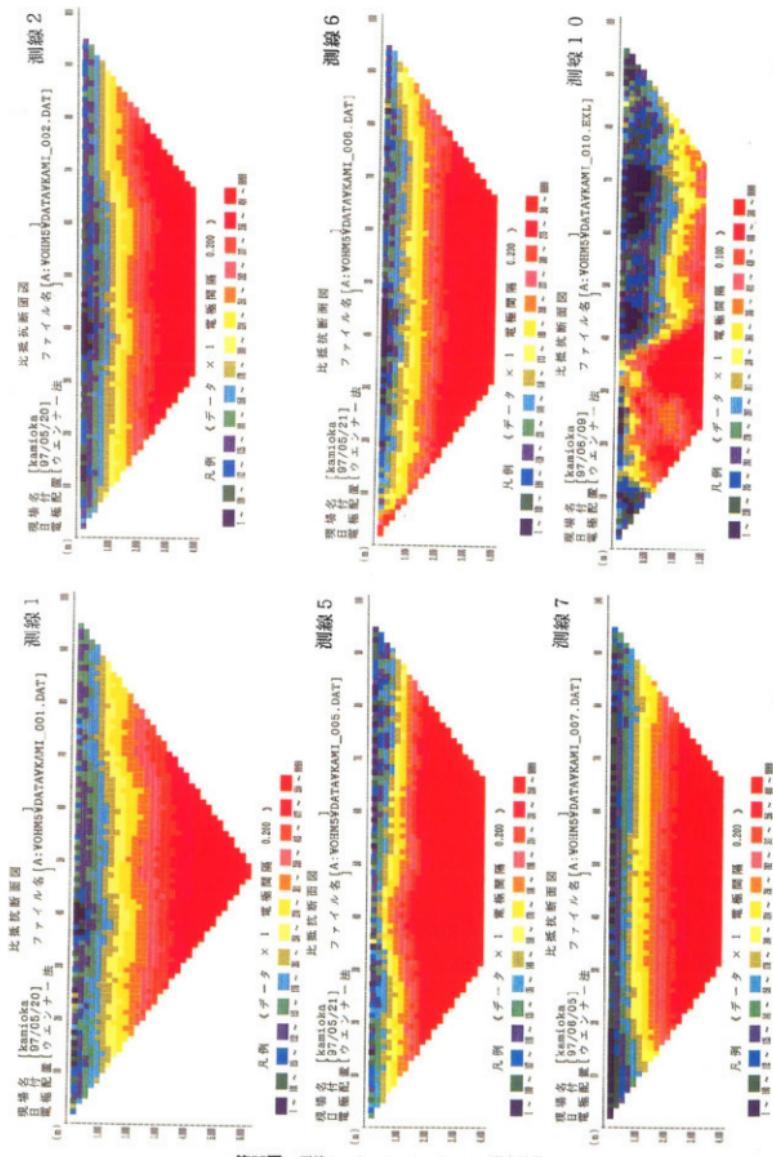
高密度電気探査

表土剥ぎ取り前

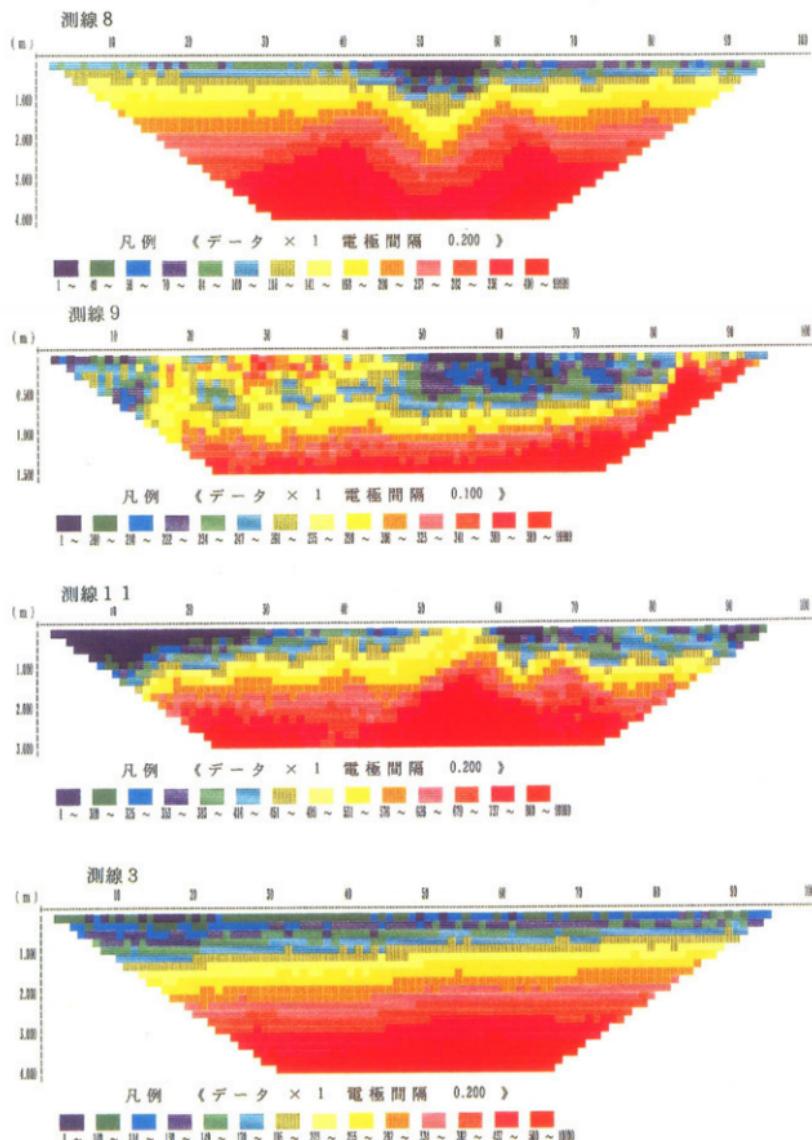
始点座標(考古学) (X, Y)	各測線の探査の詳細			
	電極間隔(m)	電極本数(本)	測線長(m)	探査深度(m)
測線01 (-22, -12)	0.2	96	19	6.2
測線02 (-22, -12)	0.2	96	19	3.8
測線03 (-25, -11)	0.2	96	19	3.8
測線05 (-32, -23)	0.2	96	19	3.8
測線06 (-22, -23)	0.2	96	19	3.8
測線07 (-33, -12)	0.2	96	19	3.8
測線08 (-32, -18)	0.2	96	19	3.8

表土剥ぎ取り後

始点座標(考古学) (X, Y)	各測線の探査の詳細			
	電極間隔(m)	電極本数(本)	測線長(m)	探査深度(m)
測線09 (-48, -27.5)	0.1	96	9.5	1.4
測線10 (-48, -20.5)	0.1	96	9.5	1.4
測線11 (-25, -11)	0.2	96	19	2.8



第55図 測線 1, 2, 5, 6, 7, 10 の探査結果



第56図 測線 8, 9, 11, 3 の探査成果

道)を示すと思われる。

測線6：測線5につながる測線である。顕著な境界は見られないが、深度0.5m前後に低比抵抗帯が数カ所ある。

測線7：測線1と2につながる測線である。顕著な異常は認められない。

測線8：電極番号40～60の領域を中心に、地表から深度3m付近まで低比抵抗帯が拡大しており、この地形の窪みを示唆する構造は南堀を示すと考えられる。同地域は始点から6.5～10.5mにあたり、予想されている位置よりやや南よりである。

3-2 表土剥取り後の探査

測線9：表面に数カ所の柱跡が見られる東側の領域の測線である。電極番号15～50付近では表面の比抵抗が高く、電極50～80では深度1mまで低比抵抗帯が存在する。深度1mまでの構造が、住居柱跡等に対応すると思われる。高比抵抗の領域の表層土壤は黒色で、低比抵抗帯の領域の表層はやや聞く白色であった。粘土質の黒色土壤では水の下部への浸透を妨げるので、その領域は高比抵抗となっている。それに対し、白くガサガサ(空隙率が高い)土壤は水が浸透し易く、浸透した水が下部の難透水性の土壤で止められて含水率が上がる所以、この領域は低比抵抗帯となったと考えられる。

測線10：測線9につながる測線である。電極番号15～35の領域では深度20cmから下は高比抵抗を示しており、水が浸透し難い層準になっていると考えられる。

測線11：表土剥取り前の測線3と同一測線である。測線3に比べて電気比抵抗が高い傾向にあるが、これは表土剥ぎ取り後に踏みしめられ、また日射を受けて表面が固くなっているためと考えられる。測線3の結果よりかなり明確な構造が認められた。表層の深度50cmまでに幾つか柱跡の境界が見え、深度2mまで影響している。

始点から11mまでの領域(番号50まで；地点A)と11.5～19mまでの領域(番号60～75；地点B)の、深度2.5mが低い値を示している。また、11.5m地点(番号57)と13.5m(番号70)で深度1mを頂点とする山形の高比抵抗帯がある。11.5m地点は、西堀の南側肩部(立ち上がり斜面部分)には対応し、13.5m地点は南堀の北側肩部と対応する。この測線では4.5～11mの領域に西堀が、13～17mの領域に南堀が存在する。地点Aの9～11mは西堀南側肩部の形を反映していると考えられる。西堀北側肩部の形は上手く出ていない。これは、この西堀が20年前の調査によって既に一度、埋土を掘り上げているため、水の浸透圧等が変化した影響を受けている可能性を考えたい。11.5、13.5mの高まりはそれぞれ、西堀南側肩部、南堀北側肩部と、ほぼ対応する。ここは、角になっている部分のため、乾燥が進み、特に顕著な高比抵抗を示したものと考えたい。

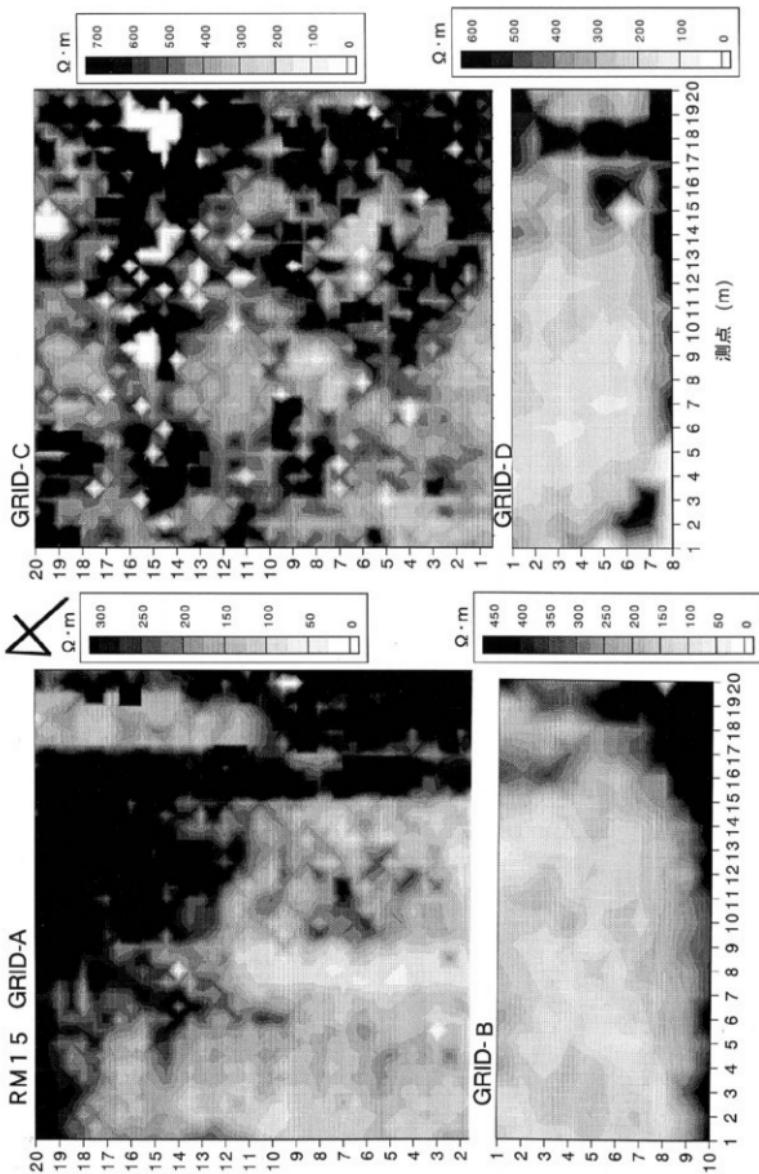
遺構に対応する部分の電気比抵抗の変化は、周囲土壤の比抵抗の違いが小さいことが原因で顕著では無かった。また20年前の調査によって、堀の埋土が掘られている所があり、堀の埋土の状態が均質で無かったこともあって、電気比抵抗の変化と遺構が一致しない部分もあるが、探査結果は全体としては堀の形を反映していたと言えよう。

4 RM15装置による二極法電気探査

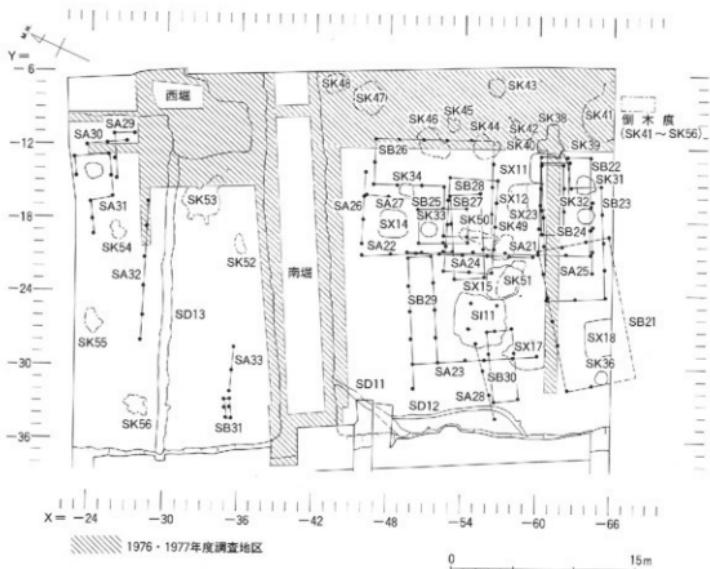
4-1 探査結果

探査は表土剥取り後の6月9日と10日に実施した。探査範囲とグリッド座標を第52図に示しており、4つの探査グリッドはAからDと名付けた。

第57図は、各グリッドの結果を合成したものである。比抵抗の高低を濃淡で示しており、黒い部分は高く白い部分が低い電気比抵抗に対応する。グリッドAの領域では西側で比抵抗が低く、東側が高



第57図 RM15二極法電気探査の結果



第58図 1997年度の発掘結果の概略図と1976・1977年度調査地域 比例尺1/400

い。第58図は今年度の発掘調査の概略と20年前の発掘地域を示すが、東側の高比抵抗領域は20年前の発掘調査地域とはほぼ一致している。またグリッドAの南の縁で幅約3mの高比抵抗帯が南西へ延びているが、これは南堀に相当する。

グリッドBにも南西にのびる高比抵抗帯がグリッドAにつながっており、南堀による異常と推測される。比抵抗値がグリッドAに比べて全体的に低いのは、発掘の際にグリッドBはA地域より水はけが良かったことを参考すると、同地域の土質が含水率が低いためと考えられる。

グリッドCはグリッドBと同様に全体的に比抵抗は低いが、南端より約1.5mの地点から幅約2mの高比抵抗帯が東方向にほぼ直線上に延びている。この地点は20年前に行われた発掘調査のトレントン位置と正確に一致する。

グリッドDにも南端に高比抵抗帯が見られ、20年前の発掘調査のトレントン位置と一致する。

4-2 採査結果と堀以外の構造との対応

上述の面的に調べた二極法電気探査の結果について、堀以外の構造との対応について検討した。その結果、土間状土坑、倒木痕は高比抵抗を示す様である。以下では第58図に示す構造との具体的な検討を示す。

土間状土坑SX12と倒木痕SK49・50は、ほぼ全体が高比抵抗になっている。

土間状土坑SX15の東半分で現われる高比抵抗は、南東部のSX24(炉跡)の下部の高比抵抗と連続しており、その範囲は倒木痕SK51の範囲に一致することから、土間状土坑ではなく倒木痕による高

比抵抗と考える。

竪穴住居SI11は浅い土坑で、壁面もゆるい勾配で立ち上がり、中央に炉跡SX20がある。比抵抗の分布には、この遺構の輪郭に沿って僅かに低比抵抗の円形の帯がある。中央部の高比抵抗は炉跡と直接は対応していない。

土間状土坑SX17では、周囲より低比抵抗と高比抵抗の異常域として現われている。

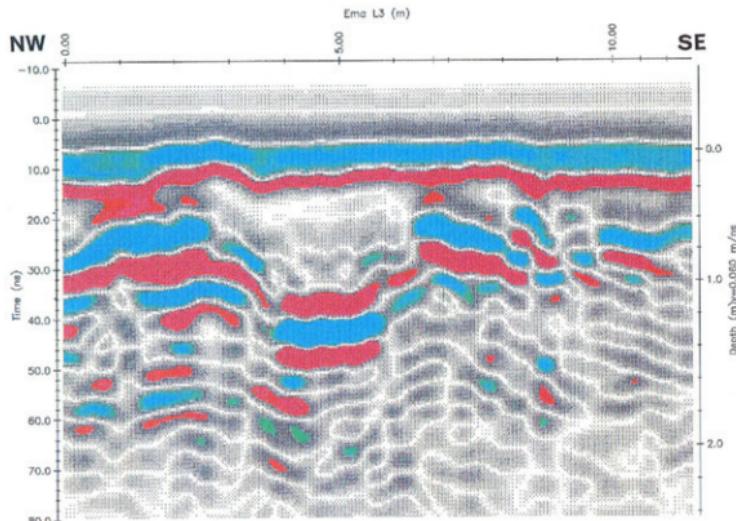
倒木痕SK43・44の東側およびSK46の東側は、20年前の調査で一度掘り上げている。この3つの倒木痕の一掘り上げた部分は高比抵抗を示すが、SK44・46の掘り上げていない部分の比抵抗は周囲とあまり変わらない。一方、20年前に掘られた倒木痕SK41～48のうち、南堀すぐ南のSK47・48では顕著な異常が認められない。

大きなSX14や径1m前後（深さ15～40cm）の土坑（SK31・32・33・34）も特に異常が認められない等、遺構と比抵抗の異常の対応はさらに検討が必要であるが、RM15装置による電気比抵抗の探査は、面的な異常から遺構を検討できるのでデジタルな有用な情報源となると考えられる。今後、研究例を増やすことにより細かい分析も可能になると考える。

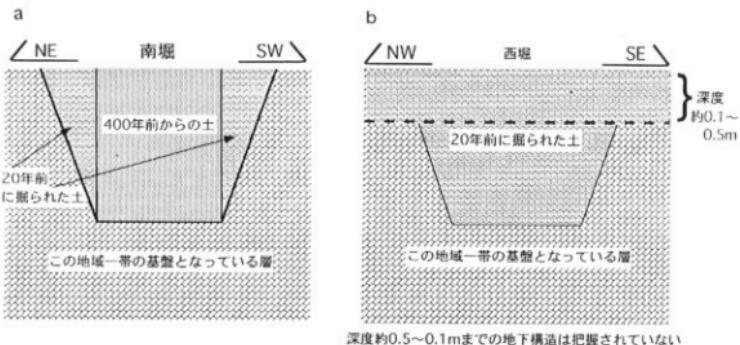
5 地下レーダ探査の結果

探査は6月10日（晴れ）に行った。前日に雨が降ったために地面は少し湿っていた。探査地点の周囲は自動車や電気のノイズも少なく探査に良い条件であった。堀跡の調査を主な目的とした。

探査測線は第52図に示す測線1～3（測線長11～35m）に取った。測線2と3は北西～南東の走向で、測線1と直交している。レーダ波の周波数は200MHzに設定し、アンテナ間隔0.5m、測点間隔0.1m



第59図 測線3の地下レーダ探査の結果
第60図aに南堀の推定構造を示す。



第60図 a 南堀において推測される地下構造
b 西堀において推測される地下構造

の条件で探査を行った。今回は、レーダ波の伝搬速度を推定するCMP探査は実施できなかったので、解析画像による手計算により推定された約0.06m/nsの伝搬速度を解析に用いた。

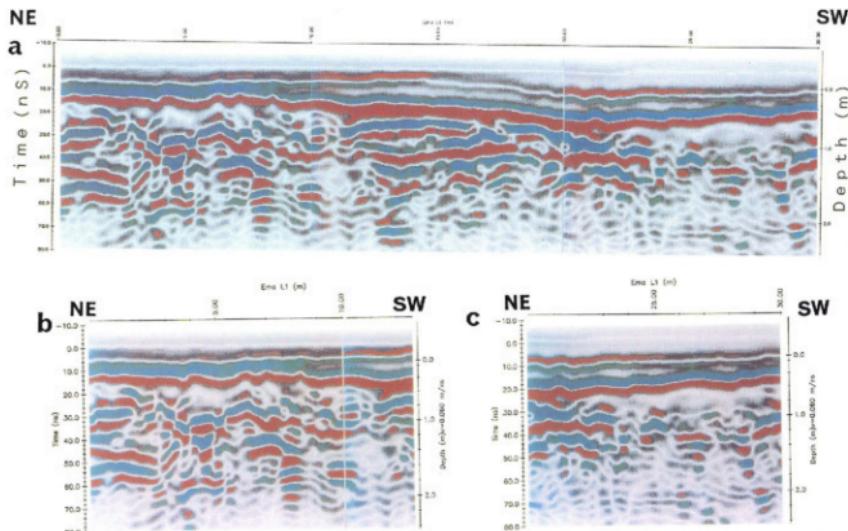
第59図は測線3の結果を示している。縦軸は深さ（反射波の受信機までの到達時間）を、横軸には測線の始点からの距離を表わしている。始点から3.5~6.5m、深度0.3~1.2mの領域に反射面が急激に落ち込む構造があり、これは南堀を示唆する。白い部分は、400年前の遺構土壤がそのまま残っていると考えられる。左側の端が欠けているのは20年前の試掘跡の影響であり、右側の端が深部で曖昧になっているのは試掘の際に埋め戻された土質のためと考える。

この測線の結果は南堀の跡をかなり明確に示している。第60図aは南堀で推測される地下構造を示している。

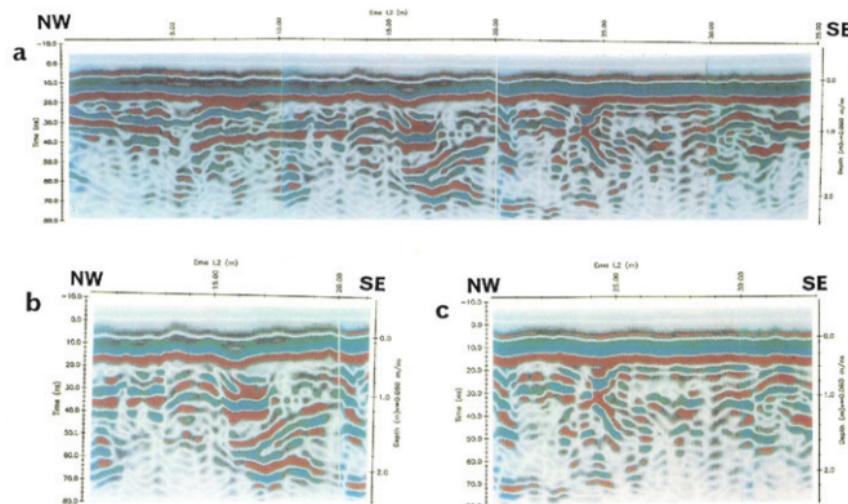
第61図は測線1の結果を示しており、上図aは全範囲の結果である。始点から11mの地点を境に両側で深度1m以内の構造は大きく異なる。始点から約11mまでは20年前に発掘調査された領域に当たり、土質が他地域と異なることを示す。

下図bの3~6mの領域が20年前の試掘で埋土を掘り上げた西堀に当たる。3mと6m地点には僅かに堀の肩を示唆する構造（第60図b）が認められる。顕著な異常でないのは、20年前に埋め戻された土壤と地山の比抵抗にあまり差が無いためか、または第60図bの様な地下構造のためと考えている。始点から24mの地点より西側で深度1m以内の構造は徐々に変化する。図cには、24m、26m、28mに白く抜けたパターンがあり、柱穴を示すと考えられる。

第62図に測線2の探査結果を示しており、図aは全範囲の結果である。図bでは、14~19mの領域が南堀の位置に当たる。17m付近の深さ90cmにおける反射の異常は、測線3（第59図）と同様な南堀に対応する異常と考えられる。測線3に比べると明確な異常ではないのは、20年前の試掘調査の際の掘削による影響が考えられる。図cの23~25mに見られる異常は大穴SX14を示唆している。33m付近は、土抗SK32（幅1mで深さ25cm）にあたるが顕著な構造は見られない。



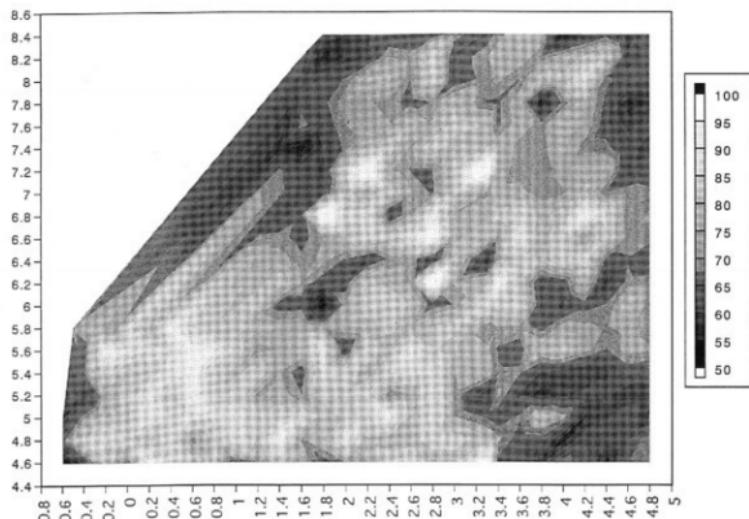
第61図 a. 測線1の地下レーダー探査の結果
b. 1~13mまでの探査結果
c. 20~30mまでの探査結果



第62図 a. 測線2の地下レーダー探査の結果
b. 11~22mまでの探査結果
c. 20~33mまでの探査結果

6 帯磁率探査

携帯型帯磁率計を用いた探査を第52図の範囲で行った。磁気センサーは感度を上げるために地面に接し、測線間隔20cm、測点間隔10cmにて細かく測定した。第63図に得られた帯磁率の高低を濃淡で表わしている。強い帶磁を示す領域は焼土の範囲に対応している。



第63図 帯磁率探査の結果
第52図の範囲で得た帯磁率分布高低を濃淡で示している。

7 まとめ

江馬氏下館跡の中心部からやや離れた地区において、道路跡や住居跡の分布調査を電磁気探査により実施した。

探査後に行われた発掘調査では、館の南側周辺部においては、(1)南堀の延長部分を館周辺部の区画の大きな境としていること、(2)南堀の外側（南側）に職人などの工房・作業場の区画を設けていること、(3)主門の前には建物が建ち並ぶ門前地区も、南堀の際では広場的な使い方をしていることが判明している。

1995年度門前地区では、西堀と主門前の建物の間の空間と、電気探査の帯状の高比抵抗帯が一致し、西堀に沿って南北に延びる道路跡を明らかにすることができた。門前地区につながる今年度調査地区区画5（南堀北側電気探査のグリッドA、B）の発掘調査からは、門前地区の様に整然と建ち並ぶ建物が無く、広場の様な空間が広がっていると考えた。電気探査で、この部分に明確な帯状の高比抵抗帯が確認できなかったことは、道路の様に限られた部分を歩いたのではなく、広場として均質に踏み

しめられたことを裏付けるものと考えられよう。

また堀に対応する異常構造をRM15電気探査や地下レーダ探査で認めることができ、発掘調査との矛盾は無かった。高密度電気探査は初めて試みた。様々な条件が重なり解釈が難しい点もあったが探査結果を検討した結果、同調査も遺跡の調査に十分に活用できると判明した。現段階では、遺跡の探査には地下レーダ探査と電気探査を併用することが有用と考える。

謝辞

神岡町教育委員会の皆様には、探査の便宜を図って頂き、また発掘調査結果との比較において議論を頂いた。調査の一部に、文部省科学研究費「基盤研究(C)：課題番号07831004」を使用した。

参考文献

- Clark A. (1990) : Seeing beneath the soil –prospecting methods in archaeology–, B. T. Blatsford Ltd, London, pp176.
- 神岡町(1987) :『史跡江馬氏城跡発掘調査概報』, 1979, PP60.
- 酒井英男, 平井 徹, 山田剛士, 張 忠良, 田中保士(1994) :立山室堂における山岳宗教遺跡の電磁気探査, 立山町教育委員会,『芦峰寺室堂遺跡』, 65-72.
- 酒井英男, 前川要, 宇野隆夫(1995a) :福島城跡遺跡および十三塗遺跡における電気探査,『青森県十三塗遺跡・福島城跡の研究』, 国立歴史民俗博物館研究所報告, 第64集, 137-142.
- 酒井英男, 武田昌明, 前川 要(1995b) :江馬氏館における電磁気探査とレーダー探査, 富山大学人文学部考古学教室,『江馬氏城館跡－下館跡発掘調査報告書1－』151-164.
- 酒井英男, 上田純子, 上坂麻子, 宇野隆夫, 田中保士(1996) :江馬氏下館遺跡における電磁気探査と放射温度計探査, 富山大学人文学部考古学教室,『江馬氏城館跡II』, 135-146.
- 酒井英男, 黒沢尚美, 田中保士, 前川 要(1997) :岐阜県神岡町江馬氏下館遺跡における電磁気探査, 富山大学人文学部考古学研究室,『江馬氏城館跡III』, 127-139.

参考文献 (五十音順)

- 青森県市浦村教育委員会 1996『十三湊遺跡－市浦村第1次・第2次発掘調査概報－』
- 網野善彦・石井 進編 1992『中世都市と商人職人』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集
- 市村高男 1992『戦国期東国の城郭と城下町の実態』『北の中世 史跡整備と歴史研究』日本エディタースクール出版部
- 上田秀夫 1982『14～16世紀の青磁碗の分類について』『貿易陶磁研究』No.2, 日本貿易陶磁研究会
- 宇野隆夫 1992『食器計量の方法と意義』『国立歴史民俗博物館研究報告』第10集, 国立歴史民俗博物館
- 宇野隆夫 1994『考古学からみた日本生産流通史－2000年余の歴史を二分する転換点について－』『日本史研究』第380号, 日本史研究会
- 宇野隆夫 1994『日本海における中世の生産と流通』『中世都市十三湊と安藤氏』国立歴史民俗博物館
- 宇野隆夫 1996『木製食器と土製食器－弥生変革と中世変革－』『古代の木製食器－弥生期から平安期にかけての木製食器－』発表要旨, 稲成文化財研究会・第39回稲成文化財研究会実行委員会
- 大山町 1964『大山町史』
- 岡村利平 1912『飛騨山川』住伊吉店
- 小野正敏 1981『第4回貿易陶磁研究集会・その成果と課題』『貿易陶磁研究』No.4, 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1984『福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分担』『貿易陶磁研究』No.4, 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1985『出土陶磁よりみた15、16世紀における画期の蒸籠』『MUSEUM』No.416, 東京国立博物館
- 小野正敏 1991『城館出土の陶磁器が表現するもの』『中世の城と考古学』新人物往来社
- 小野正敏 1991『中世陶磁器研究の視点と方法』『考古学と中世史研究』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集
- 小野正敏 1994『戦国期の館・屋敷の空間構造とその意識』『信濃』531号, 信濃史研究会
- 金子拓男・前川 要編 1991『守護所から戦国城下へ－地方政治都市論の試み－』1993年度日本考古学協会シンポジウム報告集
- 鎌倉考古学研究所 1994『中世都市鎌倉を掘る』日本エディタースクール出版部
- 神岡町 1972『神岡町史』史料編 上巻(中世・近世・近代)
- 神岡町 1982『神岡町史』特集編(飛騨山野史・国説集成)
- 神岡町教育委員会 1979『江馬氏城館跡発掘調査概報』
- 神岡町教育委員会 1981『江馬氏城館跡保存管理計画策定報告書』
- 神岡町教育委員会 1994『ふるさと・神岡』探検マップ
- 神岡町教育委員会 1995『飛騨の神岡』
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1995『江馬氏城館跡一下館跡発掘調査報告書Ⅰ』
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1996『江馬氏城館跡Ⅱ一下館跡門前地区と庭園の調査－』
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1997『江馬氏城館跡Ⅲ一下館跡南辺地区の調査－』
- 神岡町役場 総務課 1992『神岡町勢要覧』資料編
- 岐阜県 1968『岐阜県史』通史編 近世上
- 岐阜県 1969『岐阜県史』通史編 中世
- 岐阜県 1969『岐阜県史』資料編 古代・中世1
- 岐阜県 1973『岐阜県史』史料編 古代・中世4
- 岐阜県郡都大和村教育委員会 1984『東氏館跡発掘調査報告書』
- 岐阜市教育委員会 1990『城之内遺跡』
- 葛谷駄彦 1970『中世江馬氏の研究』神岡町
- 葛谷駄彦 1972『越中街道』『飛騨の街道』飛騨運輸株式会社
- 国立歴史民俗博物館 1993『日本出土の貿易陶磁』
- 国立歴史民俗博物館 1994『中世都山十三湊と安藤氏』
- 小島道裕 1984『戦国期城下町の構造』『日本史研究』第257号, 日本史研究会
- 小島道裕 1990『平地城館跡と寺院・村落－近江の事例から－』『中世城郭研究論集』新人物往来社
- 小島道裕 1996『江馬氏下館と江馬氏－文献史料による考察－』『江馬氏城館跡Ⅱ一下館跡門前地区と庭園の調査－』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室
- 小林 幹 1972『信州街道』『飛騨の街道』飛騨運輸株式会社
- 酒井重洋 1990『越中における在地窯の諸問題』『中世北陸の在地窯－生産と流通の諸問題－』北陸中世上器研究会
- 坂井秀弥 1991『絵図にみる城館と町』『中世の城と考古学』新人物往来社
- 千田嘉博 1994『古城探検隊』『歴史読本』第39巻, 新人物往来社

- 千田嘉博 1995 「江馬氏の山城」『江馬氏城館跡－下館跡発掘調査報告書Ⅰ－』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室
- 多賀秋五郎 1941 「第5編 第2章 社会経済」『飛驒史の研究』下巻, 濃飛文化研究会
- 高橋與右衛門 1992 「発掘された中世の建物跡」『北の中世 史跡整備と歴史研究』日本エディターズグループ出版部
- 中世土器研究会 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」
- 中世都市研究会 1994 「都市空間」『中世都市研究1』
- 中世都市研究会 1995 「古代から中世へ」『中世都市研究2』
- 中世都市研究会 1996 「津・泊・宿」『中世都市研究3』
- 東海埋蔵文化財研究会 1989 「清須一歳豊年の城と都市」 研究報告編
- 富山県井口村教育委員会 1990 「井口城跡発掘調査概要」
- 中井 均 1987 「中世城館の発生と展開」『物質文化』48, 物質文化研究会
- 中井 均 1994 「織豊系城郭の画期」『中世城郭研究論集』新人物往来社
- 中井 均 1991 「中世の居館・寺そして村落－四国を中心として－」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 中条町教育委員会 1993～1997 「江上館跡」 I～V
- 長野県中野市教育委員会 1993 「高梨氏館跡発掘調査報告書」
- 丹生川村教育委員会 1993 「尾崎城跡発掘調査概報」
- 橋口定志 1987 「中世居館の再検討」『東京考古』5, 東京考古学談話会
- 橋口定志 1991 「中世居館研究の現状と問題点」『争点日本の歴史』4, 新人物往来社
- 菱村正文 1972 「総論」『飛驒の街道』飛驒運輸株式会社
- 菱村正文 1972 「平湯街道」「飛騨の街道」飛騨運輸株式会社
- 福井県教育委員会 1979 「一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告」I
- 福井県教育委員会 1990 「一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告」II
- 福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館 1983 「一乗谷朝倉氏遺跡 県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書」
- 藤澤良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要』V, 潤戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1991 「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群II－古瀬戸後期様式の編年－」『研究紀要』X, 潤戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1995 「瀬戸古窯址群III－古瀬戸前期様式の編年－」『研究紀要』第3輯, 財團法人市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 1997 「中世瀬戸窯の動態」『研究紀要』第5輯, 財團法人市埋蔵文化財センター
- 北陸中世土器研究会 1991 「城館遺跡出土の土器・陶磁器」
- 北陸中世土器研究会 1993 「中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり」
- 埋蔵文化財研究会・大阪市文化財協会 1990 「中近末から近世のまち・むらと都市」第1分冊 発表を旨編
- 村瀬一郎 1979 「岐阜県・概説」『日本城郭大系』9, 新人物往来社
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2, 日本貿易陶磁研究会
- 湯本軍一 1991 「信濃高梨氏城下の景観復元」『中世の村落と現代』吉川弘文館
- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4, 九州歴史資料館
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館
- 吉岡泰英 1983 「朝倉館の建築的考察」『朝倉氏遺跡資料館紀要』福井県立朝倉氏遺跡資料館
- 脇田晴子 1981 「日本中世都市論」東京大学出版社

別 表

凡　　例

〈柱穴・土坑計測表〉

No. : 調査時・報告書での通し番号。1996年度南辺地区からの通し番号であるが、柱穴のみは1から数えている。

X・Y : 1m単位の調査座標で遺構の位置を示した。

平面形: 円形、楕円形、方形、不整形の形に分類した。

データ: [長径] [短径] [深さ] [底面レベル] の値。

断面形: 第14表の分類表に依拠して表示した。

出土遺物: ●国産土器、■国産陶器、○中国陶磁器、▲鉄製品、□その他、△表した。

備考: 遺構の切り合い関係は>、<の記号で表した。
切り合いで不明は、遺構+遺構と表した。

調査: Xはすでに1976~1978年度調査時において完掘していた遺構を表わす。

土坑計測表の「完掘」「半截」の別は1997年度調査時の調査方法を示す。

〈遺物計測表〉

No. : 報告書での通し番号。

種類: 土師器、珠洲、瀬戸美濃、青磁などの名称。

器種: 梗、皿、すり鉢、盤など用途別の分類。

X・Y : 1m単位の調査座標で出土地点を示した。

遺構: 遺物の出土遺構名。空白は遺構外である。

層位: 遺物の出土した土層名。層位図参照。

レベル: 遺物の出土標高値。水準はT.P.、単位はmである。

法量: 口=口径、底=底径、高=器高を示している。

括弧のつかないデータが完形値、[]が復元値、()が現存値である。

個体数: 口縁部計測法(宇野1992)による。

備考: 時期別分類、重量、その他を示す。

整理No.: 調査時の取り上げ番号。

別表1 建物計測表

造構No.	桁行柱間	梁行柱間	桁行(cm)	桁行(尺)	梁行(cm)	梁行(尺)	平面積(m ²)	主軸方位	備考
SB21	6	3	1177	38.84	600	19.80	70.6200	N-51.0°-E	SB22>SB21
SB22	4	2	800	26.40	401	13.23	32.4400	N-64.0°-E	SA25・SX11・SX13・SX23>SB22>SB21 SA21が西辺北側にのびる
SB23	4	2	922	30.42	468	15.44	48.2000	N-61.5°-E	SX24・SX13・SX23>SB23>SX11 1間×1間の張り出しが東辺北側につく
SB24	3	1	578	19.07	189	6.23	10.9242	N-63.5°-E	SX13>SB24>SB23・SX23
SB25	2	1	397	13.10	289	9.53	11.4733	N-27.0°-W	
SB26	5	2	953	31.45	380	12.54	51.7514	N-26.0°-W	SB28>SB26≠SK46・SK50 2間×2間の張り出しが西辺南側につく
SB27	3	1	697	23.00	247	8.15	17.1811	N-60.5°-E	SB28>SB27 SA22が北辺西から第2柱穴から北側にのびる
SB28	5	2	780	25.74	394	13.00	30.6733	N-68.0°-E	SX15>SB28>SB26・SB27・SK49・SK50 東側1間分が庇の可能性あり
SB29	4	1	880	29.04	197	6.50	17.2822	N-60.0°-E	SA23が西辺南側にのびる。
SB30	3	1	592	19.53	200	6.60	11.8300	N-58.5°-E	SI11・SX17>SB30
SB31	2	1	161	5.31	39	1.28	0.6250	N-60.0°-E	

別表2 桁列計測表

造構No.	柱間	総長(cm)	総長(尺)	主軸方位	備考
SA21	4	1060	34.98	N-25.0°-W	SA24>SA21・SK49 SB22西辺北側にのびる
SA22	3	724	23.89	N-30.0°-W	SI11>SA22 SB27北辺の西から第2柱穴から北側にのびる
SA23	4	803	26.50	N-29.5°-W	SX17>SA23 SB29西辺南側にのびる
SA24	5	949	31.32	N-26.0°-W	SA24>SA21・SK49
SA25	3	596	19.66	N-63.0°-E	SA25>SB22
SA26	3	595	19.63	N-66.0°-E	SA27>SA26
SA27	2	368	12.14	N-22.5°-W	SA27>SA26
SA28	3	641	21.15	N-49.0°-E	SI11>SA28
SA29	2	364	12.01	N-59.5°-E	東西列
	1	169	5.57		南北列
SA30	2	318	10.49	N-32.0°-W	
SA31	2	351	11.58	N-56.5°-E	SE11を囲む 東西列SP766・SP709・SP711
	2	271	8.94		SE11を囲む 東西列SP724・SP725・SP726
	1	160	5.28		SE11を囲む 東西列SP707・SP708
	1	284	9.37		SE11を囲む 南北列SP707・SP766
	1	196	6.46		SE11を囲む 南北列SP717・SP724
SA32	5	1149	37.92	N-66.0°-E	
SA33	2	376	12.40	N-70.0°-E	

別表3 堀跡計測表

(単位: cm)

堀名	形状	主軸方位	検出長	堀上幅	堀下幅	深さ	立ち上がり	備考
西堀	葉研堀	N-29.0°-W	900		16	297	西46.0° 東52.5°	X=-27.5m ライン 東側堀周部は検出できず
西堀 尾曲部北側	箱堀	N-27.0°-W	289	648	121	206	西42.5° 東46.5°	X=-32.5m ライン 西堀≠SD13
							北50.0° 南62.0°	Y=-11m ライン
西堀 尾曲部南側	箱堀	N-27.0°-W	380	418	135	125	西46.0° 東61.0°	X=-34.5m ライン
							南49.0°	Y=-11m ライン
南堀	箱堀	N-59.5°-E	3120	436	260	97	北38.0° 南59.5°	調査区東壁A-A' 最小幅部付近
				492	296	100	北31.5° 南70.0°	SST西壁B-B' 最大幅部付近
				454	285	87	北48.0° 南43.5°	S2T西壁C-C' 略浅部付近
								南堀≠SD11

別表4 溝跡計測表

(単位: cm)

No.	検出長	最大幅	最小幅	平均幅	深さ	埋土	主軸方向	出土遺物	備考
SD11	759	66	27	46.5	30	第37回	N- 9.5°-E	■	南堀≠SD11>SD12
SD12	1170	40	18	29.0	15	第37回	N-32.5°-W		SD11>SD12≠SP628・SP637
SD13	2479	92	62	77.0	17		N-67.0°-E		SD13≠西堀
SD14	230	69	29	49.0	11		N-75.0°-W		

別表5 穹穴住居計測表

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	直徑	短径	深さ	底面レベル	出土遺物	備考
SI11	-56.6	-26.0	方形	438	420	8	455.55	●3■4 ○2▲2	SP522>SI11>SA22(SP164)・SB30(SP460・SP480) SP165・SP168・SP281・SP287・SP304・SP398・SP456・ SP461・SP462・SP529・SP558・SP565・SP571・SP577・ SP687・SP688・SP689 SX21・SX22を伴う

別表6 炉跡・竈跡計測表

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	埋土	出土遺物	備考
SX19	-63.2	-28.8	不整形	210	134	13	455.37	第36回	●7■▲□	
SX20	-55.5	-26.2	楕円形	91	74	23	455.34	第35回	●▲	SI11に伴う
SX21	-55.5	-24.8	不整形				455.50	第36回		粘土ブロック・炭を検出 原形をとどめず
SX22	-57.5	-31.8	円形	87	79	30	455.17	第35回		SI11に伴う SX21>SP655・SP461
SX24	-58.3	-22.3	円形	72	60	15	455.36	第36回		石椎炉 SB30に伴う
										SX15に伴う SP314>SX24>SK51

別表7 土坑計測表

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	埋土	出土遺物	備考	調査
SX11	-61.0	-13.7	方形	321	246	8	455.48	第32回	●●	土間状土坑 SB23(SP87) SP42>SX11≠SP97・SP436・SP657・SP658・SP662・SP663・SP664・SP665>SB22(SP660) SB24(SP659)・SP489・SP661	×完掘
SX12	-58.5	-16.0	方形	216	210	24	455.52	第32回	●●○□□	土間状土坑 SX23・SP669>SX12>SP53・SP677・SP668・SP670・SP671	×完掘
SX13	-60.2	-18.3	方形	219		8	455.60		●●	土間状土坑 SX13>SB22(SP677) SB23(SP675) SB24(SP678) SP676	×完掘
SX14	-48.5	-18.3	方形	237	231	248	453.02		●	P222>SX14	半裁
SX15	-57.1	-22.8	方形	285	275	8	455.50	第31回	●17■6▲2	十間状土坑 SX24・SP92>SX15>SP318・SB28(SP491)	完掘
SX17	-59.3	-28.8	椭円形	303	234	14	455.38	第33回	●11■2○1 ▲2□2	土間状土坑 SX17≠SP448>SA23 (SP393・SP504)・SB30(SP507) SP395・SP396・SP397・SP500・SP501・SP502・SP505・SP506・SP508・SP509・SP510	完掘
SX18	-65.0	-27.5	方形	315		30	455.33	第33回	●13■3▲	土間状土坑 SP470>SX18>SB21 (SP143)・SP471・SP472	完掘
SX23	-60.2	-15.9	方形	194		10	455.59	第32回	●4■3○3	土間状土坑 SB24(SP315)>SX23>SB22 (SP674) SB23・SB24(SP666)・SX12・SP673	×完掘
SK31	-63.8	-14.8	円形	154	148	13	455.57			SP77>SK31>SP75	半裁
SK32	-63.8	-17.4	円形	134	122	25	455.45			SP82・SP83>SK32>SP86	半裁
SK33	-51.3	-18.7	円形	126	124	40	455.20			SP387>SK33	半裁
SK34	-49.4	-15.5	方形	100	96	50	455.06			SK36>SP590	完掘
SK36	-65.3	-30.6	楕円形	110	108	15	455.25				
SK38	-61.2	-10.8	方形	144	99	47	455.15				×
SK39	-61.4	-11.8	方形	126	99	52	455.08				×
SK40	-60.6	-11.8	方形	135	111	46	455.04				×
SK41	-64.9	-9.4	円形	502		22	455.39		倒木痕		×
SK42	-58.7	-10.6	不整形	240	146				倒木痕 SK42≠SP35・SP36		×未掘
SK43	-56.5	-6.7	不整形	153	140	22	455.38		倒木痕		×
SK44	-55.8	-12.0	不整形	207	206	27	455.32		倒木痕 SP138・SP139・SP140>SK44		半裁
SK45	-53.1	-10.2	不整形	125	118	20	455.40		倒木痕		×
SK46	-51.7	-11.8	不整形	290	184	15	455.36		倒木痕 SK46≠SB26(SP37) SP38・SP214		×
SK47	-46.3	-8.0	不整形	280	252				倒木痕		×未掘
SK48	-43.7	-6.7	椭円形	180	146				倒木痕		×未掘
SK49	-57.3	-20.1	不整形	224	174	34	455.29		倒木痕 SB28(SP683) SA21(SP340) SA24 (SP679) SP326・SP328・SP681>SK49	完掘	
SK50	-55.3	-9.2	不整形	300	117	37	455.19		倒木痕 SB28(SP683) SP684>SK50≠SB26(SP367) SP368・SP369	完掘	
SK51	-57.7	-22.7	不整形	372	170	45	455.12		倒木痕 SX15・SX24>SK51	完掘	
SK52	-26.1	-20.2	不整形	162	68				倒木痕		未掘
SK53	-33.0	-16.5	不整形	432	308				倒木痕		未掘
SK54	-26.3	-19.0	不整形	144	106	13	455.08		倒木痕 SK54≠SP716	完掘	
SK55	-24.3	-26.5	不整形	200	138	22	454.92		倒木痕		完掘
SK56	-28.9	-33.4	不整形	187	156				倒木痕		未掘

別表8 柱穴調査表

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レバ%	柱痕跡	断面形	出土遺物	備考	調査
SP001	-64.30	-6.25	楕円形	30	20	14	455.55	B				×
SP002	-64.48	-7.35	円形	29	25	14	455.52	A		SP2+SP6		×
SP003	-64.00	-7.68	楕円形	49	34	16	455.50	A				×
SP004	-63.45	-7.90	不整形	43	35	10	455.58	A				×
SP005	-62.75	-7.90	楕円形	42	36	6	455.59	A				×
SP006	-64.20	-7.35	不整形	46	40	15	455.50	A		SP2+SP6		×
SP007	-62.40	-5.70	楕円形	50	40	25	455.43	A				×
SP008	-65.39	-11.85	楕円形	22	17	11	455.51	B				×
SP009	-63.40	-11.18	円形	45	45	12	455.48	A				×
SP010	-62.15	-11.38	方形	26	24	16	455.42	A				×
SP011	-62.27	-8.28	円形	27	25	4	455.61	A				×
SP012	-61.80	-7.53	円形	24	22	12	455.55	B				×
SP013	-61.52	-8.54	円形	25	25	12	455.58	A				×
SP014	-61.18	-8.46	楕円形	24	18	16	455.54	D				×
SP015	-65.51	-11.96	楕円形	24	20	6	455.59	B				×
SP016	-60.21	-6.01	円形	29	24	14	455.55	C-2				×
SP017	-60.58	-9.32	円形	25	22	23	455.44	C-2				×
SP018	-60.43	-9.41	楕円形	19	11	24	455.43	A				×
SP019	-59.52	-7.92	方形	33	32	14	455.57	C-1				×
SP020	-59.21	-8.32	楕円形	30	22	9	455.58	A				×
SP021	-64.31	-11.57	楕円形	25	20	13	455.49	A				×
SP022	-59.24	-11.30	椭圓形	27	21	12	455.43	A				×
SP023	-58.90	-11.86	円形	26	23	28	455.28	A				×
SP024	-58.06	-8.11	楕円形	20	16	16	455.47	B				×
SP025	-57.10	-9.38	楕円形	33	26	12	455.51	A				×
SP026	-56.82	-11.15	円形	26	23	29	455.31	A				×
SP027	-55.30	-9.72	円形	29	26	21	455.40	A				×
SP028	-54.40	-11.03	円形	37	37	31	455.28	A		SP28+SP29		×
SP029	-54.52	-11.30	円形	36	36	30	455.32	A		SB26柱穴 SP28+SP29		×
SP030	-53.85	-11.80	円形	57	54	21	455.36	B		SB26柱穴		×
SP031	-52.62	-11.30	楕円形	53	37	17	455.38	A				×
SP032	-52.35	-10.94	円形	35	33	25	455.31	A				×
SP033	-52.78	-10.58	楕円形	23	18	22	455.37	B				×
SP034	-51.95	-10.75	円形	23	21	10	455.46	B				×
SP035	-58.70	-11.30	楕円形	35	26	10	455.49	A		SK42+SP35		×
SP036	-59.00	-10.00	円形	30	26	19	455.45	B		SK42+SP36		×
SP037	-50.72	-11.32	円形	36	34	21	455.26	A		SB26柱穴 SP37+SK46+SP38		×
SP038	-50.63	-11.12	円形	30	25	9	455.32	B		SK46+P37+SP38		×
SP039	-49.48	-11.00	円形	37	35	19	455.36	B				×
SP040	-48.08	-12.28	楕円形	35	30	14	455.39	—		地上に現1 SP42>SX11+SP44		×
SP041	-47.85	-12.00	円形	30	26	9	455.45	—		SB26柱穴 SP43+SP44		×
SP042	-59.35	-13.45	円形	26	25	38	455.17	A		SP43+SP44		×
SP043	-48.78	-11.35	円形	29	24	25	455.29	A				×
SP044	-48.75	-11.06	円形	32	25	24	455.30	A				×
SP045	-47.88	-9.75	楕円形	25	18	12	455.43	B				×
SP046	-47.70	-12.30	楕円形	35	18	13	455.39	—				×
SP047						0				欠番		×
SP048	-46.65	-10.62	楕円形	34	26	12	455.40	B				×
SP049	-46.88	-11.30	円形	37	32	35	455.27	A		SB26柱穴		×
SP050	-45.00	-11.30	楕円形	42	34	14	455.37	A				×
SP051						0				欠番		×
SP052						0				欠番		×
SP053	-58.93	-14.98	円形	27	26	23	455.42	A		SX12>SP53		×
SP054	-43.05	-7.73	楕円形	41	31	18	455.31	B		欠番		×
SP055						0						×
SP056	-44.12	-9.05	楕円形	41	35	9	455.42	D				×
SP057	-43.65	-10.35	楕円形	45	32	26	455.26	A				×
SP058	-65.86	-13.56	楕円形	30	23	7	455.60	A				×
SP059	-65.75	-14.60	円形	34	31	8	455.60	C-2				×
SP060	-66.00	-16.70	円形	33	15	11	455.57	D				×
SP061	-65.40	-15.15	円形	25	25	19	455.50	B				×
SP062	-65.00	-15.00	楕円形	48	38	44	455.24	A		SB23柱穴		×
SP063	-64.92	-15.42	円形	27	26	10	455.59	C-2				×
SP064						0				欠番		×
SP065	-65.35	-17.30	楕円形	47	30	30	455.34	円形 径16	A	SP65>SP66		×
SP066	-65.10	-17.30	円形	37	33	24	455.46	A		SB23柱穴 SP65>SP66		×
SP067						0				欠番		×
SP068						0				欠番		×
SP069	-64.40	-13.90	不整形	43	38	18	455.52	C-2				×
SP070	-64.17	-12.70	円形	34	31	19	455.44	A		SB22柱穴		×

別表8 のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短軸	深さ	底面レベル	柱痕跡	断面形	出土遺物	備考	調査
SP071	-63.82	-13.44	椭円形	24	18	9	455.56		A			
SP072	-63.67	-13.45	椭円形	21	16	7	455.59		A			
SP073	-63.43	-13.30	円形	25	23	9	455.54		A			
SP074	-64.30	-16.35	円形	30	29	27	455.42	椭円形 径15	A			
SP075	-63.55	-15.35	椭円形	27	20	9	455.52		A			
SP076	-64.20	-16.65	円形	30	30	28	455.43	円形 径16	A			
SP077	-63.30	-15.40	椭円形	37	30	19	455.49		A			
SP078	-63.54	-17.10	不整形	60	45	19	455.48		B			
SP079						0				欠番		
SP080						0				欠番		
SP081	-36.25	-15.36	円形	33	25	27	455.33	円形 径15	A	●	SP119>SP118>SP81	
SP082	-63.50	-16.97	円形	22	17	21	455.47		A		SP82>SK32	
SP083	-63.25	-17.18	円形	28	25	21	455.45		A		SP83>SK32	
SP084						0				欠番		
SP085	-63.55	-18.24	椭円形	30	27	19	455.44		B	●	SP85>SP86	
SP086	-63.70	-18.12	椭円形	45	25	19	455.47		A	●	SK32>SP85>SP86	
SP087	-62.60	-15.20	円形	38	36	33	455.35		A		SB23柱穴 SP87>SX11	
SP088	-62.62	-16.55	椭円形	23	18	13	455.55		B			
SP089	-62.67	-17.45	円形	37	36	25	455.43		A		SB23柱穴	
SP090	-62.32	-16.17	円形	23	22	8	455.61		B	●	SB22柱穴 地上に隣り SP92>SX15	
SP091	-62.15	-16.64	椭円形	32	25	24	455.43		B		SB24柱穴	
SP092	-57.35	-22.42	円形	19	16	26	455.40		B			
SP093	-62.10	-17.06	椭円形	35	30	30	455.40		B			
SP094	-61.79	-17.30	円形	28	26	13	455.54		A			
SP095	-62.10	-17.45	円形	26	24	18	455.50		C-2			
SP096	-62.05	-17.69	円形	40	40	9	455.59		A			
SP097	-62.25	-13.74	円形	26	25	20	455.38		B		SB22柱穴 SP97≠SX11	
SP098	-59.12	-17.28	椭円形	32	24	17	455.52		A			
SP099	-58.90	-17.52	円形	32	31	26	455.44		D			
SP100	-58.32	-13.74	椭円形	27	20	16	455.50		B			
SP101	-58.25	-14.55	円形	28	28	25	455.40		A			
SP102	-46.04	-16.06	円形	30	20	18	455.34		B	●	SA26柱穴 SP247>SP102	
SP103	-57.37	-16.68	円形	24	23	26	455.40		B			
SP104	-65.38	-33.76	円形	22	20	8	455.29		B			
SP105	-57.37	-13.34	円形	26	24	18	455.51		A			
SP106	-57.12	-12.35	椭円形	31	26	18	455.47		B			
SP107	-66.00	-33.35	円形	22	10	36	455.02		B			
SP108	-56.67	-12.58	円形	35	35	26	455.37		B			
SP109						0				欠番		
SP110	-56.53	-13.15	円形	27	26	31	455.32		B			
SP111	-56.34	-13.20	円形	27	26	30	455.33		B			
SP112	-56.25	-13.35	円形	21	18	9	455.54		B			
SP113	-56.59	-13.50	椭円形	25	22	17	455.47		A			
SP114	-56.28	-13.55	椭円形	25	19	8	455.54		B			
SP115	-56.14	-13.83	椭円形	29	25	11	455.52		B			
SP116	-56.50	-13.82	円形	24	20	14	455.48		C-2			
SP117	-56.72	-14.50	椭円形	46	40	32	455.31		A			
SP118	-56.54	-15.16	椭円形	29	24	30	455.36		A			
SP119	-56.28	-15.16	椭円形	35	27	27	455.34		A			
SP120	-56.27	-14.83	方形	24	24	24	455.20		A			
SP121	-55.94	-14.58	椭円形	31	26	5	455.56		E			
SP122	-55.95	-15.10	方形	21	20	16	455.42		A			
SP123						0				欠番		
SP124						0				欠番		
SP125	-56.85	-15.00	円形	22	18	21	455.45		B			
SP126	-56.69	-15.15	円形	21	17	12	455.54		C-2	□	SP126>SP127	
SP127	-56.64	-16.45	椭円形	38	28	24	455.44		A			
SP128	-56.84	-17.48	円形	23	21	13	455.54		B			
SP129	-56.51	-16.96	円形	21	17	7	455.57		B			
SP130	-56.34	-16.08	円形	26	26	29	455.32		A			
SP131	-56.20	-16.42	椭円形	34	27	21	455.43		C-2			
SP132	-56.00	-16.42	円形	18	18	16	455.45		B			
SP133	-55.70	-17.42	円形	15	13	20	455.41		B			
SP134	-55.29	-17.45	円形	22	21	18	455.42		A	●		
SP135	-55.54	-15.72	椭円形	30	25	12	455.50		B			
SP136	-55.32	-15.70	椭円形	41	36	28	455.34		A			
SP137	-55.93	-13.12	円形	23	22	11	455.49		A			
SP138	-56.00	-12.73	椭円形	31	26	10	455.50	椭円形 径12	B			
SP139	-55.78	-12.53	円形	30	26	21	455.43		B			
SP140	-55.32	-12.80	方形	27	26	27	455.32		B			

別表8のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱 痕 跡	断面形	出土遺物	備考	調査
SP141	-55.35	-13.55	円形	27	25	26	455.36		A			
SP142	-64.43	-29.58	円形	25	21	40	455.14		A			
SP143	-64.14	-29.69	橢円形	34	26	32	455.22		C-2		SB21柱穴 SX18>SP143	
SP144	-54.54	-13.72	円形	18	16	14	455.44		A			
SP145						0					欠番	
SP146	-54.68	-14.84	橢円形	26	24	20	455.43		B			
SP147	-54.82	-15.24	円形	16	14	5	455.54		B		SP147+SP148	
SP148	-54.75	-15.42	円形	22	19	10	455.49		B		SP147+SP148	
SP149						0					欠番	
SP150	-54.53	-15.38	橢円形	20	14	14	455.43		B			
SP151	-54.42	-15.09	橢円形	45	30	21	455.38		B			
SP152	-54.28	-15.38	円形	24	20	18	455.41		A			
SP153	-54.42	-15.58	橢円形	25	20	22	455.38		B			
SP154	-54.70	-16.38	橢円形	40	30	13	455.47		A			
SP155	-54.85	-17.40	円形	22	21	11	455.48		C-2			
SP156	-54.60	-17.28	円形	30	30	16	455.45	円形 径12	B	●	SB28柱穴 SP156>SP157	
SP157	-54.35	-17.53	方形	33	31	17	455.44		A			
SP158	-54.21	-17.55	円形	23	23	20	455.40		A		SB26柱穴 SP156・SP158>SP157	
SP159	-54.22	-16.84	橢円形	42	26	16	455.42		B			
SP160	-54.11	-16.38	円形	27	26	13	455.46		A		SB25柱穴	
SP161	-54.44	-13.22	橢円形	40	29	23	455.35		C-2	●	SB26柱穴	
SP162	-66.00	-29.20	円形	26	20	50	455.01		A		SB21柱穴 SX18>SP162	
SP163						0					欠番	
SP164	-55.11	-28.04	円形	22	20	28	455.26		A		SA26柱穴 SI11>SP164	
SP165	-55.56	-27.62	円形	26	24	29	455.20		B		SI11>SP165	
SP166	-53.85	-12.50	円形	30	25	24	455.33		A			
SP167	-53.78	-12.92	橢円形	40	31	13	455.42		E			
SP168	-56.12	-27.89	円形	30	25	15	455.30		C-2		SI11>SP168	
SP169	-53.46	-13.18	方形	36	30	17	455.41		A			
SP170	-53.54	-13.58	円形	20	18	15	455.44		B			
SP171	-53.16	-13.44	橢円形	22	20	13	455.47		B			
SP172	-53.38	-13.74	円形	38	36	14	455.43	円形 径15	A		欠番	
SP173						0						
SP174	-53.08	-14.08	円形	30	30	34	455.25		A			
SP175	-52.98	-14.58	橢円形	36	30	8	455.51		C-2		SB28柱穴	
SP176	-53.72	-15.34	橢円形	34	26	12	455.47		B			
SP177	-53.32	-15.80	橢円形	45	32	27	455.31		A			
SP178	-53.02	-15.36	円形	24	22	15	455.42		B	●		
SP179	-52.95	-15.62	円形	22	20	11	455.45		B			
SP180	-52.90	-15.94	橢円形	40	34	23	455.35		C-2	●	SB27柱穴	
SP181	-52.72	-16.29	橢円形	29	25	21	455.36		A		SB28柱穴	
SP182	-56.13	-15.70	橢円形	30	24	18	455.43		A			
SP183	-53.30	-15.86	円形	26	23	15	455.41		A			
SP184	-53.68	-16.46	円形	23	23	16	455.42		B			
SP185	-53.80	-17.25	不整形	33	28	24	455.34		B			
SP186	-53.54	-17.42	円形	24	23	23	455.33	円形 径13	B		SP186>SP187	
SP187	-53.43	-17.46	円形	20	13	5	455.50		A			SP186>SP187
SP188	-53.23	-17.23	橢円形	31	26	0						
SP189	-52.46	-17.61	橢円形	34	28	21	455.38		C-1			
SP190	-52.36	-17.34	橢円形	38	30	24	455.34		B		SB26柱穴	
SP191	-52.38	-17.00	橢円形	38	30	20	455.38		A		SB25柱穴	
SP192	-51.92	-17.35	円形	29	25	13	455.42		A	●		
SP193	-51.62	-17.44	円形	32	28	15	455.42		A			
SP194	-51.00	-16.12	円形	45	38	30	455.26		A			
SP195	-51.42	-15.58	円形	24	21	12	455.45		A			SP195>SP196
SP196	-51.62	-15.56	円形	30	30	17	455.38		B			
SP197						0					欠番	
SP198	-51.70	-15.18	円形	29	26	16	455.40		A			
SP199						0					欠番	
SP200	-52.38	-15.30	橢円形	24	35	21	455.35		A		SP201>SP200	
SP201	-52.36	-15.05	不整形	48	41	32	455.26		A		SB26柱穴 SP201>SP200	
SP202	-51.54	-14.64	円形	23	20	11	455.46		—			
SP203	-51.92	-14.36	円形	34	32	28	455.31		A			
SP204	-52.10	-14.20	円形	19	19	9	455.52		A			
SP205	-51.42	-13.72	方形	26	26	23	455.36		A			
SP206	-51.91	-13.74	円形	23	23	12	455.47		A			
SP207						0					欠番	
SP208						0					欠番	
SP209						0					欠番	
SP210	-52.34	-13.35	橢円形	43	38	17	455.43		B		SP211>SP210	

別表8のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱 痕 跡	断面形	出土遺物	備考	調査
SP211	-52.60	-13.10	楕円形	45	28	18	455.39		A		SB25柱穴 SP211>SP210	
SP212						0					欠番	
SP213	-66.00	-24.00	円形	26	20	26	455.30		A			
SP214	-51.96	-12.35	円形	34	31	27	455.29		A		SK46>SP214	
SP215	-51.25	-12.70				15	455.41		A			
SP216	-50.48	-14.93	楕円形	30	15	23	455.35		A			
SP217	-50.75	-14.32	楕円形	35	28	24	455.35		A		SP218>SP216	
SP218	-50.62	-15.04	不整形	48	35	35	455.23		B			
SP219	-50.40	-15.56	楕円形	25	20	8	455.46		A		SB26柱穴 SP218>SP216	
SP220	-50.03	-15.40	円形	25	23	13	455.44	円形 疵20	C-2			
SP221	-50.36	-17.01	楕円形	44	38	34	455.19		A		SB25柱穴	
SP222	-49.46	-17.41	円形	37	36	11	455.42	円形 疵12	A		SP222>SN14・SP223	
SP223	-49.52	-17.18	円形	50	40	9	455.44		A		SP222>SP223	
SP224	-49.20	-17.06	円形	39	23	18	455.35		A			
SP225	-48.38	-16.84	円形	28	24	35	455.19		A			
SP226	-47.98	-16.11	円形	26	26	9	455.44		A		SA27柱穴	
SP227	-48.76	-16.22	円形	28	28	10	455.44		C-2			
SP228	-49.12	-16.18	円形	25	25	16	455.36		B			
SP229	-49.36	-16.20	円形	20	18	18	455.35		B			
SP230	-49.86	-16.20	楕円形	30	26	10	455.44		C-2			
SP231	-48.65	-15.08	楕円形	40	30	27	455.28		A		SA27柱穴	
SP232	-49.98	-14.53	円形	26	26	16	455.41		C-2		SB26柱穴 SP231>SP244	
SP233	-49.88	-13.90	円形	25	25	10	455.47		A			
SP234	-49.92	-12.76	円形	25	23	19	455.39		A			
SP235	-49.45	-13.31	楕円形	46	40	23	455.34		A			
SP236	-48.56	-13.11	円形	28	25	18	455.38		A		SB26柱穴	
SP237	-43.12	-14.00	楕円形	40	25	14	455.29		B			
SP238	-47.72	-14.12	楕円形	32	20	18	455.38		B			
SP239	-49.51	-13.65	円形	22	21	10	455.46		A			
SP240	-47.14	-13.94	円形	24	24	17	455.36		B			
SP241	-46.80	-13.20	円形	34	34	26	455.32		A		SB26柱穴	
SP242	-46.14	-13.08	方形	28	28	17	455.36		A		SA26柱穴 地上に礫	
SP243	-46.76	-14.04	円形	31	28	18	455.33		B		SB26柱穴	
SP244	-48.40	-15.10	楕円形	30	23	18	455.34		A		SP231>SP244	
SP245	-47.38	-16.02	円形	27	25	19	455.32		B			
SP246	-46.92	-15.88	楕円形	40	35	20	455.32		B			
SP247	-46.20	-15.96	円形	33	30	17	455.35		A		SA27柱穴 SP247>SP102	
SP248	-46.70	-17.54	円形	37	36	11	455.42		A		SA26柱穴	
SP249	-46.00	-18.00	円形	30	30	19	455.34		A			
SP250	-45.08	-16.70	円形	25	23	12	455.40		C-2			
SP251	-44.50	-15.65	円形	31	26	14	455.37		C-2			
SP252	-44.75	-15.58	円形	25	21	10	455.42		B		SP253>SP252	
SP253	-44.92	-15.14	円形	35	34	18	455.34		B		SP253>SP252	
SP254	-65.75	-19.18	楕円形	34	26	14	455.46		B		SB21柱穴 SB21	
SP255	-65.52	-19.20	円形	20	15	11	455.50		B		SP255>SP256	
SP256	-65.34	-18.95	楕円形	20	16	18	455.48		B		SP255>SP256	
SP257	-65.25	-19.60	円形	41	38	24	455.40		A			
SP258	-65.37	-21.93	楕円形	45	35	17	455.46		A		SB23柱穴 SB23	
SP259	-65.25	-22.16	楕円形	27	22	19	455.43		B		SB23柱穴	
SP260	-64.70	-23.45	楕円形	45	53	12	455.48		A		SB21柱穴	
SP261	-64.28	-19.85	円形	20	18	7	455.57		B			
SP262	-64.37	-22.26	円形	24	24	13	455.49		B		SA25柱穴	
SP263	-64.25	-21.57	円形	37	34	32	455.31		A		SB21柱穴	
SP264	-63.90	-21.38	楕円形	32	25	10	455.54		C-2			
SP265	-64.25	-20.70	円形	32	30	17	455.47		A		SB22柱穴	
SP266	-64.28	-20.41	楕円形	26	22	17	455.47		A		SA25柱穴	
SP267	-64.24	-18.62	円形	35	30	21	455.45		A		SB22柱穴 SP268>SP267	
SP268	-64.32	-18.40	円形	26	23	30	455.38		A		SA25柱穴 SP268>SP267	
SP269	-63.75	-19.13	円形	30	29	7	455.59		D			
SP270	-63.85	-19.60	楕円形	36	30	15	455.51		B			
SP271	-63.50	-19.76	円形	22	18	64	55.60		B			
SP272	-65.54	-20.06	円形	35	33	25	455.41	円形 疵14	B		SP273>SP272	
SP273	-65.51	-20.31	楕円形	22	16	14	455.52		B		SP273>SP272	
SP274	-63.50	-20.82	円形	27	26	19	455.45		B			
SP275	-63.50	-21.35	楕円形	40	22	11	455.51		C-2			
SP276	-63.30	-21.79	楕円形	25	18	8	455.53		B			
SP277	-63.11	-21.40	円形	26	26	10	455.53		C-2			
SP278	-63.41	-22.45	円形	26	24	16	455.46		C-2			
SP279	-62.98	-22.33	円形	32	25	17	455.45		C-2			
SP280	-63.00	-22.00	円形	42	35	16	455.47	円形 疵16	A		SP280>SP279>SP282	
											SB23柱穴 SP280>SP279>SP282	

別表8 のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱痕跡	断面形	出土遺物	備考	調査
SP281	-53.80	-25.14	円形	28	25	10	455.25		B	SI 11 > SP281		
SP282	-63.06	-22.00	円形	30	22	22	455.40		A	SP280 > SP279 > SP282		
SP283	-62.26	-21.88	円形	33	33	25	455.40		C-2	SP283 > SP307		
SP284	-61.88	-20.90	円形	26	24	21	455.42		A	SP284 > SP285		
SP285	-62.10	-20.90	楕円形	47	30	29	455.34		A	SP284 > SP286 > SP285		
SP286	-62.23	-20.69	円形	28	25	18	455.47		B	SB22柱穴 SP286 > SP285		
SP287	-54.61	-24.67	楕円形	46	34	16	455.36		A	SI 11 > SP288 > SP287		
SP288	-54.81	-24.65	楕円形	33	18	64	454.90	円形 径12	A	SI 11柱穴 SP288 > SP287		
SP289	-62.00	-20.22	円形	40	35	18	455.50		B	SP289 > SP300		
SP290						0				欠番		
SP291						0				欠番		
SP292						0				欠番		
SP293						0				欠番		
SP294	-62.74	-23.90	楕円形	35	25	22	455.42		B	SP294 > SP295		
SP295	-62.72	-23.73	楕円形	34	16	18	455.49		B	SB21柱穴 SP294 > SP295		
SP296						0				欠番		
SP297						0				欠番		
SP298						0				欠番		
SP299						0				欠番		
SP300	-61.90	-20.14	円形	36	35	24	455.42		C-2	SB21柱穴 SP289 > SP300		
SP301	-62.68	-20.52	円形	20	19	13	455.52		B			
SP302	-62.82	-19.77	円形	30	28	13	455.43		A	SB23柱穴		
SP303	-63.11	-19.02	楕円形	30	25	18	455.47		B			
SP304	-53.77	-26.51	円形	21	16	3	455.47		B	SI 11 > SP304		
SP305	-63.28	-18.78	円形	16	16	9	455.56		B			
SP306	-63.45	-18.38	円形	16	16	9	455.57		B			
SP307	-62.32	-21.98	円形	33	27	22	455.43		B	SB21柱穴 SP283 > SP307		
SP308	-62.00	-18.54	円形	25	23	22	455.46		A	SB22柱穴		
SP309	-62.00	-19.00	楕円形	29	24	34	455.30		A	SB24柱穴		
SP310	-59.30	-18.20	円形	25	25	11	455.60		C-2			
SP311	-59.34	-18.75	円形	26	25	20	455.49		B	▲		
SP312	-60.00	-19.93	円形	26	23	25	455.42		B	●■	SB23柱穴	
SP313	-60.42	-19.98	円形	34	31	31	455.38		A	SP314 > SX24		
SP314	-58.15	-22.25	円形	26	25	16	455.46		—	SB24柱穴 SP315 > SX23		
SP315	-60.15	-17.05	円形	28	28	33	455.37		B	SB22・SA21柱穴 SP316 > SP317		
SP316	-60.05	-20.60	円形	27	24	25	455.39		A	SB21柱穴 SP316 > SP317		
SP317	-60.02	-20.45	方形	35	25	17	455.45		A	SX15 > SP318		
SP318	-56.00	-23.24	楕円形	49	39	13	455.37		C-2	SA24柱穴		
SP319	-59.65	-20.85	円形	25	23	11	455.51		A			
SP320	-59.40	-20.53	方形	21	21	11	455.55		B			
SP321	-60.11	-21.32	円形	34	29	17	455.47		A			
SP322	-60.58	-22.18	円形	35	35	27	455.36		A	SB21・SB23柱穴		
SP323	-60.10	-22.45	楕円形	32	26	22	455.38		C-2			
SP324	-58.54	-20.70	円形	28	26	0			B	●		
SP325	-58.20	-20.84	円形	33	30	21	455.41	円形 径16	A			
SP326	-58.02	-20.18	円形	35	35	30	455.35		A	SP326 > SK49		
SP327	-58.48	-19.98	円形	28	26	0			B			
SP328	-58.12	-19.82	楕円形	38	32	25	455.39		B	SP328 > SK49		
SP329	-58.15	-19.26	円形	30	30	25	455.39		A			
SP330						0				欠番		
SP331						0				欠番		
SP332						0				欠番		
SP333						0				欠番		
SP334						0				欠番		
SP335						0				欠番		
SP336						0				欠番		
SP337						0				欠番		
SP338						0				欠番		
SP339						0				欠番		
SP340	-57.38	-20.48	円形	27	25	28	455.39		C-2	SA21柱穴 SP340 > SK49		
SP341	-57.42	-18.51	円形	32	30	21	455.45		A	SP342 > SP341		
SP342	-57.30	-18.26	円形	26	26	22	455.47		C-1	SP342 > SP341		
SP343	-56.77	-18.88	円形	25	23	15	455.48		B			
SP344	-56.58	-18.38	円形	28	28	20	455.44		A	SB28柱穴		
SP345	-56.02	-17.98	円形	20	20	19	455.43		C-2			
SP346	-55.70	-18.50	円形	30	26	6	455.53		A			
SP347	-55.45	-18.02	円形	34	34	36	455.28		C-2	SB27柱穴		
SP348	-55.15	-17.78	円形	21	20	9	455.50		B			
SP349	-55.70	-17.52	円形	36	36	14	455.47		A	SP350 > SP349		
SP350	-55.52	-20.32	円形	36	33	19	455.40		B	SB27柱穴 SP350 > SP349		

別表 8 のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱	痕跡	断面形	出土遺物	備考	調査
SP351	-55.66	-22.62	楕円形	40	28	19	455.44		B		SB27柱穴		
SP352	-55.16	-23.80	円形	33	28	18	455.40		A				
SP353	-54.72	-23.20	円形	26	24	12	455.45		B				
SP354	-54.51	-23.24	楕円形	20	15	16	455.43		円形 痕9		B		
SP355						0							
SP356	-53.98	-22.60	円形	18	15	8	455.50		A		欠番		
SP357	-53.80	-22.48	楕円形	48	30	15	455.44		A		SP357>SP356		
SP358	-53.24	-22.74	円形	36	36	17	455.42		A		SP357>SP356		
SP359	-54.45	-22.15	円形	35	32	28	455.31		A	●○	SB27柱穴		
SP360	-54.44	-21.15	円形	27	24	28	455.31		B		SB28柱穴 SP360>SP361		
SP361	-54.55	-21.02	方形	24	20	9	455.49		A		SP360>SP361		
SP362	-58.95	-20.75	楕円形	40	31	25	455.34		B		SA24柱穴		
SP363	-54.30	-20.50	円形	24	21	0			B		SP363>SP364		
SP364	-54.55	-20.50	楕円形	48	30	0			A		SP363>SP365>SP364		
SP365	-54.78	-20.44	楕円形	38	36	14	455.47		C-2		SA21柱穴 SP365>SP364		
SP366	-54.32	-19.75	円形	32	28	22	455.37		B	●■	SB25柱穴		
SP367	-54.25	-19.26	円形	31	25	31	455.28		A		SB26柱穴 SK50≠SP367		
SP368	-54.85	-18.65	不整形	34	32	17	455.39		A	●	SK50+SP368		
SP369	-54.15	-18.76	不整形	35	28	15	455.33		A		SK50+SP369		
SP370	-53.30	-18.22	円形	38	38	18	455.40		C-1		SP370>SP371		
SP371	-52.98	-18.28	方形	40	35	18	455.40		A		SB27柱穴 SP370+SP372>SP371		
SP372	-52.88	-18.28	円形	41	40	26	455.34		C-2		SB28柱穴 SP372>SP371		
SP373	-52.43	-19.18	楕円形	35	28	20	455.38		A		SB25柱穴		
SP374	-52.34	-19.74	円形	34	28	22	455.37		C-2	▲	SB25柱穴		
SP375	-52.60	-20.04	楕円形	40	26	23	455.34		A	●●●	SB28柱穴		
SP376	-53.06	-20.52	円形	38	37	36	455.23		A		SB27+SA22柱穴		
SP377	-52.65	-21.10	楕円形	30	23	25	455.33		A	●	SB28柱穴		
SP378	-52.36	-22.15	円形	32	31	14	455.41		B		SB28柱穴		
SP379	-51.64	-23.00	方形	28	27	0			B		SB29柱穴		
SP380	-51.54	-21.88	楕円形	37	30	2	455.53		A				
SP381	-51.52	-20.90	楕円形	52	36	22	455.35		A		SB25柱穴 SP382>SP381		
SP382	-51.68	-20.65	楕円形	36	26	10	455.48		A		SP382>SP381		
SP383	-52.10	-20.63	不整形	43	32	22	455.38		C-1		SA24柱穴 SP383>SP384		
SP384	-52.36	-20.62	円形	27	25	12	455.48		A	●■	SA21柱穴 SP383>SP384		
SP385	-51.72	-20.15	円形	30	20	14	455.46		A		SP386>SP385		
SP386	-51.55	-19.98	楕円形	40	24	19	455.41		C-2		SP386>SP385		
SP387	-51.52	-19.28	楕円形	35	27	9	455.50		B		SP387>SK33		
SP388	-50.32	-17.89	円形	30	25	20	455.34		A				
SP389	-50.34	-18.28	円形	28	24	21	455.34		B				
SP390						0							
SP391	-53.20	-25.80	円形	38	32	15	455.46		B		欠番		
SP392	-60.00	-24.30	不整形	27	16	11	455.50		A		SB21柱穴		
SP393	-60.00	-28.94	円形	25	25	13	455.26		B		SP451>SP392>SP450		
SP394	-60.60	-27.44	円形	17	16	12	455.39		B		SA23柱穴 SX17>SP393		
SP395	-59.10	-29.18	円形	20	20	15	455.33		B		SX17>SP395		
SP396	-58.90	-27.85	円形	22	22	23	455.31		B		SX17>SP396		
SP397	-57.50	-28.72	楕円形	57	40	11	455.39		A		SX17>SP397		
SP398	-56.42	-27.70	円形	24	24	16	455.29		B		S111>SP398>SP687		
SP399						0					欠番		
SP400	-50.35	-18.86	円形	31	27	23	455.32		A	●	SB25柱穴		
SP401	-50.42	-19.78	円形	34	34	13	455.43		A		SA22柱穴		
SP402	-50.08	-19.86	円形	25	25	13	455.43		B		欠番		
SP403	-50.68	-20.52	円形	36	32	28	455.30		A		SA24柱穴 埋土に疊3		
SP404						0					SA21柱穴		
SP405	-50.24	-20.66	円形	32	28	30	455.26		A	●■	SH29柱穴		
SP406	-49.58	-20.57	円形	33	28	19	455.37		A				
SP407	-49.70	-21.10	楕円形	45	36	14	455.41		A				
SP408	-49.40	-20.92	楕円形	25	21	19	455.36		B				
SP409	-50.08	-22.35	楕円形	45	34	24	455.38		B				
SP410	-49.78	-22.44	円形	26	24	17	455.43		B				
SP411	-49.76	-22.75	円形	24	22	8	455.43		B				
SP412	-49.64	-23.36	円形	26	24	12	455.41		B				
SP413	-49.36	-22.66	楕円形	40	30	10	455.43		A				
SP414	-48.98	-22.84	楕円形	43	25	13	455.40		A				
SP415	-48.85	-22.65	楕円形	50	40	19	455.32		C-2				
SP416	-48.85	-22.35	円形	30	28	16	455.35		B				
SP417	-65.55	-24.10	円形	38	35	21	455.37		A				
SP418	-49.48	-22.18	円形	30	25	15	455.41		A				
SP419	-48.84	-20.90	楕円形	38	33	28	455.27		B				
SP420	-49.62	-19.20	楕円形	35	30	13	455.41		A				

別表8のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱 真跡	断面形	出土遺物	備 考	調査
SP421	-48.25	-20.72	円形	43	43	12	455.41		C-2		SA22柱穴	
SP422	-47.84	-21.00	橢円形	30	24	15	455.38		C-1			
SP423	-47.84	-21.81	方形	32	28	28	455.25		B			
SP424	-54.50	-26.84	円形	45	40	64	454.86		A	▲	SII 11柱穴	
SP425	-46.96	-20.38	橢円形	40	30	19	455.33		C-1		SP425>SP426	
SP426	-46.85	-20.03	橢円形	35	28	12	455.40		B		SP425>SP426	
SP427	-45.91	-19.96	円形	27	25	9	455.46		A	●	SA26柱穴	
SP428	-46.88	-21.35	円形	27	25	15	455.35		A			
SP429						0					欠番	
SP430	-46.46	-23.14	円形	20	20	10	455.39		B			
SP431						0					欠番	
SP432	-45.92	-20.84	円形	24	22	11	455.43		B		SA22柱穴	
SP433	-58.80	-13.70	円形	25	25	15	455.50		A			
SP434	-59.10	-13.55	橢円形	53	44	15	455.50		A			
SP435	-65.18	-25.30	円形	40	39	17	455.42		A			
SP436	-60.96	-15.25	円形	26	26	12	455.45		B			
SP437	-63.23	-25.03	円形	21	20	11	455.51		B			
SP438	-63.15	-24.70	橢円形	27	25	10	455.49		C-2			
SP439	-63.08	-24.32	橢円形	43	36	21	455.38		A			
SP440	-61.46	-25.74	橢円形	37	30	20	455.28		A		SB23柱穴	
SP441	-61.65	-26.04	円形	29	26	9	455.39		A		SB21柱穴	
SP442	-66.90	-26.34	橢円形	47	25	19	455.28		A			
SP443	-62.48	-27.05	円形	32	29	19	455.30		B			
SP444	-62.70	-28.02	円形	30	26	15	455.38		A		SB21柱穴	
SP445	-62.78	-28.28	円形	21	20	16	455.35		A			
SP446	-62.28	-28.14	橢円形	45	26	26	455.23		A			
SP447	-61.18	-29.34	円形	29	26	20	455.18		A			
SP448	-60.56	-29.28	円形	26	26	24	455.16		A			
SP449	-60.84	-24.14	円形	26	26	7	455.41		A			
SP450	-60.70	-24.46	円形	32	30	30	455.31		A			
SP451	-60.55	-24.15	円形	26	21	6	455.56		A			
SP452	-60.34	-24.40	円形	30	29	21	455.40		A			
SP453	-60.20	-24.70	円形	17	16	15	455.46		B			
SP454	-60.00	-24.58	橢円形	23	19	12	455.49		C-2			
SP455	-60.06	-26.33	円形	32	30	27	455.30		A	■		
SP456	-56.87	-24.58	円形	30	30	22	455.30		A	●	SB21柱穴 SX18>SP456>SP471	
SP457	-63.70	-27.70	円形	26	25	43	455.06		A		SII 11柱穴 SP456>SP558>SP458	
SP458	-56.65	-24.84	円形	50	44	56	454.96		A			
SP459	-59.86	-26.54	円形	16	16	6	455.46		A			
SP460	-56.20	-27.38	円形	23	21	21	455.27		B			
SP461	-55.14	-24.98	円形	22	20	0			B		SII 11>SP460	
SP462	-51.96	-25.94	円形	24	22	25	455.20		A	●	SII 11>SP461	
SP463	-53.75	-29.98	円形	23	23	0			A		SII 11>SP462	
SP464	-44.45	-27.50	橢円形	40	32	19	455.11		A			
SP465	-44.66	-27.50	橢円形	13	19	6	455.24		A			
SP466	-44.35	-28.42	橢円形	40	33	17	455.13		B			
SP467						0					欠番	
SP468	-44.26	-29.82	橢円形	30	23	28	455.03		B			
SP469	-44.04	-29.76	円形	23	20	7	455.15		B			
SP470	-64.50	-25.85	円形	30	24	0			—			
SP471	-63.92	-27.62	円形	27	27	0			A			
SP472	-64.90	-28.98	円形	30	23	6	455.38		A			
SP473	-61.50	-31.55	不規形	20	29	38	455.08		B			
SP474	-64.30	-31.60	円形	30	20	0			B			
SP475	-65.38	-31.58	円形	20	16	17	455.32		B			
SP476	-64.96	-32.75	橢円形	23	18	11	455.27		B			
SP477	-65.02	-33.31	橢円形	26	21	11	455.21		B			
SP478	-60.68	-32.48	円形	20	20	0			B			
SP479	-61.13	-32.24	橢円形	28	23	13	455.31		C-2	●▲	根固め石1	
SP480	-56.00	-27.00	橢円形	37	32	26	455.25		B			
SP481	-54.56	-31.38	橢円形	26	21	13	455.33		B			
SP482	-54.48	-30.58	円形	22	21	22	455.27		B			
SP483	-50.60	-30.12	橢円形	30	21	11	455.31		B			
SP484	-46.32	-30.98	橢円形	30	26	8	455.32		C-2			
SP485	-45.55	-31.22	橢円形	50	28	15	455.24		B			
SP486	-46.17	-33.37	円形	27	25	16	455.11		A			
SP487	-45.98	-34.04	円形	25	22	15	455.12		A			
SP488	-62.86	-27.06	橢円形	30	23	11	455.33		A			
SP489	-59.70	-13.55	円形	29	29	29	455.24		A			
SP490	-58.20	-13.30	橢円形	83	60	48	455.18		A		SII 11・SP665>SP489	

別表8 のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱痕跡	断面形	出土遺物	備考	測査
SP491	-56.35	-22.22	円形	30	25	19	455.25		B	▲	SB28柱穴 SX15>SP491	
SP492						0					欠番	
SP493	-64.77	-29.76	橢円形	33	25	27	455.17		A			
SP494						0					欠番	
SP495						0					欠番	
SP496						0					欠番	
SP497						0					欠番	
SP498						0					欠番	
SP499						0					欠番	
SP500	-58.96	-29.68	円形	25	22	7	455.33		A		SX17>SP500	
SP501	-58.95	-29.34	円形	28	26	15	455.25		A		SX17>SP501	
SP502	-58.72	-29.58	円形	22	22	7	455.33		A		SX17>SP502	
SP503	-57.75	-29.84	円形	28	26	18	455.26		A	●	埋土に疊1	
SP504	-58.08	-29.25	円形	27	27	23	455.21		A	●	SA23柱穴 SX17>SP504	
SP505	-59.15	-28.50	円形	32	29	21	455.30		A	●	SX17>SP505	
SP506	-58.58	-28.76	円形	18	18	15	455.23		B		SX17>SP506	
SP507	-58.16	-28.78	円形	25	23	21	455.19		A		SH30柱穴 SX17>SP507	
SP508	-58.65	-27.69	橢円形	41	26	9	455.49		B	●	SX17>SP508	
SP509	-59.02	-27.56	円形	32	28	25	455.32		A	●	SX17>SP509	
SP510	-59.32	-27.70	円形	25	25	22	455.32		A		SX17>SP510	
SP511	-59.17	-27.32	円形	21	19	8	455.47		B			
SP512	-58.82	-26.70	橢円形	40	20	23	455.34		A		SP690>SP512・SP691>SP592	
SP513	-58.03	-27.53	円形	18	16	11	455.48		B			
SP514	-57.68	-27.90	円形	22	20	29	455.30		A			
SP515	-57.44	-27.68	橢円形	30	28	22	455.40	円形 径14	B			
SP516	-57.35	-27.37	橢円形	27	20	10	455.48		A		SP516>SP517	
SP517	-57.50	-27.25	円形	23	21	17	455.46		C-1	●●	SP516>SP517	
SP518	-56.65	-26.90	円形	48	42	73	454.81		A	●●	SI11柱穴	
SP519	-57.69	-26.56	円形	26	23	8	455.50		B			
SP520	-58.04	-26.72	円形	26	24	12	455.48		B		SB30柱穴	
SP521	-57.72	-25.23	橢円形	41	26	20	455.39		A		SP522>SI11	
SP522	-57.58	-24.72	橢円形	32	28	17	455.41		A	●●		
SP523	-58.38	-24.66	橢円形	42	36	13	455.45		A	●●		
SP524	-56.92	-29.32	円形	37	35	34	455.20	円形 径14	B			
SP525	-56.60	-29.16	橢円形	40	30	16	455.42		B		SB30柱穴	
SP526	-56.08	-28.83	橢円形	43	34	27	455.31		A	▲		
SP527	-56.12	-28.37	橢円形	38	31	28	455.28		B		欠番	
SP528						0					SI11>SP529	
SP529	-55.64	-28.12	橢円形	48	33	16	455.41		B			
SP530	-55.62	-28.47	円形	22	22	20	455.37		B			
SP531	-55.35	-28.55	橢円形	32	21	17	455.41		B			
SP532	-55.56	-29.12	橢円形	38	23	29	455.30		A	●		
SP533	-55.78	-29.38	橢円形	30	24	28	455.33		B		SA23柱穴	
SP534	-54.34	-29.42	円形	27	24	27	455.31		C-2		SA23柱穴	
SP535	-54.72	-28.64	橢円形	29	22	21	455.35		C-2			
SP536	-54.52	-28.32	円形	24	23	9	455.47		A			
SP537	-53.60	-29.76	橢円形	30	23	46	455.04		B			
SP538	-52.91	-29.21	円形	19	16	18	455.37		B			
SP539	-52.78	-29.39	円形	19	18	26	455.28		C-2			
SP540	-53.54	-28.38	橢円形	18	14	13	455.46		B			
SP541	-53.52	-28.18	円形	17	17	15	455.44		B			
SP542	-53.14	-28.08	円形	37	36	22	455.37		B	●●	SB29・SA23柱穴	
SP543	-52.92	-28.26	円形	26	24	25	455.30		B	●●		
SP544	-52.20	-29.58	橢円形	37	28	15	455.41		B			
SP545	-51.60	-29.16	円形	26	25	29	455.28		B			
SP546	-51.88	-28.93	橢円形	32	26	11	455.45		A			
SP547	-53.00	-27.46	円形	23	20	18	455.41		B			
SP548	-52.20	-27.25	円形	20	19	17	455.42		A		SP548>SP549	
SP549	-52.37	-27.27	円形	19	19	22	455.38		B		埋土に疊1 SP548>SP549	
SP550	-57.90	-27.50	橢円形	47	27	21	455.36		B		SB29柱穴	
SP551	-52.25	-27.54	円形	34	28	14	455.46		A			
SP552	-51.75	-27.11	円形	34	26	6	455.43		B			
SP553	-51.55	-26.47	円形	28	25	20	455.38		B	●●		
SP554						0					欠番	
SP555	-52.00	-25.25	橢円形	59	43	15	455.46		A		SB29柱穴	
SP556	-52.84	-25.00	橢円形	35	23	16	455.47		A			
SP557	-49.65	-24.68	橢円形	35	21	7	455.44		B			
SP558	-56.40	-24.66	円形	21	20	15	455.38		A		SI11>SP558>SP458	
SP559	-49.77	-24.99	橢円形	18	14	8	455.42		B			
SP560	-49.80	-25.45	橢円形	35	23	19	455.36		B		SB29柱穴	

別表 8 のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱痕跡	断面形	出土遺物	備考	調査
SP561	-50.20	-26.52	円形	25	23	17	455.36	B				
SP562	-49.89	-27.70	椭円形	32	21	19	455.36	B			SB29柱穴	
SP563	-49.70	-28.12	椭円形	26	19	12	455.43	B	▲			
SP564	-49.74	-28.41	円形	20	18	10	455.48	B			SI 11>SP565	
SP565	-57.45	-25.62	円形	33	30	25	455.32	B	●■■■			
SP566	-50.73	-29.73	椭円形	29	25	14	455.43	A				
SP567	-50.21	-29.51	円形	16	15	9	455.48	B				
SP568	-50.12	-29.72	椭円形	33	26	19	455.37	C-2			SB29柱穴	
SP569	-50.02	-28.08	円形	33	31	19	455.36	B				
SP570	-48.30	-27.34	椭円形	35	16	12	455.41	B				
SP571	-56.80	-25.55	椭円形	30	25	0					SI 11>SP571	
SP572						0					欠番	
SP573	-47.36	-25.35	円形	27	27	11	455.37	D				
SP574						0					欠番	
SP575						0					欠番	
SP576	-54.09	-28.11	方形	32	27	29	455.26	円形 径16	A	●▲		
SP577	-56.92	-25.94	円形	31	27	29	455.21	A				
SP578	-62.26	-28.33	椭円形	31	23	10	455.32	A			SI 11>SP577	
SP579	-47.70	-29.63	円形	27	23	17	455.37	B				
SP580	-46.30	-29.50	円形	26	23	11	455.39	B				
SP581	-45.89	-28.63	方形	25	24	14	455.39	A				
SP582	-45.28	-28.18	円形	22	20	23	455.35	B				
SP583	-45.06	-26.65	椭円形	26	16	16	455.31	B				
SP584						0					欠番	
SP585	-66.00	-31.58	椭円形	30	24	24	455.24	B				
SP586	-64.98	-32.12	円形	33	31	36	455.11	B				
SP587	-64.90	-33.00	椭円形	27	22	22	455.14	B				
SP588	-64.94	-34.28	方形	30	28	18	455.18	A				
SP589	-64.52	-34.18	円形	26	26	39	454.98	B				
SP590	-65.46	-30.62	円形	20	18	11	455.13	B			SK36>SP590	
SP591						0					欠番	
SP592	-64.94	-31.06	円形	22	22	27	455.21	B			SP592>SP593	
SP593	-65.00	-31.30	椭円形	35	30	21	455.26	A			SP592>SP593	
SP594	-64.55	-31.40	不整形	30	15	0		B			SP047>SP594>SP474	
SP595	-63.13	-30.18	円形	25	22	20	455.16	A				
SP596	-63.80	-30.75	円形	26	23	21	455.16	A				
SP597	-63.75	-31.60	円形	28	24	30	455.19	B				
SP598	-63.08	-31.95	円形	26	26	29	455.15	A	□			
SP599	-62.04	-31.21	円形	26	25	22	455.24	B				
SP600	-62.24	-31.59	円形	28	25	35	455.11	A				
SP601	-62.54	-31.47	円形	25	23	23	455.24	B				
SP602	-62.51	-31.80	椭円形	30	26	8	455.31	A			SB21柱穴	
SP603	-62.45	-32.38	椭円形	37	25	11	455.32	C-2				
SP604	-62.80	-32.62	円形	30	26	29	455.12	B				
SP605	-62.42	-33.25	円形	25	23	18	455.20	A			SP606+SP610	×
SP606	-61.48	-30.26	円形	29	25	16	455.22	A				
SP607	-62.53	-34.89	円形	23	19	18	455.15	B				
SP608	-61.38	-33.74	円形	25	23	19	455.24	B				
SP609	-61.02	-31.10	円形	26	25	23	455.15	B				
SP610	-61.22	-30.26	円形	30	28	13	455.24	A			SP606+SP610	×
SP611	-60.85	-30.28	椭円形	20	18	10	455.26	C-2				×
SP612	-59.50	-31.40	椭円形	46	24	39	455.10	B				×
SP613	-59.06	-30.75	円形	18	15	16	455.30	B			SP616>SP613	×
SP614						0					欠番	
SP615	-59.00	-30.98	円形	20	18	26	455.22	A				
SP616	-59.20	-30.68	円形	24	18	13	455.37	A			SP616>SP613 墓土に埋入	
SP617	-58.68	-30.26	椭円形	26	21	14	455.35	C-2				
SP618	-58.58	-30.48	円形	27	23	15	455.34	B				
SP619	-58.34	-30.70	円形	30	28	41	455.07	B	○		SB30柱穴	
SP620	-58.38	-31.14	円形	24	20	19	455.29	B				
SP621	-58.18	-31.30	円形	27	25	32	455.16	C-1				
SP622	-57.90	-30.92	円形	37	34	16	455.33	A	●			
SP623	-57.28	-30.32	椭円形	26	20	13	455.35	B				
SP624	-59.00	-31.95	椭円形	40	25	27	455.13	B				
SP625	-59.46	-32.38	椭円形	32	28	18	455.24	B				
SP626	-59.42	-32.63	椭円形	23	16	10	455.28	B			杭か?	
SP627	-59.08	-32.64	椭円形	35	28	34	455.06	A	●		SD12+SP628	
SP628	-58.70	-34.82	椭円形	27	22	10	455.21	A				
SP629	-58.22	-33.32	不整形	35	31	22	455.21	A			欠番	
SP630						0						

別表8 のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱痕跡	断面形	出土遺物	備考	調査
SP631						0						
SP632	-58.52	-32.55	橢円形	46	30	38	455.06		A	●●	SB30柱穴 SP632+SP633	
SP633	-58.60	-32.30	円形	27	26	14	455.31		A		SP632+SP633	
SP634	-56.76	-34.15	橢円形	33	26	10	455.26		A		SA28柱穴	
SP635	-56.50	-33.89	橢円形	50	34	21	455.16		C-2			
SP636	-55.28	-34.16	円形	36	33	20	455.05		C-2			
SP637	-56.38	-32.00	橢円形	35	18	0			A		SD12+SP637	
SP638	-56.64	-32.84	橢円形	34	25	19	455.20		A		SB30柱穴	
SP639	-56.82	-32.12	不整形	42	35	29	455.14		A			
SP640	-56.20	-32.35	橢円形	30	26	34	455.12		A	■■■	SA28柱穴	
SP641	-56.78	-30.32	円形	34	25	25	455.24		A			
SP642	-56.30	-30.63	円形	30	29	24	455.26		A		SB30柱穴	
SP643	-55.72	-30.22	橢円形	34	28	19	455.33		B		SA28柱穴	
SP644	-55.54	-30.63	円形	22	22	26	455.24		C-2			
SP645	-55.12	-30.68	円形	23	22	25	455.22		A			
SP646	-35.60	-31.22	円形	28	28	29	455.16		B			
SP647	-36.15	-31.35	円形	24	20	23	455.22		B			
SP648	-36.35	-31.85	円形	31	28	20	455.26		A			
SP649	-48.08	-31.22	円形	30	29	16	455.29		B			
SP650						0						
SP651	-46.26	-33.06	円形	26	22	13	455.25		B			
SP652	-45.92	-33.08	円形	30	26	16	455.21		A			
SP653	-44.84	-30.58	橢円形	43	32	16	455.26		C-2			
SP654	-44.15	-31.78	橢円形	40	32	29	455.13		B		SB29柱穴	
SP655	-55.81	-24.81	円形	39	39	18	455.38		A		SX21>SP655	
SP656	-62.45	-13.08	円形	24	21	12	455.47		B		SB23柱穴	
SP657	-62.20	-13.28	円形	25	25	62	455.12		A		SP675+SX11+SP658	
SP658	-61.91	-13.21	円形	37	37	28	455.45		B		SB24柱穴 SP675+SX11+SP65	
SP659	-65.25	-14.72	円形	33	28	33	455.35		B		SB22柱穴 SX11>SP659	
SP660	-62.08	-15.18	円形	25	21	36	455.34		B		SB24柱穴 SX11>SP660	
SP661	-59.70	-12.42	方形	25	22	8	455.51		C-1		SX11>SP661	
SP662	-60.21	-12.53	円形	25	23	13	455.41		B		SB22柱穴 SX11+SP662	
SP663	-60.10	-13.10	円形	25	15	9	455.44		A		SB23柱穴 SX11+SP664>SP663	
SP664	-60.28	-13.28	円形	32	28	30	455.23		A		SB24柱穴 SX11+SP664>SP663	
SP665	-59.76	-13.35	橢円形	36	28	31	455.25		C-2	●	SX11+SP665>SP489	
SP666	-60.05	-15.25	橢円形	44	17	19	455.40		A		SH23+SB24柱穴 SX23>SP666	
SP667	-59.25	-15.65	円形	26	23	7	455.38		A		SX12>SP667	
SP668	-58.16	-15.02	橢円形	34	27	18	455.37		A		SX12>SP668	
SP669	-57.75	-15.40	方形	33	33	32	455.34		A		SP669>SX12	
SP670	-57.68	-16.58	円形	20	19	2	455.43		B		SX12>SP670	
SP671	-57.35	-16.38	橢円形	29	22	16	455.33		A		SX12>SP671	
SP672						0						
SP673	-60.00	-15.88	円形	26	23	24	455.33		B		SB23>SP673	
SP674	-60.10	-16.62	円形	31	16	14	455.44		A		SB22柱穴 SX23>SP674	
SP675	-60.30	-17.62	円形	38	36	24	455.41		A		SB23柱穴 SX13>SP675	
SP676	-59.90	-17.54	円形	29	27	20	455.45		B		SX13>SP676	
SP677	-60.15	-18.55	円形	35	32	25	455.42		A		SB22柱穴 SX13>SP677	
SP678	-60.20	-18.98	橢円形	31	26	35	455.35		A		SB24柱穴 SX13>SP678	
SP679	-57.70	-20.85	橢円形	40	30	16	455.48		A		SA24柱穴 SP679>SK49	
SP680	-57.14	-21.15	円形	23	23	20	455.39		B	●▲		
SP681	-56.74	-21.10	円形	30	30	4	455.58		A		SP681>SK49+SK50	
SP682	-56.44	-21.18	円形	32	32	15	455.47		B		SB28柱穴	
SP683	-56.50	-20.30	円形	30	30	13	455.49		C-1		SB28柱穴 SP683>SK49	
SP684	-56.12	-20.23	円形	36	30	2	455.59		A		SP684>SK50	
SP685	-56.88	-20.24	円形	30	27	16	455.45		A		SA24柱穴	
SP686						0						
SP687	-55.58	-27.72	橢円形	24	20	19	455.28		A		S11>SP688>SP687	
SP688	-55.82	-27.73	円形	23	20	18	455.26		A		S11>SP688>SP687	
SP689	-55.00	-26.39	橢円形	21	20	27	455.19		—		S11>SP689	
SP690	-58.90	-26.88	円形	29	25	17	455.40		C-2		SP690>SP512+SP691>SP692	
SP691	-58.95	-27.18	橢円形	42	42	25	455.31		B		SP690>SP512+SP691>SP692	
SP692	-58.80	-27.04	円形	38	35	7	455.27		A		SP690>SP512+SP691>SP692	
SP693						0						
SP694						0						
SP695						0						
SP696						0						
SP697						0						
SP698						0						
SP699						0						
SP700	-27.52	-11.08	円形	23	23	12	455.14		B		SA29柱穴	

別表8 のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径	深さ	底面レベル	柱痕跡	断面形	出土遺物	備考	調査
SP701	-25.92	-11.12	楕円形	26	23	29	454.97		B		SA29柱穴	
SP702	-23.12	-9.90	楕円形	22	18	16	454.99		B			
SP703	-23.50	-10.36	楕円形	26	23	11	455.11		E			
SP704	-26.92	-11.70	円形	26	24	22	455.04	円形 径18	B		SA30柱穴	
SP705	-25.38	-11.88	円形	24	20	32	454.93		B		SA30柱穴	
SP706	-23.77	-12.06	円形	27	26	28	454.96		B		SA30柱穴	
SP707	-22.68	-13.06	円形	26	26	26	454.98	円形 径16	A		SA31柱穴	
SP708	-22.88	-11.65	楕円形	33	24	18	455.04		A		SA31柱穴	
SP709	-25.70	-14.57	不規形	27	25	18	455.07		A		SA31柱穴	
SP710	-26.15	-14.76	円形	23	21	17	455.06		A		SA29柱穴	
SP711	-25.79	-16.25	円形	29	27	18	455.07	円形 径20	A		SA31柱穴	
SP712	-28.70	-16.62	楕円形	46	30	11	455.07		B		SA32柱穴	
SP713	-38.42	-22.52	楕円形	30	25	8	455.22		—			
SP714	-34.22	-19.76	楕円形	53	46	13	455.24		B			
SP715	-34.16	-20.60	楕円形	43	32	17	455.19		B			
SP716	-26.19	-19.20	楕円形	33	25	10	454.98		A		SK54+SP716	
SP717	-28.13	-26.65	円形	22	18	15	455.07		C-2			
SP718	-34.00	-21.77	楕円形	51	31	16	455.19		D			
SP719	-31.30	-19.17	楕円形	46	37	19	455.12		C-1			
SP720	-28.65	-18.73	楕円形	35	21	8	455.13		C-2		SA32柱穴	
SP721	-35.55	-29.46	楕円形	25	21	18	455.12		B			
SP722	-25.13	-8.35	楕円形	36	28	13	455.06		A			
SP723	-24.90	-16.40	楕円形	48	34	16	455.06		B			
SP724	-23.98	-16.72	円形	26	29	29	454.90		A		SA31柱穴	
SP725	-24.24	-18.15	円形	30	28	37	454.91		B		SA31柱穴	
SP726	-24.35	-19.36	楕円形	38	28	32	455.03		C-1		SA31柱穴	
SP727	-23.86	-19.72	円形	32	32	24	454.98		A			
SP728	-28.82	-20.84	楕円形	34	19	14	455.09		B			
SP729	-28.44	-20.80	円形	27	24	9	455.17		B			
SP730	-28.38	-21.24	楕円形	46	30	10	455.14		A		SA32柱穴	
SP731	-28.30	-22.75	円形	28	27	18	455.05		B			
SP732	-28.35	-23.66	円形	31	29	18	455.06		A		SA32柱穴 SP732>SP733	
SP733	-28.10	-23.56	楕円形	40	23	8	455.13		A		SP732>SP733	
SP734	-37.56	-28.05	楕円形	25	16	2	455.31		C-2			
SP735	-36.47	-25.96	楕円形	26	21	14	455.20		B			
SP736	-36.36	-26.25	楕円形	34	25	17	455.16		C-2			
SP737	-37.34	-27.76	楕円形	40	32	16	455.17		E			
SP738	-36.62	-27.31	円形	23	20	17	455.16		B			
SP739	-36.78	-27.76	円形	25	24	17	455.16		B			
SP740	-34.75	-24.32	円形	25	23	11	455.24		C-2			
SP741	-34.00	-24.25	円形	44	44	11	455.19		C-2			
SP742	-32.05	-29.88	円形	31	30	13	455.05		A			
SP743	-34.31	-24.55	円形	27	24	13	455.19		B			
SP744	-34.25	-25.85	楕円形	21	16	11	455.22		B			
SP745	-34.20	-25.41	楕円形	27	22	12	455.17		E			
SP746	-33.98	-25.95	楕円形	27	21	12	455.15		B			
SP747	-34.28	-26.32	円形	20	20	15	455.13		B			
SP748	-33.82	-26.42	楕円形	20	16	13	455.15		B			
SP749	-33.78	-26.84	楕円形	27	22	12	455.15		B			
SP750	-35.78	-28.82	楕円形	20	18	14	455.17		B			
SP751	-35.68	-28.42	円形	28	25	16	455.16		A		SA33柱穴	
SP752	-33.55	-28.04	楕円形	41	32	15	455.14		D			
SP753	-32.64	-29.00	円形	26	24	10	455.18		A			
SP754	-31.65	-26.10	楕円形	31	25	15	455.10		B			
SP755	-31.05	-27.68	円形	22	21	9	455.13		B			
SP756	-29.62	-24.62	楕円形	24	21	13	455.07		E			
SP757	-28.24	-21.68	円形	29	27	19	455.03		C-1			
SP758	-28.47	-25.15	方形	40	38	15	455.07		C-2			
SP759	-28.52	-25.46	円形	30	26	17	455.04		C-2		SP758>SP759	
SP760	-28.35	-25.36	円形	27	24	18	455.03		A		SP758>SP759	
SP761	-28.04	-26.05	円形	14	13	9	455.09		C-1		SA32柱穴 植上に埋1	
SP762	-28.20	-26.14	円形	20	19	9	455.10		A			
SP763	-28.42	-27.82	楕円形	24	18	16	455.02		C-2			
SP764	-28.12	-27.95	円形	42	36	16	455.04		C-1			
SP765	-28.93	-29.90	楕円形	40	34	15	455.06		B			
SP766	-25.53	-12.97	楕円形	30	26	20	455.00		B		SA31柱穴	
SP767	-34.08	-28.98	楕円形	26	21	9	455.20		B			
SP768	-34.38	-29.16	楕円形	27	24	10	455.22		E			
SP769	-34.04	-29.68	楕円形	32	27	27	455.06		A			
SP770	-35.35	-30.40	楕円形	27	24	13	455.22		B		SA33柱穴	

別表8のつづき

(単位: cm)

No.	X	Y	平面形	長径	短径・深さ	底面レベル	柱痕跡	断面形	出土遺物	備考	調査
SP771	-34.92	-30.53	円形	29	28	23	455.10		A		
SP772	-34.85	-30.94	円形	28	26	13	455.19		C-1		
SP773	-35.30	-31.60	楕円形	19	32	13	455.19		A		
SP774	-34.46	-31.78	楕円形	42	34	24	455.04		B		
SP775	-35.30	-32.14	円形	36	31	27	455.06		A		
SP776	-38.78	-31.20	楕円形	35	30	23	455.06		A		
SP777	-32.28	-31.35	円形	26	25	13	455.09		A		
SP778	-25.95	-13.25	円形	22	20	14	455.10		A		
SP779	-35.28	-32.71	円形	23	20	23	455.11		A		
SP780	-35.30	-33.43	円形	20	18	26	455.08		A		
SP781	-35.48	-34.33	円形	24	23	17	455.11		B		
SP782	-34.93	-32.72	円形	24	21	20	455.13		B		
SP783	-34.93	-33.41	円形	24	23	25	455.09		A		
SP784	-35.12	-34.34	円形	24	20	13	455.15		B		
SP785	-32.30	-32.18	円形	37	30	21	455.00		B		
SP786	-32.26	-32.60	円形	38	37	9	455.11		A		
SP787	-32.00	-33.48	楕円形	43	32	21	454.99		B		
SP788	-37.00	-31.00	楕円形	34	29	19	455.15		B		
SP789	-36.68	-30.02	円形	27	23	20	455.13		B		
SP790	-38.78	-29.84	楕円形	26	16	16	455.11		C-2		
SP791	-24.10	-30.62	円形	32	31	11	455.04		B		
SP792	-24.40	-31.92	円形	32	27	8	455.02		C-2		
SP793	-28.55	-28.92	楕円形	35	25	13	455.00		E		
SP794	-28.00	-29.82	楕円形	34	29	16	454.95		E		
SP795	-26.90	-34.64	円形	34	34	9	455.01		B		
SP796	-30.16	-27.35	楕円形	29	21	12	454.94		E		
SP797	-30.06	-36.06	円形	28	25	9	455.05		B		
SP798	-36.30	-21.36	円形	41	40	17	455.29		B		
SP799	-28.58	-30.34	円形	27	25	26	455.07	円形 径14	A		
SP800	-40.24	-37.70	円形	23	21	36	453.73	円形 径15	A		
SP801	-10.14	-37.24	円形	16	15	5	454.05		B		
SP802	-10.14	-36.92	円形	24	24	22	454.16		B		
SP803	-39.20	-18.50	楕円形	22	17	8	454.41		B		
SP804	-42.50	-17.04	円形	20	20	10	455.05		B		
SP805	-42.15	-12.78	楕円形	22	18	21	454.94		B		
SP806	-41.84	-11.32	楕円形	22	18	9	454.91		B		
SP807	-41.72	-9.92	楕円形	26	26	19	454.76		—		
SP808					0						
SP809					0						
SP810					0						
SP811	-66.00	-39.75	円形	26	13	35	453.64		B		
SP812	-65.90	-40.87	楕円形	22	19	33	453.50		A		
SP813	-65.20	-40.88	楕円形	33	23	15	453.68		B		
SP814	-65.10	-42.71	円形	28	24	28	453.50		A		
SP815	-65.20	-43.78	円形	26	25	32	453.36		B		
SP816	-65.64	-42.25	楕円形	35	30	19	453.38		B		

第14表 柱穴断面形分類表

形態・分類	備考
A類 	・底面が平坦で、断面形が方形を呈するもの。
SP394	
B類 	・底面が丸もしくは尖り、断面形が方形・三角形を呈するもの。
SP450	
C-1類 	・底面に段を有するもの。 底面中央に段を有するもの (C-1類)。 壁面に段を有するもの (C-2類)。
SP308	
C-2類 	
SP13	

(類例柱穴は1996年度調査のもの)

別表9 1997年度調査の出土遺物計測表

(単位:cm)

No	種類	器種	X	Y	遺構	層位	レベル	法量	個体数	備考	想定
1	珠洲	すり鉢	-40.20	-6.57	南堀SIT	第1段階	454.746	底[11.0]	0.00	珠洲IV期後半 部原体14条/2.5cm 底部静止系切り	697
2	珠洲	すり鉢	-41.65	-11.44	南堀SST	第1段階	454.930	底[11.0]	0.00	珠洲V期 部原体13条/3.5cm 底部静止系切り	703
3	石製品	はたき石	-40.10	-8.26	南堀SIT	第3段階b	455.008		0.00	流紋岩	739
4	土器器	皿	-39.56	-8.56	南堀SIT	第2段階	454.939	口[12.5]	0.12	T-5類 黄褐色 695と接合	694
5	土器器	皿	-39.62	-7.81	南堀SIT	第2段階	451.930	口[12.5]	0.04	T-5類 黄褐色 694と接合	695
6	土器器	皿	-40.62	-6.59	南堀SIT	第3段階b	455.023	口[12.0]	0.10	T-6類少下-7類 淡黄褐色	690
7	土器器	皿	-39.31	-7.48	南堀SIT	第3段階b	455.119	口[13.0]	0.16	T-7類 灰黄色	686
8	土器器	皿	-40.48	-6.59	南堀SIT	第3段階b	455.290		0.00	不明 体部内面に露文弁 手合部接合	678
9	土器器	皿	-39.60	-17.24	南堀SST	第1段階	454.561	口[12.0]	0.08	T-1類 棕褐色 タール付着	656
10	土器器	皿	-40.41	-18.34	南堀SST	第2段階	454.937	口[7.5]	0.29	T-6類淡黄褐色 タール付着	661
11	土器器	皿	-40.96	-17.41	南堀SST	第2段階	454.535	底[6.0]	0.04	R-5類 淡黄色	657
12	鉄製品	カタミ	-40.72	-19.00	南堀SST	第2段階	454.743		0.00		768
13	珠洲	甌	-41.19	-19.28	南堀SST	第2段階	454.801	I-[36.0]	0.05	珠洲IV期 明き目原体11条/3cm幅	653
14	珠洲	甌	-41.13	-19.51	南堀SST	第2段階	454.688	口[18.0]	0.03	珠洲IV期-Ⅴ期 明き目原体7条/3cm幅	666
15	土器器	皿	-40.36	-19.40	南堀SST	第3段階b	455.056	口[10.0]	0.12	T-7類 淡黄色 649・650と接合	642
16	土器器	皿	-40.78	-19.02	南堀SST	第3段階b	454.874	口[10.0]	0.05	T-7類 淡黄色 642・645と接合	649
17	土器器	皿	-40.80	-19.05	南堀SST	第3段階b	454.860	口[10.0]	0.18	T-7類 淡黄色 642・649と接合	650
18	白磁	杯	-40.39	-18.63	南堀SST	第3段階b	455.178	口[12.0]	0.06	T-6類少下-7類 淡黄色 タール付着	633
19	瀬戸美濃	すり鉢	-40.22	-21.20	南堀SST	第3段階b	455.148	底[19.0]	0.00	大窯第一-2段階 鍋輪	534
20	珠洲	甌	-41.40	-17.28	南堀SST	第3段階b	455.031	口[58.0]	0.04	珠洲IV期-Ⅴ期 明き目原体7条/3cm幅	640
21	珠洲	甌	-39.89	-18.27	南堀SST	第3段階b	455.057	口[51.0]	0.04	珠洲IV期 明き目原体7条/3cm幅	636
22	石製品	石鍋	-41.60	-20.41	南堀SST	第3段階b	451.965	底[20.0]	0.00	安井町外 四方に巻状工具による底形 加工板あり	651
23	青磁	甌	-60.17	-26.70	SP457	粗土	455.568		0.00	鹿児島系窯B05類 体部外面に露文 SB21柱穴	533
24	土器器	皿	-62.25	-20.75	SP286	粗土	455.530	I-[13.0]	0.03	T-6類少下-7類 淡黄色 SB22柱穴	712
25	土器器	皿	-60.42	-19.95	SP313	粗土	455.681	口[8.0]	0.12	T-4類 灰白色 SB23柱穴	472
26	瀬戸美濃	筒型香炉	-60.42	-19.95	SP313	粗土	455.681	口[10.0]	0.00	古窯内後期(新)灰釉 二次被熱	473
27	土器器	皿	-50.46	-19.77	SP401	埋土	455.519	口[9.0]	0.25	T-6類 淡黄色 SB25柱穴	427
28	鉄製品	釘	-32.23	-19.76	SP374	埋土	455.524	長(3.4)幅0.9	0.00	SB25柱穴	717
29	土器器	皿	-54.44	-13.22	SP161	埋土	455.582	口[9.0]	0.16	T-6類 灰黄色 煙付着 SB26柱穴	556
30	土器器	皿	-46.76	-14.04	SP243	埋土	455.390	I-[8.0]	0.18	T-6類 淡黄色 煙付着 SB26柱穴	545
31	土器器	皿	-52.74	-20.00	SP375	埋土	455.566	口[12.0]	0.04	T-6類少下-7類 淡黄色 SB28柱穴	477
32	青白磁	水注	-56.65	-20.24	SP350	埋土	453.527		0.00	二次被熱 489と同一個体 SB27柱穴	470
33	青白磁	水注	-51.45	-26.20	SP359	埋土	455.583	口[3.0]	0.34	二次被熱 487と同一個体 SB28柱穴	489
34	鉄製品	鉗	-56.36	-22.20	SP491	埋土	455.392		0.00	SE26柱穴	754
35	土器器	皿	-58.10	-29.30	SP504	埋土	455.520	口[12.0]	0.10	T-2類 淡黄色 SB27柱穴	535
36	中国陶器	肩書き茶入れ	-63.00	-30.00		盛土	455.528		0.00	鉄輪 二次被熱 403と同一個体	92
37	中国陶器	肩書き茶入れ	-49.55	-23.27	SP412	埋土	455.480	口(2.6)	0.00	鉄輪 二次被熱 402と同一個体 SB29柱穴	403
38	土器器	皿	-56.78	-26.90	SP518	埋土	455.095	口[9.0]	0.10	T-6類 淡黄色 S11柱穴	709
39	土器器	皿	-54.45	-26.85	SP424	埋土	455.544	口[12.0]	0.00	S11柱穴	752
40	土器器	皿	-52.45	-20.58	SP384	埋土	455.536	口[12.0]	0.08	T-6類少下-7類 淡黄色 SA11柱穴	474
41	土器器	皿	-50.24	-20.66	SP405	埋土	455.536	口[12.0]	0.12	古窯戸後期(新)灰釉 二次被熱	537
42	土器器	皿	-57.95	-17.65	SP102	埋土	口[11.0]		0.10	T-6類少下-7類 淡黄色 タール付	540
43	土器器	皿	-63.58	-18.30	SP085	埋土	455.530	I-[12.0]	0.03	SA26柱穴	705
44	土器器	皿	-54.50	-19.25	SP134	埋土	455.490	口[11.0]	0.23	T-2類 淡黄色	435
45	瀬戸美濃	縦袖小皿	-54.30	-19.85	SP366	埋土	455.450	底4.6	1.00	古窯戸後期(新)灰釉 底部同軸糸切り	706
46	鉄製品	釘	-58.83	-39.66	SP509	埋土	455.398	長(3.15)幅0.45	0.00		750
47	瀬戸美濃	縦袖皿	-53.58	-28.20	SP541	口	[11.0]		0.12	古窯戸後期(古)灰釉	541
48	土器器	皿	-51.72	-27.06	SP532	埋土	455.514	口[15.0]	0.10	R-5類 灰白色	434
49	瀬戸美濃	四耳壺	-57.45	-25.62	SP565	埋土	455.426	I-[12.0]	0.11	古窯戸中間 灰釉	546
50	土器器	皿	-59.08	-32.64	SP627	埋土	455.217	口[12.0]	0.15	T-6類 淡黄色 煙付着	547
51	土器器	花瓶	-56.75	-30.35	SP641	埋土	455.358		0.00	古窯戸後I-Ⅱ期 灰釉 二次被熱	428
52	瀬戸美濃	縦袖盤	-63.80	-32.00	SP598	埋土	455.122		0.00	小間開産	465
53	瀬戸美濃	すり鉢	-51.50	-26.44	SP563	埋土	455.515		0.00	大窯町段段灰釉	432
54	瀬戸美濃	脚付大皿	-60.00	-26.35	SP455	埋土	455.341	口[28.0]	0.18	古窯戸後期(新)灰釉 二次被熱	451

別表9のつづき

(単位: cm)

No.	種類	器種	X	Y	遺構	層位	レベル	法	量	個体数	備考	費用
53	土師器	皿	-56.48	-25.48	SI 11	埋土	455.581	口[11.0]	0.08	T-6類かT-7類	灰黃褐色	400
54	土師器	皿	-56.15	-23.63	SI 11	埋土	455.570	口[12.0]	0.10	T-8類	淡黃色	389
55	土師器	皿	-53.62	-27.09	SI 11	埋土	455.601	口[12.0]	0.11	T-2類	灰白色	519
56	土師器	皿	-53.86	-25.63	SI 11	埋土	455.592	口[11.0]	0.04	T-6類かT-7類	灰白色	521
57	土師器	皿	-54.15	-25.25	SI 11	埋土	455.602	口[12.0]	0.12	T-6類かT-7類	灰黄色	506
58	土師器	皿	-53.64	-24.98	SI 11	埋土	455.610	口[13.0]	0.10	T-6類かT-7類	淡黃色 二次被熱	528
59	土師器	皿	-55.73	-26.58	SI 11	埋土	455.572	口[13.0]	0.15	T-2類	淡黃橙色	393
60	土師器	皿	-54.11	-27.25	SI 11	埋土	455.583	口[13.0]	0.15	T-8類	淡黃褐色	404
61	土師器	皿	-54.49	-26.71	SI 11	埋土	455.577	口[14.0]	0.12	T-8類	黃褐色	394
62	白磁	皿	-55.34	-24.28	SI 11	埋土	455.572	底[4.5]	0.00	白磁17類	高台内に墨書の花押	508
63	瀬戸口美濃	天日葵柄四耳壺	-54.20	-26.07	SI 11	埋土	455.630	底[4.0]	0.00	古瀬戸後口期	鉄胎削り出し高台	505
64	瀬戸口美濃	四耳壺	-55.12	-24.50	SI 11	埋土	455.599	口[12.0]	0.10	古瀬戸中期	灰胎 二次被熱	385
65	土師器	皿	-60.05	-16.95	SX23	埋土	455.567	口[10.0]	0.12	R-1類	淡黃色	531
66	土師器	皿	-59.70	-13.90	SI 11	埋土	455.595	口[11.0]	0.08	T-6類かT-7類	淡黃色	460
67	土師器	皿	-58.40	-16.09	SX12	埋土	455.620	口[8.0]	0.12	T-5類	淡黃色	438
68	白磁	皿	-58.66	-15.35	SX12	埋土	455.676	口[14.0]	0.04	白磁17類	内面にスタンプ	444
69	石製品	石鏡	-58.41	-15.44	SX12	埋土	455.719	口[14.0]	0.00	滑石	外面煤付着 449と同一個体	439
70	石製品	石鏡	-58.61	-15.26	SX12	埋土	455.691	口[14.0]	0.00	滑石	外面煤付着 439と同一個体	449
71	土師器	皿	-60.20	-18.58	SX13	埋土	455.644	口[11.0]	0.08	T-6類かT-7類	灰黃褐色	451
72	土師器	皿	-60.10	-18.58	SX13	埋土	455.653	口[11.0]	0.25	T-6類かT-7類	明黃褐色	450
73	土師器	皿	-59.15	-16.63	SX23	埋土	455.637	口[11.0]	0.10	T-6類かT-7類	淡黃色 タール付着	445
74	土師器	皿	-60.57	-15.39	SX23	埋土	455.705	口[15.0]	0.19	T-8類	淡黃褐色	446
75	白磁	皿	-59.52	-16.13	SX23	埋土	455.688	口[10.0]	0.10	白磁16類	442と接合	440
76	白磁	皿	-59.97	-16.28	SX23	埋土	455.640	口[10.0底4.4]	0.00	白磁16類	440と接合	442
77	瀬戸口美濃	卸目付大皿	-60.27	-15.32	SX23	鉄屑	455.711	口[32.0]	0.07	古瀬戸後口期(古)	灰釉 二次被熱 2片接合	441
78	土師器	皿	-56.55	-23.05	SX15	埋土	455.641	口[12.0]	0.03	T-6類かT-7類	淡黃色	499
79	土師器	皿	-56.60	-23.23	SX15	埋土	455.538	口[12.4]	0.06	T-2類	淡黃褐色	562
80	土師器	皿	-56.09	-22.36	SX15	埋土	455.594	口[12.5]	0.15	T-2類	灰白色	564
81	瀬戸口美濃	卸目付	-56.31	-23.40	SX15	埋土	455.647	底[5.0]	0.00	R-1類	灰白色	491
82	瓦器	皿	-55.99	-22.91	SX15	埋土	455.580	口[19.0]	0.12	古瀬戸後II期	灰釉	498
83	石製品	刷毛	-57.80	-22.48	SX15	埋土	455.602	口[32.0]	0.01	第V類	石英	513
84	石製品	刷毛	-56.40	-22.26	SX15	埋土	455.556	口[11.0]	0.00	石英	493	
85	土師器	皿	-59.12	-28.85	SX17	埋土	455.479	口[11.0]	0.13	T-6類かT-7類	灰黃色	419
86	土師器	皿	-60.60	-28.45	SX17	埋土	455.415	口[13.0]	0.16	T-2類	灰白色	418
87	近世陶器	輪碗	-58.35	-29.15	SX17	埋土	455.463	口[11.0]	0.12	白磁1類	423	
88	近世陶器	輪碗	-58.41	-29.05	SX17	埋土	455.480	口[16.0]	0.06	肥前(唐津)灰釉	572	
89	土師器	皿	-60.06	-28.20	SX17	埋土	455.420	底[7.5 稲0.75]	0.00	R-4類	淡黃褐色	761
90	土師器	皿	-65.00	-28.00	SX18	埋土	455.448	口[12.0]	0.10	T-2類	灰白色	616
91	土師器	皿	-64.00	-27.95	SX18	埋土	455.551	口[11.5]	0.08	T-6類かT-7類	灰黃色	369
92	瀬戸口美濃	卸目付	-64.81	-28.12	SX18	埋土	455.494	口[11.0]	0.07	古瀬戸後I-Ⅱ期	灰釉 614と接合	530
93	瀬戸口美濃	卸皿	-63.60	-28.35	SX19	埋土	455.445	口[15.0]	0.03	728と同一個体	614と接合	614
94	瀬戸口美濃	卸皿	-64.38	-26.50	SX18	埋土	455.450	口[15.0]	0.04	古瀬戸後I-Ⅱ期	灰釉 530と接合	728
95	瀬戸口美濃	卸皿	-64.38	-26.50	SX18	不明		口[15.0]	0.02	古瀬戸後I-Ⅱ期	灰釉 530-614と同一個体	728
96	洲陶	すり鉢	-65.16	-26.30	SX18	埋土	455.431	口[33.0]	0.02	珠磨II期	卸目原体10条/1.9cm幅	613
97	鉄製品	釘	-64.10	-26.82	SX18	埋土	455.468	長[3.15]幅0.85	0.00	739		
98	土師器	皿	-63.44	-26.28	SX19	埋土	455.435	口[9.0]	0.12	T-5類	橙色 タール付着	466
99	土師器	皿	-63.20	-29.23	SX19	埋土	455.405	口[13.0]	0.08	R-5類	淡黃色	464
100	その他の陶器	陶玉	-62.80	-29.10	SX19	埋土	455.405	口径2.1	0.00	161		
101	鉄製品	金具	-62.15	-29.10	SX19	埋土	455.380	長[3.5]	0.00	腰等の止め金具	穴径0.4 軸幅0.6	767
102	土師器	皿	-62.08	-28.05	SX19周辺	埋土	455.421	口[11.0]	0.19	T-5類	乳白色 二次被熱	455
103	土師器	皿	-61.86	-32.24	高土底上	埋土	455.501	口[18.0]	0.03	古瀬戸後Ⅲ期	灰釉 615と接合	615
104	土師器	皿	-65.04	-30.04	SX19周辺	埋土	455.435	口[18.0]	0.04	古瀬戸後Ⅲ期	灰釉 615と接合	615
105	土師器	皿	-65.25	-29.25	SX19周辺	埋土	455.529	口[12.0]	0.00	刺繍跡付着	382	
106	土師器	皿	-63.75	-31.25	盛土	埋土	455.161	口[18.0]	0.04	占瀬戸後I期	灰釉	713
107	土師器	皿	-62.23	-30.75	盛土	盛土	455.550	口[8.0]	0.16	T-6類	淡黃色	368
108	土師器	皿	-62.42	-28.60	盛土	盛土	455.618	口[12.0]	0.08	T-2類	灰白色	407
109	土師器	皿	-63.41	-29.78	盛土	盛土	455.508	口[13.0]	0.04	T-6類	灰白色	338
							455.501	口[13.0]	0.09	T-6類かT-7類	淡黃色 煙付着	340

別表9のつづき

(単位: cm)

No	種類	器種	X	Y	遺構	層位	レベル	法 量	個体数	備考	整理
110	土器器	皿	-63.64	-29.88	盛土	盛土1	455.380	底[8.0]	0.00	R-5類 淡黄色	408
	土器器	皿	-58.61	-31.31	盛土	盛土1	455.376		0.00	T-6類かT-7類 黄褐色 内面に墨書き	228
112	青磁	皿	-46.77	-28.32	盛土	盛土1	455.397	口[9.0]	0.09	体部外面に墨書き 二次被熱	325
113	青磁	碗	-62.25	-30.75	盛土	盛土1	455.618	口[14.0]	0.06	龍泉窯系碗D類	280
114	白磁	皿	-50.35	-36.62	盛土	盛土1	455.615	口[11.5]	0.16	白磁17類	218
115	白磁	皿	-56.49	-32.43	盛土	盛土1	455.565	口[10.0]	0.05	白磁16類	230
116	白磁	皿	-51.25	-30.13	盛土	盛土1	455.678	口[11.0]	0.05	白磁16類	298
117	白磁	杯	-29.64	-23.06	盛土	盛土1	455.484	口[6.8]	0.19	白磁23類	607
118	白磁	碗	-62.25	-30.75	盛土	盛土1	455.618		0.00	白磁9類 内面にスタンプ	281
119	瀬戸美濃	平楕	-53.25	-34.28	盛土	盛土1	454.951	口[23.0]	0.10	古瀬戸中Ⅳ期 灰釉 375と同一個体	219
	瀬戸美濃	平楕	-60.43	-31.20	盛土	盛土1	455.594	口[23.0]	0.05	古瀬戸中Ⅳ期 灰釉 219と同一個体	575
120	瀬戸美濃	平楕	-55.39	-30.18	盛土	盛土1	455.320	口[15.0]	0.03	古瀬戸後Ⅱ期 灰釉	244
	瀬戸美濃	平楕	-55.30	-30.10	盛土	盛土1	455.591	口[15.0]	0.03	古瀬戸後Ⅱ期 灰釉	413
121	瀬戸美濃	平楕	-62.62	-31.97	盛土	盛土1	455.522	口[17.0]	0.10	古瀬戸後Ⅳ期(古) 灰釉 焼け	273
122	瀬戸美濃	丸楕	-63.75	-31.25	盛土	盛土1	455.618	口[11.0]	0.06	人兼第1段階 灰釉	265
123	瀬戸美濃	丸楕	-59.69	-29.07	盛土	盛土1	455.598	口[12.0]	0.03	大兼第1段階 灰釉	319
124	瀬戸美濃	鉢	-59.23	-32.46	盛土	盛土1	455.610	口[12.0]	0.01	古瀬戸後Ⅳ期(新) 灰釉	241
125	瀬戸美濃	丸皿	-29.64	-23.06	盛土	盛土1	455.484	底[6.0]	0.00	大兼第2段階 灰釉 二次被熱	606
126	瀬戸美濃	鉢	-54.78	-28.96	盛土	盛土1	455.596	底[8.0]	0.00	登窯第2段階 長石釉	359
127	近世陶器	碗	-23.87	-25.83	盛土	盛土1	455.310		0.00	肥前陶器1期 康津 灰釉	602
128	鉢製品	頸製品	-60.50	-34.18	盛土	盛土1	455.569	長0.95幅1.05	0.00	建恭金具	763
129	土器器	皿	-55.85	-23.94	SI11面上	455.553	口[12.0]	0.10	T-5類かT-7類 灰白色	164	
130	土器器	皿	-54.46	-25.25	SI11面上	455.558	口[12.0]	0.05	T-2類 凌灰色	171	
131	土器器	皿	-56.88	-24.31	SI11面上	455.528	口[15.0]	0.06	T-2類 淡黄褐色 烟付着	170	
132	青磁	盤	-56.34	-24.52	SI11面上	455.537	口[20.0]	0.03	不明	172	
133	瀬戸美濃	折縁小皿	-54.11	-26.90	SI11面上	455.578	底[4.0]	0.05	古瀬戸中Ⅲ-Ⅳ期	45	
134	瀬戸美濃	折縁目付大皿	-56.08	-24.46	SI11面上	455.538	口[31.0]	0.05	古瀬戸後Ⅳ期(古) 灰釉 二次被熱	174	
135	上等器	皿	-57.05	-23.95	SX15面上	455.538	口[12.0]	0.05	T-2類 淡黄褐色	168	
136	土器器	皿	-53.20	-21.98	SX15面上	455.570	口[15.0]	0.11	T-2類 灰白色	160	
137	上等器	皿	-63.00	-30.00	鏡上直上	455.528	口[10.0]	0.07	T-5類 淡黄褐色	122	
138	土器器	皿	-59.87	-30.85	鏡上直上	455.553	口[12.5]	0.10	T-6類かT-7類 談貴色 壁・タール付着	49	
139	土器器	皿	-54.32	-21.53	鏡上直上	455.514	口[10.0]	0.10	T-6類かT-7類 黄褐色 烟付着	26	
140	土器器	皿	-59.85	-29.75	盛土直上	455.513	口[13.0]	0.16	T-2類 灰白色 二次被熱 101と接合	48	
	土器器	皿	-63.00	-30.00	盛土直上	455.528	口[13.0]	0.09	T-2類 灰白色 二次被熱 48と接合	101	
141	土器器	皿	-59.92	-28.59	盛土直上	455.541	口[12.0]	0.10	T-6類かT-7類 灰白色 壁・タール付着	77	
142	土器器	皿	-52.03	-30.46	盛土直上	455.604	口[15.0]	0.07	R-5類 流黃色	146	
143	吉備	碗	-59.10	-23.86	盛土直上	455.533	口[16.0]	0.06	龍泉窯系碗D類 体部外面に透光文	89	
144	青磁	花口盤	-63.00	-30.00	盛土直上	455.528	口[13.0]	0.06	不曉	95	
145	青磁	碗	-55.08	-35.38	旧耕作土	455.395	底[6.0]	0.00	龍泉窯系碗D類 内底に文様	210	
146	青磁	碗	-52.38	-34.73	旧耕作土	455.563	底[5.0]	0.00	龍泉窯系碗C類 体部外面に墨書き 二次被熱	8	
147	白磁	皿	-54.24	-19.22	旧耕作土	455.618	口[9.0]	0.12	白磁17類 二次被熱	486	
148	白磁	碗	-55.67	-28.79	盛土直上	455.587	底[6.0]	0.00	白磁29類	9	
149	青花	皿	-61.88	-22.00	地山直上	455.572	底[5.0]	0.00	龍B群皿種類	74	
150	瀬戸美濃	天目茶碗	-63.00	-30.00	盛土直上	455.528	口[12.0]	0.07	古瀬戸後Ⅳ期(新) 鉄釉	93	
151	瀬戸美濃	丸皿	-63.00	-30.00	盛土直上	455.528	口[11.0]	0.06	大兼第2段階 灰釉 二次被熱	96	
152	瀬戸美濃	丸皿か馬蹄形	-27.45	-31.50	旧耕作土	455.310	底5.5	0.06	大兼第1-2段階 灰釉	594	
153	瀬戸美濃	寸草型小鉢	-53.86	-29.75	盛土直上	455.585	口[16.0]	0.04	古瀬戸後Ⅳ期(古) 鉄釉 二次被熱	28	
154	瀬戸美濃	卯皿	-50.88	-29.10	盛土直上	455.578	口[21.5]	0.04	灰釉	22	
155	瀬戸美濃	直径大皿	-48.80	-28.80	鉢	455.585	口[30.5]	0.01	古瀬戸後Ⅳ期 灰釉	55	
156	瀬戸美濃	即日付大皿	-35.04	-35.41	旧耕作土	455.079	口[30.0]	0.03	古瀬戸後Ⅳ期 灰釉 二次被熱	209	
157	近世陶器	蓋	-44.00	-36.00	2トレンチ	455.514	長伴1.9厚0.45	1.00	外周部に墨書き	142	
158	石製品	岩石	-65.43	-25.25	地山直上	455.463		0.00	「水楽通」(1408年)	24	
159	鏡貨	永樂通宝	-31.11	-26.68	盛土直上	455.572	口[27.0]	0.00	珠潤V期	39	
160	珠潤	すり鉢	-46.48	-30.48	旧耕作土	455.603	口[38.0]	0.04	珠潤V期 L1壁部に成状文	586	
161	珠潤	すり鉢	-25.50	-30.00	旧耕作土	455.603	口[36.0]	0.10	珠潤IV期 叫び目原体8角/2.5cm以上	68	

図 版



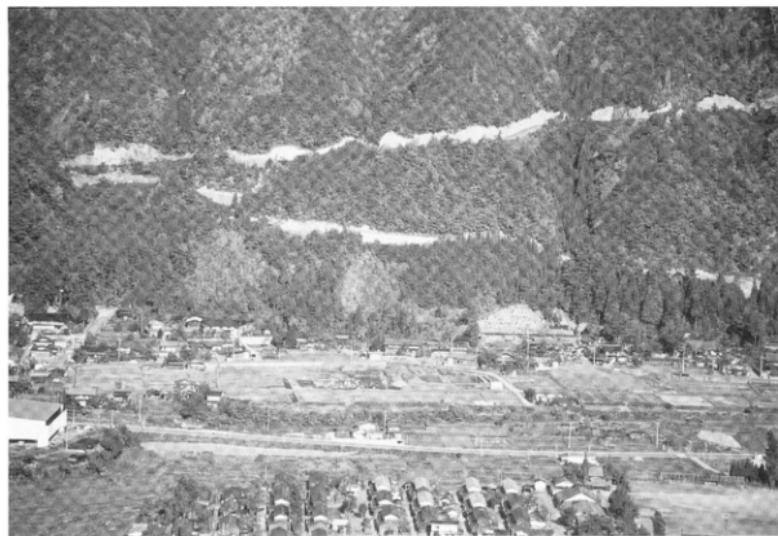
1 調査地域航空写真(1947年撮影)

1. 江馬氏下館跡
 2. 高原調訪城跡
 3. 東町城跡
 4. 八幡山城跡
- (上が北、縮尺: 約1/26,500)

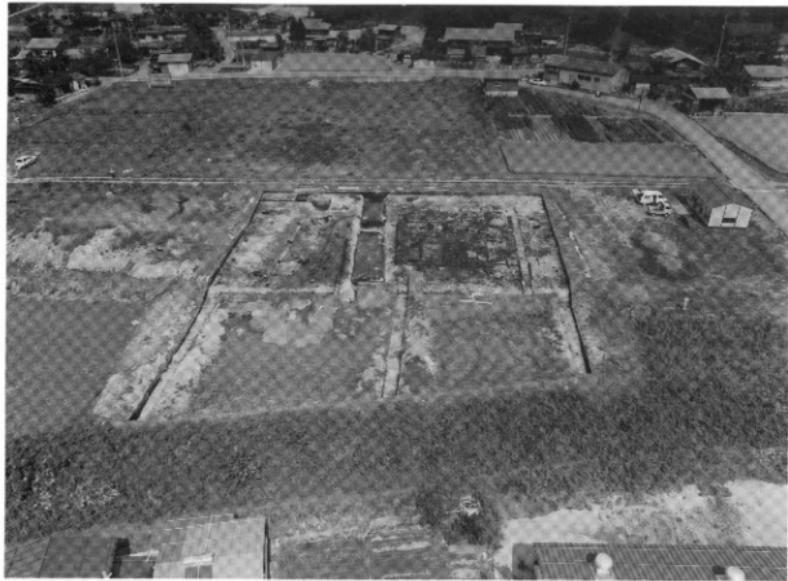
図版 2



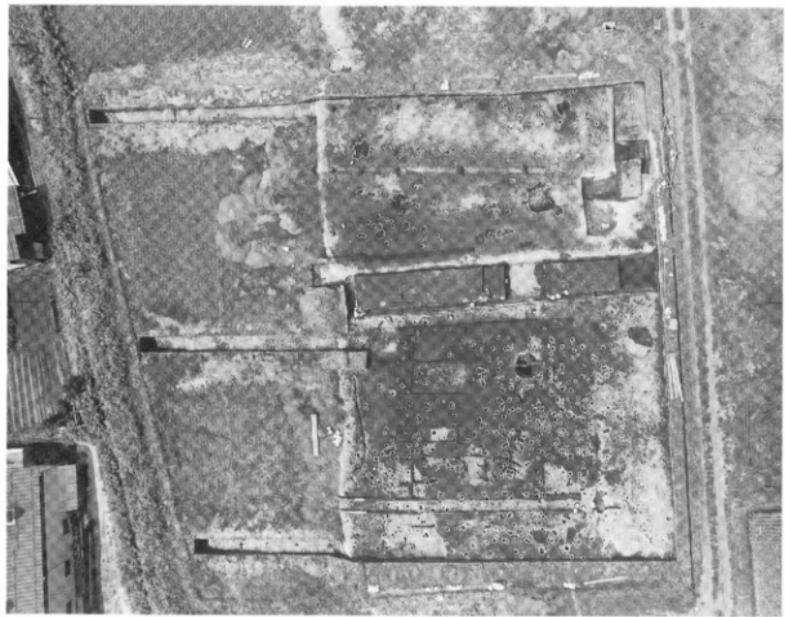
1 神岡町遠景写真(北から)



2 調査地域遠景写真：1978年度調査時(西から)

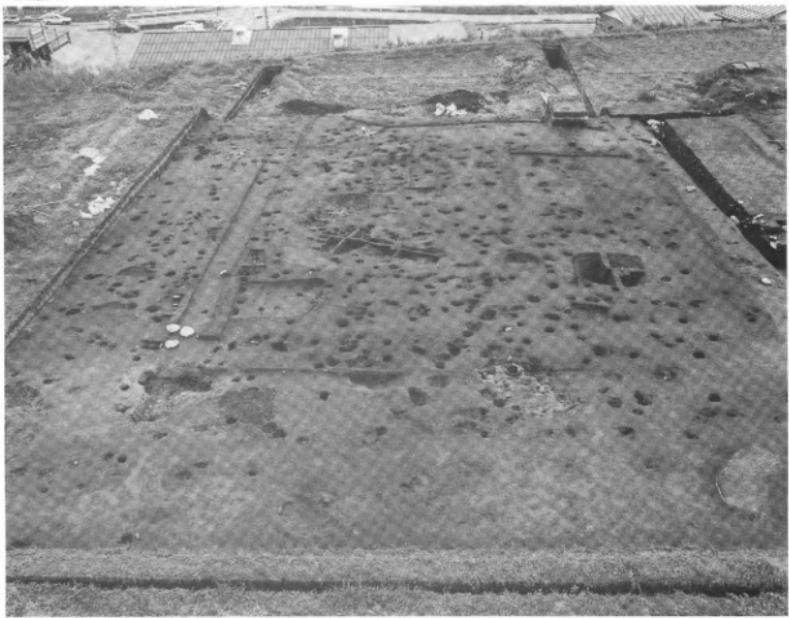


1 調査地区遠景(西から)



2 調査地区発掘後全景(上が北)

図版 4

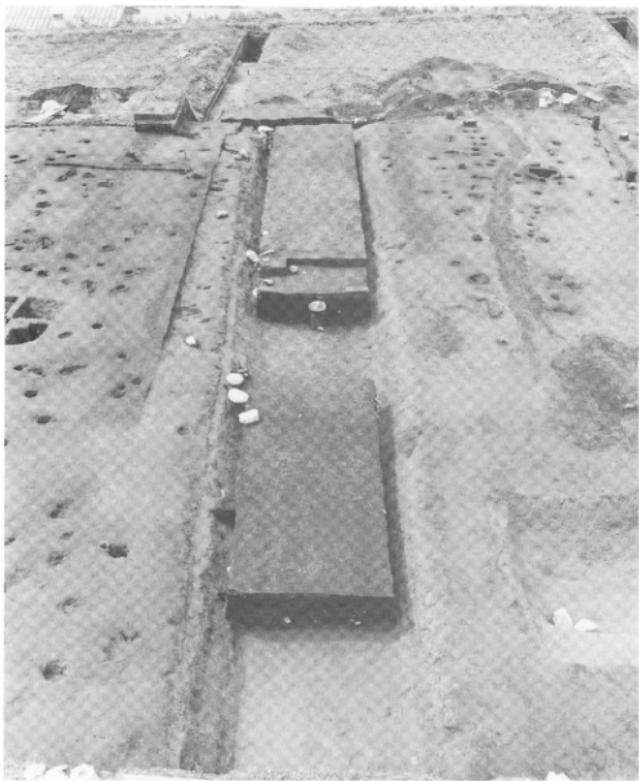
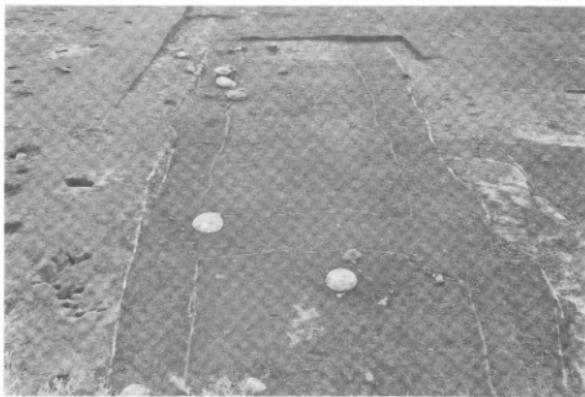


1 調査地区区画 4 発掘後全景(東から)



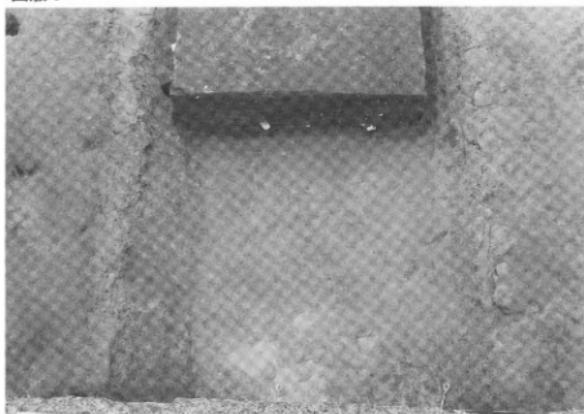
2 調査地区区画 5 発掘後全景(東から)

1 南堀検出状況
(東部分、東から)



2 南堀発掘後全景(東から)

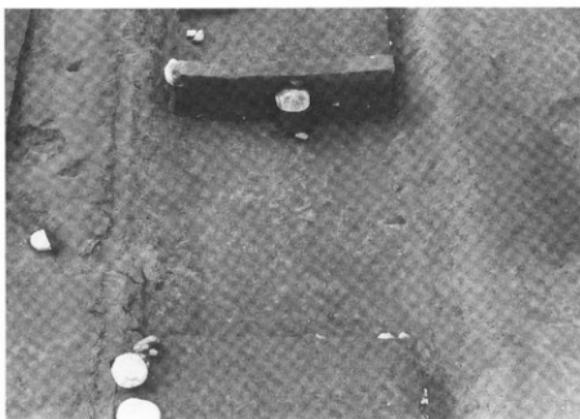
図版 6



1 南堀SIT
発掘後全景
(東から)

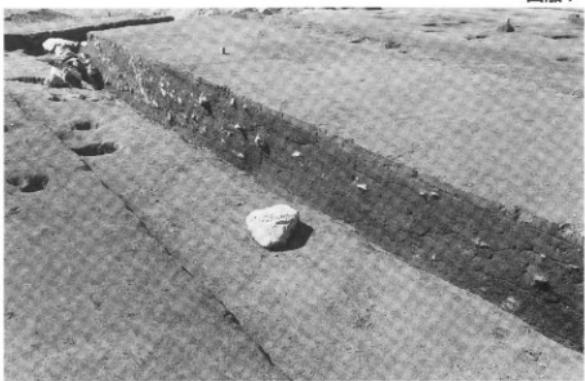


2 南堀S5T
第3段階埋土b
中の確認状況
(北から)

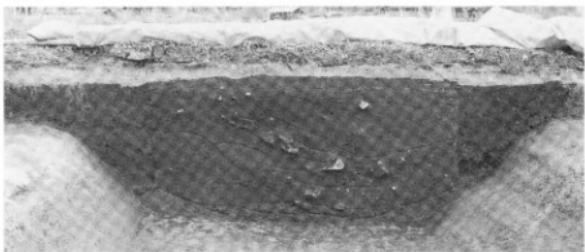


3 南堀S5T
発掘後全景
(東から)

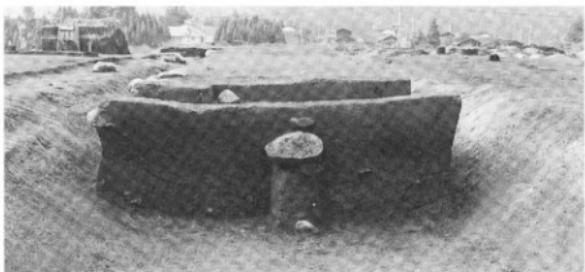
1 南堀S3T
北壁層位
(南堀埋土東西
断面の西部分,
南東から)



2 南堀
調査地区東壁層位
(西から)



3 南堀S5T
西壁層位
(東から)



4 南堀S2T
西壁層位
(北東から)



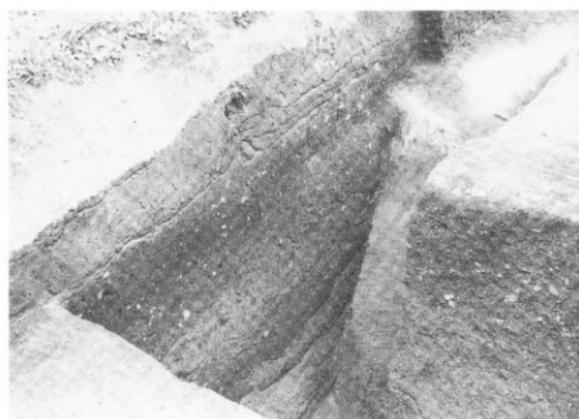
図版 8



1 西堀発掘後
全景(上が西)



2 西堀(薬研堀)
北壁断面層位
(南から)



3 西堀(薬研堀)
東壁断面層位
(北西から)

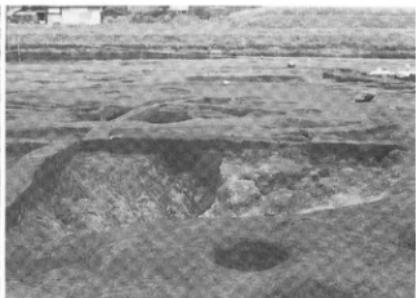
1 SI11発掘後
全景(東から)



2 SX15発掘後
全景(西から)



3 SX15断面層位
(東西畦の西半, 南から)



4 SX15断面層位
(南北畦の南半, 西から)

図版10



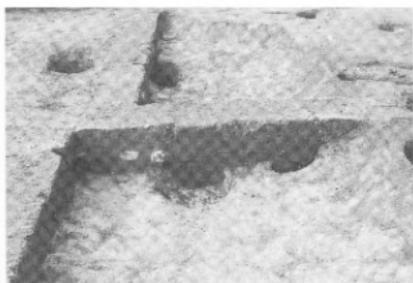
1 SX11・SX12・SX23発掘後全景
(西から)



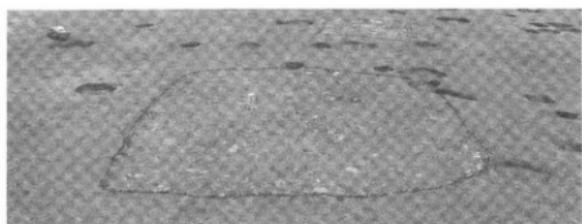
2 SX12・SX23断面層位(西から)



3 SX17発掘後全景(西から)



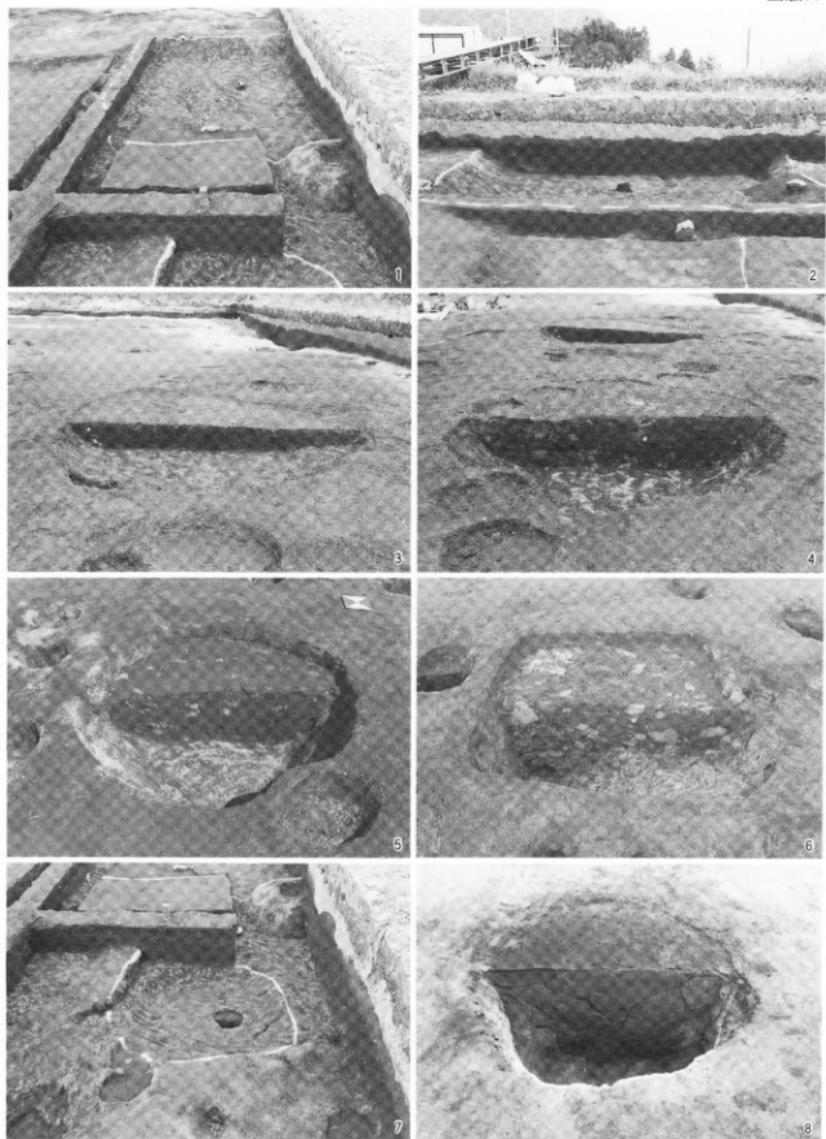
4 SX17断面層位
(東西畦の東半, 南から)



5 SX14検出状況
(西から)



6 SX14断面層位
(南から)



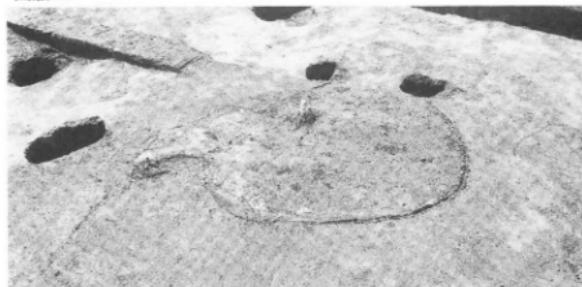
1 SX18発掘後全景(西から), 2 SX18断面層位(調査地区南壁内、北から),

3 SK31断面層位(西から), 4 SK32断面層位(西から),

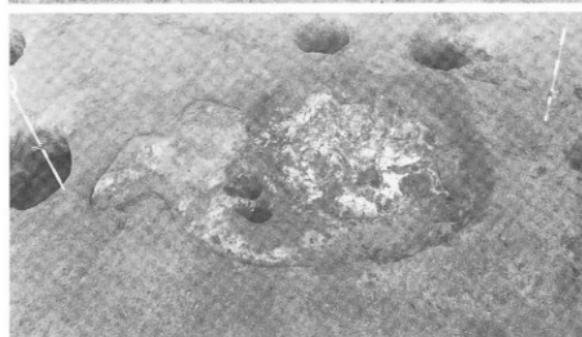
5 SK33断面層位(西から), 6 SK34断面層位(西から),

7 SK36発掘後全景(西から), 8 SE11断面層位(西から)

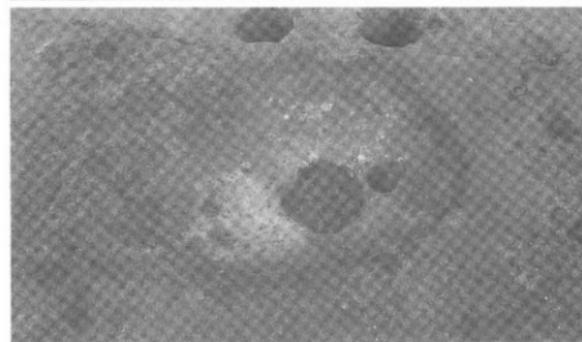
図版12



1 炉跡SX20
検出状況
(南から)



2 炉跡SX20
焼成2の白色灰
(2層)
検出状況
(南から)



3 炉跡SX20
焼成1の被熱面
(12層)
検出状況
(南から)



4 炉跡SX20
発掘後全景
(地山床面状況、
南から)

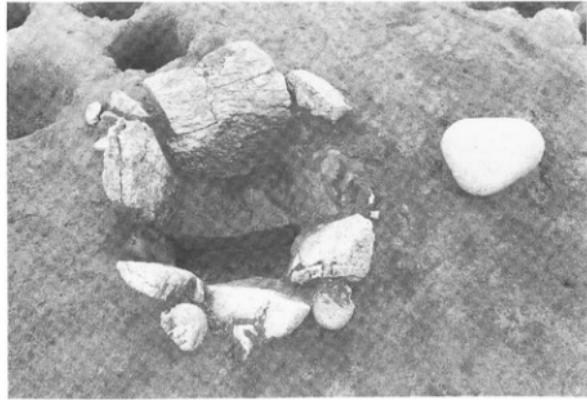
1 石組み炉SX22
炉内円礫
検出状況
(北から)



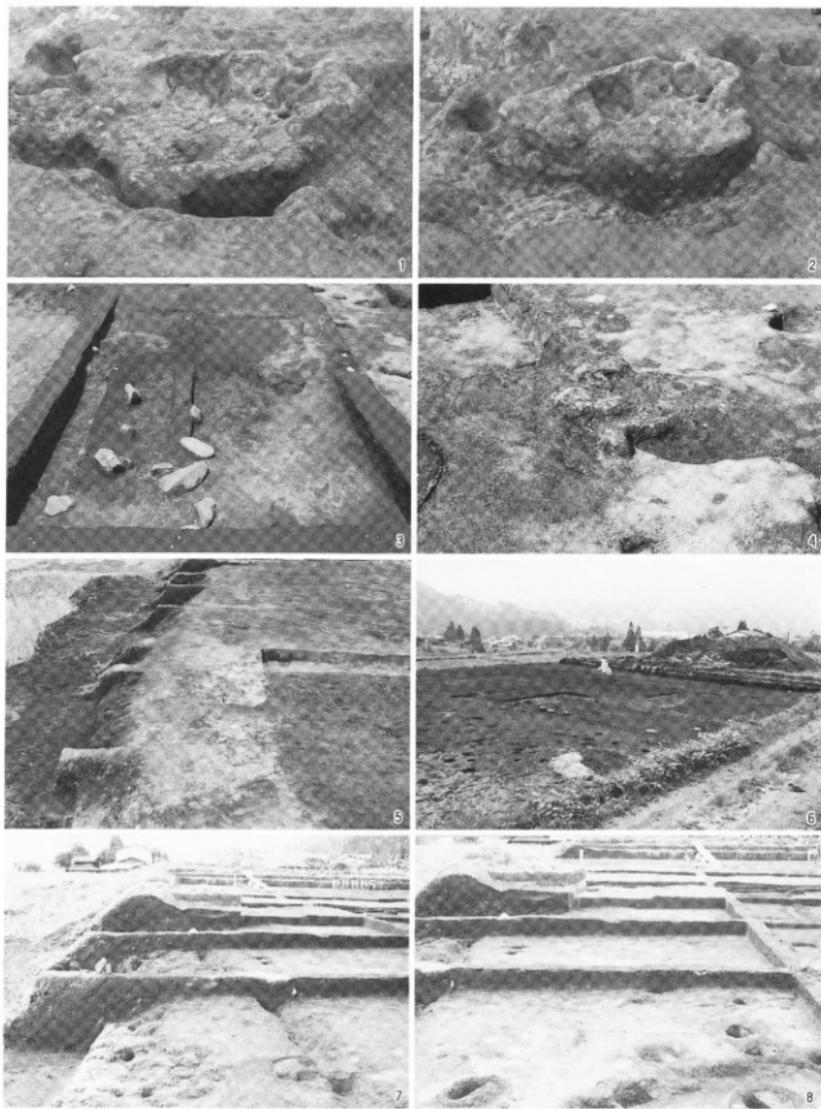
2 石組み炉SX22
炉床の礫
検出状況
(北から)



3 石組み炉SX22
炉床の礫
取り上げ後の
断面層位(北から)

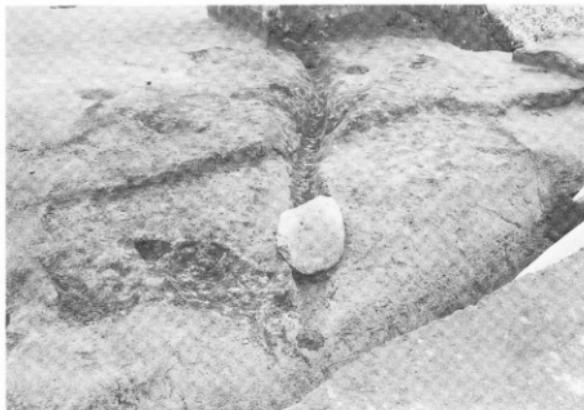


図版14



1 炉跡SX24被熱粘土面検出状況(南から), 2 炉跡SX21・倒木痕SK51断面層位(南から),
3 炉跡SX19発掘後全景(西から), 4 SX21検出状況(南から),
5 区画4盛土2検出状況(南から), 6 区画5盛土1検出状況(南東から),
区画4盛土土層断面(X座標-54ライン畦, 南から): 7 Y座標-33~-37, 8 Y座標-30~-33

1 溝跡SD11
発掘後全景
(北東から)



2 溝跡SD12
発掘後全景
(南から)

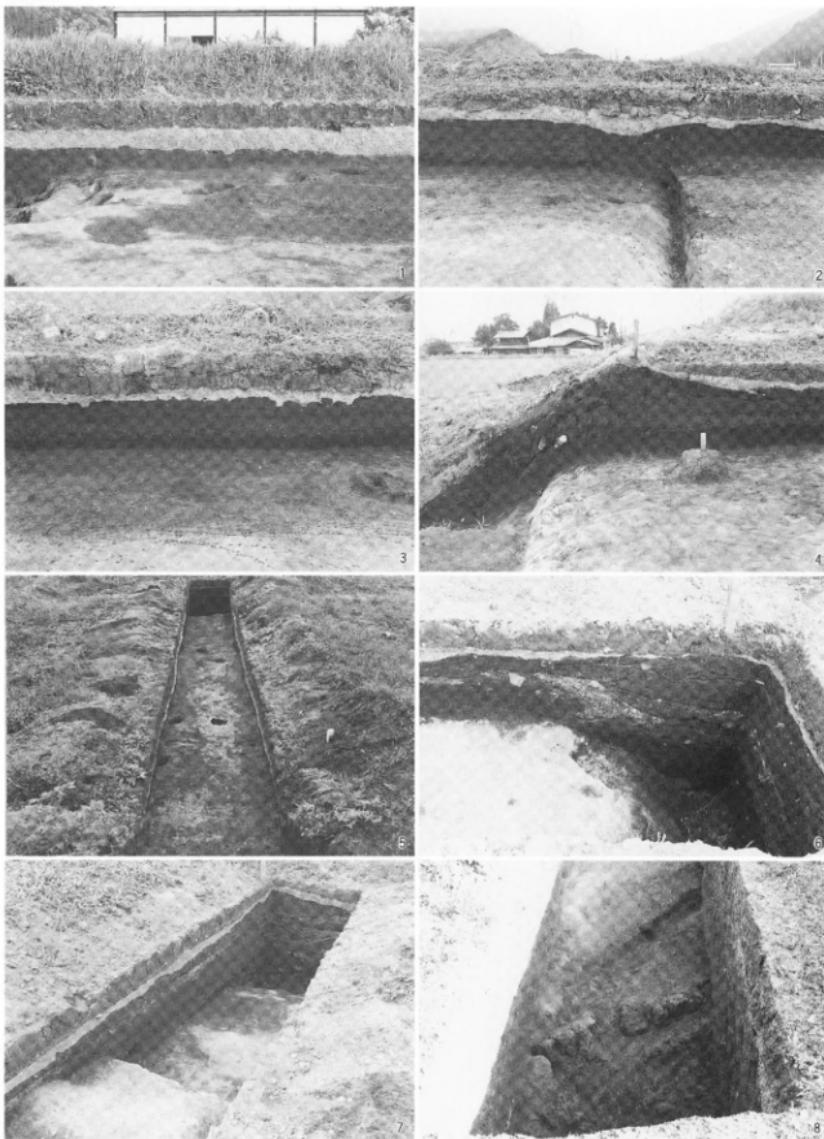


3 溝跡SD11断面層位
(2トレンチ南壁内、北から)



4 溝跡SD11・SD12断面層位
(中央畦北壁内、南から)

図版16

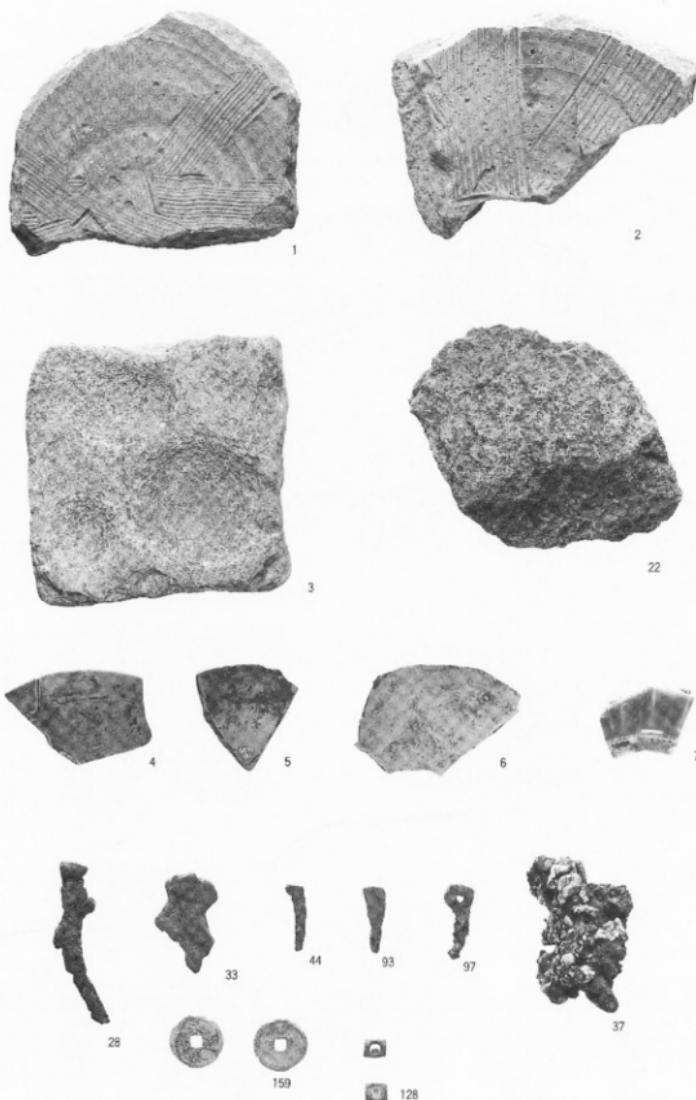


1 調査地区南壁土層断面(Y座標-12付近、北から),

調査地区北壁土層断面(北から): 2 Y座標-10付近, 3 Y座標-20付近, 4 Y座標-36付近,

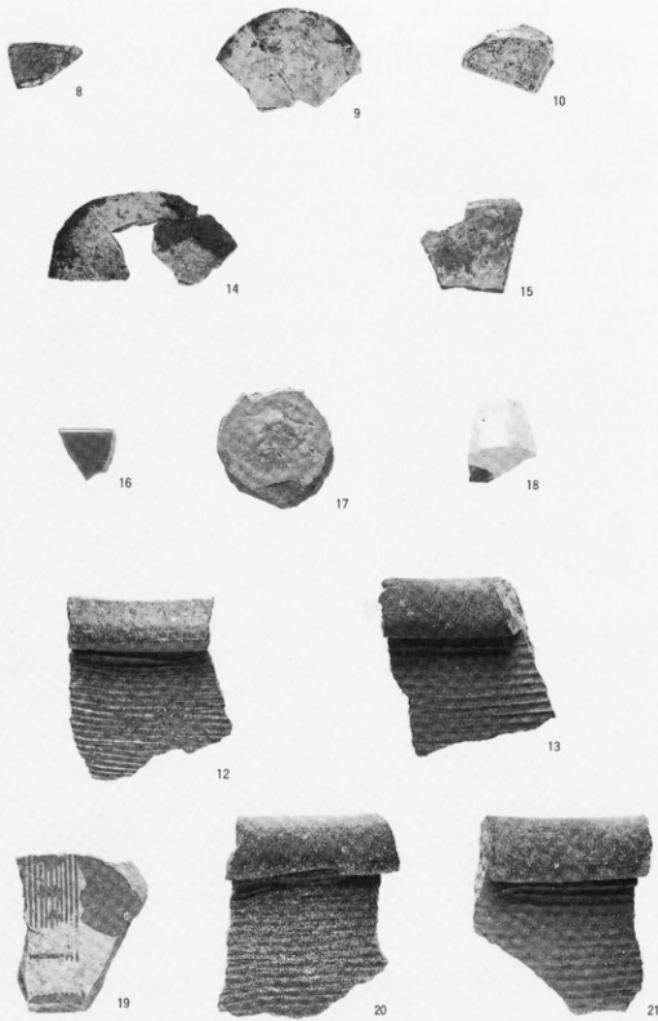
5 1トレンチ発掘後全景(東から), 6 1トレンチ西端部落ち込み部土層断面(北から),

7 2トレンチ西端部落ち込み部(北東から), 8 3トレンチ西端部SD14発掘後全景(西から)

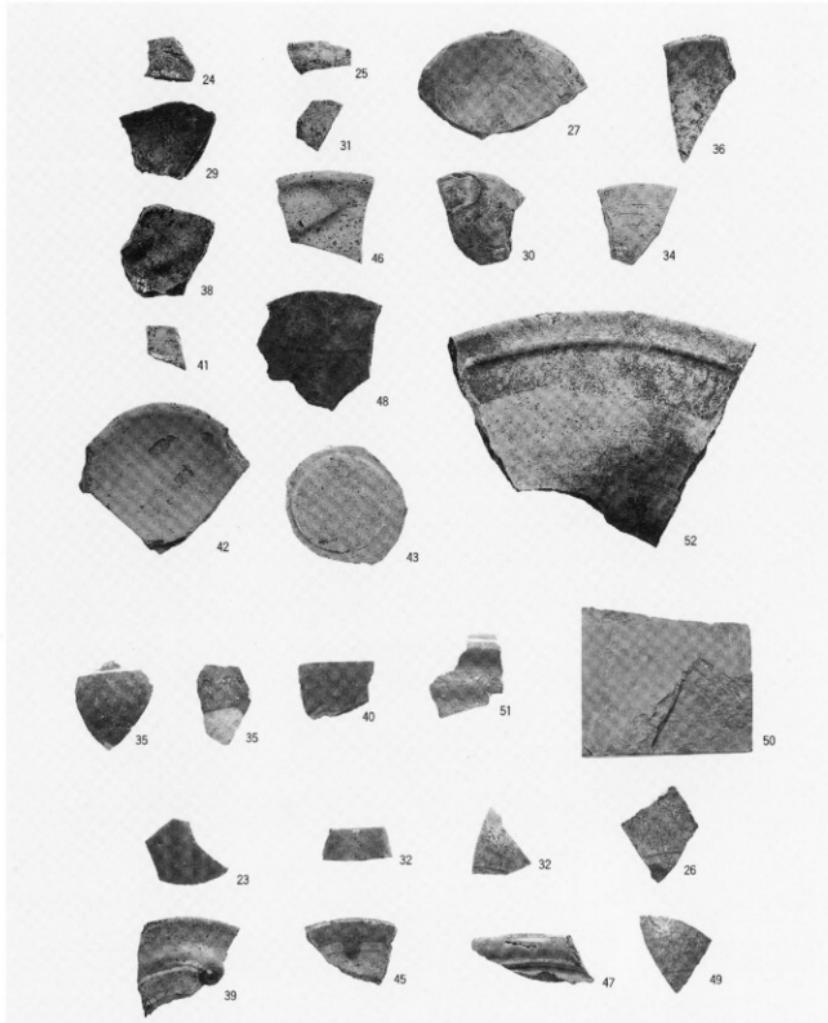


南堀出土遺物写真(1)：南堀 S 1 T (1～7), 南堀 S 5 T (22)
鉄製品等：SB25柱穴(28), SB28柱穴(33), SI 11柱穴(37), SP509(44), SX18(93), SX19(97), 盛土 1・盛土
2(128), 旧耕作土(159)

図版18

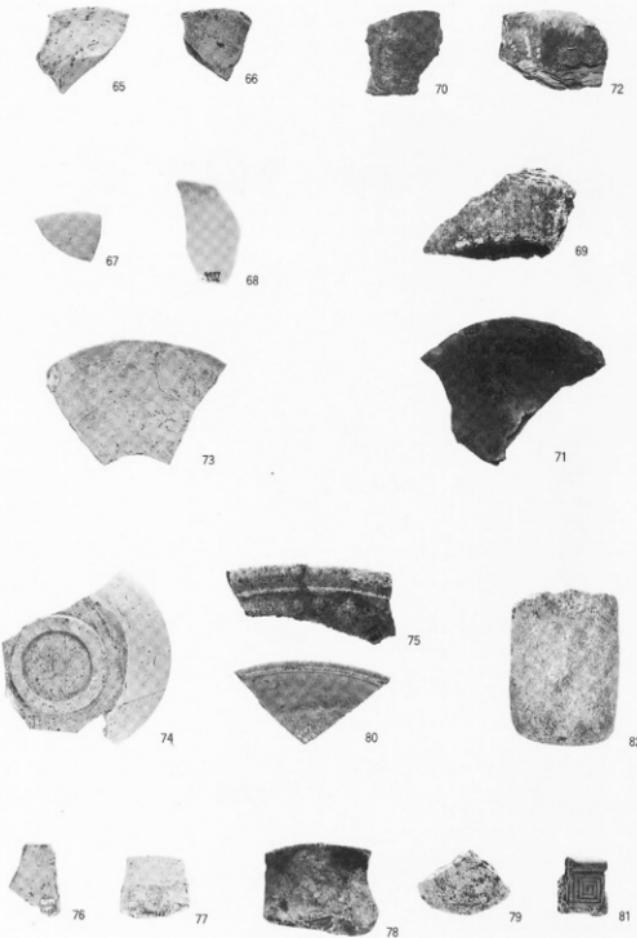


南堀出土遺物写真(2): 南堀 S 5 T (8~21)

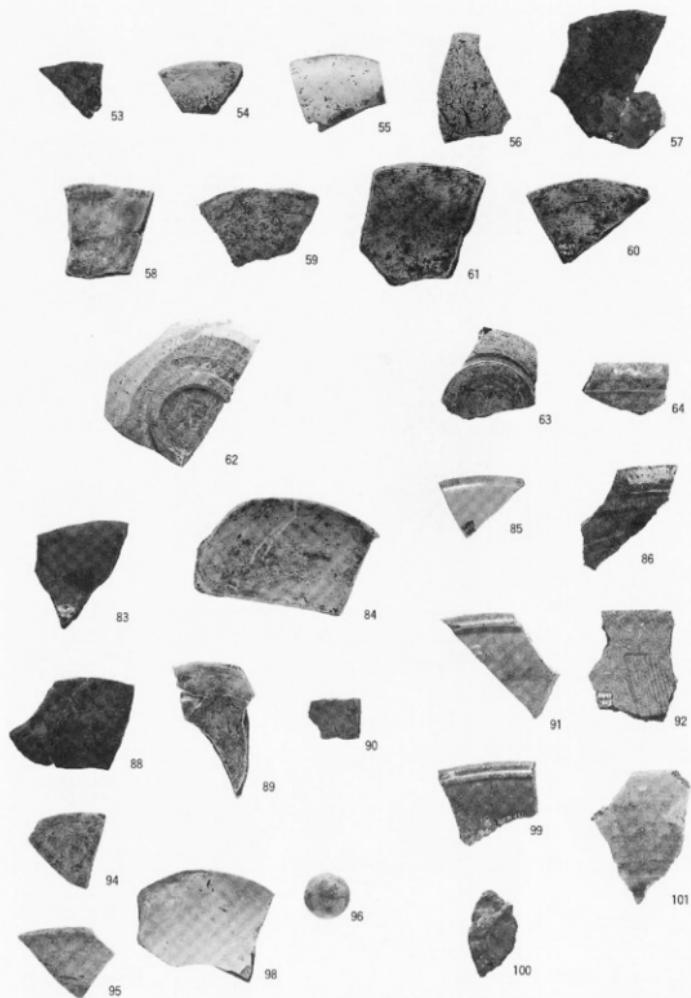


建物・柵列柱穴出土遺物写真：SB21柱穴(23), SB22柱穴(24), SB23柱穴(25・26), SB25柱穴(27),
SB26柱穴(29・30), SB28柱穴(31・32), SA23柱穴(34), SB29柱穴(35), SI11柱穴(36), SA21柱穴(38),
SA24柱穴(39), SA26柱穴(40), SP85(41), SP134(42), SP366(43), SP541(45), SP552(46), SP565(47),
SP627(48), SP641(49), SP298(50), SP553(51), SP455(52)

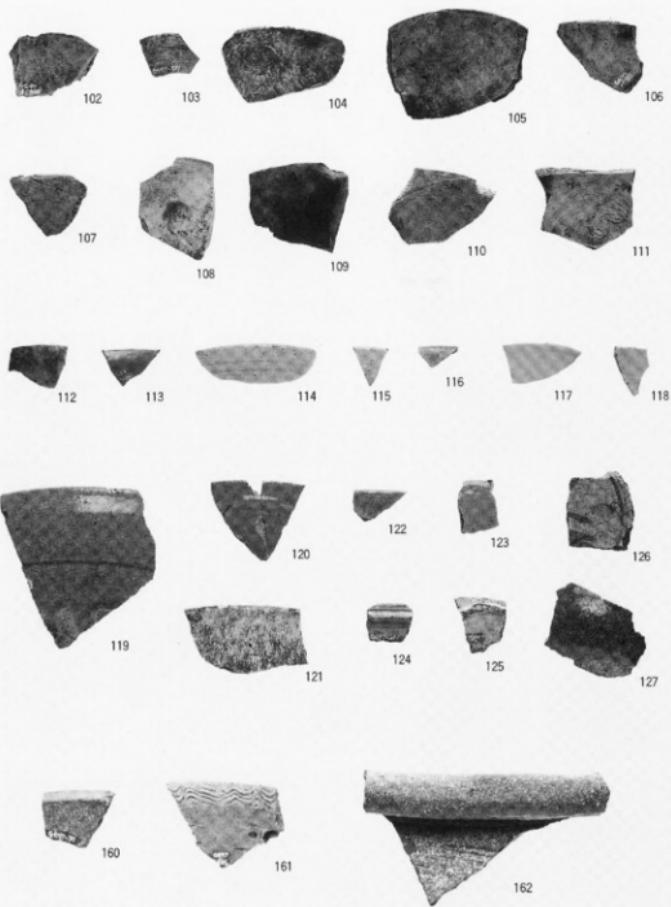
図版20



遺構内出土遺物写真(1)：SX11(65・66), SX12(67～69), SX13(70・71), SX23(72～75), SX15(76～82)

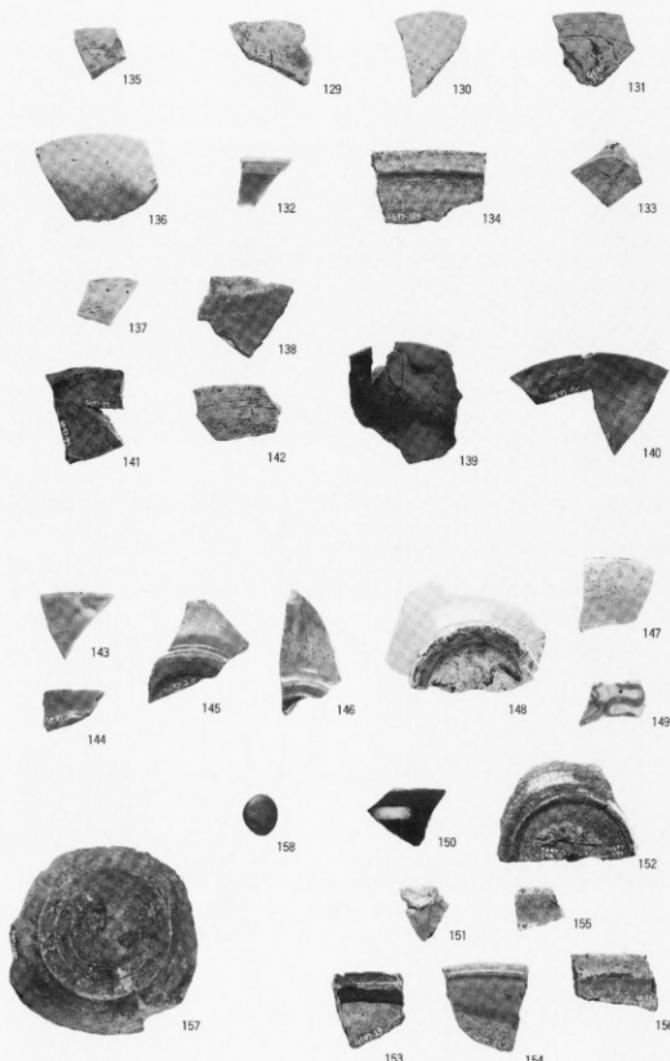


遺構内出土遺物写真(2) : SI 11 (53~64) , SX17 (83~86) , SX18 (88~92) , SX19 (94~96) , SX19周辺 (98~100)
, SD11 (101)



盛土1・盛土2出土遺物写真：(102~127)

遺構外出土遺物写真(1)：旧耕作土・盛土面上・地山面上(160~162)



遺構外出土遺物写真(2): SI11面上(129~134), SX15面上(135・136), 旧耕作土・盛土面上・地山面上(137~158)

報告書抄録

ふりがな	えましじょうかんあと					
書名	江馬氏城館跡					
副書名	下館跡南堀延長部周辺の調査					
卷次	IV					
シリーズ名	神岡町埋蔵文化財調査報告書・江馬氏城館跡調査報告書					
シリーズ番	第5集・第5集					
編著者名	大平 愛子・小島 道裕・酒井 英男					
編集機関	神岡町教育委員会					
所在地	〒506-1195 岐阜県吉城郡神岡町大字東町378番地 TEL0578-2-1271					
発行年月日	西暦1998年3月31日					
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号		調査面積	
えましじょうかんあと 江馬氏城館跡 下館跡	岐阜県吉城郡神岡町 大字殿宇中通り 山越・馬場西・ヲカモ	21625	G07K00093	36°19'25"	137°18'43"	19970516 19971126 1,429m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項
江馬氏城館跡	城館跡	中世	掘立柱建物、櫓列、堅穴住居、土坑、盛上	土師器、瓦器、青磁、白磁 瀬戸美濃、珠洲、八尾、 壺器系陶器、鉄製品（鉄釘） 石製品（石鍋・硯・臼臼）		

神岡町埋蔵文化財調査報告第5集
江馬氏城館跡調査報告書 第5集

江馬氏城館跡 IV
—下館跡南堀延長部周辺の調査—

印 刷 1998年3月25日
発 行 1998年3月31日

編集・発行 神岡町教育委員会
〒506-1195 岐阜県古城郡神岡町大字東町378
TEL0578-2-1271

印 刷 ヨシダ印刷株式会社
〒509-8204 富山県富山市根垣町611
TEL0764-93-3321

江馬氏城館跡Ⅳ－下館跡南堀延長部周辺の調査－1998年3月発行
岐阜県古城郡神岡町教育委員会編

江馬氏城館跡 IV

－下館跡南堀延長部周辺の調査－

付図1 江馬氏下館跡遺構平面図

